

茨城県教育財団文化財調査報告第477集

つくば市

島名境松遺跡3

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XXIX

下卷

令和7年3月

茨城県
公益財団法人茨城県教育財団

目 次

－下 卷－

3 古墳時代の遺構と遺物	317
(1) 壺穴建物跡	317
(2) 土 坑	340
(3) 古 墳	341
4 その他の遺構と遺物	345
(1) 土 坑	346
(2) 溝 跡	402
(3) 柱穴列	407
(4) 遺構外出土遺物	408
第4節 総 括	413
付 章	430
写真図版	PL 1 ~ PL51
抄 錄	

3 古墳時代の遺構と遺物

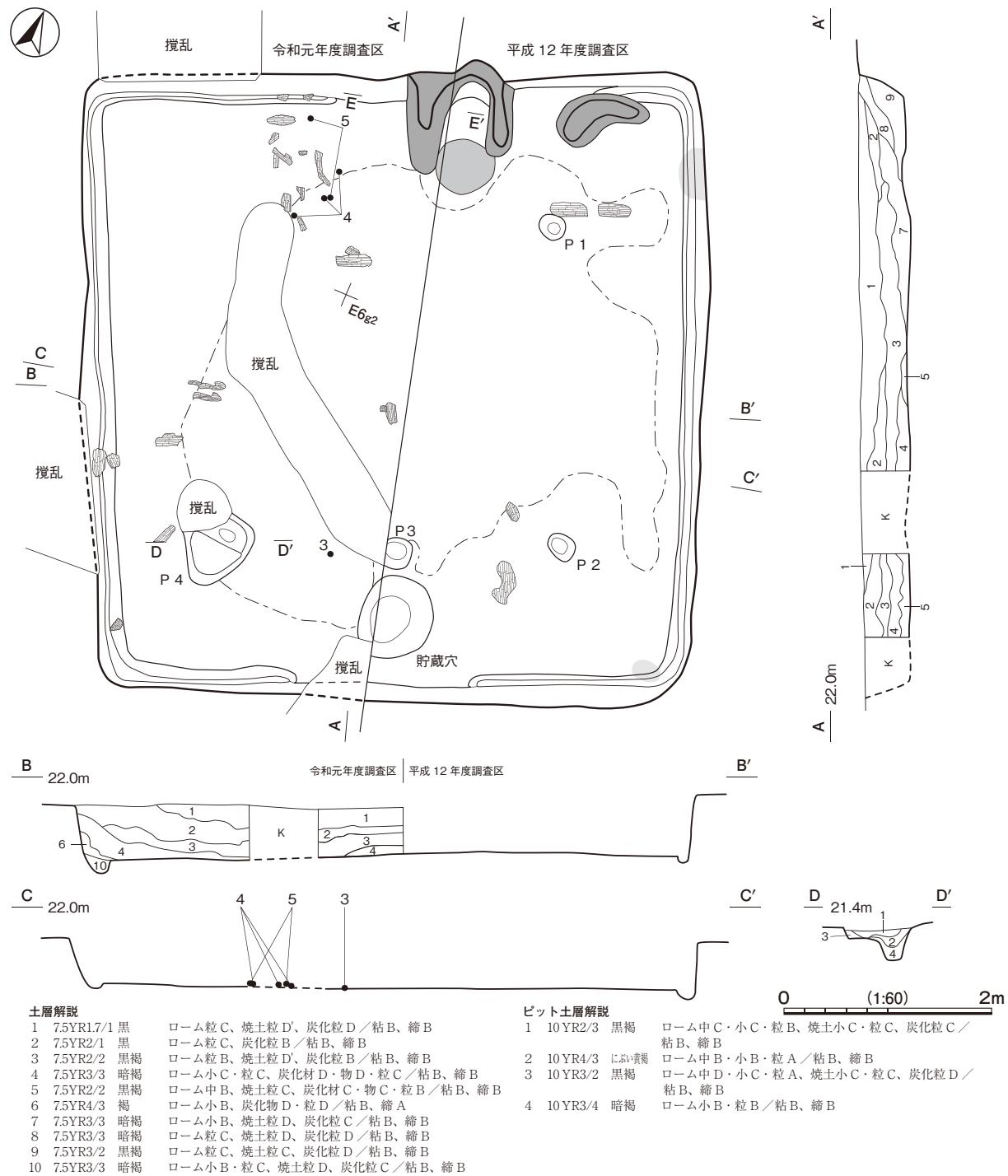
当時代の遺構は、竪穴建物跡 12 棟、土坑 1 か所、古墳 1 か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

なお、平成 12 年度の調査分についての詳細は、『茨城県教育財団文化財調査報告第 191 集』(以下『第 191 集』と略す) を参照されたい。

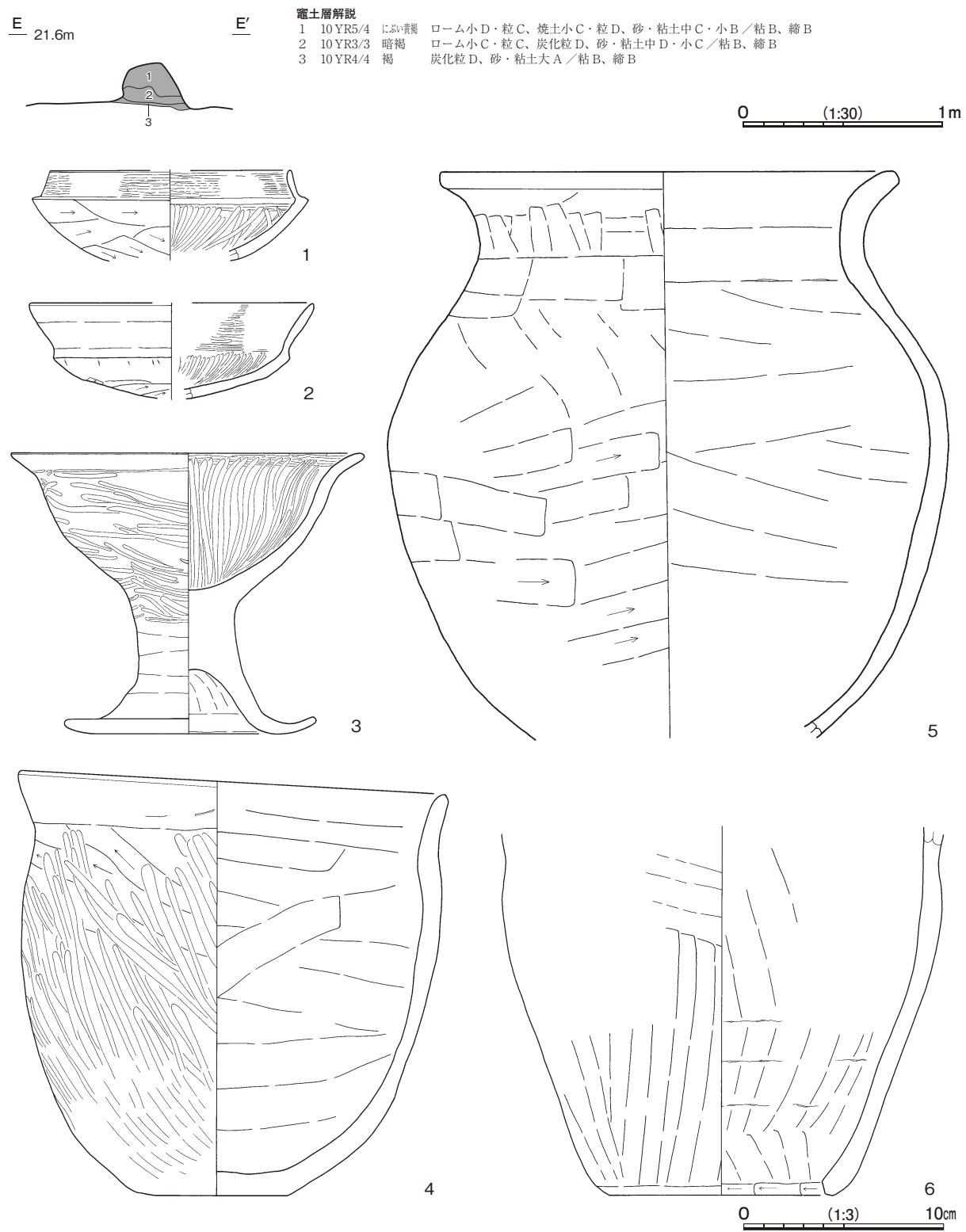
(1) 竪穴建物跡

第 15 号竪穴建物跡 (第 317・318 図 第 155 表 PL17)

位置 調査区北東部の E 6 g1 区、標高 22 m ほどの台地上に位置している。



第 317 図 第 15 号竪穴建物跡実測図



第318図 第15号竪穴建物跡・出土遺物実測図

調査年度 東部の半分は平成 12 年度に調査し、当財団調査報告『第 191 集』で報告している。

重複関係 第1438・1515号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸6.14m、短軸6.00mの方形と推定され、主軸方向はN-14°-Wである。壁は高さ50~59cmで、ほぼ直立している。平成12年度の調査後に、床面と南壁中央部に搅乱を受けている。

床 平坦で、中央部が硬化している。壁下には南壁中央部を除いて壁溝が巡っている。

竈 北壁中央からやや東よりに付設している。規模は焚口部から煙道部まで 130cm、燃焼部幅は 46cm である。地山上に砂と粘土ブロックを含む第 1～3 層を積み上げて左袖を構築している。

貯蔵穴 1 か所。南壁下の中央部に位置している。今回の調査で、長径 80cm、短径 71cm の楕円形であることが判明した。

ピット 4 か所。P 4 は深さ 32cm で、P 1・P 2 とともに主柱穴である。北西部の主柱穴は搅乱により確認できなかった。

覆土 10 層に分層できる。第 1・2 層は含有物の少ない黒色土を主体とし、周囲から流れ込んでいる状況から、自然堆積である。第 3～10 層は、壁際を中心に焼土や炭化材を含むことや不規則に堆積している状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 121 点（坏 16、椀 6、高坏 1、甕 95、甌 3）が出土しているほかに、混入した縄文土器片 159 点（深鉢）が出土している。北部の 3 層上面からは土器の小破片、床面からは完形や残存率の高いものが出土している。3 は正位で南部の床面から、4・5 は横位で北部の床面からそれぞれ出土している。炭化材は、床面から 3～27cm の高さから出土し、壁際から建物中央の床に向かって斜位の状況で確認できた。

所見 時期は、『第 191 集』で 6 世紀後半と報告したが、出土土器を再検討した結果、6 世紀中葉と考えられる。また、焼土や炭化材の出土状況から、上屋の焼失や炭化材の廃棄が考えられる。

第 155 表 第 15 号竪穴建物跡出土遺物一覧（第 318 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[12.0]	(4.5)	—	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横位ヘラ磨き 内面放射状ヘラ磨き 被熱痕・煤付着	覆土	30%
2	土師器	坏	[14.0]	(4.8)	—	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内面横位ヘラ磨き 内面放射状ヘラ磨き	覆土	30%
3	土師器	高坏	17.3	14.0	9.5	長石・石英	明赤褐	普通	坏部外面ヘラ磨き 口縁部内面横位ヘラ磨き 坏部内面放射状ヘラ磨き	床面	90% PL48
4	土師器	甕	21.0	21.3	7.0	長石・石英	にぶい黄褐	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 被熱痕	覆土下層～床面	80% PL48
5	土師器	甕	23.0	(28.2)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	内面ヘラナデ 口縁部外面弱い面取り 被熱痕	床面	70% PL48
6	土師器	甌	—	(18.4)	11.0	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部内外面ヘラナデ 被熱痕・煤付着	覆土	10%

第 16 号竪穴建物跡（第 319 図 第 156 表 PL17）

位置 調査区北東部の E 6 i2 区、標高 22 m ほどの台地上に位置している。

調査年度 東部の 3 分の 2 は平成 12 年度に調査し、当財団調査報告『第 191 集』で報告している。

規模と形状 長軸 5.60 m、短軸 5.56 m の方形で、主軸方向は N - 16° - W である。壁は高さ 16～42cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が硬化している。壁下には、北壁の一部と南壁中央部を除いて壁溝が巡っている。

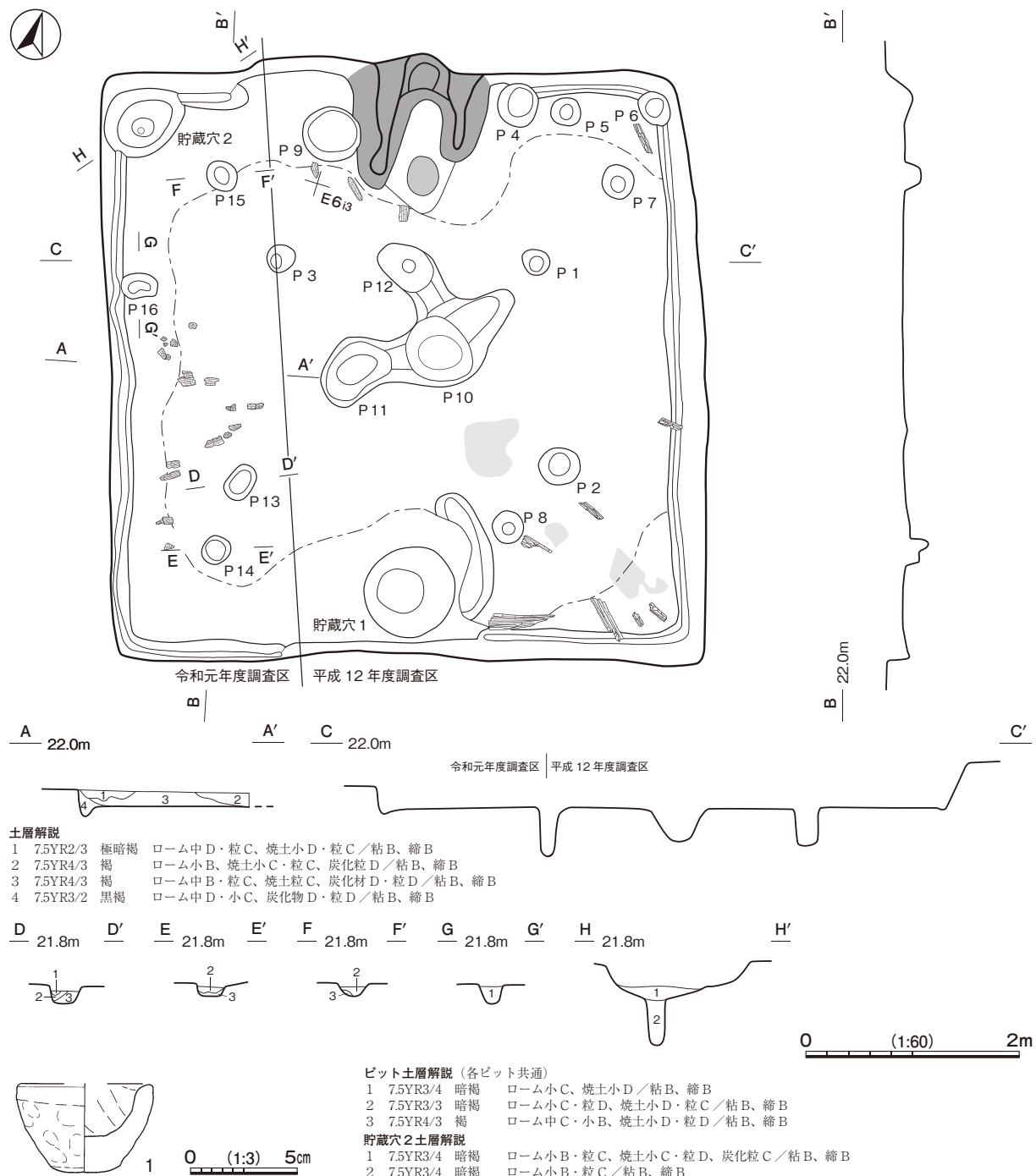
貯蔵穴 2 か所。貯蔵穴 2 は、長径 84cm、短径 62cm の楕円形で、北西コーナー部に位置している。深さは 34cm、底面は皿状で、中央部に深さ 46cm のピットを持つ。覆土には焼土が含まれており、建物の廃絶時に流入したと考えられる。

ピット 16 か所。P 3・P 13 は深さ 48・17cm で、P 1・P 2 と同じく主柱穴である。P 14～P 16 は、深さ 10～18cm で、性格不明である。

覆土 4 層に分層できる。壁際を中心に焼土や炭化材を含むことや、不規則に堆積している状況から人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 11 点（坏 1、甕 9、手捏土器 1）が出土しているほかに、混入した縄文土器片 16 点（深鉢）が出土している。1 は貯蔵穴 2 の覆土中から出土している。他は細片のため図示できない。焼土や炭化材は、西壁際が床直上から床面上 4 cm、南東コーナー部が床面から 2 ~ 10 cm の高さから出土している。

所見 時期は、6 世紀中葉と考えられる。また、焼土や炭化材の出土状況から、上屋の焼失や炭化材の廃棄が考えられる。



第 17 号竪穴建物跡（第 320 図）

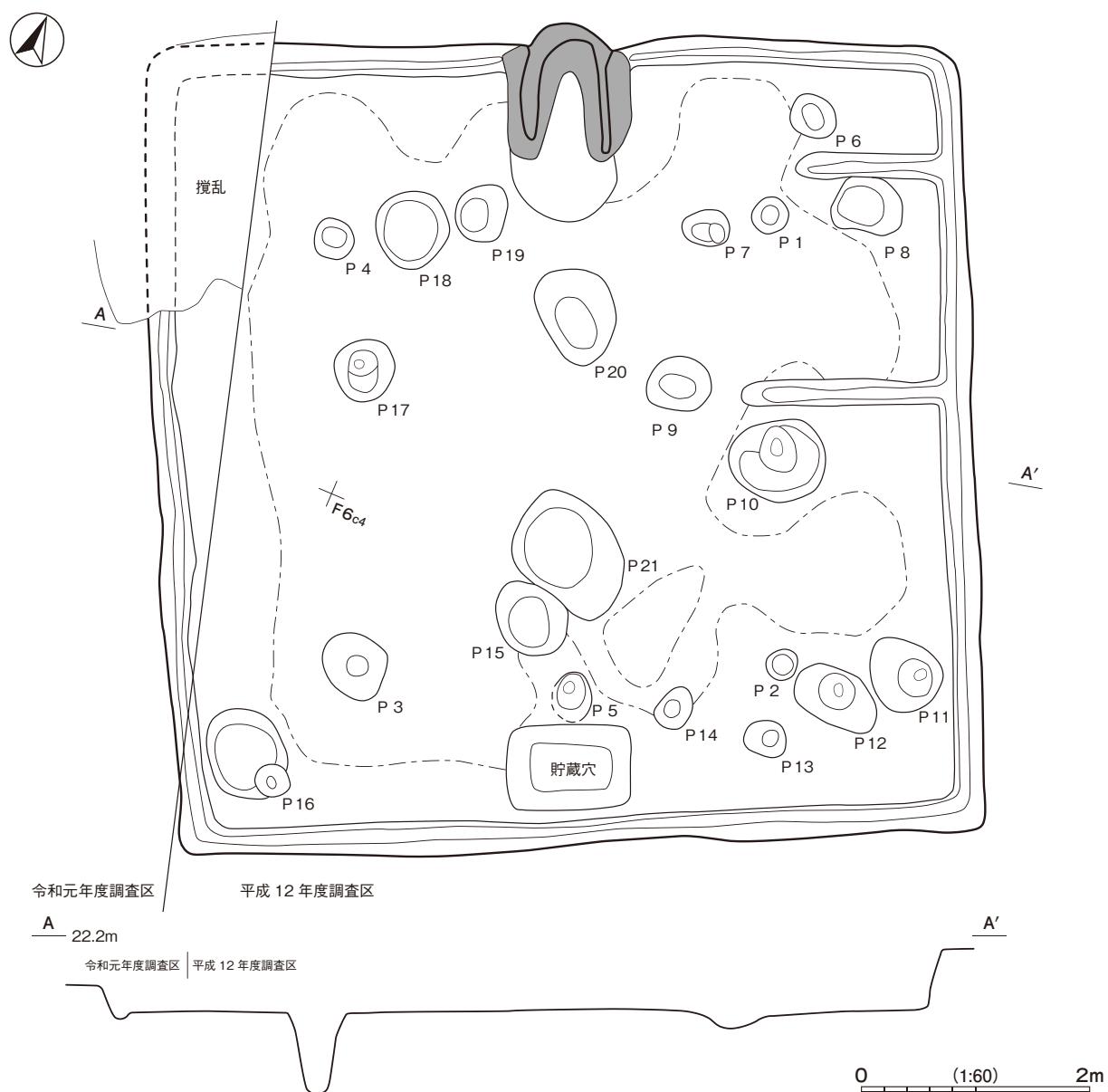
位置 調査区北東部の F 6 b3 区、標高約 22 m の台地上に位置している。

調査年度 大部分は平成 12 年度に調査し、当財団調査報告『第 191 集』で報告している。

規模と形状 長軸 7.20 m、短軸 7.10 m の方形で、主軸方向は N - 22° - W である。壁は高さ 22 ~ 54 cm で、ほぼ直立している。

床 壁下には壁溝が巡っている。床面は平坦である。

所見 時期は、『第 191 集』に掲載した出土土器から、6 世紀中葉と考えられる。今回の調査では遺物は出土しなかった。



第 320 図 第 17 号竪穴建物跡実測図

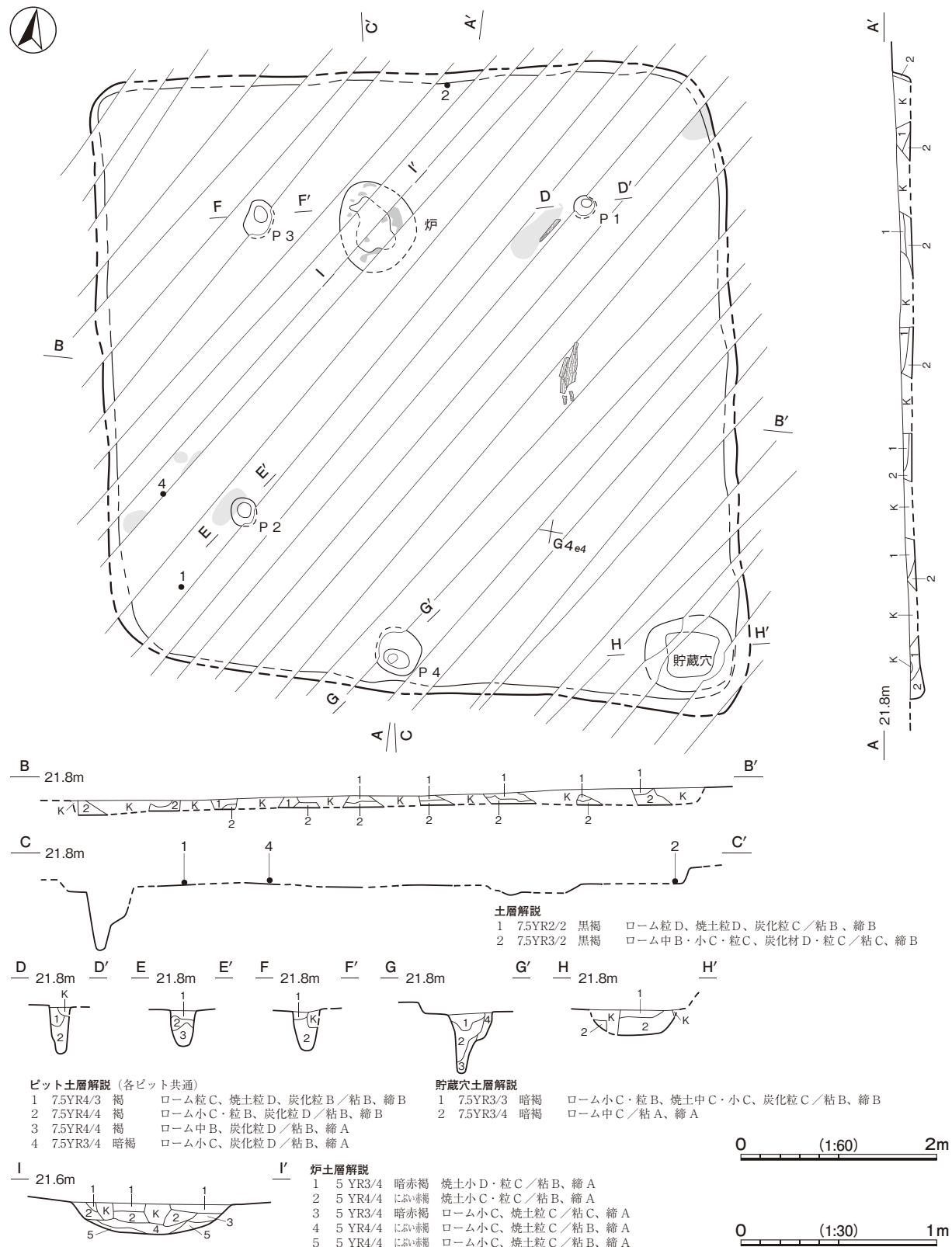
第 46 号竪穴建物跡（第 321・322 図 第 157 表 PL17）

位置 調査区中央部の G 4 d3 区、標高 22 m ほどの台地上に位置している。

規模と形状 長軸 6.46 m、短軸 6.34 m の方形で、主軸方向は N - 10° - W である。壁は高さ 14 ~ 20 cm で、ほぼ直立している。

床 確認できた範囲は、平坦である。搅乱が著しいため、硬化面は確認できなかった。

炉 北部中央に位置している。確認できた規模は、長径 90 cm、短径 76 cm で、形状は橢円形である。床面から



第 321 図 第 46 号堅穴建物跡実測図

15cm掘りくぼめられ、火床面は、部分的に赤変硬化している。

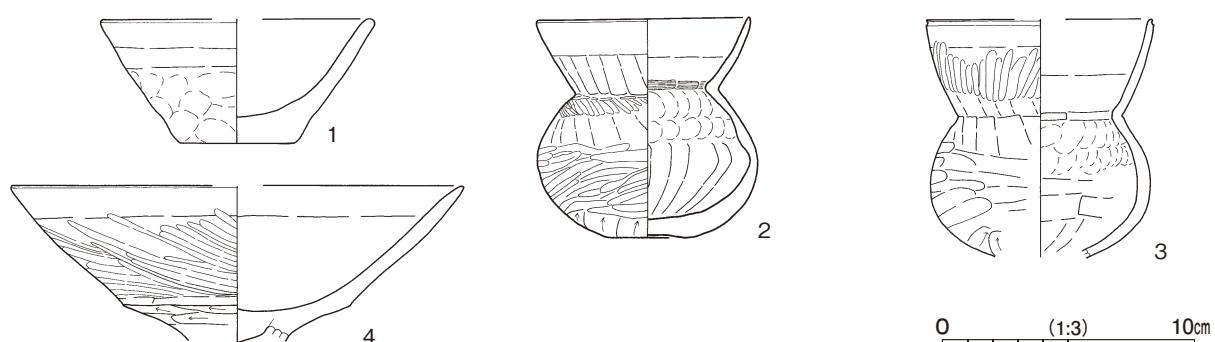
貯蔵穴 1か所。長軸90cm、短軸84cmの隅丸方形と推定され、南東コーナー部に位置している。深さは26cmで、底面は皿状である。第1層に焼土、第2層にロームブロックが含まれていることから、人為堆積である。

ピット 4か所。P1～P3は深さ36～48cmで、主柱穴である。南東部の主柱穴は、搅乱によって確認できなかった。P4は深さ62cmで、出入口施設に伴うピットである。

覆土 2層に分層できる。搅乱が著しいため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片181点（小型鉢1、壙36、高壙59、甕85）が出土している。ほかに、混入した縄文土器片40点（深鉢）が出土している。2は横位で北壁際の床面から、3は覆土中から、4は斜位で覆土下層からそれぞれ出土している。また、覆土中から炭化材が散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。床面から覆土中にかけて焼土や炭化材が出土しており上屋の焼失や炭化材の廃棄が考えられる。



第322図 第46号竪穴建物跡出土遺物実測図

第157表 第46号竪穴建物跡出土遺物一覧（第322図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	小型鉢	[10.4]	4.9	[4.6]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面指頭痕 底部外面ナデ 煙付着	床面	40%
2	土師器	壙	8.3	8.7	3.0	長石・石英	橙	普通	口縁端部横ナデ 口縁部・体部内外面ヘラナデ 頸部直下・体部下半ヘラ磨き 体部下端ヘラ削り 被熱痕	床面	90% PL48
3	土師器	壙	[8.8]	(9.4)	—	長石・石英	黄褐	普通	口縁端部横ナデ 口縁部外面ヘラ磨き 体部外面ヘラナデ 体部内面ナデ 被熱痕	覆土	40% PL48
4	土師器	高壙	[17.6]	(6.1)	—	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁端部横ナデ 壕部外面ヘラ磨き 被熱痕・煙付着	覆土	30%

第48号竪穴建物跡（第323図 第158表）

位置 調査区北西部のG4b4区、標高22mほどの台地上に位置している。

規模と形状 長軸4.30m、短軸3.14mの長方形で、長軸方向はN-87°-Wである。壁は高さ14～20cmで、ほぼ直立している。

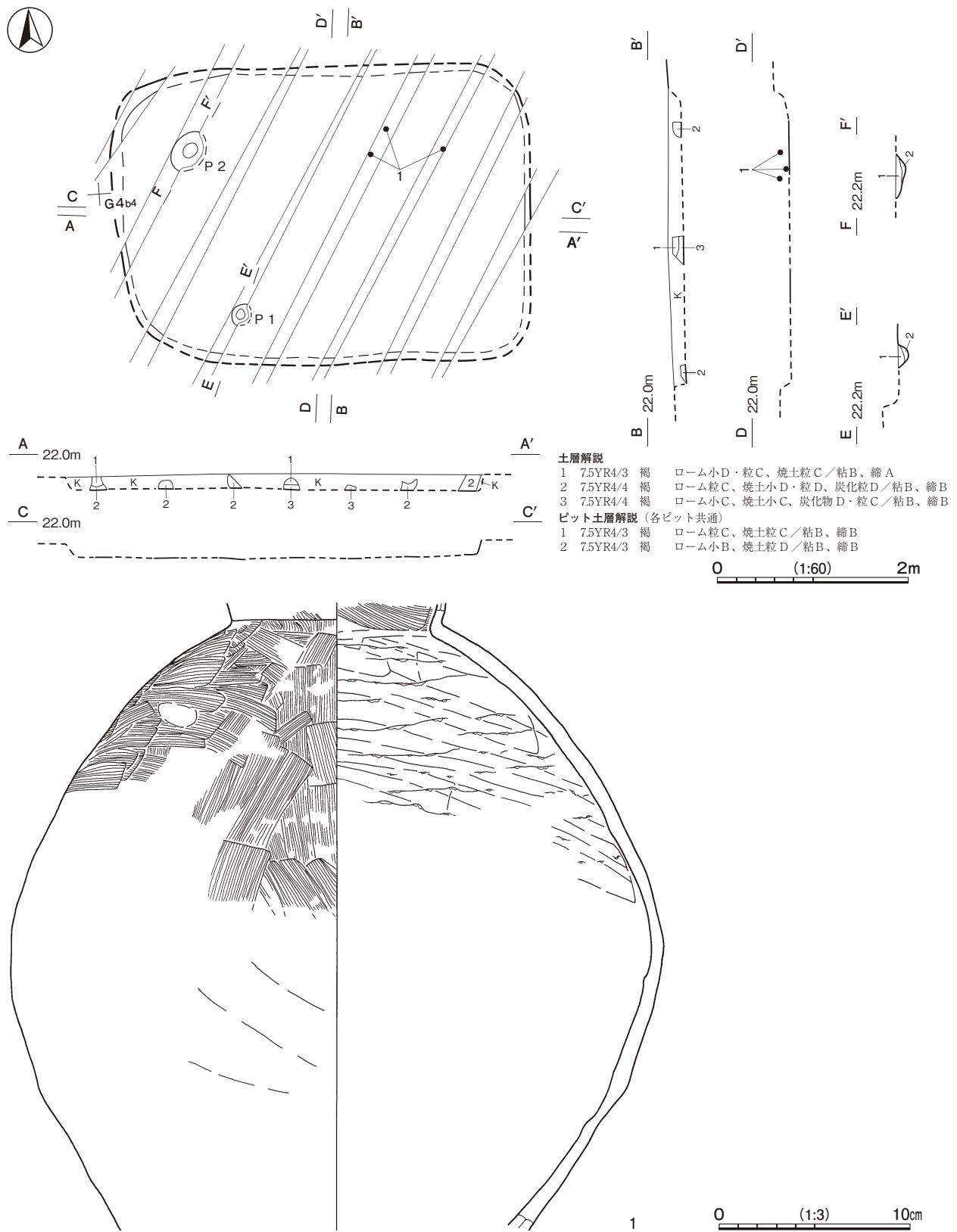
床 確認できた範囲は、平坦である。搅乱が著しいため、硬化面は確認できなかった。

ピット 2か所。P1は深さ12cm、P2は深さ11cmで、性格不明である。

覆土 3層に分層できる。搅乱が著しいため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片20点（壙2、高壙2、甕16）が出土している。ほかに、混入した縄文土器片43点（深鉢）が出土している。1は北東部の床面から覆土中にかけて出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。



第323図 第48号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第158表 第48号堅穴建物跡出土遺物一覧 (第323図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	-	(32.9)	-	長石・石英	赤	普通	体部外面・頸部内面ハケ目調整 ナデ 体部下半被熱により調整不明瞭	床面～覆土 中層	40%

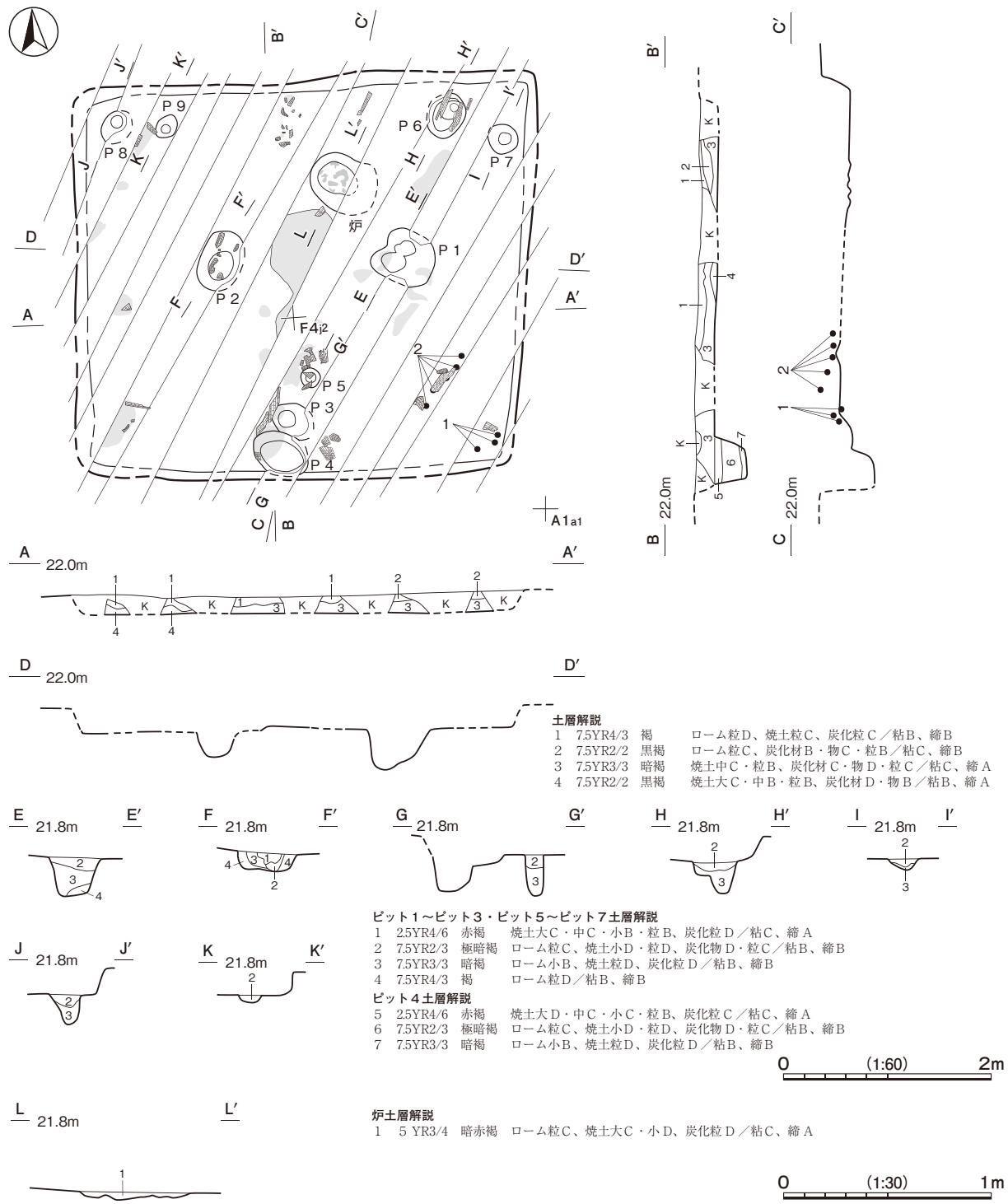
第 53 号竪穴建物跡 (第 324・325 図 第 159 表 PL17・18)

位置 調査区北西部の F 4 i1 区、標高約 22 m の台地上に位置している。

規模と形状 長軸 4.36 m、短軸 3.82 m の長方形で、主軸方向は N - 4° - E である。壁は高さ 24 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦で、搅乱が著しいため、硬化面は確認できなかった。中央部の床面が被熱している。

炉 北部東寄りに位置している。確認できた規模は、長径 56 cm、短径 52 cm で、円形または橢円形と推定される。火床面は、床面を 4 cm 堀りくぼめ、部分的に赤変硬化している。



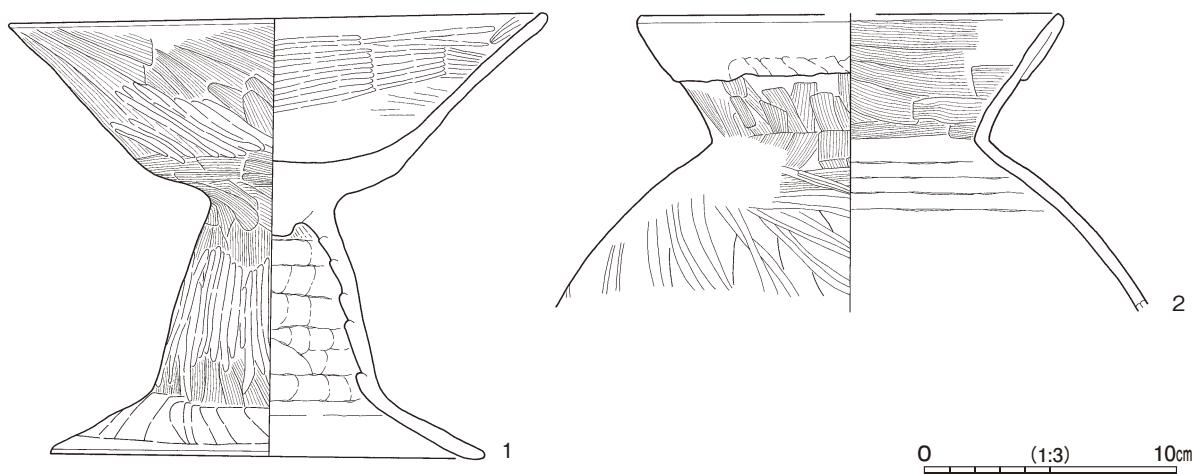
第 324 図 第 53 号竪穴建物跡実測図

ピット 9か所。P 1は深さ36cm、P 2は深さ18cmで、主柱穴である。P 3は深さ12cmで、出入口施設に伴うピットである。P 4は深さ34cmで、出入口施設に伴うピットや貯蔵穴の可能性がある。P 5～P 9は、深さ8～40cmで、性格不明である。

覆土 4層に分層できる。覆土中に焼土や炭化材を含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片98点（高坏10、甕86、壺2）が出土している。ほかに、混入した縄文土器片61点（深鉢）が出土している。1は南東コーナー部の覆土下層から、2は南東部の覆土下層から中層にかけての焼土や炭化材の下から、それぞれ出土している。焼土や炭化物は、床面から5～21cmの高さから散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。覆土中に焼土や炭化材が含まれていること、床面が被熱していること、覆土が人為堆積であることから、上屋が焼失し、埋め戻された可能性がある。



第325図 第53号竪穴建物跡出土遺物実測図

第159表 第53号竪穴建物跡出土遺物一覧（第325図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏	21.3	17.5	17.0	長石・石英	橙	普通	口縁・脚端部横ナデ 坏部内外面・脚部外面ヘラ磨き 脚部内面輪積み痕が残るナデ 被熱痕	覆土下層	90% PL48
2	土師器	壺	[16.6]	(11.8)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き 口縁部内外面ハケ目調整 被熱痕・煤付着	覆土下層～中層	30%

第68号竪穴建物跡（第326図 第160表 PL18）

位置 調査区北西部のF 2i8区、標高22mほどの台地上に位置している。

重複関係 第72号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.15m、短軸4.02mの方形で、長軸方向はN-73°-Eである。壁は高さ12cmで、ほぼ直立している。

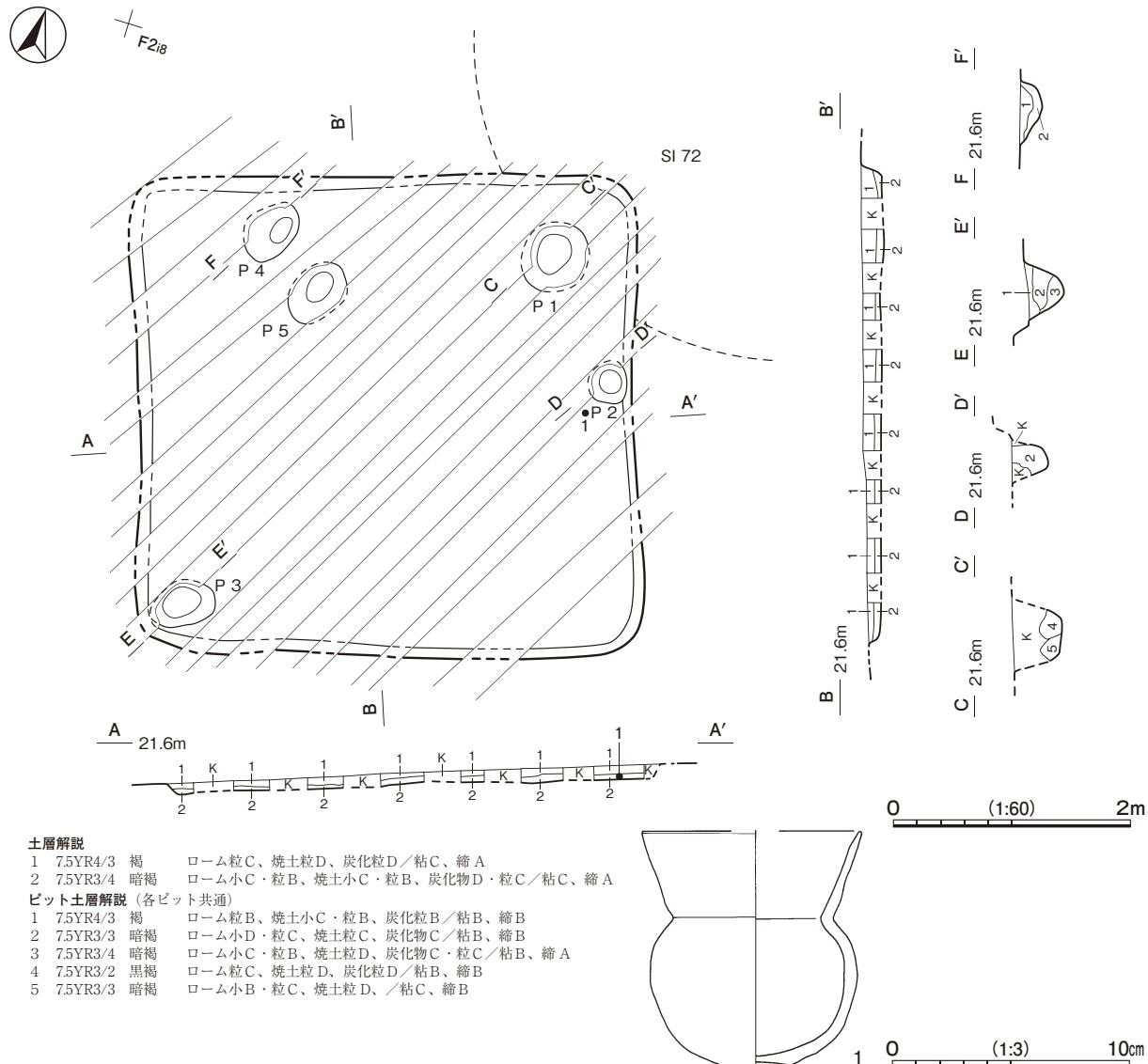
床 平坦で、搅乱が著しいため、硬化面は確認できなかった。

ピット 5か所。P 1～P 5は、深さ19～42cmで、性格不明である。

覆土 2層に分層できる。焼土や炭化物を含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片49点（壺13、高坏10、甕26）が出土している。ほかに、混入した縄文土器片52点（深鉢）が出土している。1は斜位で東部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第326図 第68号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第160表 第68号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第326図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	[9.1]	9.8	2.8	長石・石英	橙	普通	内外面摩滅により調整不明瞭 被熱痕	床面	40%

第71号竪穴建物跡 (第327・328図 第161表 PL18)

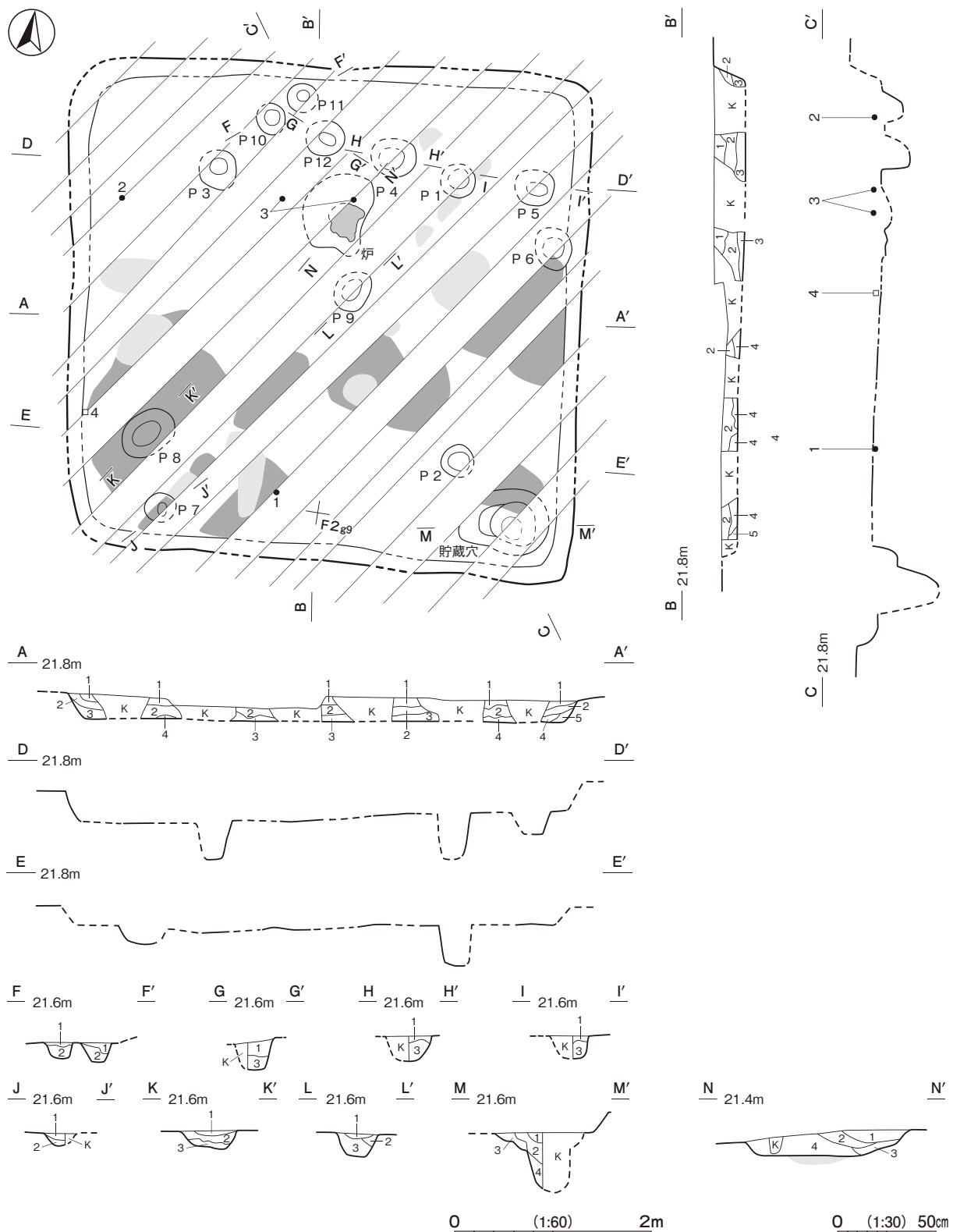
位置 調査区北西部のF 2 f8区、標高22mほどの台地上に位置している。

規模と形状 長軸5.30m、短軸5.14mの方形で、主軸方向はN-9°-Wである。壁は高さ14~32cmで、ほぼ直立している。

床 平坦である。搅乱が著しいため、硬化面は確認できなかった。

炉 北部に位置している。確認できた規模は、長径85cm、短径52cmで、不整橢円形と推定される。火床面は、床面から13cm掘りくぼめ、赤変硬化している。

貯蔵穴 1か所。長軸96cm、短軸65cmの隅丸方形と推定され、南東コーナー部に位置している。壁はほぼ直立し、



土層解説

- 1 7.5YR4/3 褐 ローム粒B、炭化粒B／粘B、締B
 2 7.5YR4/3 褐 ローム小B・粒B、炭化物B・粒B／粘C、締B
 3 7.5YR3/2 黒褐 ローム小C・粒B、焼土粒B、炭化粒B／粘B、締B
 4 7.5YR3/3 暗褐 ローム粒B、焼土中B・粒C、炭化物B・粒A'／粘C、締B
 5 7.5YR3/2 黒褐 ローム小C・粒B、焼土粒C、炭化粒C／粘B、締B
貯蔵穴土層解説
 1 7.5YR3/3 暗褐 ローム小B・粒B、焼土粒C、炭化粒C／粘B、締B
 2 7.5YR3/4 暗褐 ローム小C・炭化粒D／粘B、締B
 3 7.5YR3/3 暗褐 ローム小B・粒B、焼土粒D、炭化粒C／粘B、締A
 4 7.5YR4/3 褐 ローム小B／粘B、締A

ピット土層解説 (各ピット共通)

- 1 7.5YR3/2 黒褐 ローム小B、焼土小C・粒C、炭化粒D／粘B、締B
 2 7.5YR4/4 褐 ローム中B・小C、焼土粒C、炭化粒D／粘B、締A
 3 7.5YR3/3 暗褐 ローム中C・小B／粘B、締A
炉土層解説
 1 7.5YR3/3 暗褐 ローム小B、焼土小D・粒C／粘B、締B
 2 7.5YR3/4 暗褐 ローム粒C、焼土粒B／粘C、締B
 3 7.5YR4/3 褐 ローム粒C／粘B、締B
 4 7.5YR3/4 暗褐 ローム粒B、焼土小C・粒B／粘C、締B

第327図 第71号竪穴建物跡実測図

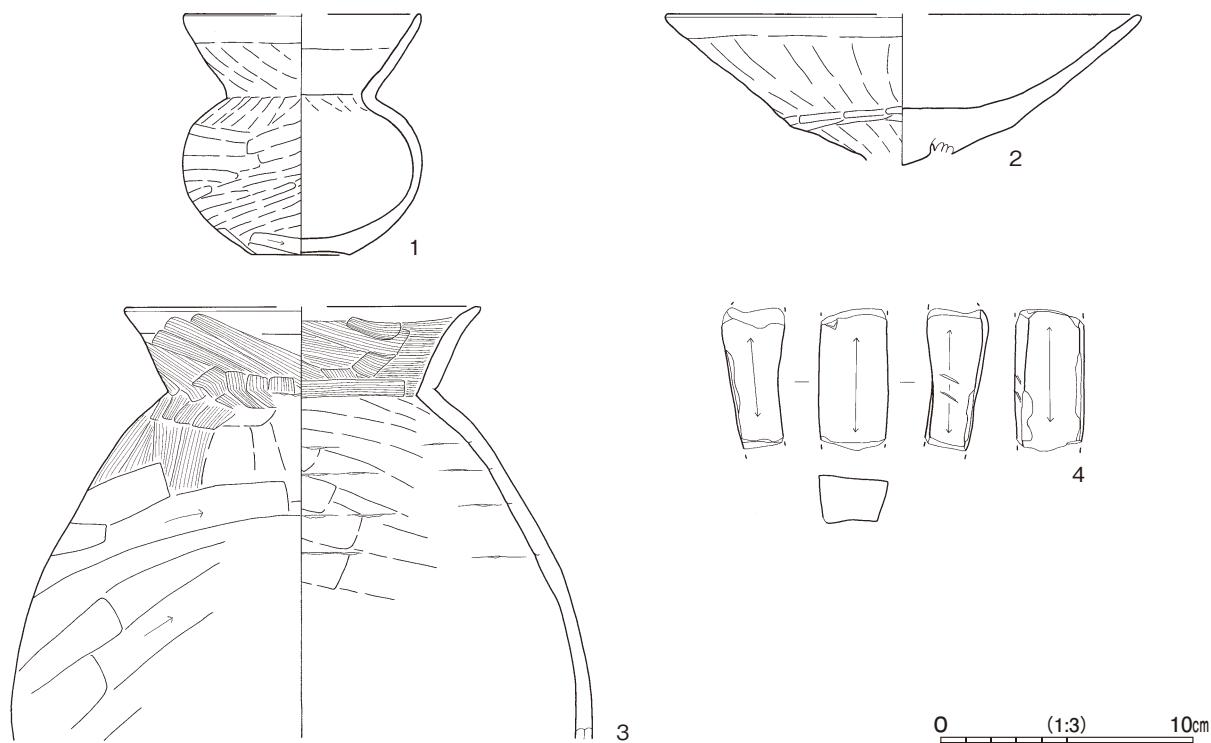
上部に段を有している。深さは60cm、底面はU字状である。

ピット 12か所。P 1～P 3は、深さ37～44cmで主柱穴である。南西コーナー部の主柱穴は、搅乱により確認できなかった。P 4～P 12は深さ10～29cmで、性格不明である。

覆土 5層に分層できる。覆土中層から下層にかけて焼土や炭化物を含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片122点（壺2、埴26、高壺33、鉢1、壺8、甕52）、石器1点（凝灰岩製砥石）が出土している。ほかに、混入した縄文土器片41点（深鉢）が出土している。1は南部の床面から、2は西部の覆土下層から、3は中央部の覆土下層から、4は西壁際の床面からそれぞれ出土している。焼土や炭化物は、炉より南側を中心に、床面から5～10cmの高さに散在しており、焼土は炭化物の上から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。覆土中層から下層にかけて焼土や炭化物が含まれていることから、上屋の焼失や炭化材の廃棄が考えられる。



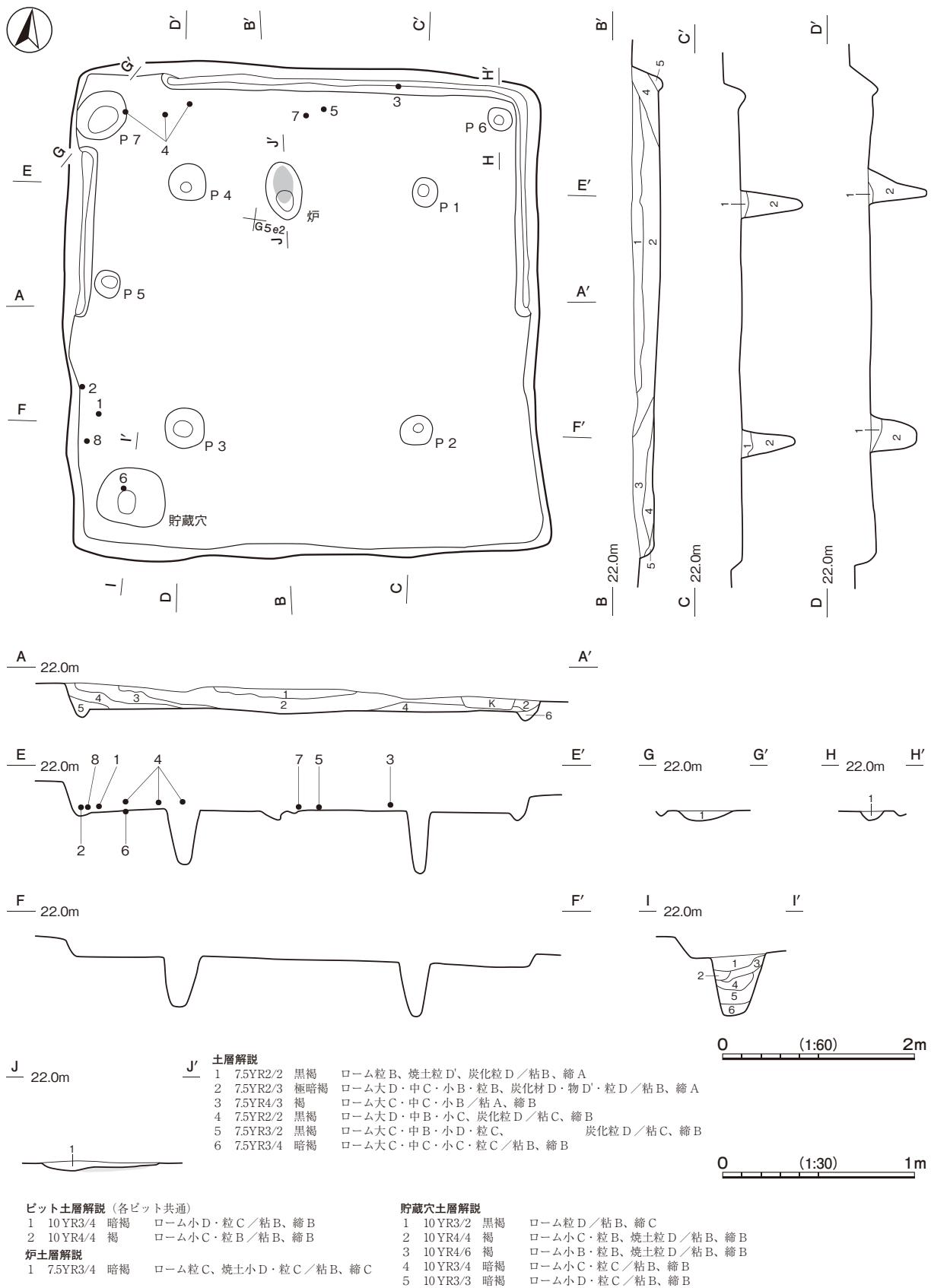
第328図 第71号竪穴建物跡出土遺物実測図

第161表 第71号竪穴建物跡出土遺物一覧（第328図）

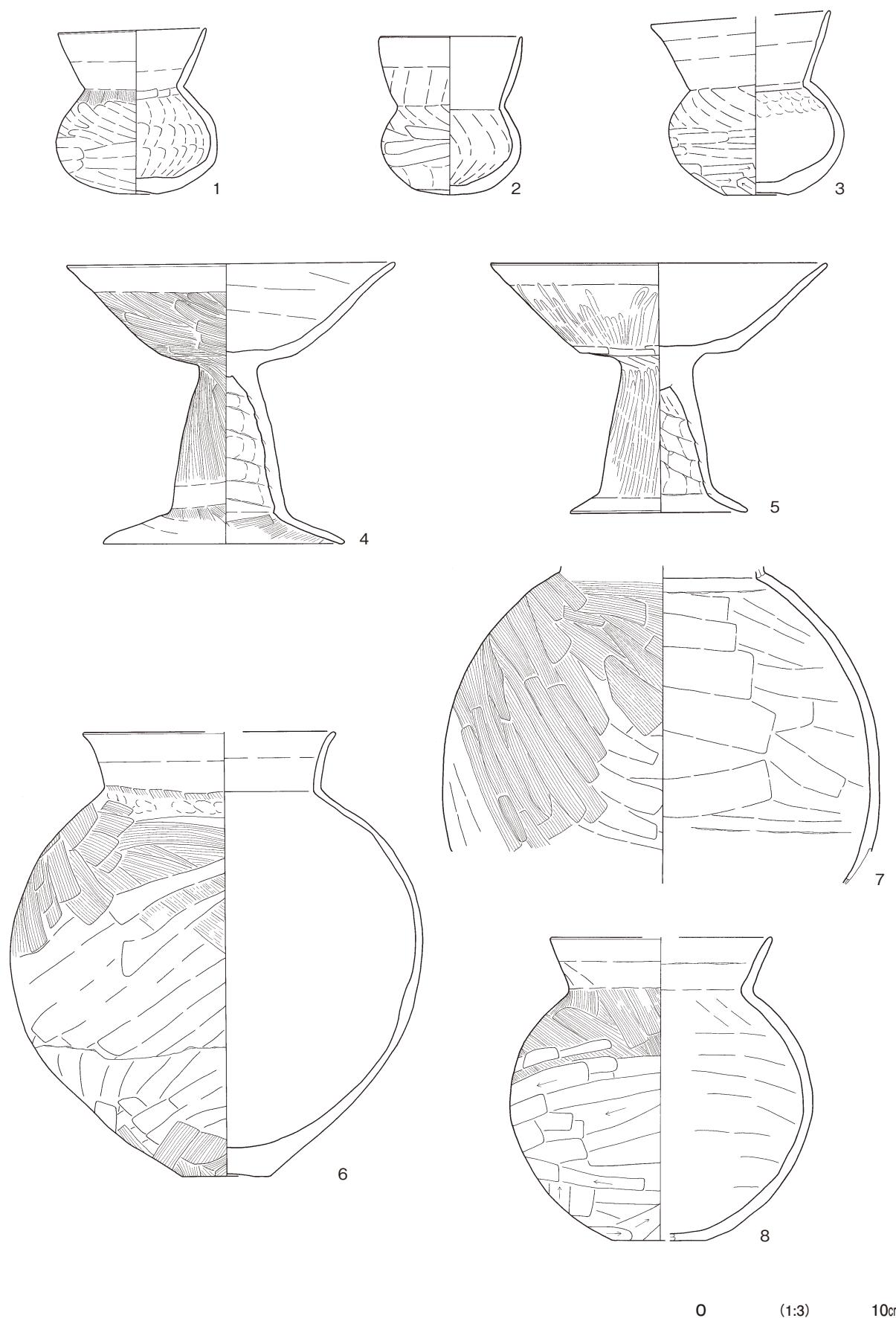
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	[9.4]	9.5	3.8	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁端部横ナデ 口縁部内外面ヘラナデ 体部外面ヘラ磨き 体部内面ナデ 被熱痕	床面	80%
2	土師器	高壺	[18.5]	(5.8)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁端部横ナデ 壺部外面ヘラナデ 壺部内面摩滅により調整不明瞭 被熱痕・煤付着	覆土下層	40%
3	土師器	甕	[14.0]	(17.1)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部内外面ヘラナデ 口縁部内外面ハケ目調整被熱痕	覆土下層	30%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
4	砥石	(5.6)	2.8	2.5	(60.0)	凝灰岩	砥面4面			床面	

第 112 号竪穴建物跡 (第 329・330 図 第 162 表 PL18)

位置 調査区北東部の G 5e2 区、標高約 22 m の台地上に位置している。



第 329 図 第 112 号竪穴建物跡実測図



第330図 第112号堅穴建物跡出土遺物実測図

重複関係 第 1478・1510 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 5.10 m、短軸 4.95 m の方形で、主軸方向は N - 8° - W である。壁は高さ 8 ~ 25 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。北半部の壁下には、北西コーナーを除いて壁溝が巡っている。

炉 北部中央に位置している。長径 62 cm、短径 40 cm の橢円形で、火床面は、床面を 6 cm 剥りくぼめ、赤変硬化している。

貯蔵穴 1 か所。長軸 76 cm、短軸 65 cm ほどの隅丸方形と推定され、南西コーナー部に位置している。壁は、外傾しており、深さは 62 cm、底面は U 字状である。覆土は褐色のロームを主体とする土と黒褐色及び暗褐色の土で交互に埋め戻されている。

ピット 7 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 48 ~ 65 cm で、主柱穴である。P 5 は深さ 13 cm で、出入口施設に伴うピットである。P 6・7 はそれぞれ 10 cm で、性格不明である。

覆土 6 層に分層できる。粒径の大きいロームブロックが多く含まれていることから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 47 点（埴 8、高坏 25、甕 14）が出土している。ほかに、混入した縄文土器片 64 点（深鉢）が出土している。土器は壁際の覆土下層に集中している。1・2・8 は斜位で西壁際の覆土下層から、3 ~ 5・7 は斜位で北壁際の覆土下層から、それぞれ出土している。6 は貯蔵穴の覆土上面から、正位で潰れた状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から 5 世紀中葉と考えられる。

第 162 表 第 112 号竪穴建物跡出土遺物一覧（第 330 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	7.9	8.8	2.0	長石・石英	にぶい黄澄	普通	口縁端部横ナデ 頸部ハケ目調整後、外面中～下位ヘラナデ 口縁部・体部内面ヘラナデ	覆土下層	90% PL48
2	土師器	埴	7.4	8.4	4.0	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁端部横ナデ 口縁部・体部内外面ヘラナデ 被熱痕	覆土下層	90% PL48
3	土師器	埴	[9.5]	9.8	3.3	長石・石英	にぶい黄澄	普通	口縁端部横ナデ 口縁部・体部内外面ヘラナデ	覆土下層	60% PL48
4	土師器	高坏	17.5	15.0	12.8	長石・石英	橙	普通	口縁端部横ナデ 坏部内ヘラナデ 坏・脚部外面ハケ目調整 脚部内面輪積み痕が残るナデ	覆土下層	80% PL48
5	土師器	高坏	17.8	13.3	[9.3]	長石・石英	明赤褐	普通	口縁端部横ナデ 坏部・脚部外面ヘラ磨き 坏部内面摩滅により調整不明瞭 脚部内面輪積み痕が残るナデ	覆土下層	70% PL48
6	土師器	甕	[13.2]	23.6	[4.6]	長石・石英・細礫	黄澄	普通	口縁部横ナデ 体部外面上半ハケ目調整・下半ヘラ削り 体部内面摩滅により調整不明瞭 体部外面煤付着 被熱痕	貯蔵穴覆土上層	90% PL49
7	土師器	甕	-	(16.9)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目調整 体部内面ヘラナデ 被熱痕	覆土下層	30%
8	土師器	小型甕	[11.8]	16.1	[5.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁端部横ナデ 口縁部・体部内面ヘラナデ 体部外面上半ハケ目調整・下半ヘラ削り 被熱痕	覆土下層	50%

第 113 号竪穴建物跡（第 331・332 図 第 163 表 PL18）

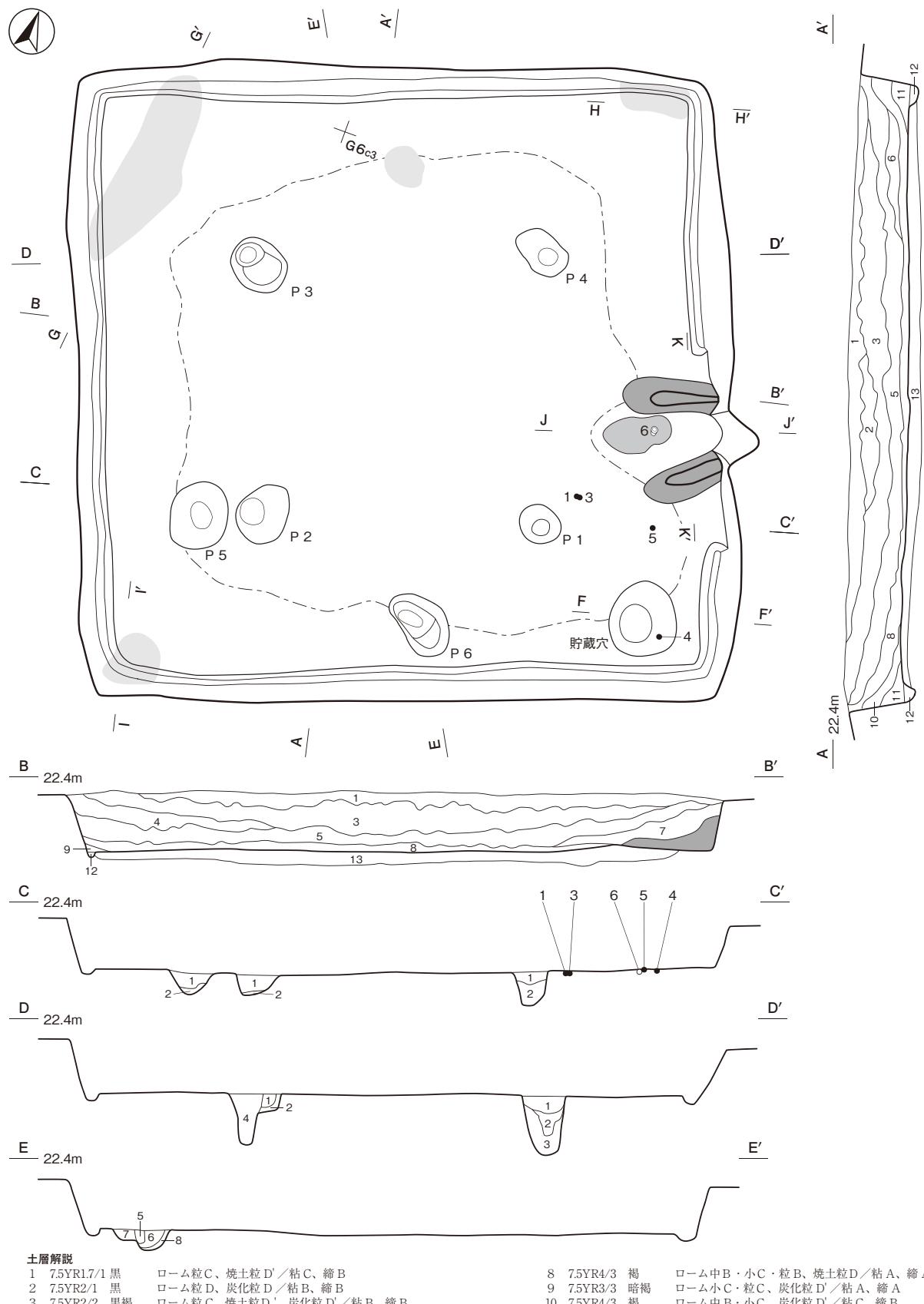
位置 調査区北東部の G 6c3 区、標高 22 m ほどの台地上に位置している。

重複関係 第 1412・1419・1488・1516・1517 号土坑を掘り込んでいる。

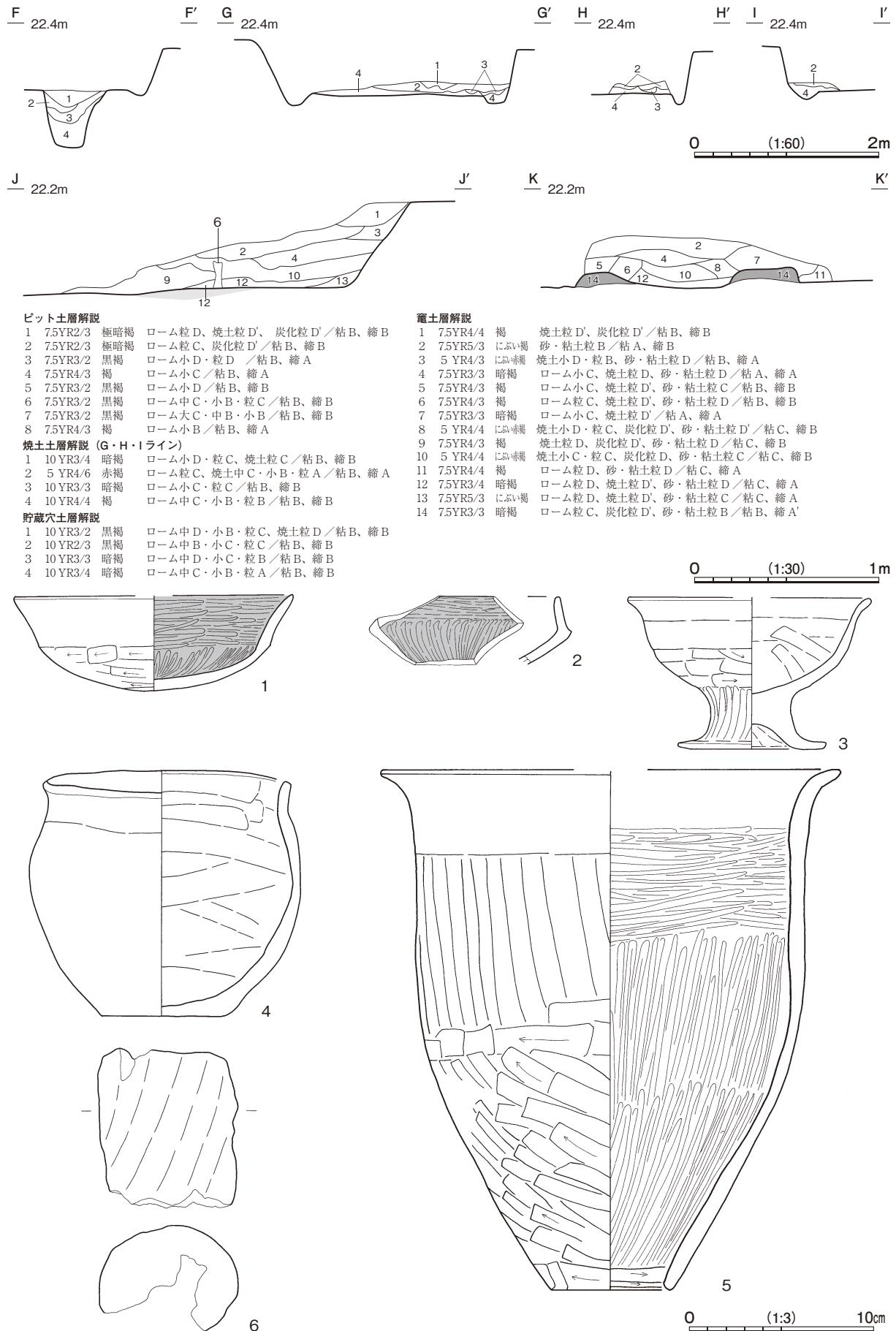
規模と形状 長軸 6.80 m、短軸 6.62 m の方形で、主軸方向は N - 72° - E である。壁は高さ 44 ~ 60 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床である。中央部が硬化している。壁下には、壁溝が巡っている。北部中央の床面が一部赤変している。

竈 東壁南寄りに位置している。規模は焚口部から煙道部まで 176 cm、燃焼部幅は 60 cm である。地山の上に、砂と粘土を含む第 14 層を積み上げて両袖部を構築しているが、遺存状況は不良である。第 4 ~ 11 層は、焼土



第331図 第113号竖穴建物跡実測図



第332図 第113号竪穴建物跡・出土遺物実測図

や炭化物のほかに竈構築材である砂と粘土を含んでおり、袖部の遺存状況と併せて考えると、竈の人为的な破壊による堆積土である。火床部は、床面とほぼ同じ高さで、火床面は赤変硬化している。火床面奥壁寄りから支脚が出土している。煙道部は壁外に32cmほど掘り込み、外傾して立ち上がる。

貯蔵穴 1か所。貯蔵穴は南東コーナー部に位置している。長径80cm、短径68cmほどの楕円形で、深さは62cmである。壁は外傾し、底面は皿状である。覆土はロームブロックを含むことから、人为堆積である。

ピット 6か所。P1～4は深さ20～60cmで、主柱穴である。P5の配置やP3の形状から、建て替えを行ったことが想定される。P6は深さ22cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 13層に分層できる。1～4層は含有物が少ない土がレンズ状に堆積していることから自然堆積である。第5～12層は、ローム粒子を多量に含むことから、人为堆積である。第13層は貼床の埋土で、ロームを主体としている。北東・北西・南西コーナー部の覆土中層から下層にかけて、焼土が堆積している。

遺物出土状況 土師器片78点（壺25、高壺6、甕46、甌1）、土製品1点（支脚）が出土している。ほかに、混入した縄文土器片47点（深鉢）、石器3点（磨石、石錘、石核）が出土している。1・3・5は横位で南東部の床面から出土している。4は貯蔵穴の覆土上層、6は竈火床面から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。コーナー部の床面から覆土下層にかけて炭化物や焼土が出土していることから、上屋の焼失や炭化材の廃棄が考えられる。

第163表 第113号竪穴建物跡出土遺物一覧（第332図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺	[14.8]	5.1	—	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部内面横位ヘラ磨き 内面放射状ヘラ磨き 内面黒色処理	床面	30%
2	土師器	壺	—	(3.7)	—	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口縁部内面横位ヘラ磨き 内面放射状ヘラ磨き 内面黒色処理	覆土中	10%
3	土師器	高壺	[10.6]	8.2	[7.8]	長石・石英	明赤褐	普通	壺部内外面赤彩 脚部外面ヘラ磨き 煤付着	床面	60% PL49
4	土師器	小型甕	12.8	13.3	6.7	長石・石英	にぶい褐	普通	底部外面ヘラ削り 被熱痕	貯蔵穴 覆土上層	100% PL49
5	土師器	甌	[24.8]	28.1	[6.4]	長石・石英	黄橙	普通	体部ナデ後口縁部横ナデ 内面ヘラ磨き 被熱 痕・煤付着	床面	40% PL49

番号	器種	上径	下径	高さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
6	支脚	7.5	—	(8.5)	(162)	長石	にぶい橙	外面ナデ	竈火床面	15%

第114号竪穴建物跡（第333・334図 第164表 PL19）

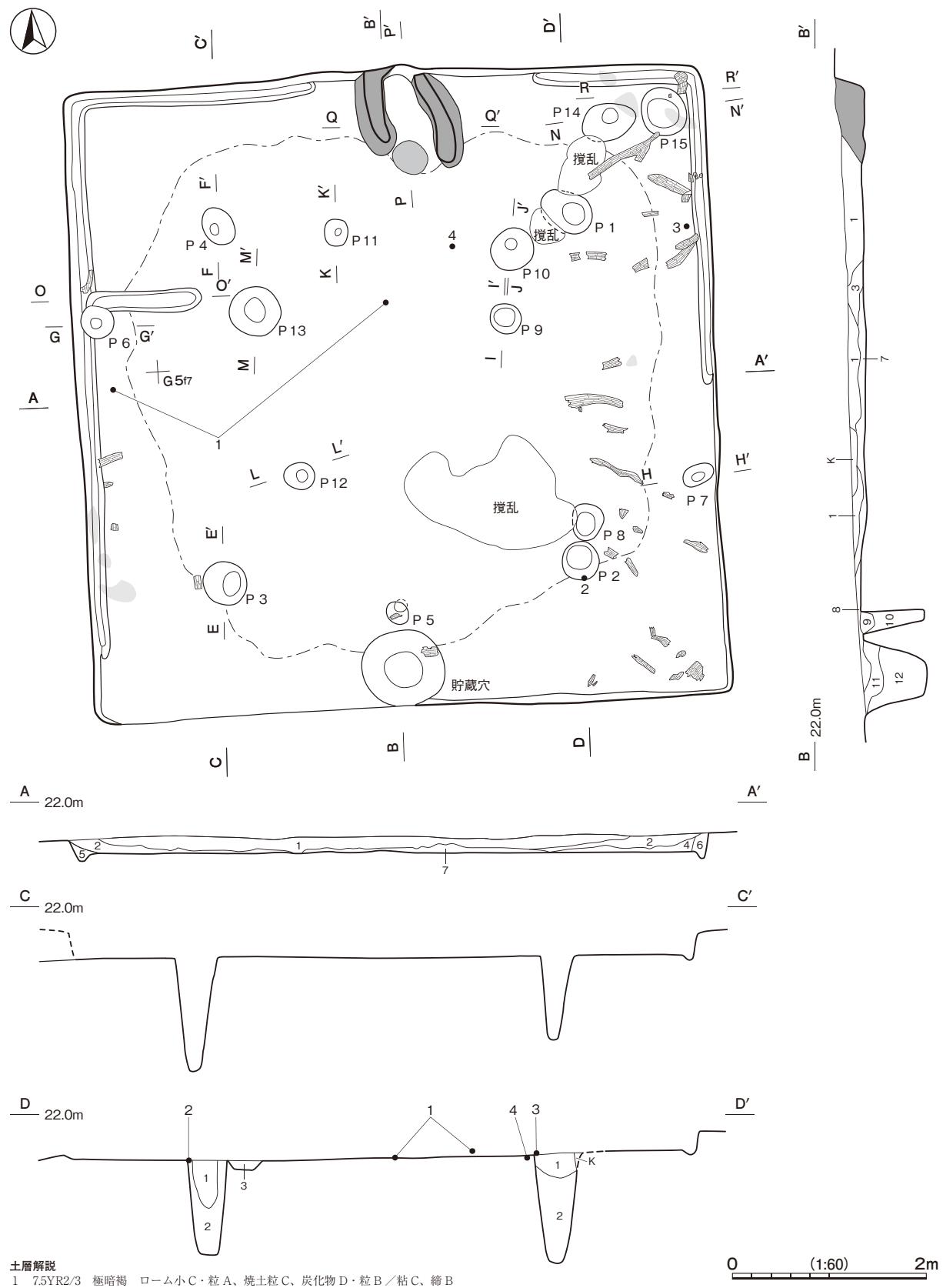
位置 調査区北東部のG5f7区、標高22mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長軸6.62m、短軸5.58mの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁は高さ4～23cmで、ほぼ直立している。南側は斜面により、削平を受けている。

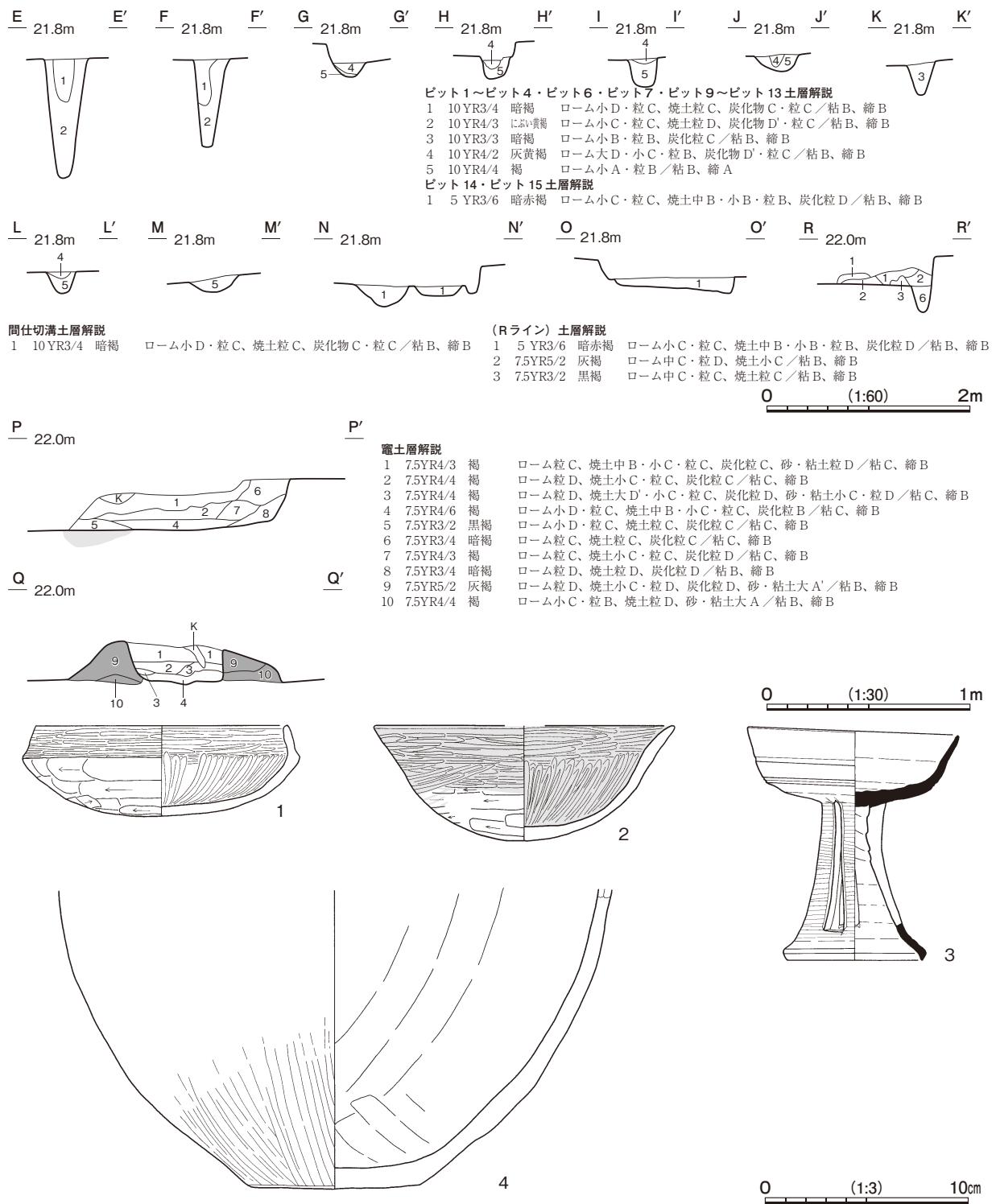
床 平坦で、中央部が硬化している。北半部、西部の壁下には壁溝が巡っている。間仕切溝が1条、西壁から中央部に向かって延びている。規模は長さ118cm、幅21cm、深さ7～17cmである。

竈 北壁中央部に位置している。規模は焚口部から煙道部まで115cm、燃焼部幅は35cmである。袖部は地山の上に、白色粘土や砂を含む第9・10層を積み上げて構築している。火床部は、床面とほぼ同じ高さで、火床面は赤変硬化している。煙道部を壁外に8cmほど掘り込み、ほぼ直立している。

貯蔵穴 1か所。南壁下の中央部に位置している。長径88cm、短径78cmの円形で、深さは64cmである。壁は外傾し、底面は平坦である。覆土には焼土や炭化材などが含まれており、建物の廃絶時に流入したと考えられる。



第333図 第114号竪穴建物跡実測図



第334図 第114号竖穴建物跡・出土遺物実測図

ピット 15か所。P 1～P 4は深さ86～130cmで主柱穴、P 5は深さ68cmで出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6～P 15は深さ10～30cmで、性格不明である。

覆土 8層に分層できる。壁際を中心に焼土や炭化材を含むことから、人為堆積である。北東・南西コーナー部の覆土中層から下層にかけて、焼土が出土している。

遺物出土状況 土師器片70点(壺5、高壺1、甕64)、須恵器片1点(高壺)、土製品1点(支脚)が出土している。また、中央部の床面から未加工の瑪瑙1点(60.2g)が出土している。ほかに、混入した縄文土器片31点(深鉢)

が出土している。1は西壁際と中央部の床面に破片が散在した状態で出土している。2は潰れた状態でP 2 覆土上層から、3は逆位で東壁際の床面から、それぞれ出土している。4は体部下半が潰れた状態で、中央部北よりの床面から出土している。炭化材は、東壁から約160cmの幅に集中し、中央部に向かって放射状に分布している。北東コーナー部では、床面から高さ7~19cm、南部では、床面から高さ2~8cmの高さで出土している。所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。覆土中層から下層にかけて炭化材や焼土が含まれていること、出土した炭化材が放射状に分布していることから、上屋の焼失が考えられる。

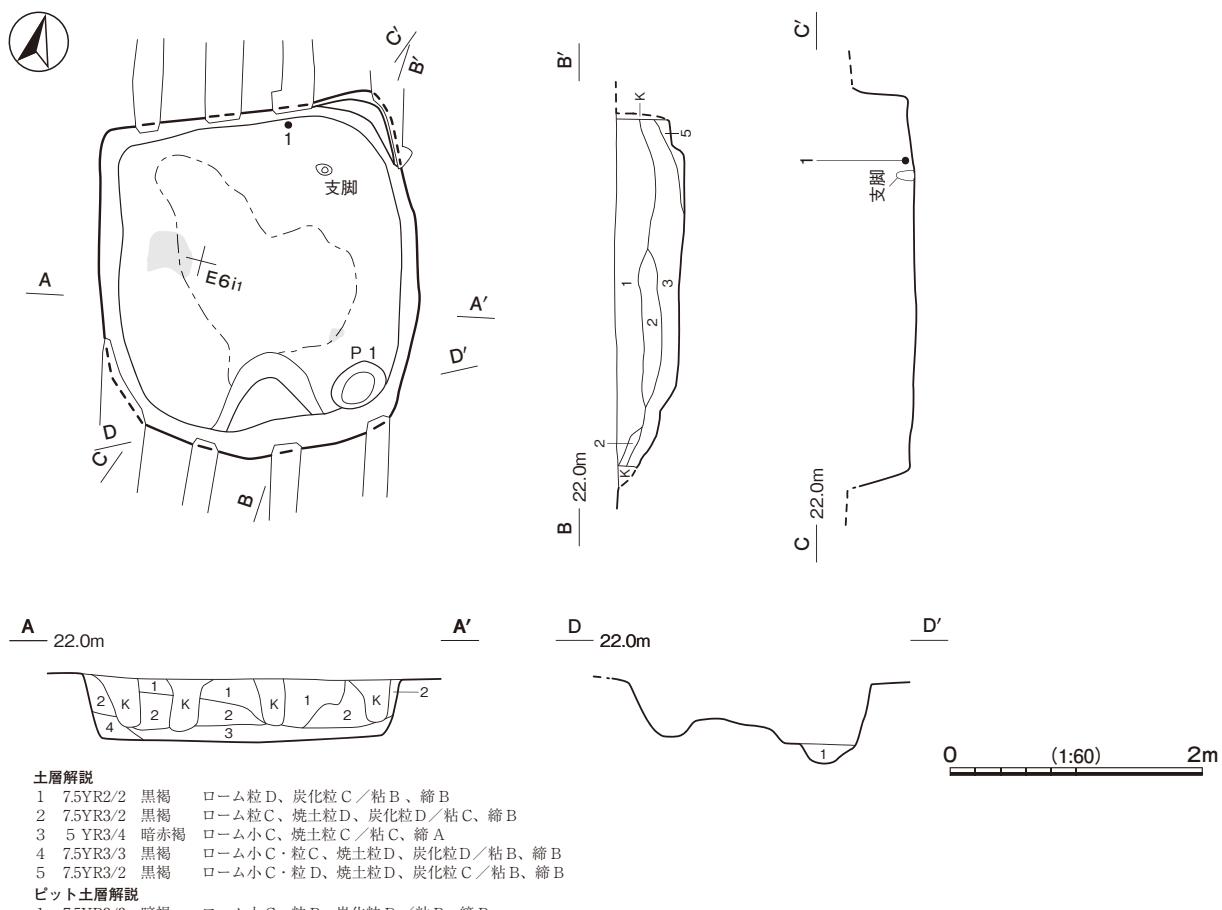
第164表 第114号竪穴建物跡出土遺物一覧（第334図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺	12.4	4.4	—	長石・雲母	浅黄	普通	口縁部内外面横位ヘラ磨き 内面放射状ヘラ磨き 被熱痕 煙付着	床面	80% PL49
2	土師器	壺	[14.8]	5.6	—	長石・赤色粒子	赤彩:赤 素地:明赤褐	普通	口縁部内外面横位ヘラ磨き 内面放射状ヘラ磨き 外面上半・内面赤彩	P 2 覆土上層	50% PL49
3	須恵器	高壺	10.2	11.5	6.6	長石	灰	良好	脚部3方一段透かし 脚部外面カキ目	床面	100% PL49 MT-15段階
4	土師器	甕	—	(14.7)	8.4	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	内外面摩滅により調整不明瞭 被熱・煙付着	床面	10%

第133号竪穴建物跡（第335・336図 第165表 PL19）

位置 調査区北東部のE 6h1区、標高22mほどの台地上に位置している。

重複関係 第1512号土坑を掘り込んでいる。



第335図 第133号竪穴建物跡遺物実測図

規模と形状 長軸 2.74 m、短軸 2.55 m の方形で、長軸方向は N - 19° - W である。壁は高さ 40 ~ 45 cm で、ほぼ直立している。北東コーナー部は壁外に 8 cm ほど掘り込み、段を有している。

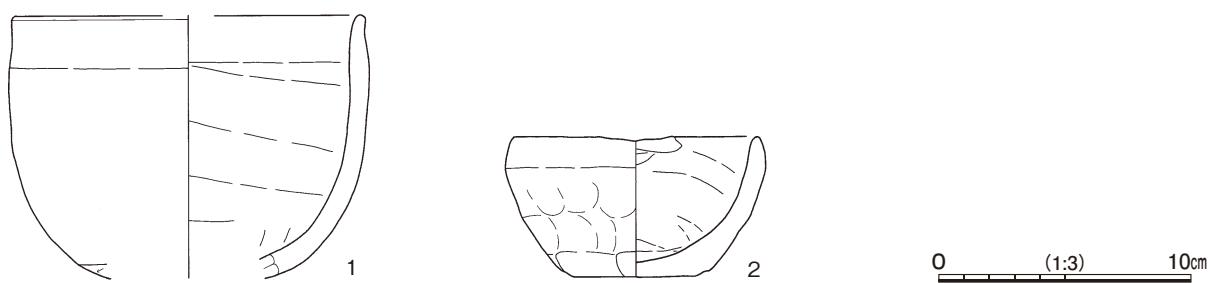
床 平坦で、中央部が硬化している。南壁中央部に、地山を掘り残した階段状の施設が位置している。

ピット 1 か所。P 1 は深さ 16 cm で、性格不明である。

覆土 5 層に分層できる。不自然な堆積状況から人為堆積である。西壁寄りの覆土下層に焼土が堆積している。

遺物出土状況 土師器片 82 点（壺 1、鉢 2、甕 75、甌 3、手捏土器 1）、土製品 1 点（支脚）が出土している。ほかに、混入した縄文土器片 22 点（深鉢）が出土している。1 は北壁際の覆土下層から、2 は北部の覆土中から出土している。北東部床面から支脚が出土しているが、残存状況が悪く図示できない。

所見 時期は、出土土器から古墳時代後期と考えられる。



第 336 図 第 133 号堅穴建物跡出土遺物実測図

第 165 表 第 133 号堅穴建物跡出土遺物一覧（第 336 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	鉢	[14.0]	(10.4)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	外面被熱により調整不明瞭 内面ナデ	覆土下層	30% PL49
2	土師器	手捏土器	[9.8]	5.5	5.0	長石・石英 ・黒色粒子	にぶい黄 褐	普通	外面指頭痕 内面粗雜なヘラナデ	覆土	30%

第 166 表 古墳時代堅穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸 × 短軸 (m)	主軸穴				出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
15	E 6g1	N - 14° - W	方形	6.14 × 6.00	50 ~ 59	平坦	ほぼ全周	3	1	-	竈 1	1	自然・人為	土師器	6世紀中葉	SK1438・1515→本跡
16	E 6i2	N - 16° - W	方形	5.60 × 5.56	16 ~ 42	平坦	ほぼ全周	4	-	12	-	2	人為	土師器	6世紀中葉	
17	F6b3	N - 22° - W	方形	7.20 × 7.10	22 ~ 54	平坦	全周	4	1	16	竈 1	1	人為	-	6世紀中葉	
46	G 4d3	N - 10° - W	方形	6.46 × 6.34	14 ~ 20	平坦	-	3	1	-	炉 1	1	不明	土師器	5世紀中葉	
48	G 4b4	N - 87° - W	長方形	4.30 × 3.14	14 ~ 20	平坦	-	-	-	2	-	-	不明	土師器	4世紀後葉	
53	F4i1	N - 4° - E	長方形	4.36 × 3.82	24	平坦	-	2	1	6	炉 1	-	人為	土師器	5世紀前葉	
68	F 2i8	N - 73° - E	方形	4.15 × 4.02	12	平坦	-	-	-	5	-	-	人為	土師器	5世紀中葉	SI 72→本跡
71	F 2f8	N - 9° - W	方形	5.30 × 5.14	14 ~ 32	平坦	-	3	-	9	炉 1	1	人為	土師器、砥石	5世紀中葉	
112	G 5e2	N - 8° - W	方形	5.10 × 4.95	8 ~ 25	平坦	一部	4	1	2	炉 1	1	人為	土師器	5世紀中葉	SK1478・1510→本跡
113	G 6c3	N - 72° - E	方形	6.80 × 6.62	44 ~ 60	平坦	全周	4	1	1	東竈 1	1	自然・人為	土師器、支脚	6世紀中葉	SK1412・1419・1488・1516・1517→本跡
114	G 5f7	N - 4° - E	方形	6.62 × 5.58	4 ~ 23	平坦	一部	4	1	10	竈 1	1	人為	土師器、須恵器	6世紀前葉	
133	E 6h1	N - 19° - W	方形	2.74 × 2.55	40 ~ 45	平坦	-	-	-	1	-	-	人為	土師器	後期	SK1512→本跡

(2) 土坑

第 888 号土坑 (第 337 図 第 167 表 PL19)

位置 調査区北西部の F 2 i6 区、標高約 21 m の台地平坦部に位置している。

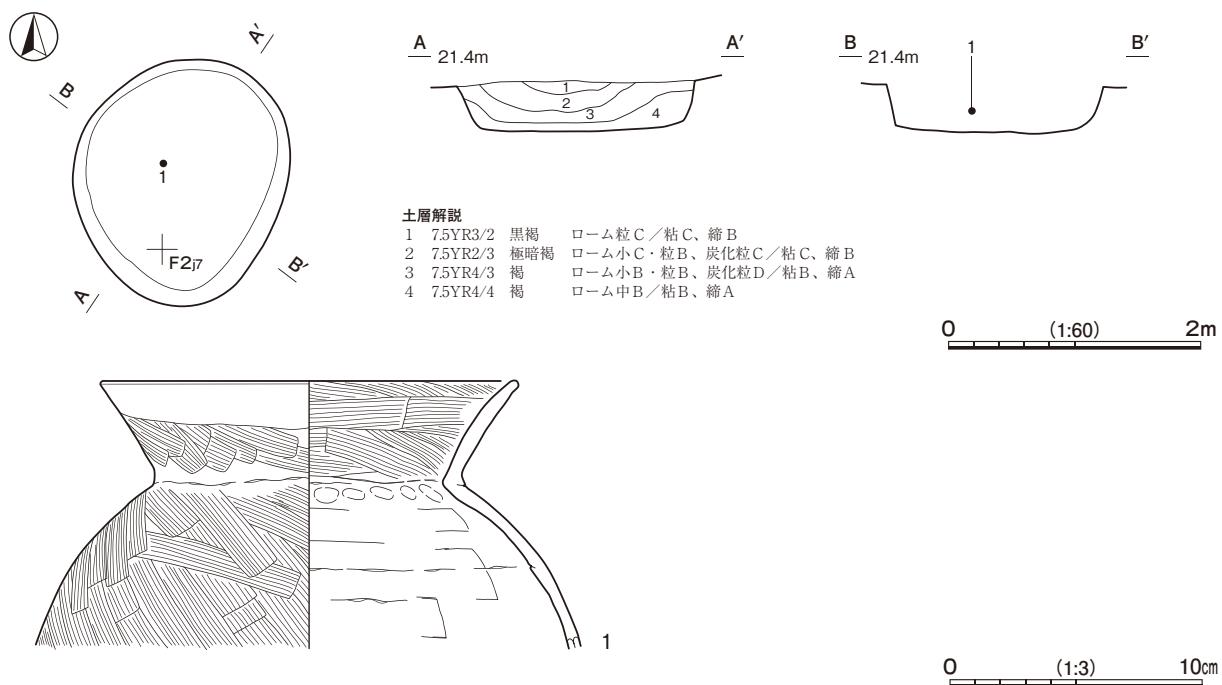
規模と形状 長径 1.95 m、短径 1.70 m の橢円形で、長径方向は N - 10° - W である。深さは 40 cm で、壁は外傾している。底面は平坦である。

覆土 4 層に分層できる。周囲から流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片 3 点 (甕) が出土している。ほかに、混入した縄文土器片 19 点 (深鉢) が出土している。

1 は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀後葉と考えられる。



第 337 図 第 888 号土坑・出土遺物実測図

第 167 表 第 888 号土坑出土遺物一覧 (第 337 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	16.4	(10.6)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面・口縁部内面ハケ目調整 口縁部外面ハケ目調整後ナデ 体部内面ヘラナデ	覆土下層	30% PL49

(3) 古墳

第1号墳 (第338～341図 第168表 PL20)

位置 調査区北西部のF3f1区、標高約22mの台地上に位置している。

重複関係 第5号炉跡を掘り込んでいる。

規模と形状 全長17.34m、墳長15.80mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。

墳丘 盛土は削平されている。墳丘規模は、周溝内法底面を墳丘裾部として、東西13.21m、南北15.80mである。周溝内法面の傾斜角は、約29～52度で立ち上がるが、搅乱のため、正確な角度は不明である。

周溝 南辺西部が0.44mにわたり途切れている。底面に段差や凹凸が認められる。辺の長さは、周溝の外側で東西16.15m、南北17.34mである。南辺内側辺は11.84mで、中央部に墓道がある。

周溝覆土 4層に分層できる。周囲から流れ込んだ堆積状況から、自然堆積である。

埋葬施設 前室を設けた複室構造の石棺系石室である。石室北東部の搅乱のため、正確な規模は不明である。墓道から石室奥壁板石の裏込め土までの全長は、約7.7mと推定される。

・**玄室** 玄室は、残存する雲母片岩の石材と裏込め土から長軸1.95m、短軸1.39m、深さ0.50mと推定される。玄室を構築する石材は、南側の床石と南東コーナー部の石材を残し、ほとんどが抜き取られている。床石は、割石を敷き詰めている。玄室の墓道側東寄りには樋石が遺存している。遺構確認面から床石までの高さは36cmである。一方、樋石の最高点から床石までの高さは16cmであり、想定される石室の高さよりも20cm以上低くなる。このため、玄室の墓道側、樋石の上部は幅約60cm、高さ20cm以上開口していたと考えられる。玄室の掘方は、石材の抜き取りによって改変を受けており、詳細は不明である。確認した範囲では、玄室床面の周囲を溝状に掘りくぼめている。掘方南辺西側の幅50cm、高さ50cmほどのくぼみは、板石の設置痕である。床石の下部には、ローム主体で褐色の第⑪層が埋土されている。裏込め土の高さは、遺構確認面から掘方底面まで約60cmである。玄室西側、東側、南側の一部に裏込めに用いられた白色粘土とローム主体の土が交互に充填されている。また、玄室南側で確認された粘土層である第36層は、後世の改変によって移動したものと考えられる。

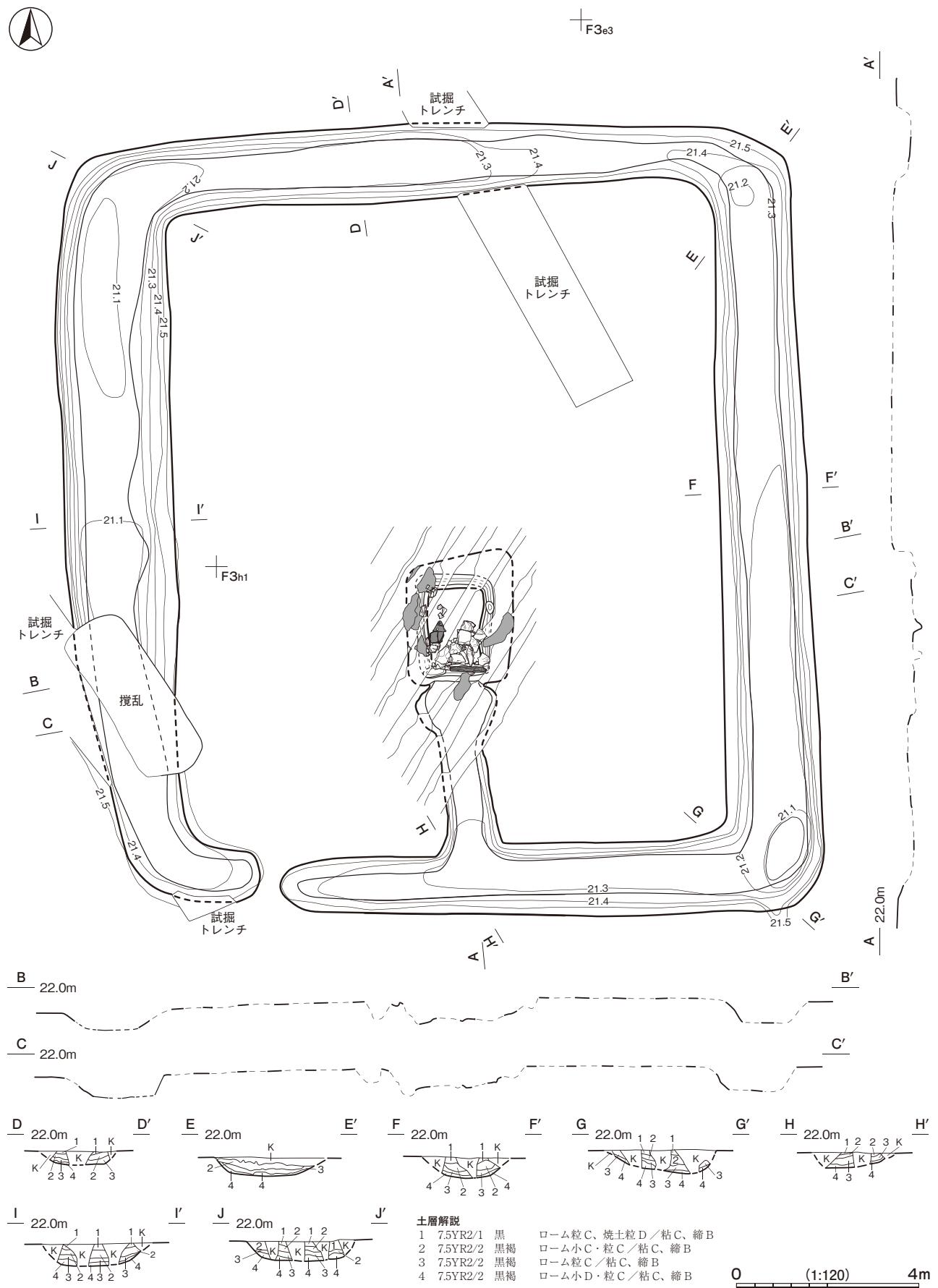
・**前室** 玄室の南側に南北1.00m、東西1.77mの空間を確認した。樋石との関係性から前室と考えられる。石材は全て抜き取られており、掘方の埋土も確認できなかった。遺構確認面から底面までの高さは50cmである。

・**墓道** 墓道は長さ2.80m、幅は周溝と接続する付近で1.40m、石室接続部前付近で0.96mを測る。墓道は周溝底面より12cm高く、前室底面よりも2cm高い。

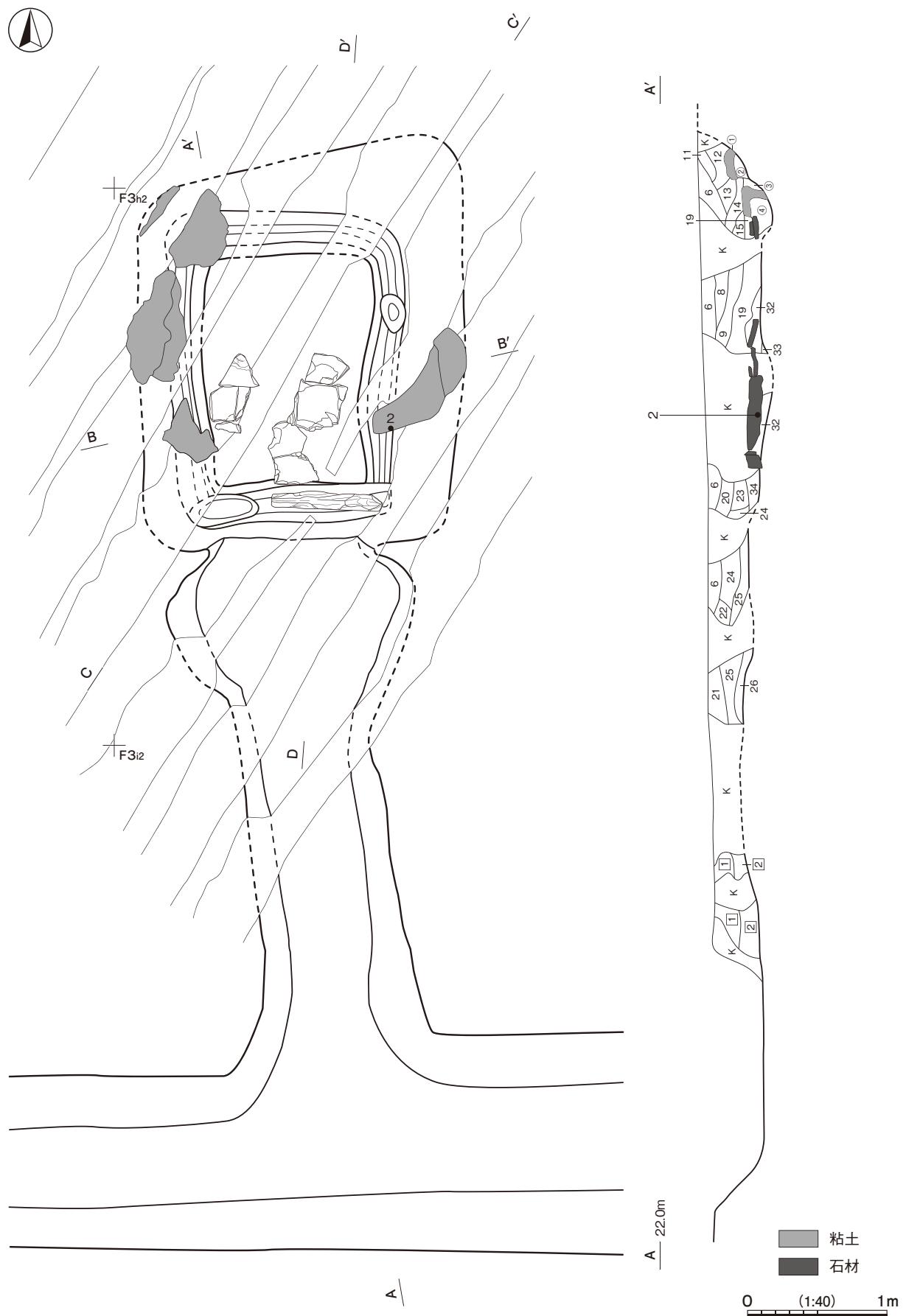
埋葬施設覆土 第1～41層は、石材の抜き取りに伴う流入土であり、粘土ブロックや破碎石が混入している。第①～⑨層は掘方の裏込め土であり、上層から中層にかけて白色粘土とローム主体の土を交互に、下層はローム主体の土を充填している。第⑩・⑪層は掘方の埋土である。

遺物出土状況 古墳時代後期の土器片は、周溝からは土師器片89点（壺24、埴3、高壺4、甕58）、須恵器片2点（瓶カ）、墓道からは土師器片5点（甕）、玄室からは土師器片13点（甕）、須恵器片3点（瓶カ）が出土し、玄室の覆土中から石製品1点（滑石製臼玉）が出土している。ほかに混入した縄文土器片478点（深鉢）、古墳時代中期の土師器片2点（高壺、甕）が出土している。1は墓道と墓道前の周溝から出土したものが接合しており、追善供養などに伴う遺物と考えられる。2は玄室南東部から出土している。出土位置から、石材が抜き取られた際に混入したと考えられる。

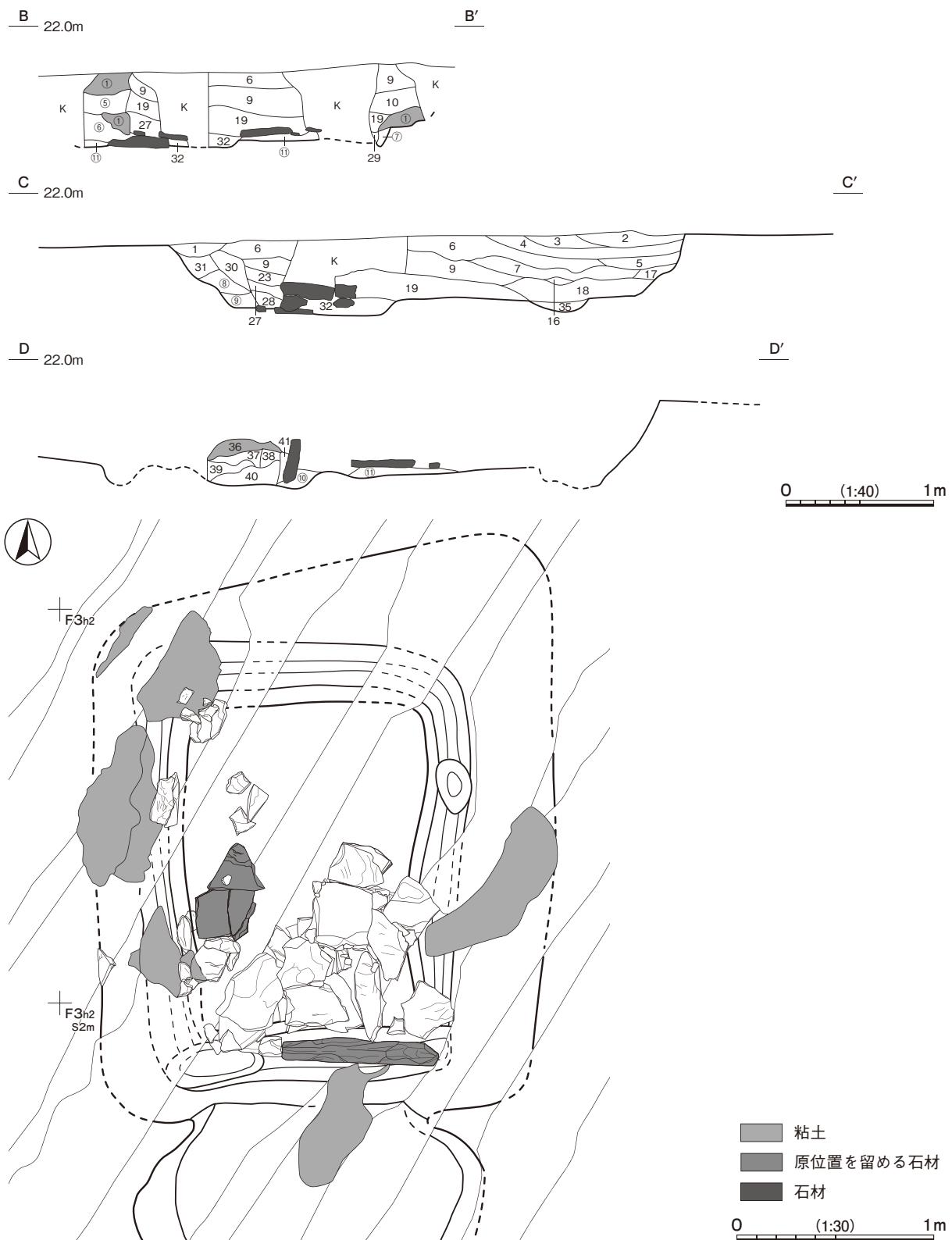
所見 遺跡周辺で墓道をもつ石棺系石室の類例としては、つくば市下河原崎高山古墳群第18号墳がある。時期は、石棺系石室の類例などから、7世紀後葉と考えられる。



第338図 第1号墳実測図



第339図 第1号墳石室実測図(1)



第340図 第1号墳石室石材出土状況・石室実測図(2)

墓道土層解説

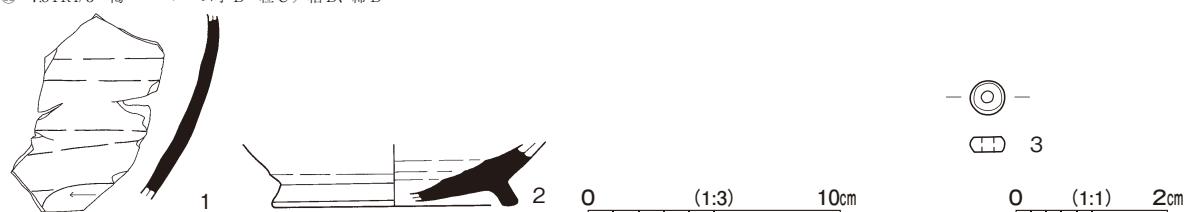
- ① 7.5YR3/2 黒褐 ローム大D・中C・小B・粒B、焼土粒D、炭化物D・粒C／粘B、締B
② 7.5YR4/3 褐 ローム大C・中B・小A・粒A、焼土粒D、炭化物D／粘B、締A

石室覆土土層解説

- 1 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中D・小B・粒B、白色粘土大D・小D／粘B、締B
2 7.5YR3/3 暗褐 ローム大D・中D・小C・粒C、白色粘土大D・小D／粘B、締B
3 7.5YR3/3 暗褐 ローム大D・中D・小C・粒C、白色粘土大D・小C／粘B、締B
4 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中C・小C・粒C、白色粘土大D・小C／粘B、締B
5 7.5YR4/3 褐 ローム大D・中C・小B・粒B、白色粘土大D・小D／粘B、締B
6 7.5YR3/4 暗褐 ローム中D・小C・粒C、炭化物D、白色粘土大D・小D／粘B、締B
7 7.5YR3/4 暗褐 ローム大C・中C・小B・粒B、白色粘土大D・小D／粘B、締B
8 7.5YR4/3 褐 ローム中D・小B・粒B、白色粘土大D・小C／粘B、締B
9 7.5YR4/3 褐 ローム大D・中C・小C・粒B、白色粘土大C・小C／粘B、締B
10 7.5YR4/3 褐 ローム大C・中B・小B・粒B、白色粘土大B・小A／粘B、締B
11 7.5YR4/4 褐 ローム大D・中B・小B・粒A、白色粘土大D・小D／粘B、締B
12 7.5YR4/4 褐 ローム大C・中C・小B・粒A、白色粘土大D・小D／粘B、締B
13 7.5YR4/3 褐 ローム大D・中B・小B・粒B、白色粘土大D・小C／粘B、締B
14 7.5YR4/3 褐 ローム大D・中C・小C・粒B、白色粘土大C・小C／粘B、締B
15 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中D・小C・粒B、白色粘土大D・小C／粘B、締B
16 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中C・小C・粒B、白色粘土小D／粘B、締B
17 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中C・小B・粒B、白色粘土小D／粘B、締A
18 7.5YR3/4 暗褐 ローム大C・中C・小B・粒B、白色粘土大C・小C／粘B、締B
19 7.5YR4/3 褐 ローム大D・中C・小C・粒B、白色粘土大C・小C／粘B、締A
20 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中D・小C・粒B、焼土粒D、炭化物D、白色粘土大D・小C／粘B、締B
21 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中D・小B・粒B、焼土小D・粒C、炭化物D・粒C、白色粘土大D・小C／粘B、締B
22 7.5YR4/3 褐 ローム大D・中C・小B・粒B、焼土中D・小C・粒B、炭化物D、白色粘土大D・小D／粘B、締B
23 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中C・小C・粒B、焼土粒D、炭化物D、白色粘土大B・小B／粘B、締B
24 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中D・小C・粒B、焼土小D・粒C、炭化物D、白色粘土大D・小C／粘B、締B
25 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中C・小C・粒B、焼土小D・粒D、炭化物D、白色粘土大D・小D／粘B、締B
26 7.5YR4/3 褐 ローム大D・中C・小A・粒A、焼土小D・粒C／粘B、締A
27 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中B・小B・粒B、白色粘土大D・小C／粘B、締C
28 7.5YR3/3 暗褐 ローム大D・中D・小C・粒C、白色粘土大C・小C／粘B、締B
29 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中B・小B・粒B、白色粘土大C・小C／粘B、締C
30 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中D・小C・粒A、白色粘土大D・小D／粘B、締B
31 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中C・小C・粒B、白色粘土大D・小D／粘B、締B
32 7.5YR4/3 褐 ローム大D・中C・小B・粒B、白色粘土大D・小D／粘B、締A
33 7.5YR3/4 暗褐 ローム大C・中B・小B・粒B、白色粘土大D・小D／粘B、締C
34 7.5YR3/3 暗褐 ローム中D・小C・粒B、焼土粒D、炭化物D／粘B、締B
35 7.5YR4/3 褐 ローム大D・中B・小B・粒A、白色粘土小D／粘B、締A
36 7.5YR4/3 褐 ローム粒B、白色粘土粒B／粘B、締A
37 7.5YR4/3 褐 ローム小C・粒B、石材碎片D／粘A、締A
38 7.5YR4/4 褐 ローム小D・粒B・粘C、締A
39 7.5YR3/3 暗褐 ローム小B・石材碎片D・粘B、締A
40 7.5YR4/4 褐 ローム小B・石材碎片C・粘A、締A
41 7.5YR4/4 褐 ローム小B・石材碎片C・粘A、締A

石室掘方土層解説

- ① 7.5YR6/2 黒褐 白色粘土A・小A／粘B、締A
② 7.5YR4/3 褐 ローム大C・中B・小A・粒A、焼土粒D、炭化物D／粘B、締A
③ 7.5YR4/3 褐 ローム大C・中C・小A・粒A、白色粘土大D・小D／粘B、締A
④ 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中B・小B・粒B、白色粘土大D・小C／粘B、締C
⑤ 7.5YR4/2 褐 ローム大C・中B・小B・粒B、白色粘土大B・小A／粘B、締B
⑥ 7.5YR4/3 褐 ローム大C・中C・小B・粒B、白色粘土大B・小B／粘B、締B
⑦ 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中B・小B・粒B、白色粘土大D・小C／粘B、締C
⑧ 7.5YR3/2 黒褐 ローム大D・中D・小C・粒C、白色粘土大D・小D／粘B、締B
⑨ 7.5YR3/4 暗褐 ローム大D・中C・小B・粒B、白色粘土大C・小C／粘B、締A
⑩ 7.5YR4/3 褐 ローム小B・炭化物D、白色粘土大D・小C／粘B、締C
⑪ 7.5YR4/3 褐 ローム小B・粒C／粘B、締B



第341図 第1号墳出土遺物実測図

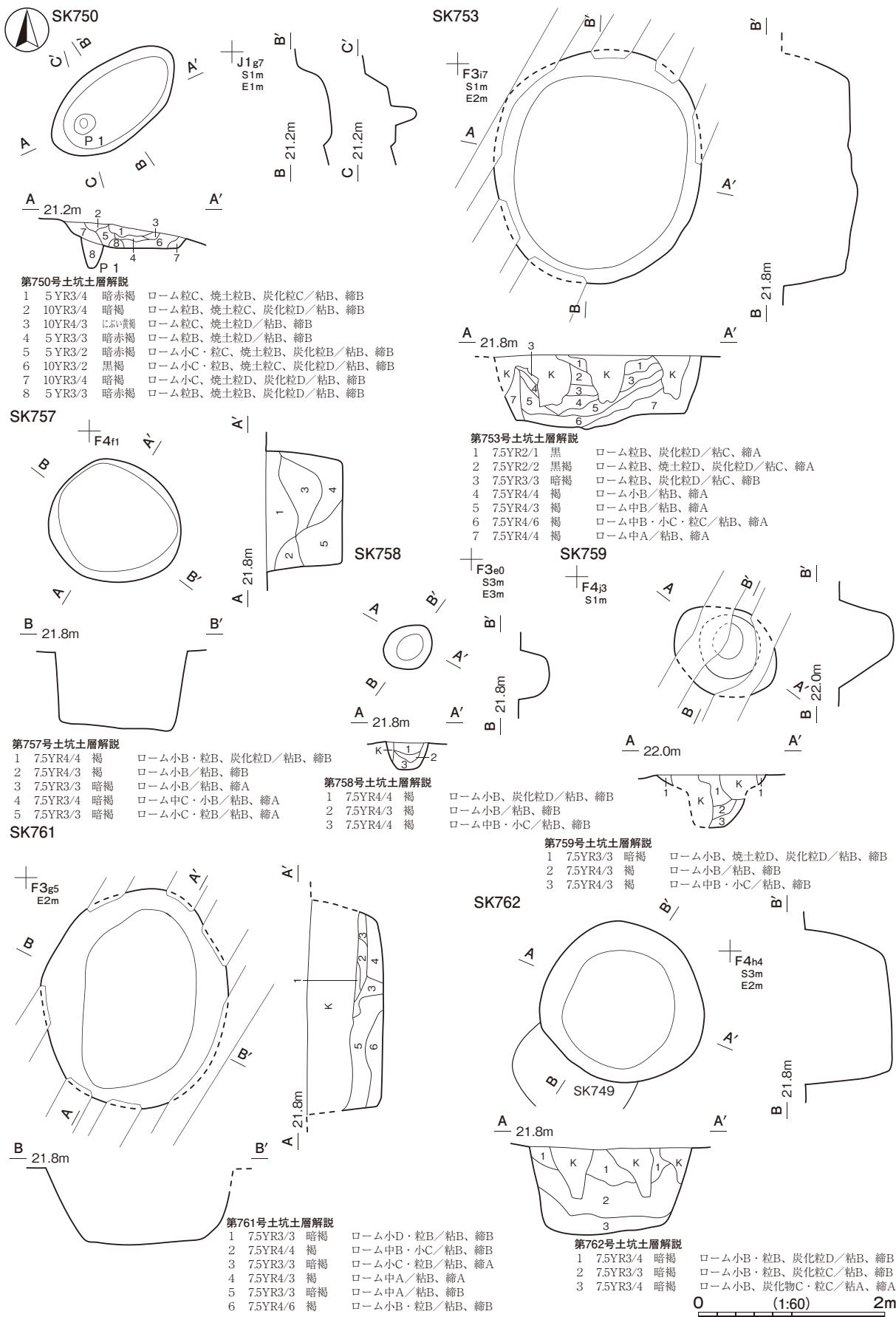
第168表 第1号墳出土遺物一覧 (第341図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	瓶カ	-	(7.8)	-	長石・石英	灰	良好	ロクロ整形 体部下端ヘラ削り	墓道・周溝覆土	5%
2	須恵器	瓶カ	-	(2.5)	[9.7]	長石・石英	灰黄褐	良好	ロクロ整形	玄室覆土下層	5%
番号	器種	径	孔径	高さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
3	白玉	0.46	0.15	0.20	0.08	滑石	一方向から穿孔			玄室覆土	100% PL49

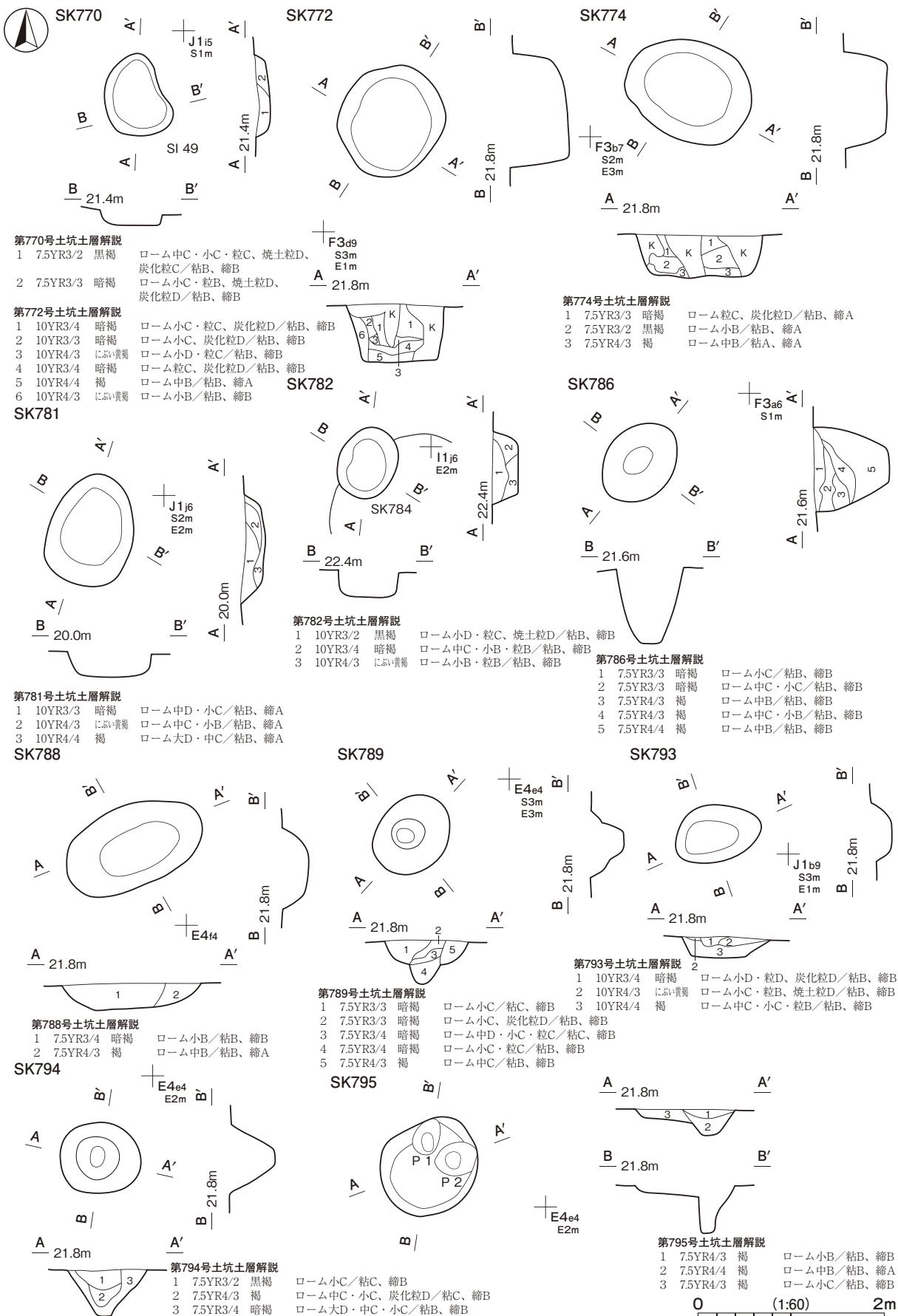
4 その他の遺構と遺物

土坑510基、溝跡5条、柱穴列1条を確認した。以下、遺構と遺物について記載する。

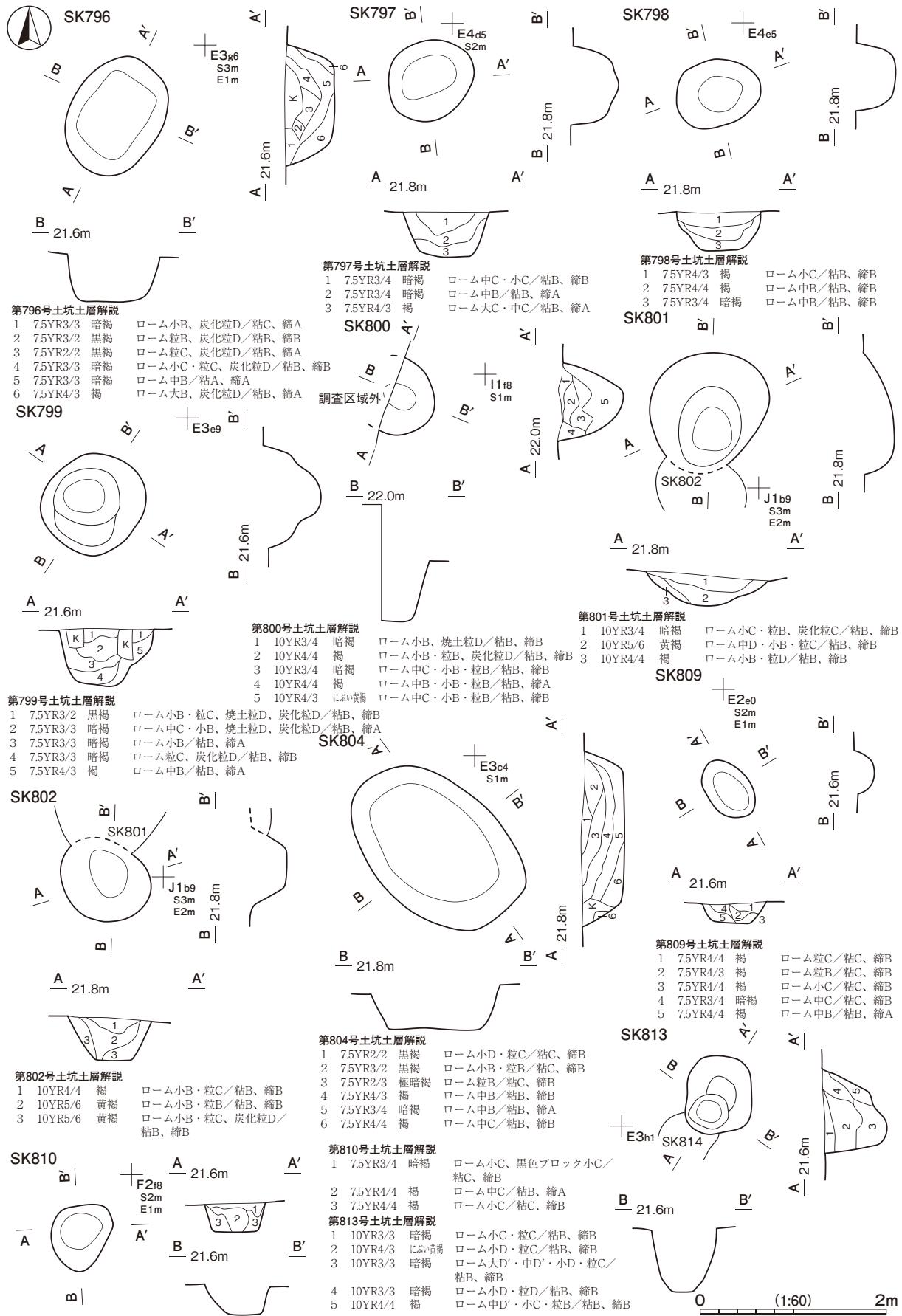
(1) 土坑



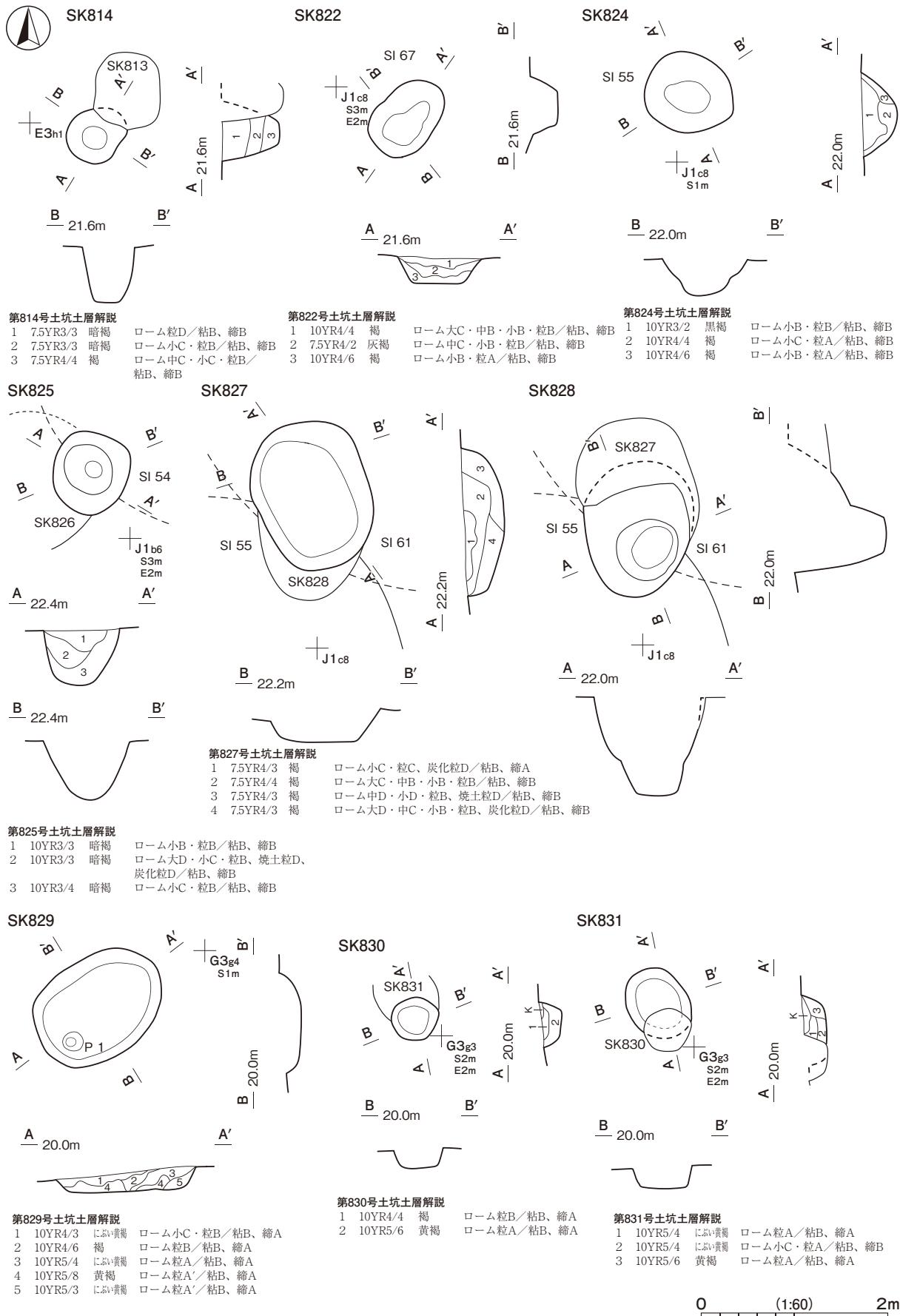
第342図 その他の土坑実測図(1)



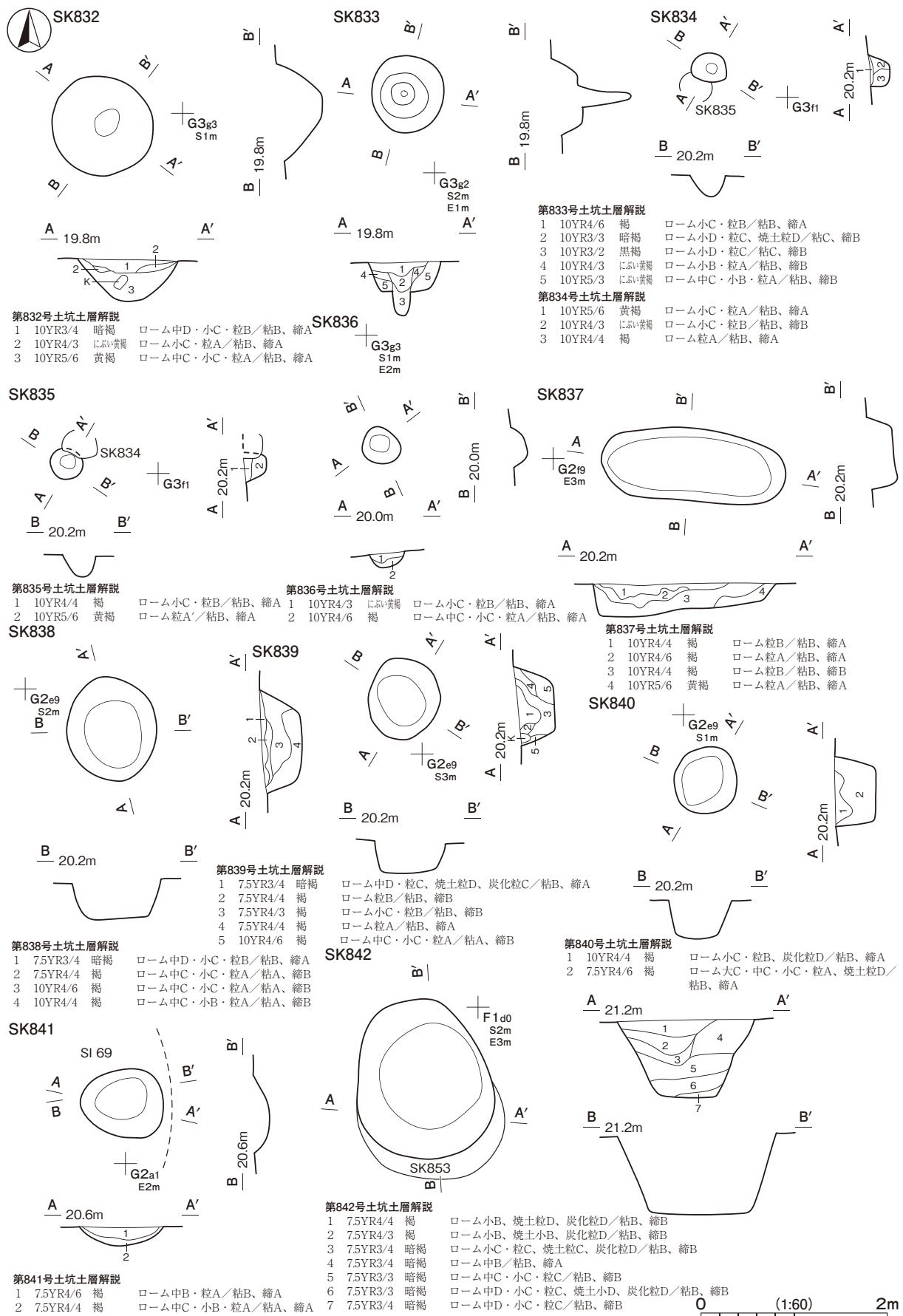
第343図 その他の土坑実測図(2)



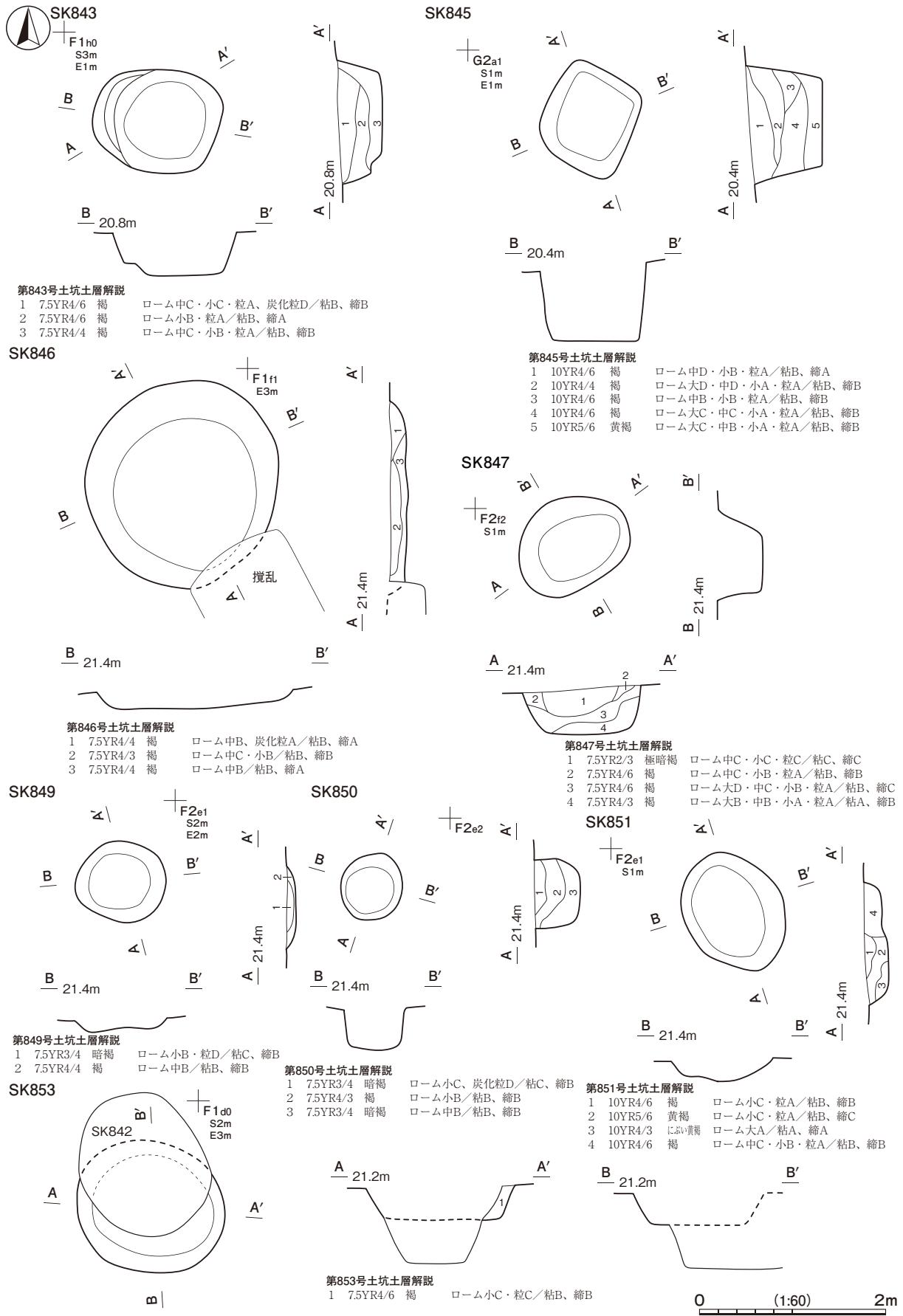
第344図 その他の土坑実測図(3)



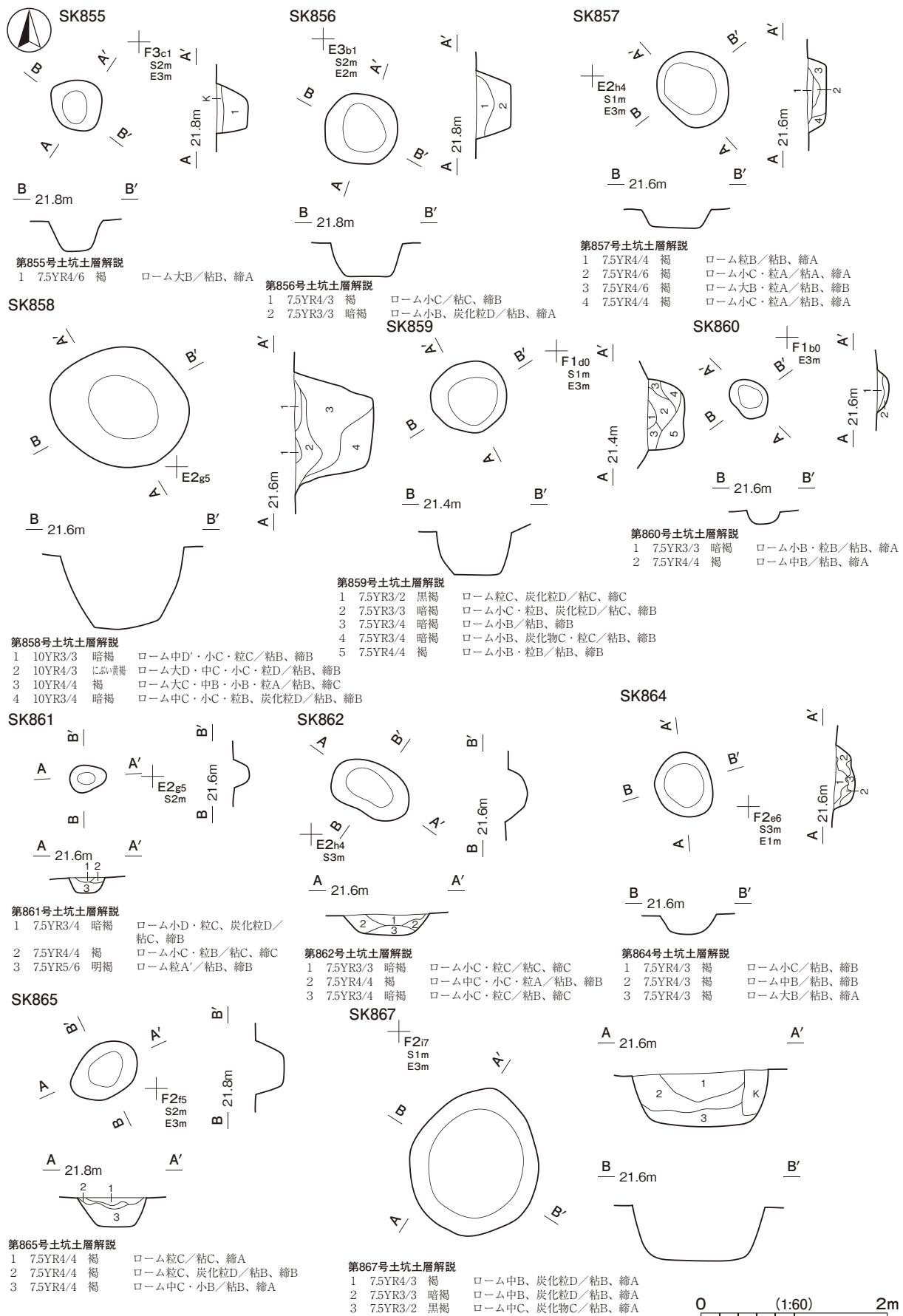
第345図 その他の土坑実測図(4)



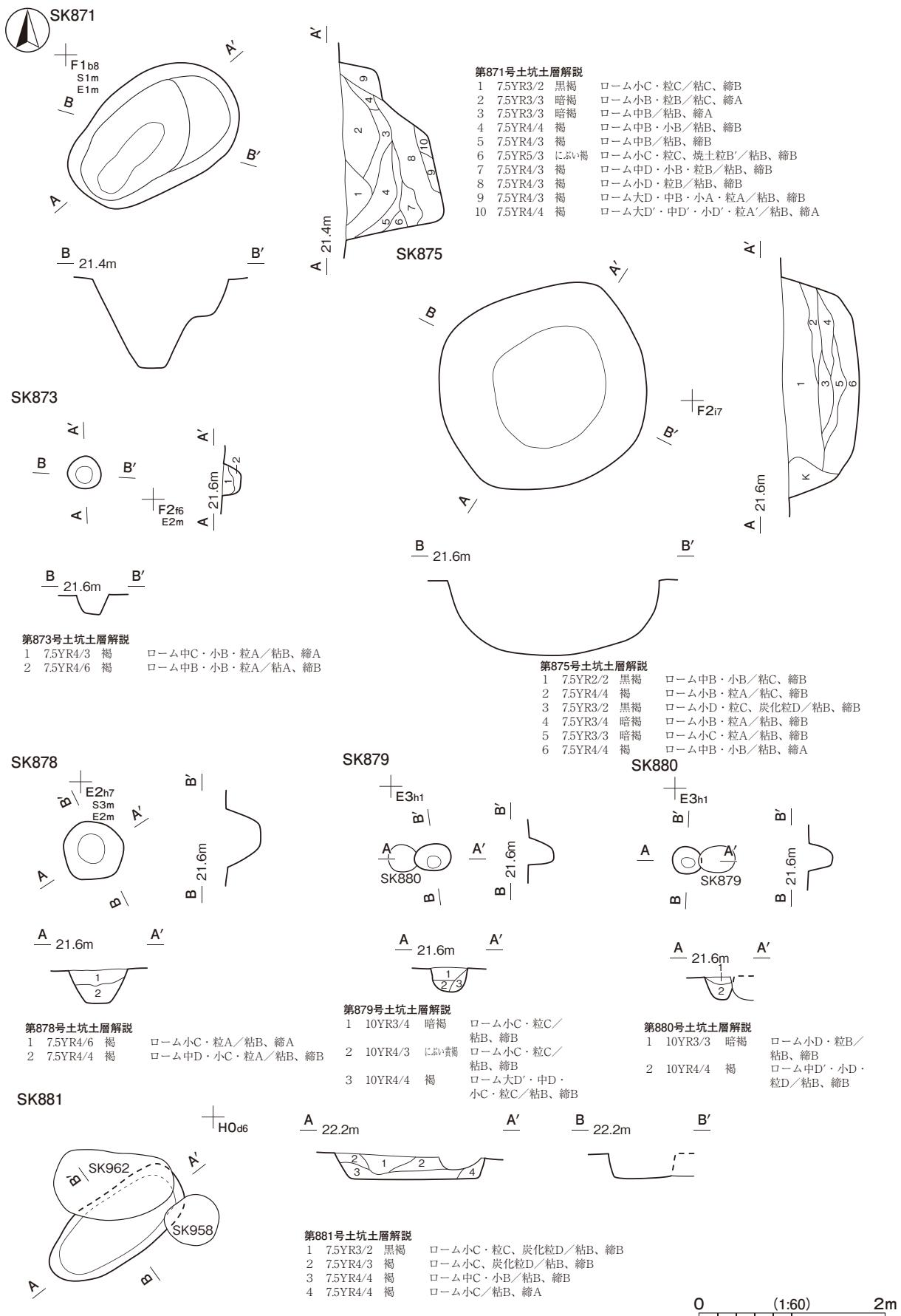
第346図 その他の土坑実測図(5)



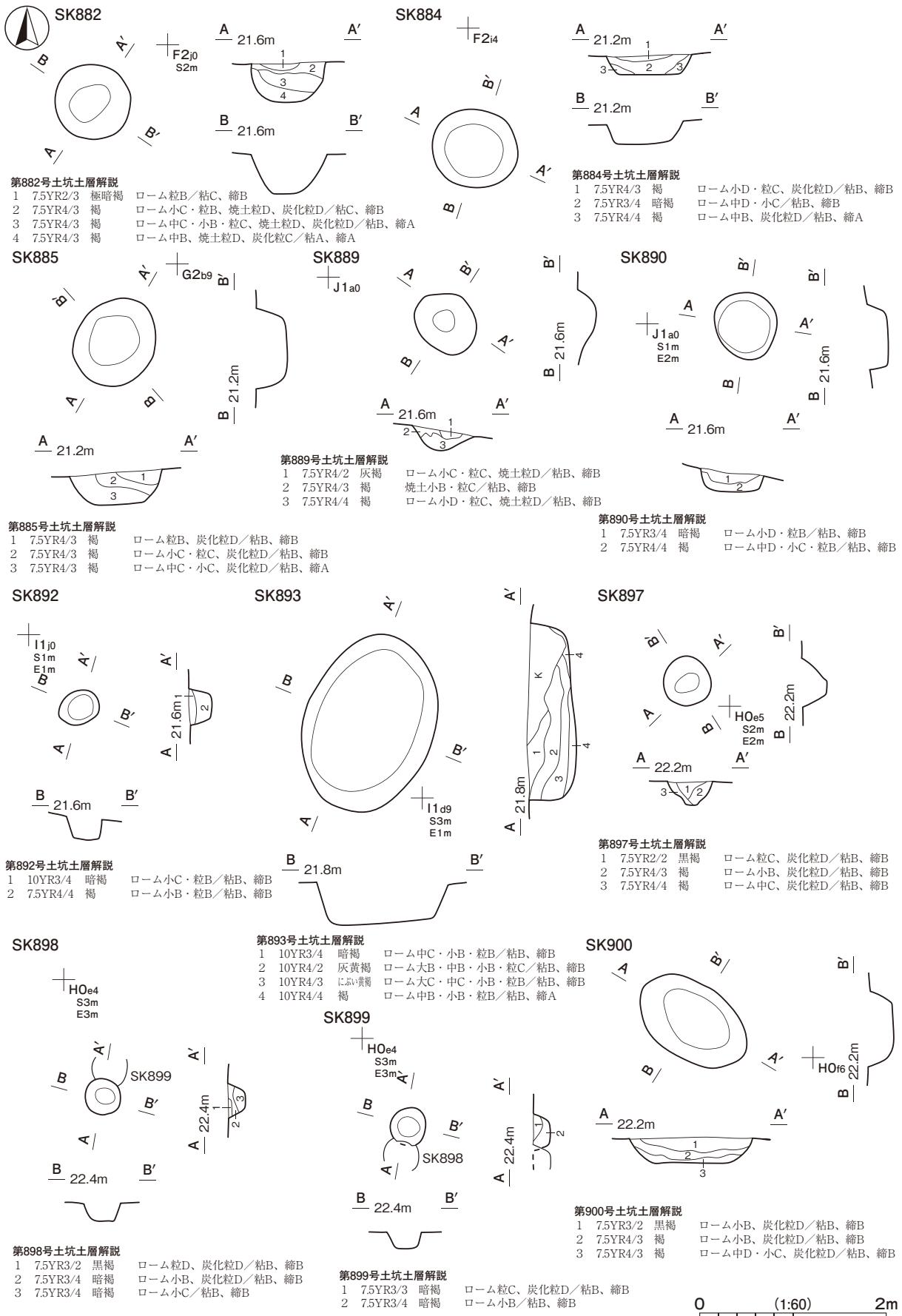
第347図 その他の土坑実測図(6)



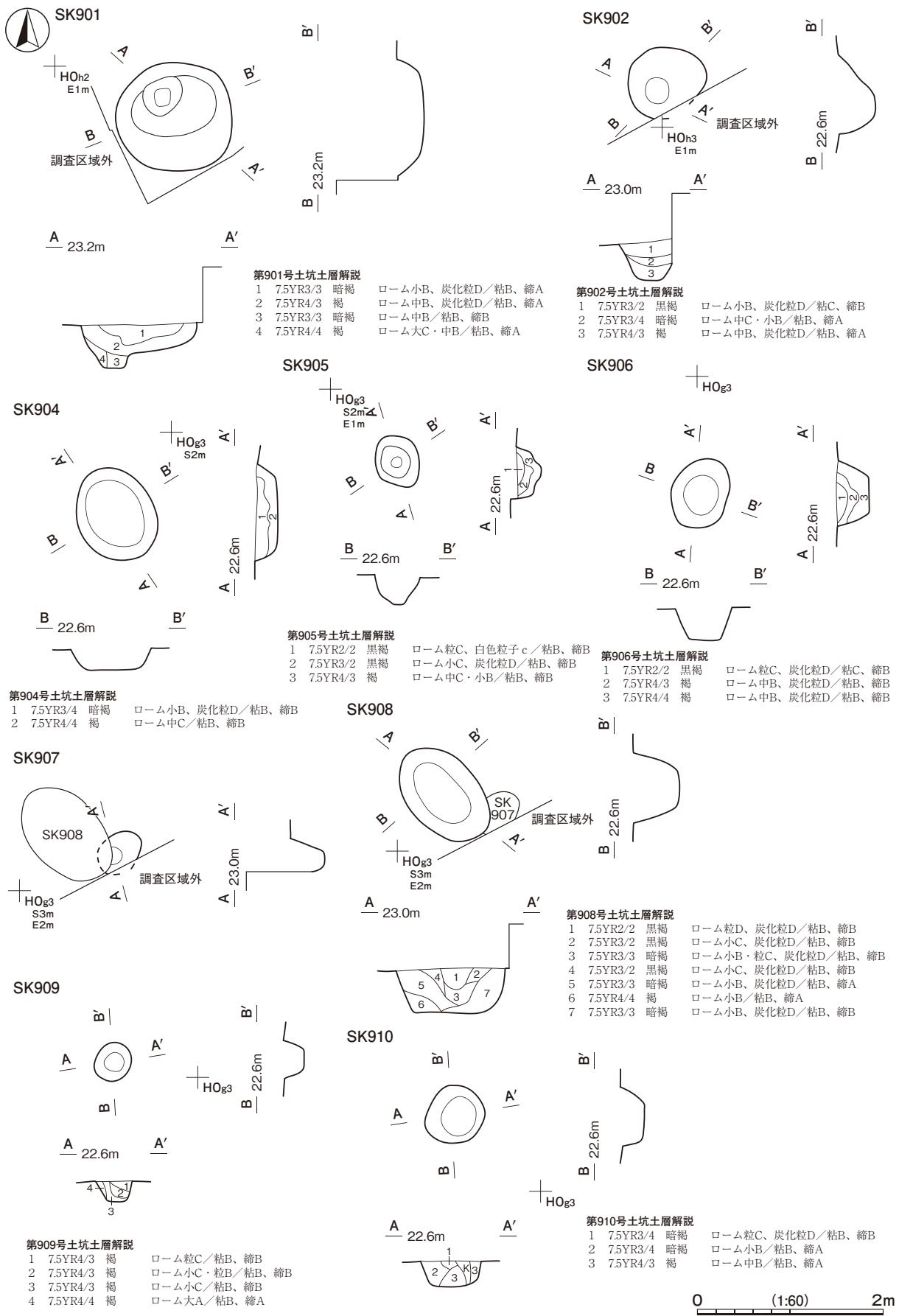
第348図 その他の土坑実測図(7)



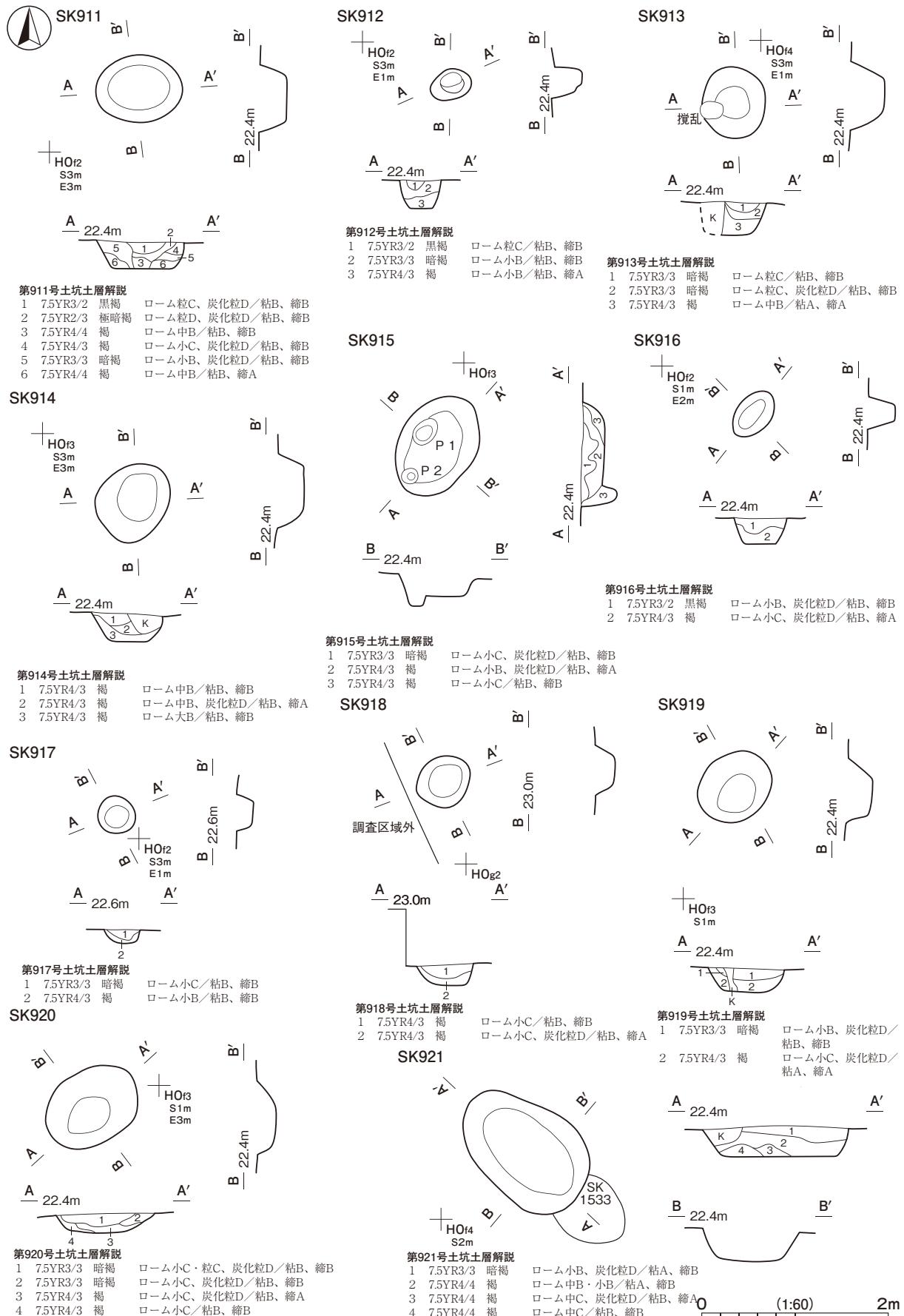
第349図 その他の土坑実測図(8)



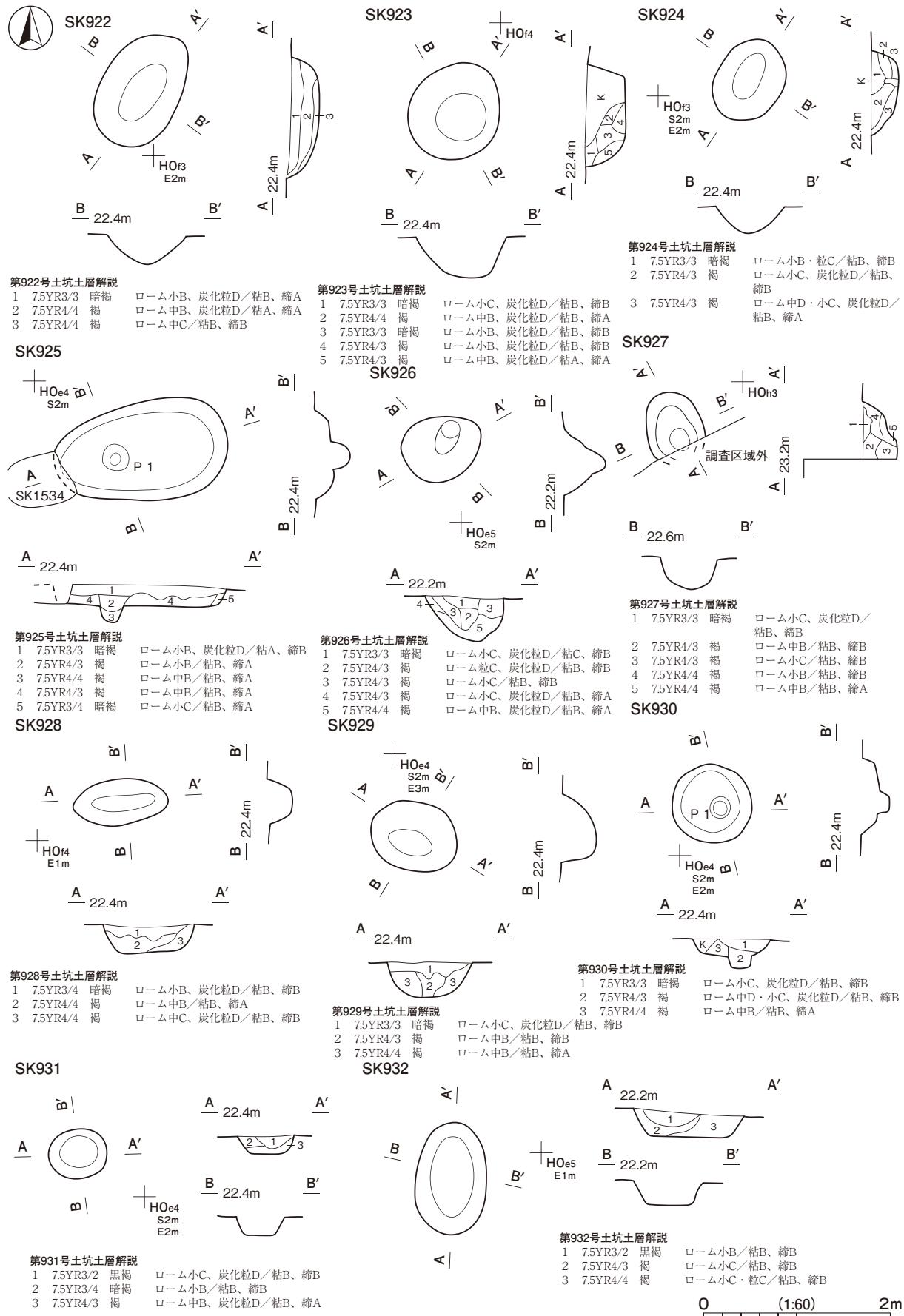
第350図 その他の土坑実測図(9)



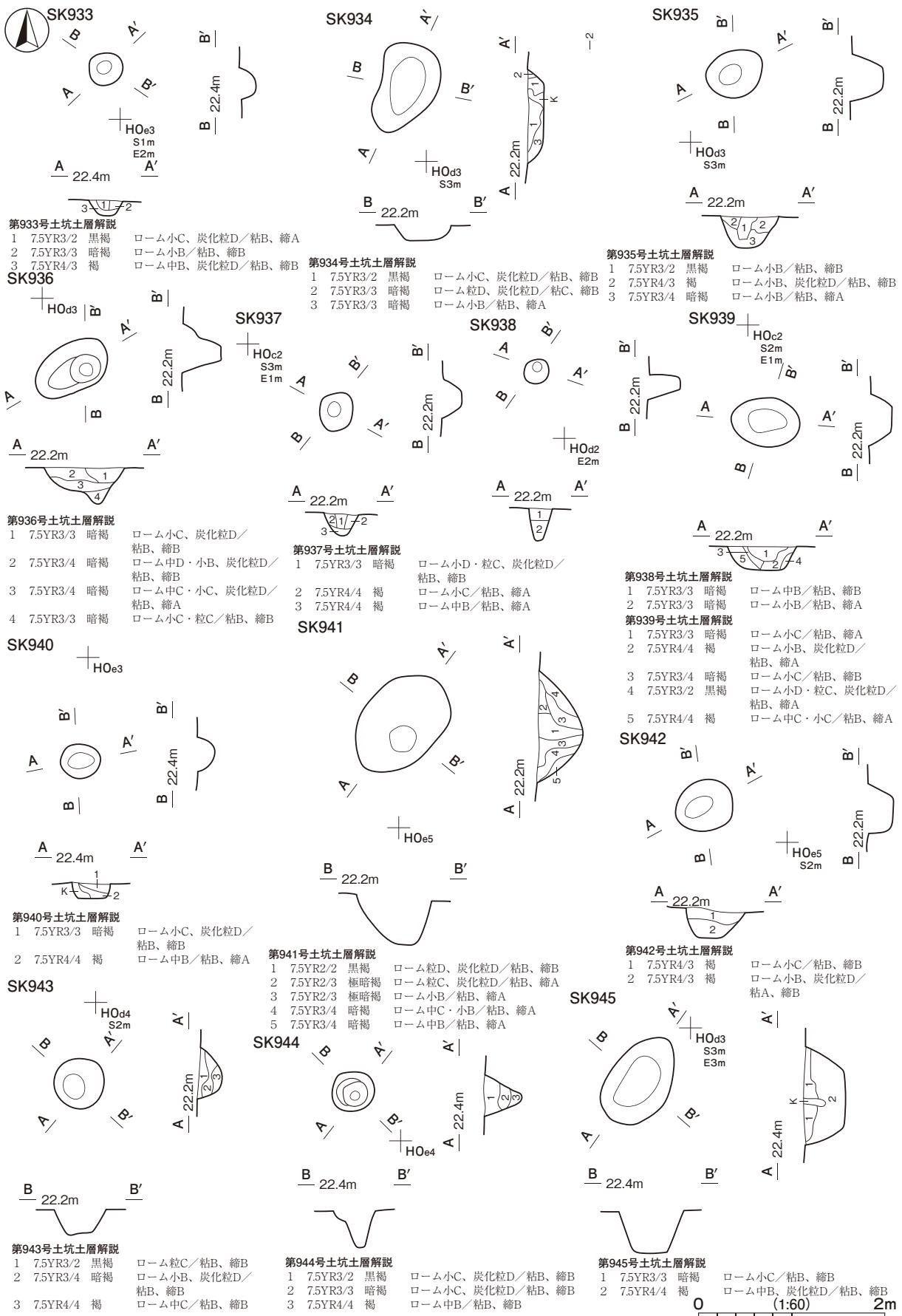
第351図 その他の土坑実測図(10)



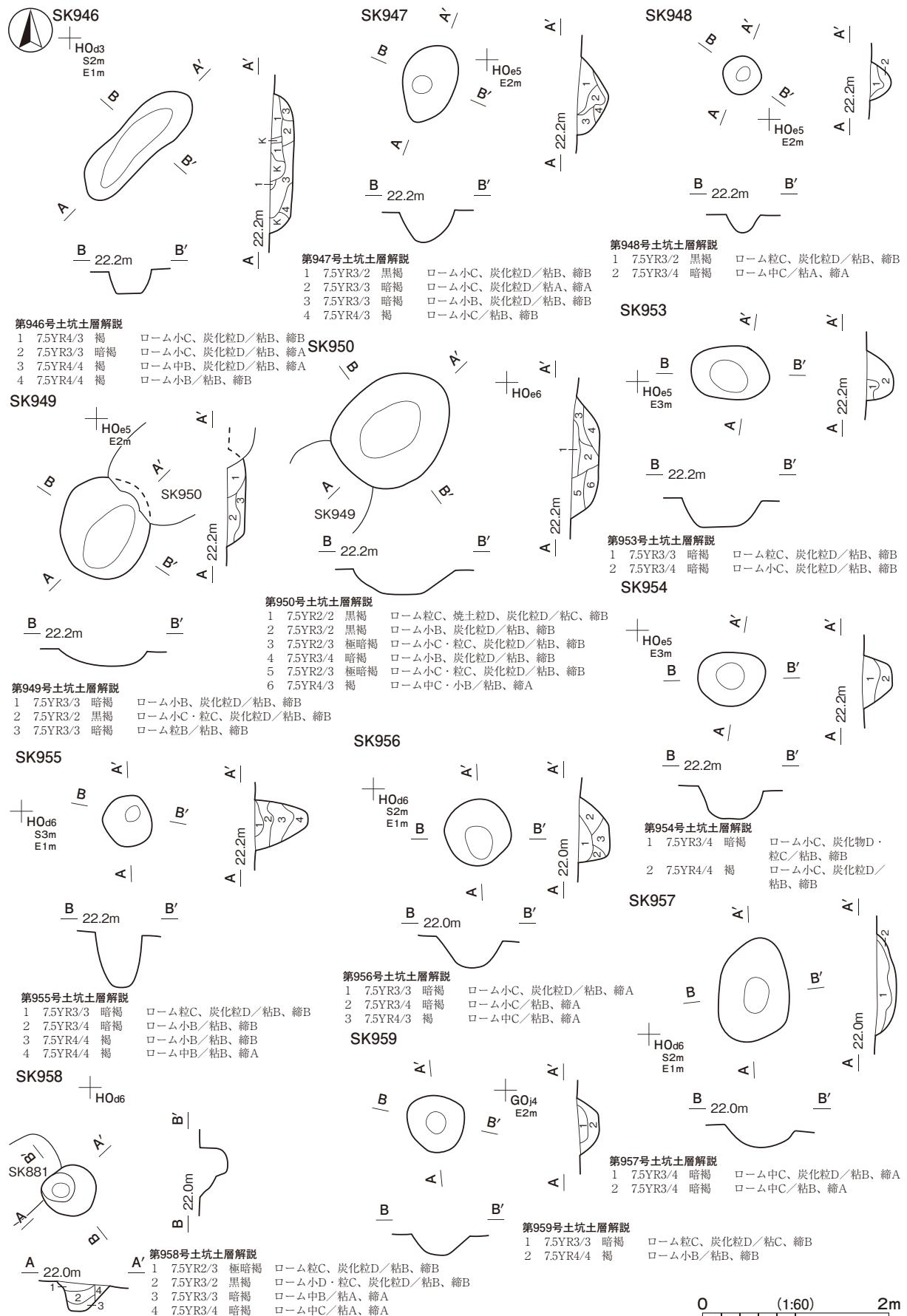
第352図 その他の土坑実測図(1)



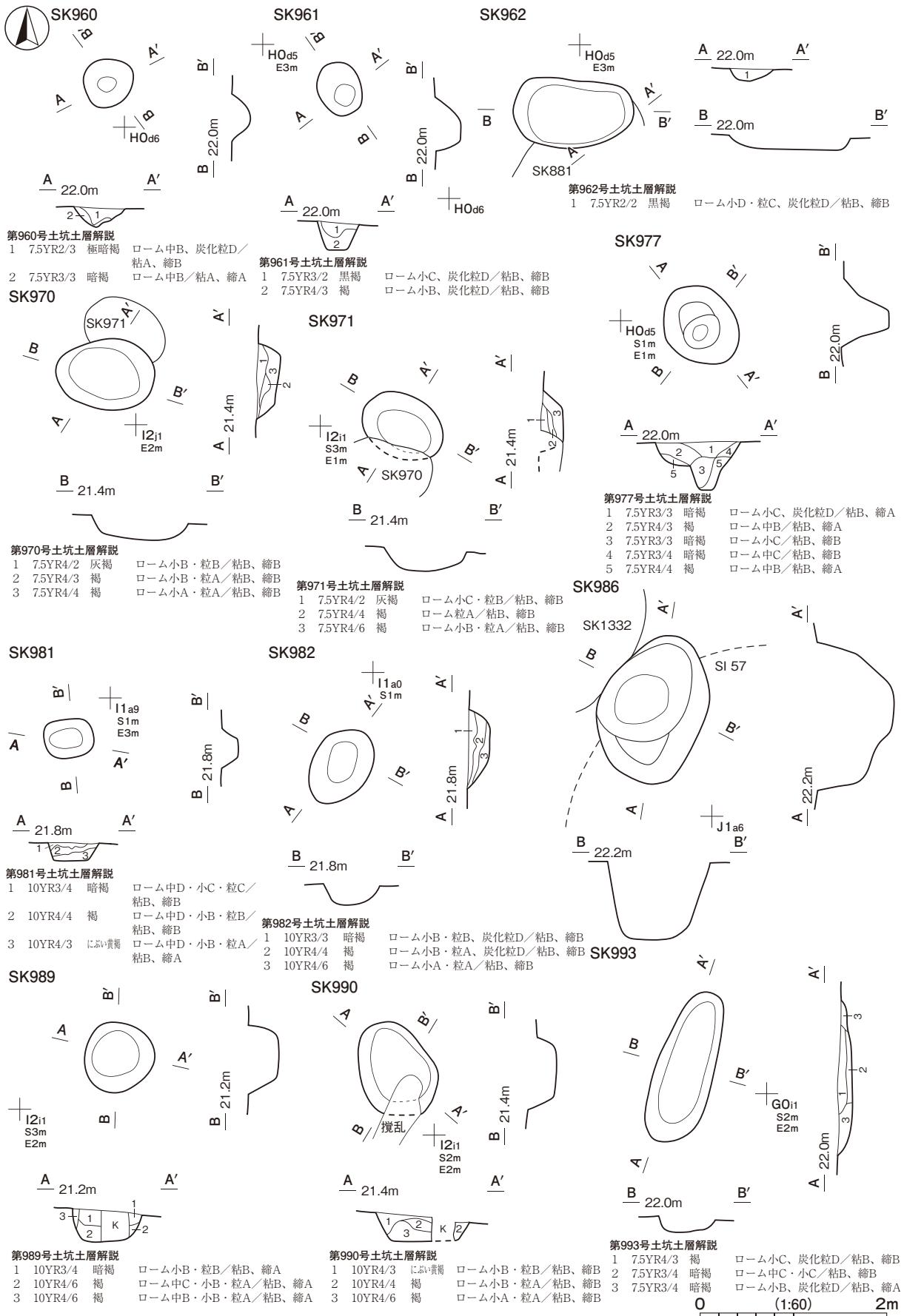
第353図 その他の土坑実測図(12)



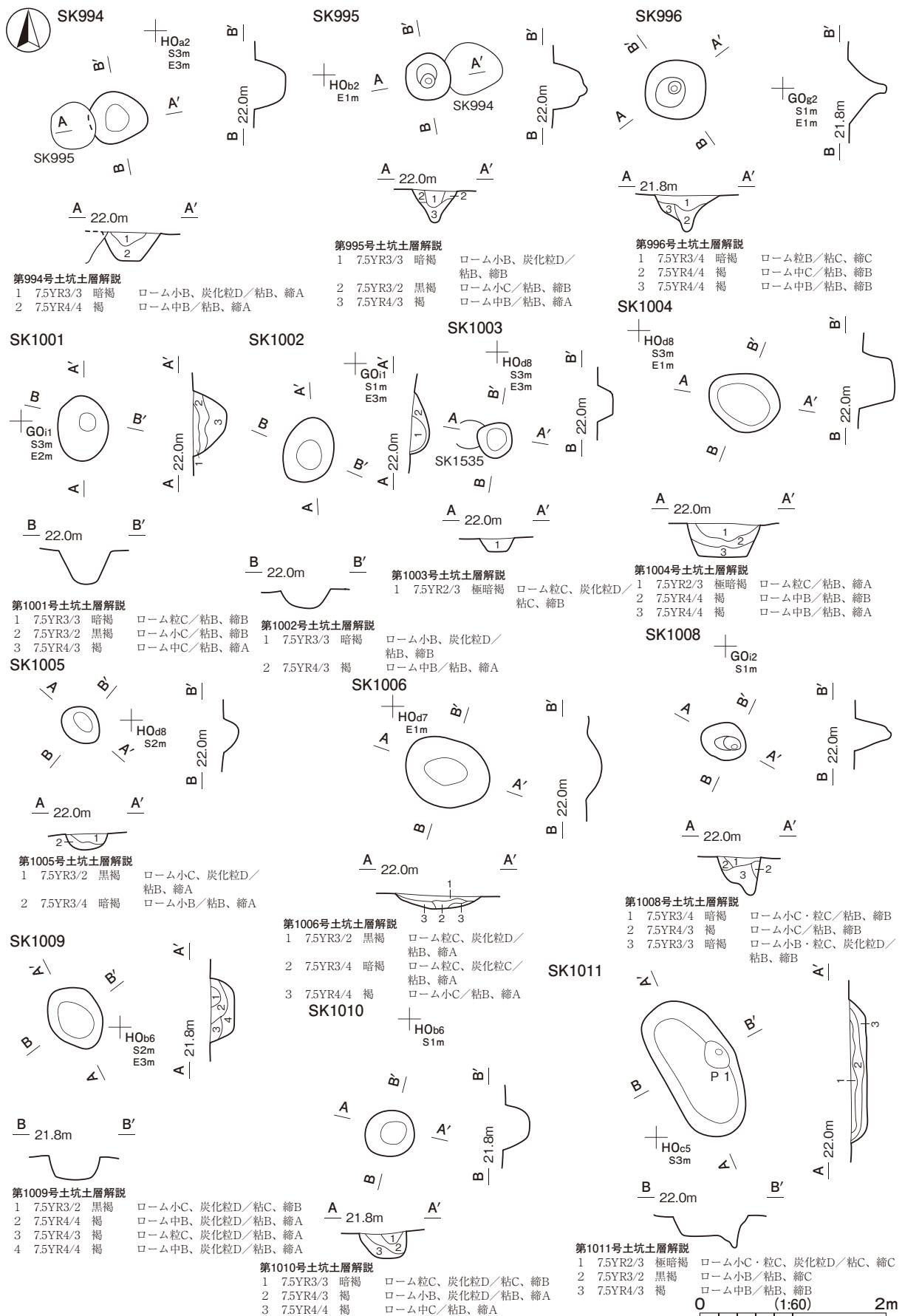
第354図 その他の土坑実測図(13)



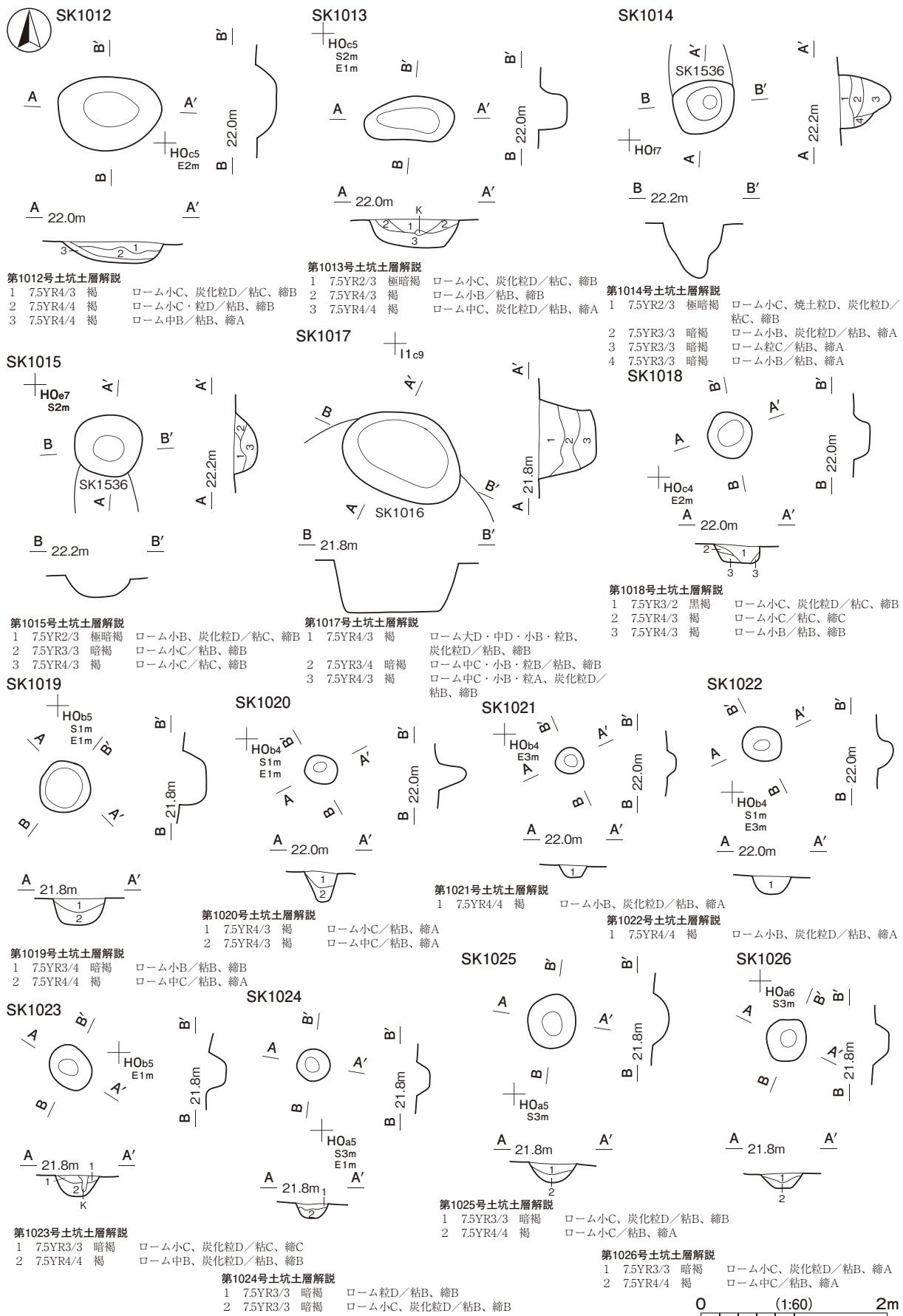
第355図 その他の土坑実測図(14)



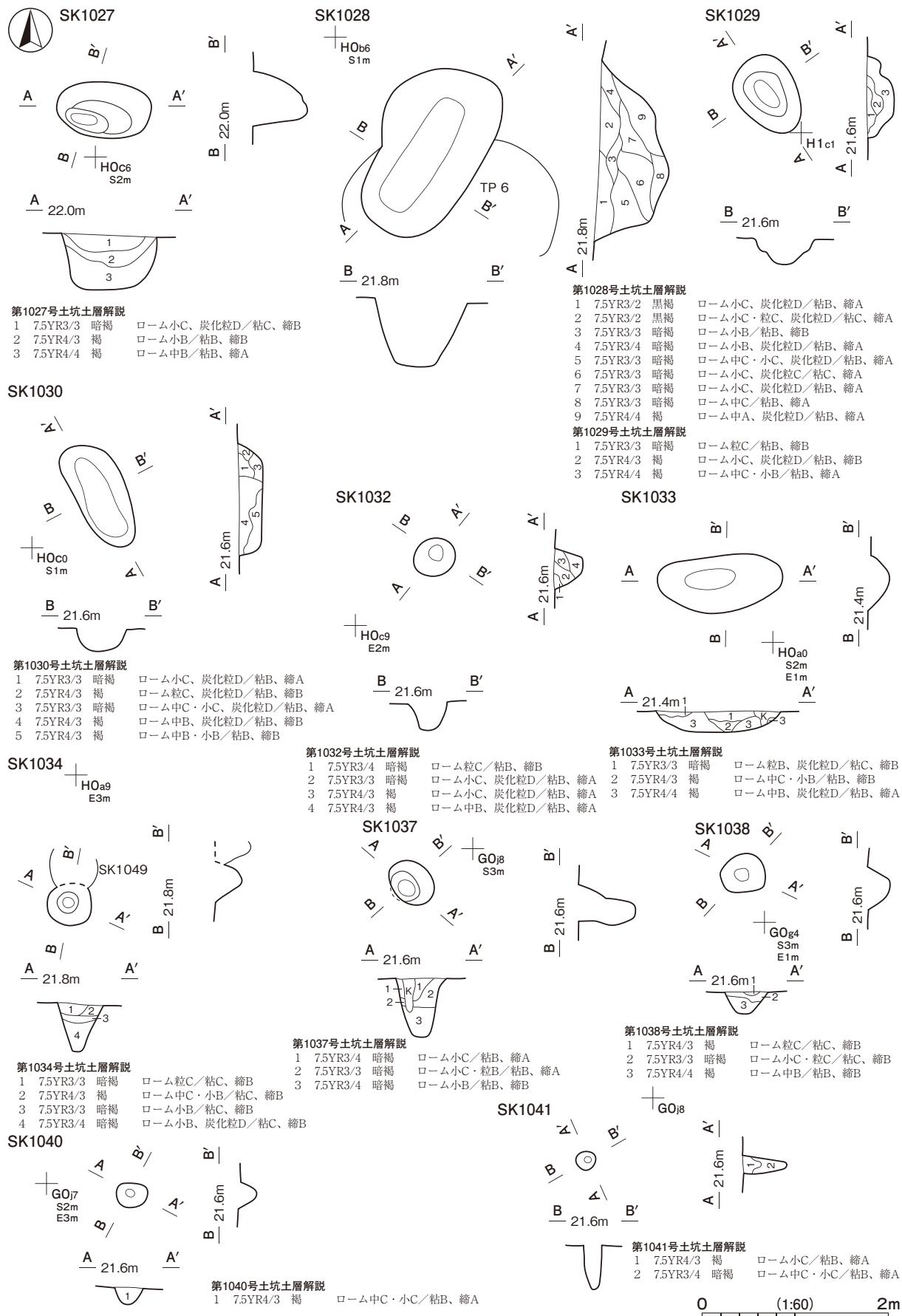
第356図 その他の土坑実測図(15)



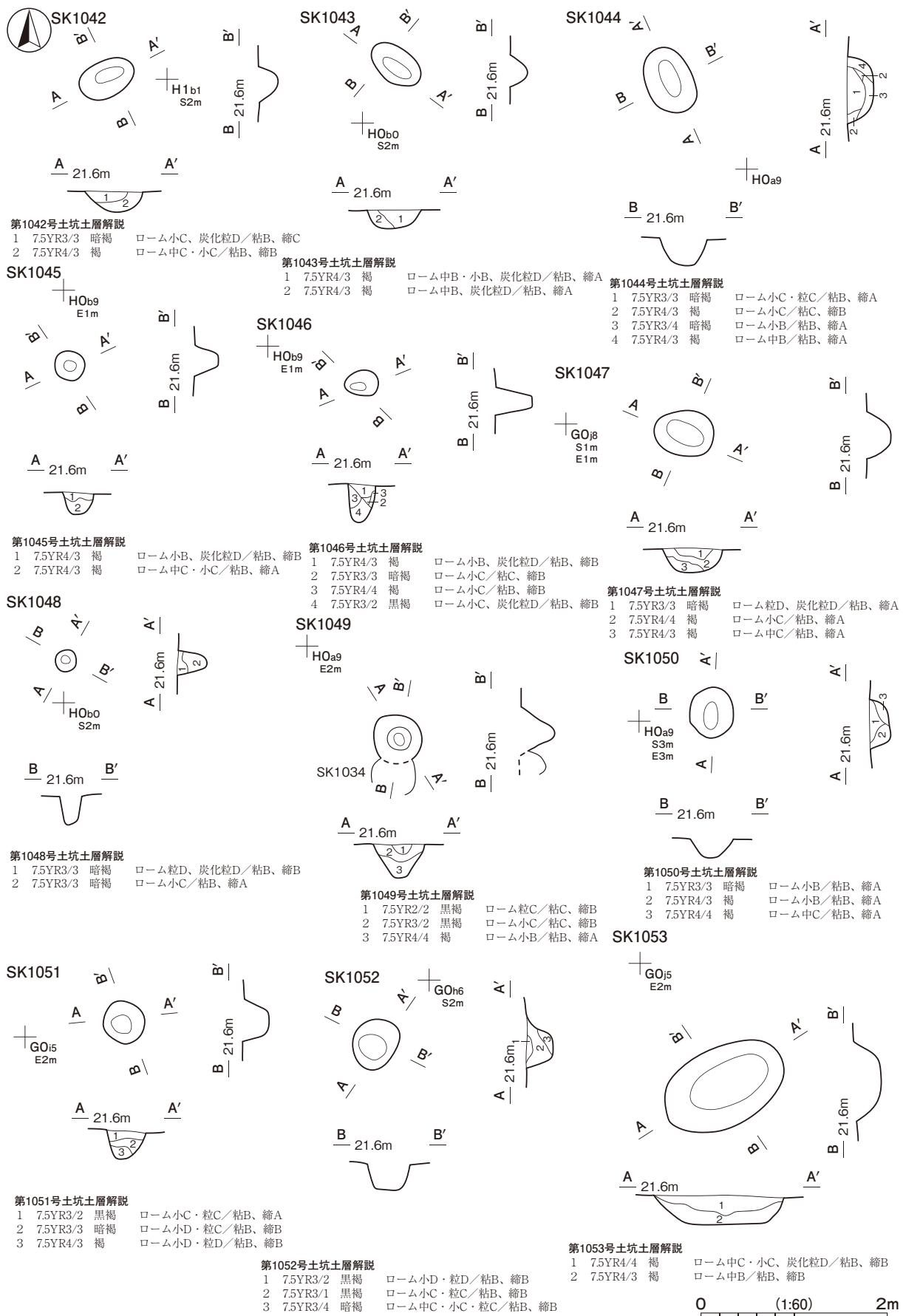
第357図 その他の土坑実測図(16)



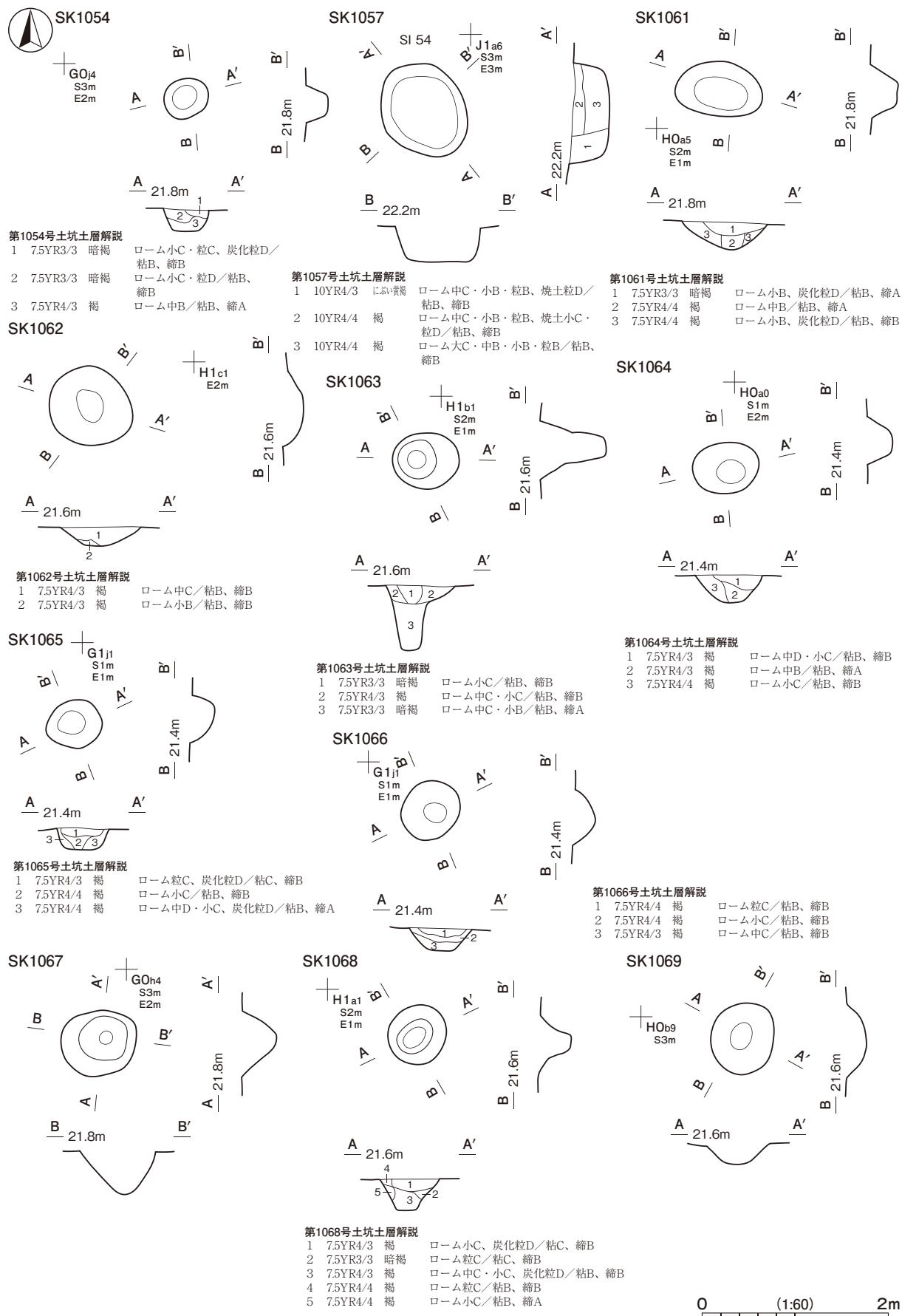
第358図 その他の土坑実測図(17)



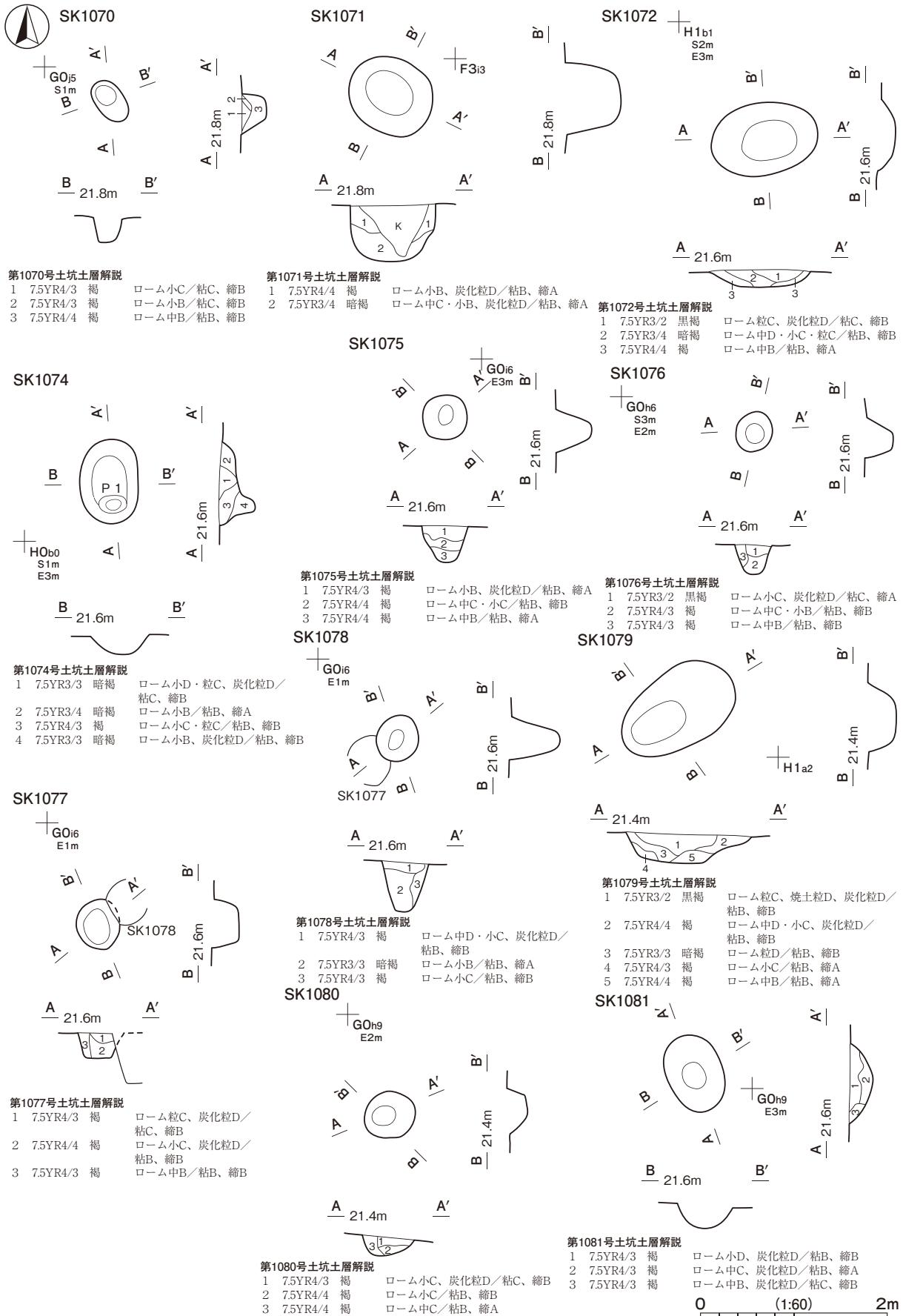
第359図 その他の土坑実測図(18)



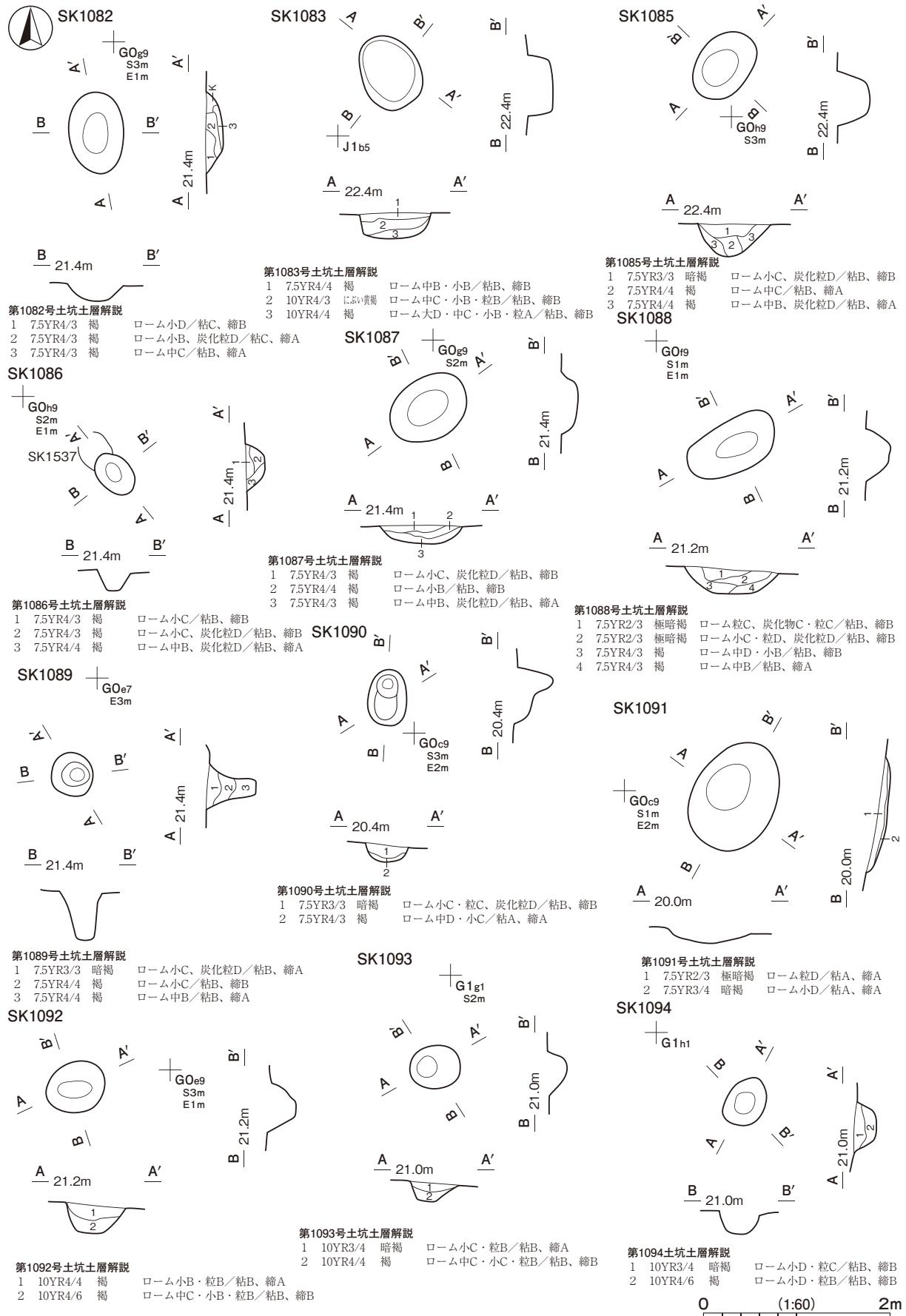
第360図 その他の土坑実測図(19)



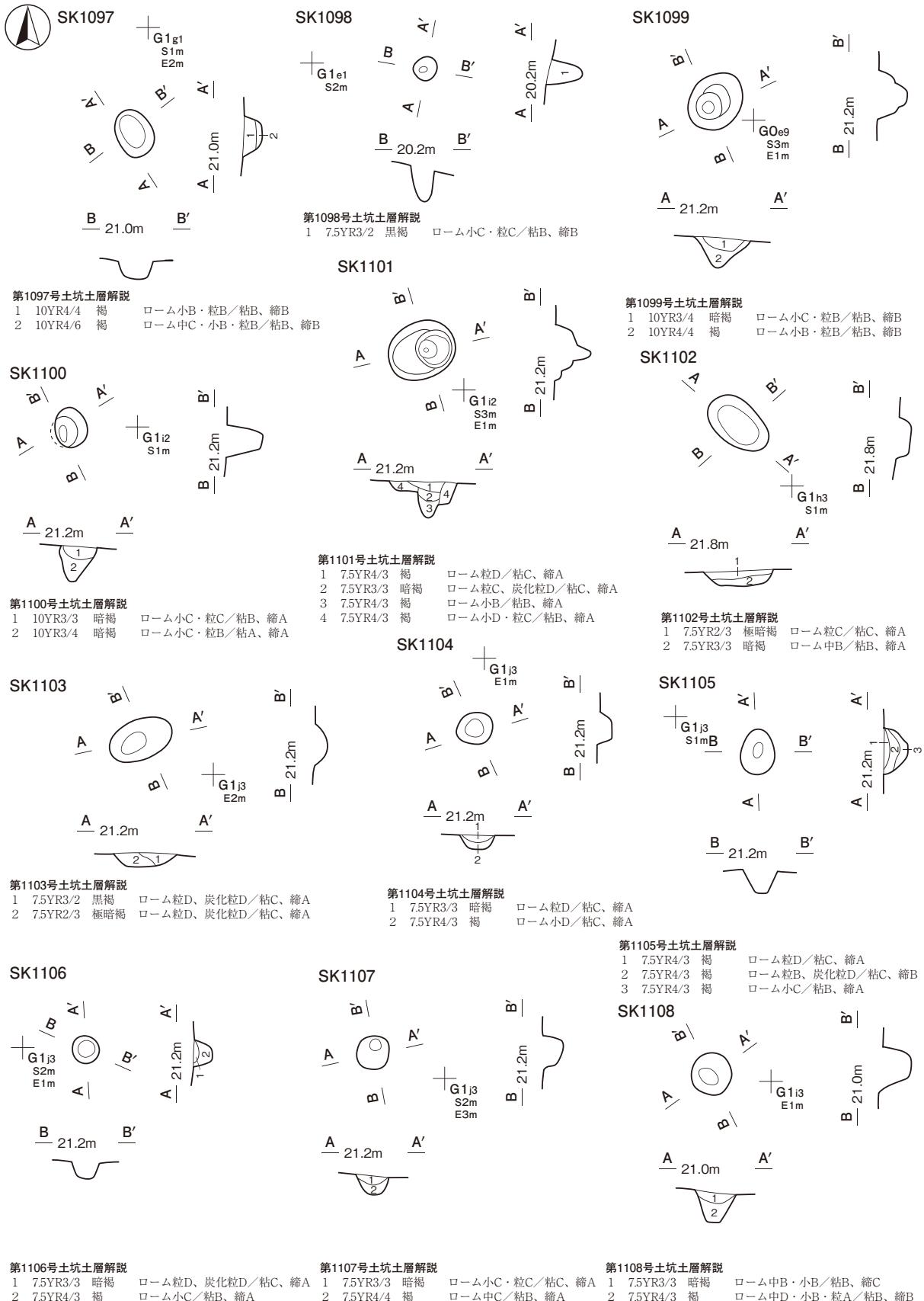
第361図 その他の土坑実測図(20)



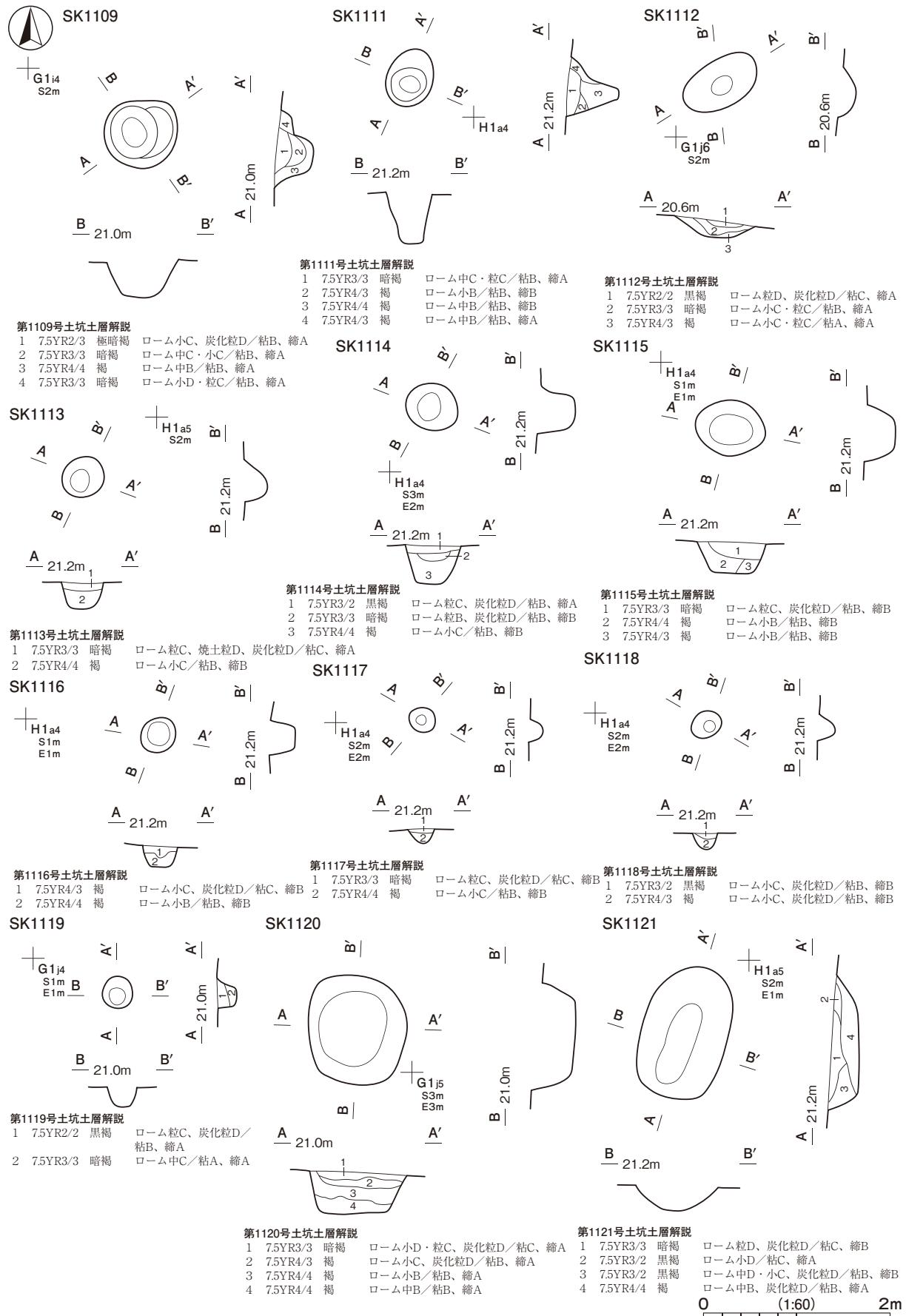
第362図 その他の土坑実測図(2)



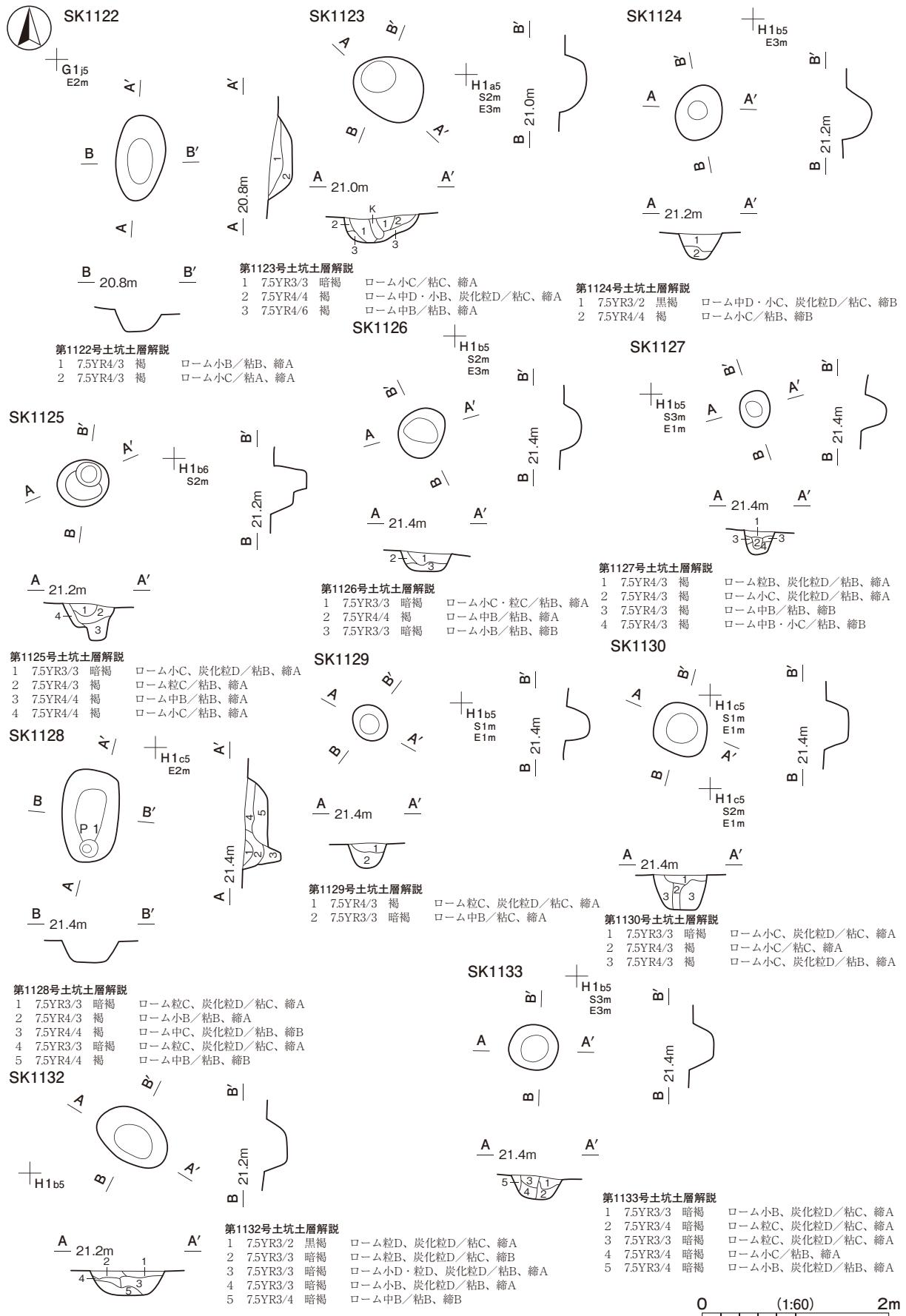
第363図 その他の土坑実測図(22)



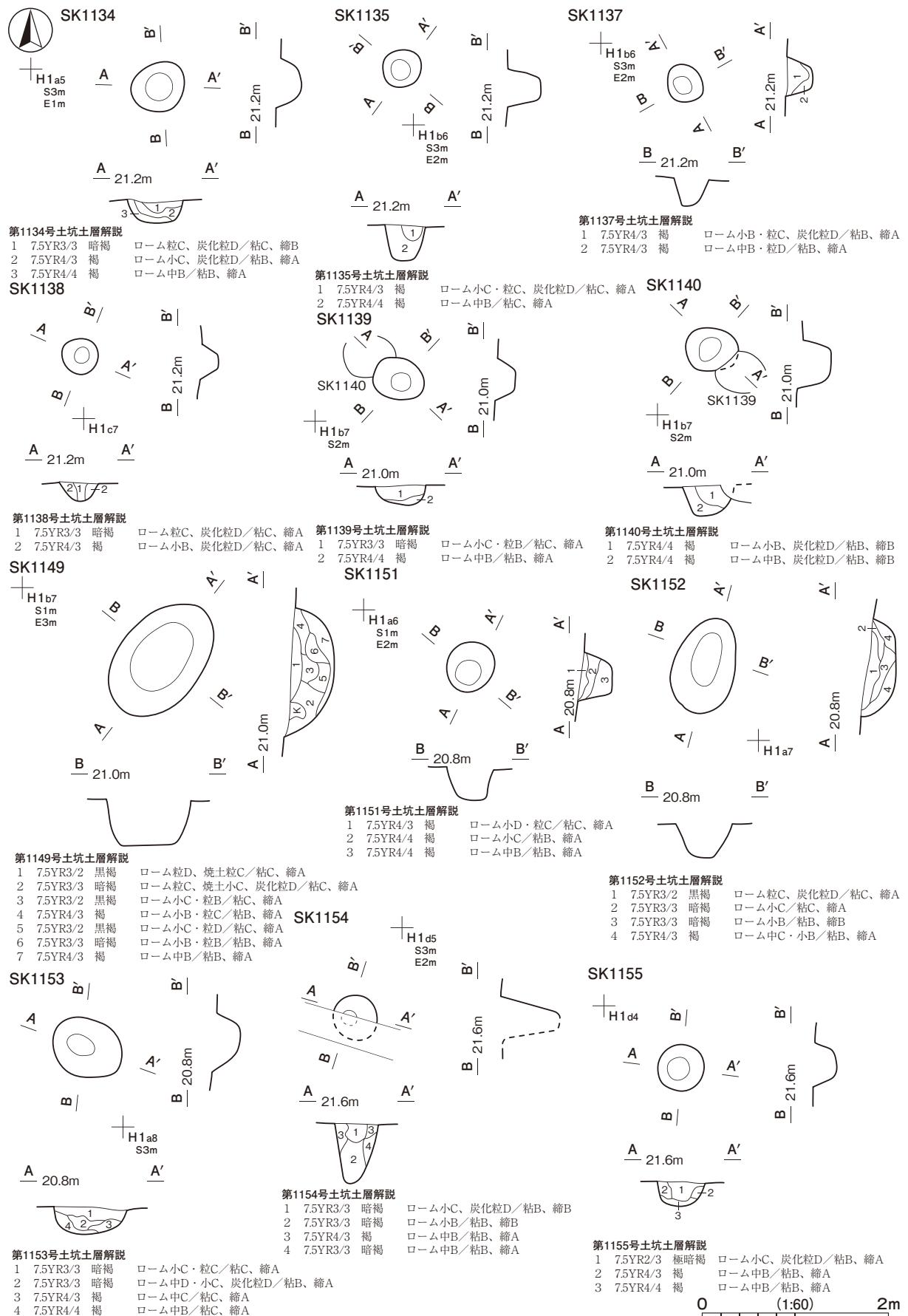
第364図 その他の土坑害測図(23)



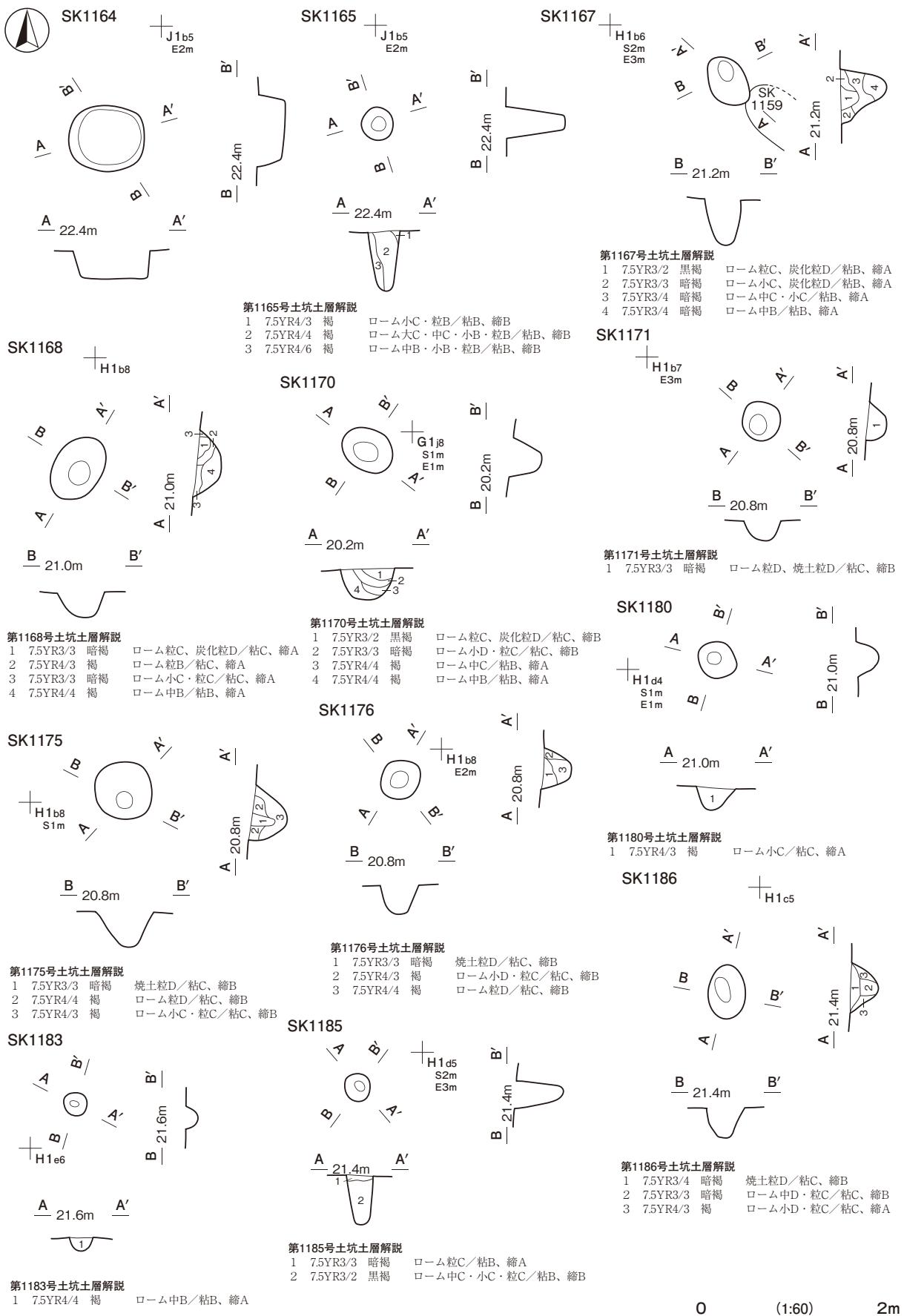
第365図 その他の土坑実測図(24)



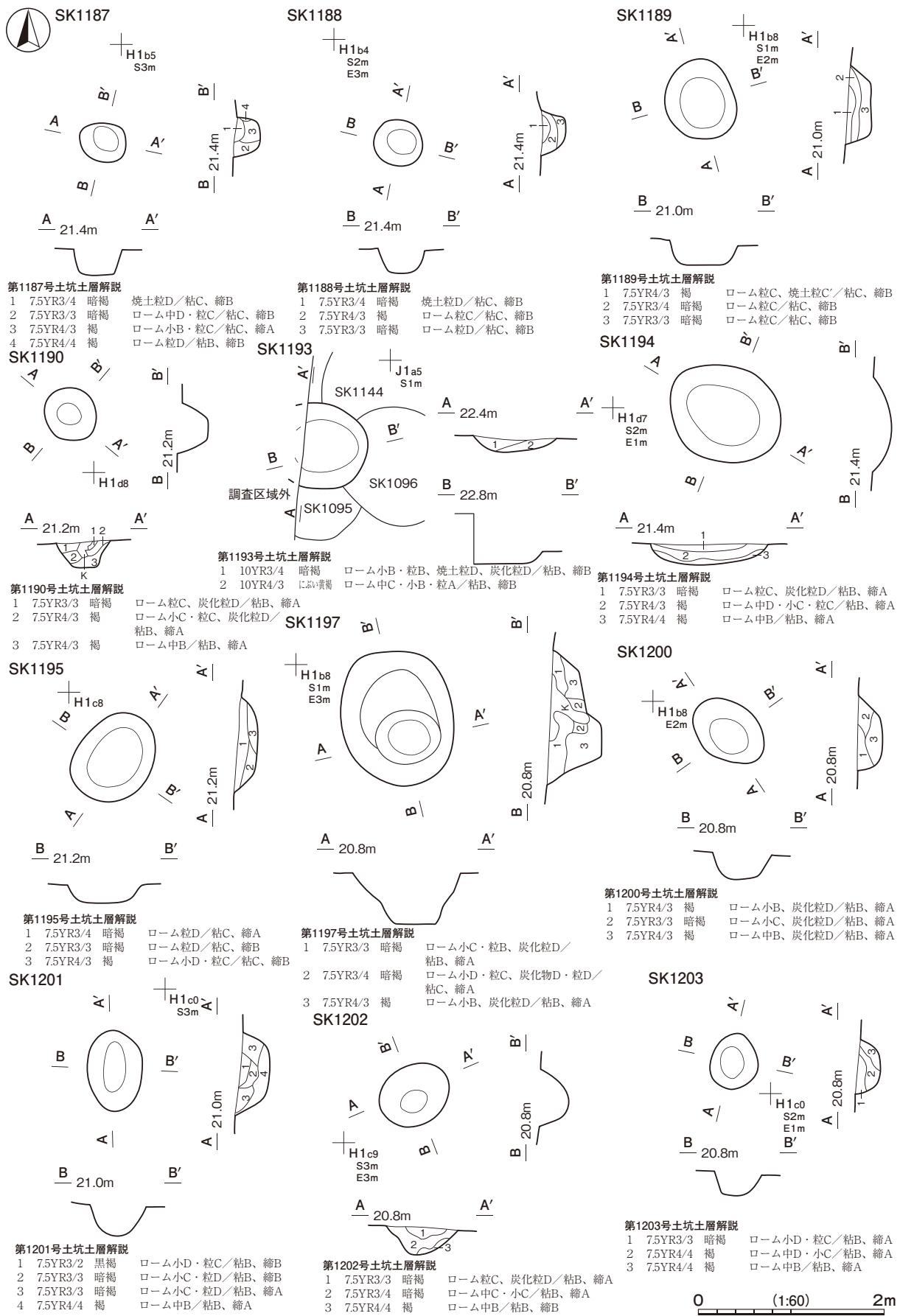
第366図 その他の土坑実測図(25)



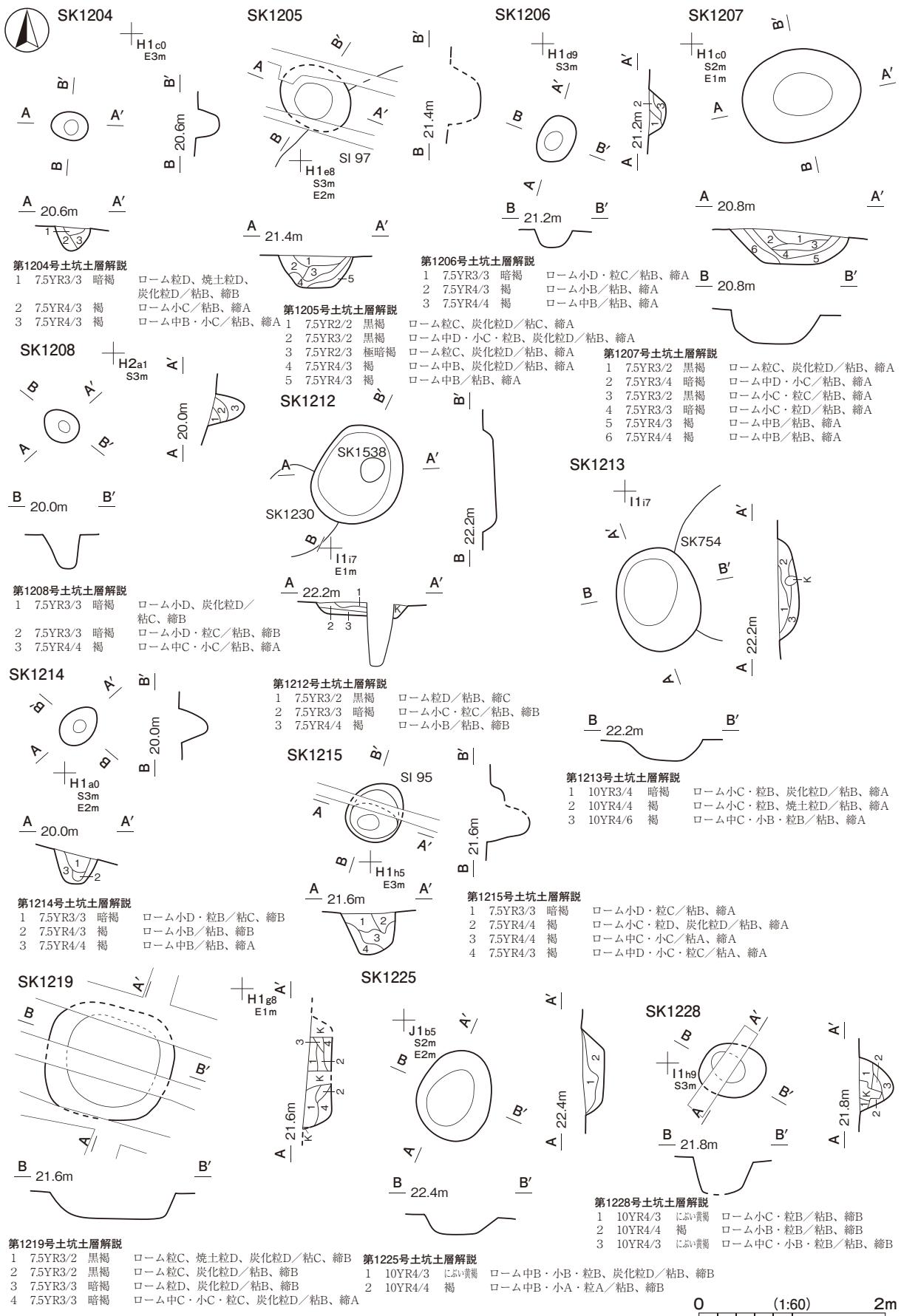
第367図 その他の土坑実測図(26)



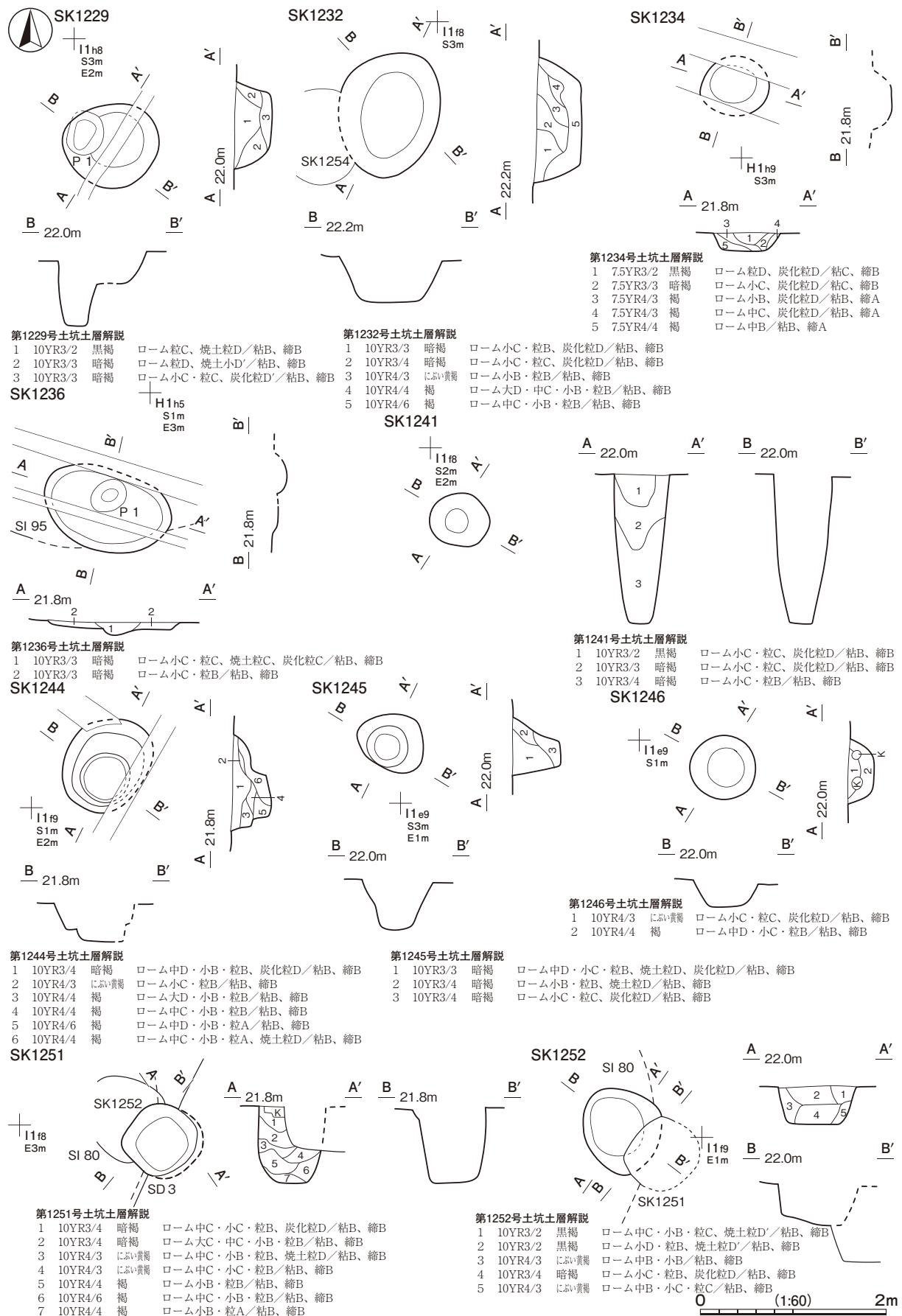
第368図 その他の土坑実測図(27)



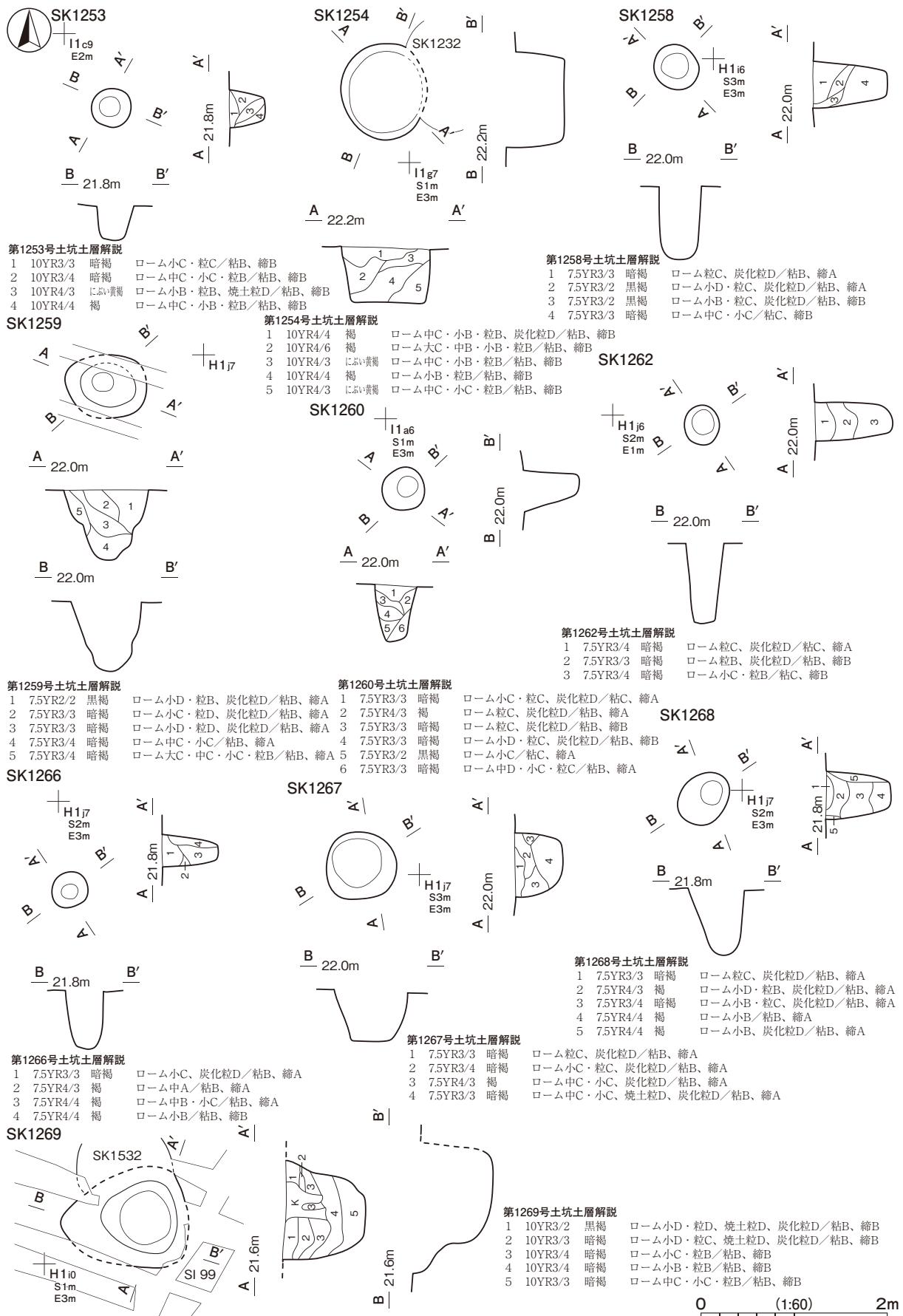
第369図 その他の土坑実測図(28)



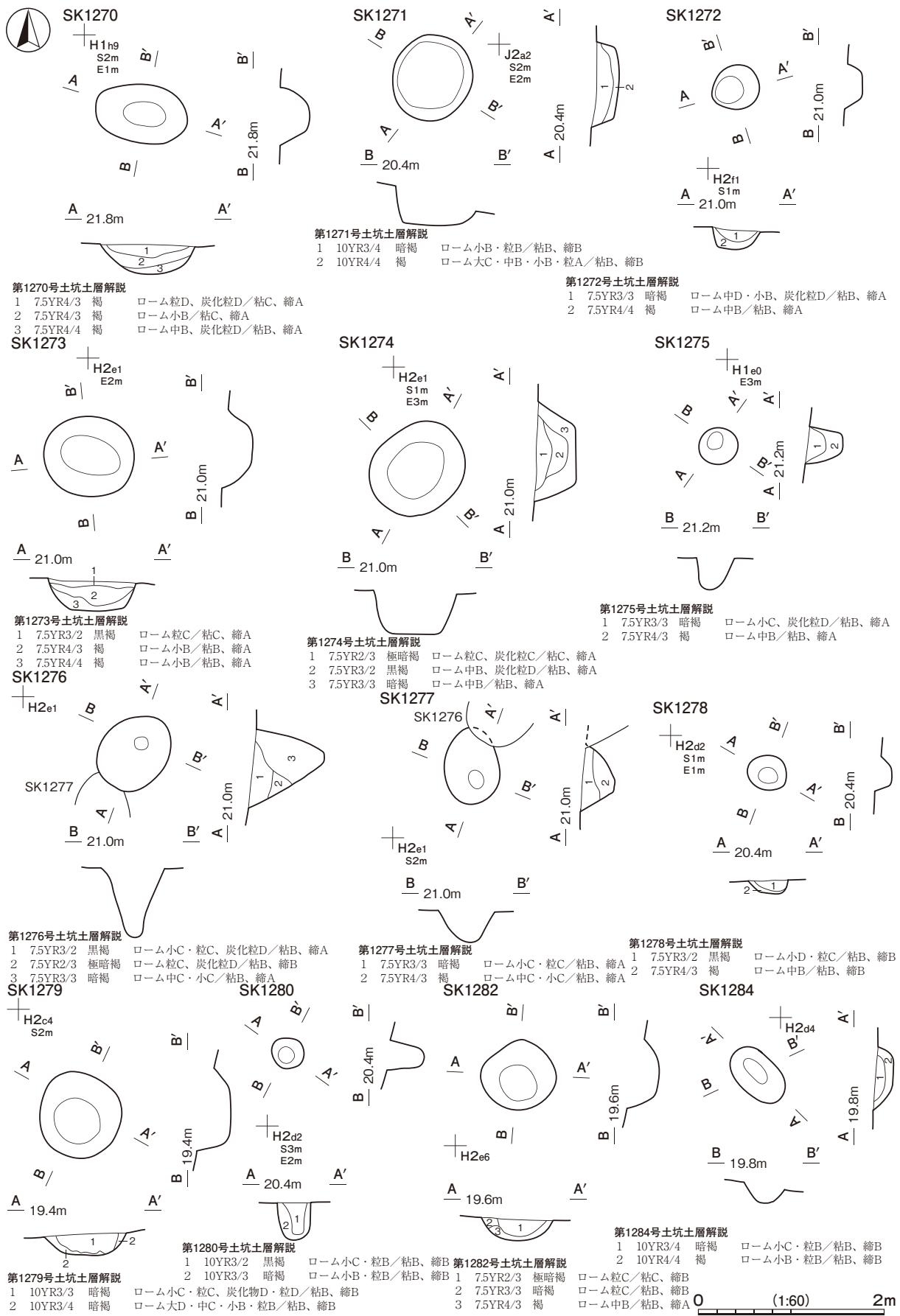
第370図 その他の土坑実測図(29)



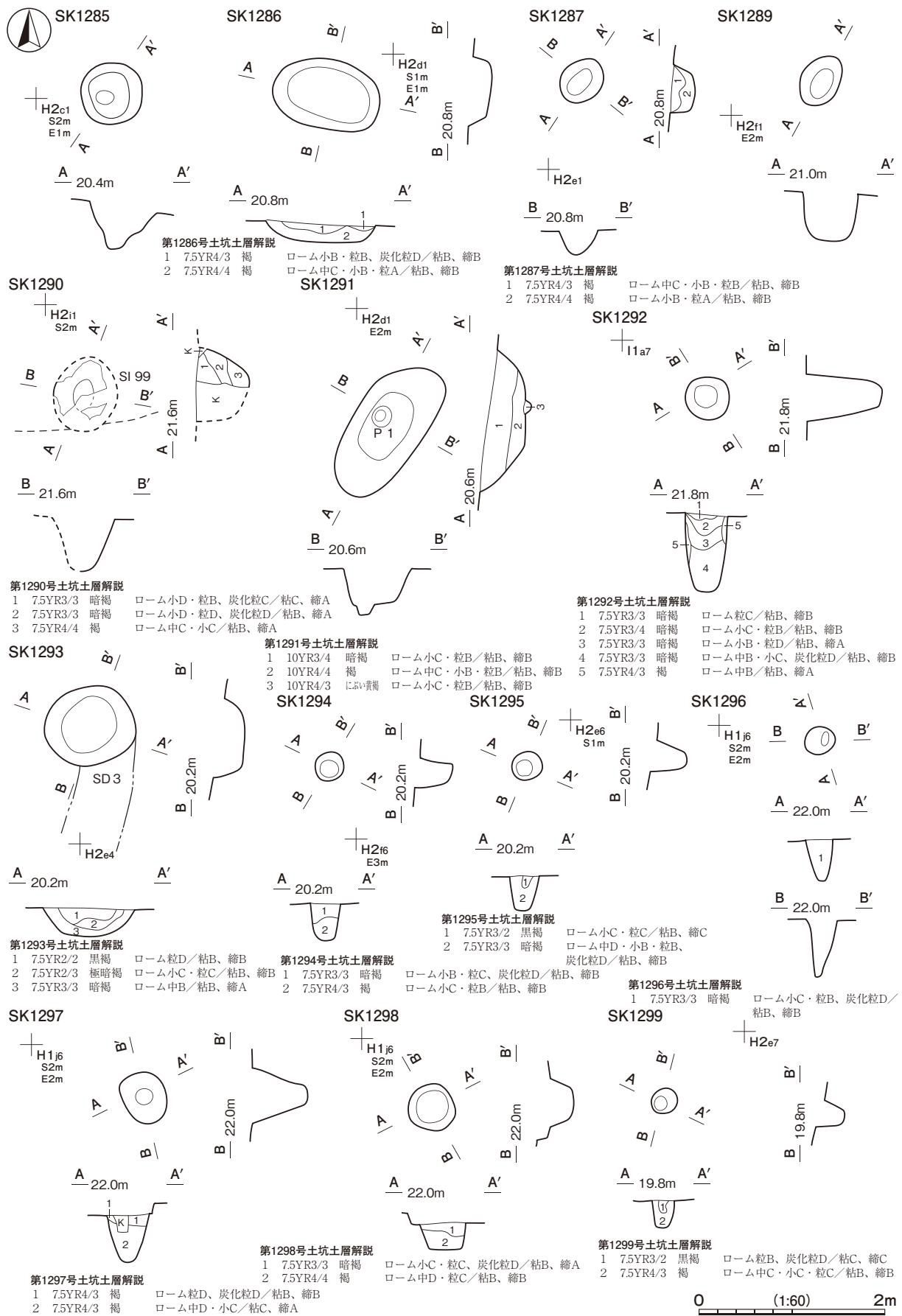
第371図 その他の土坑実測図(30)



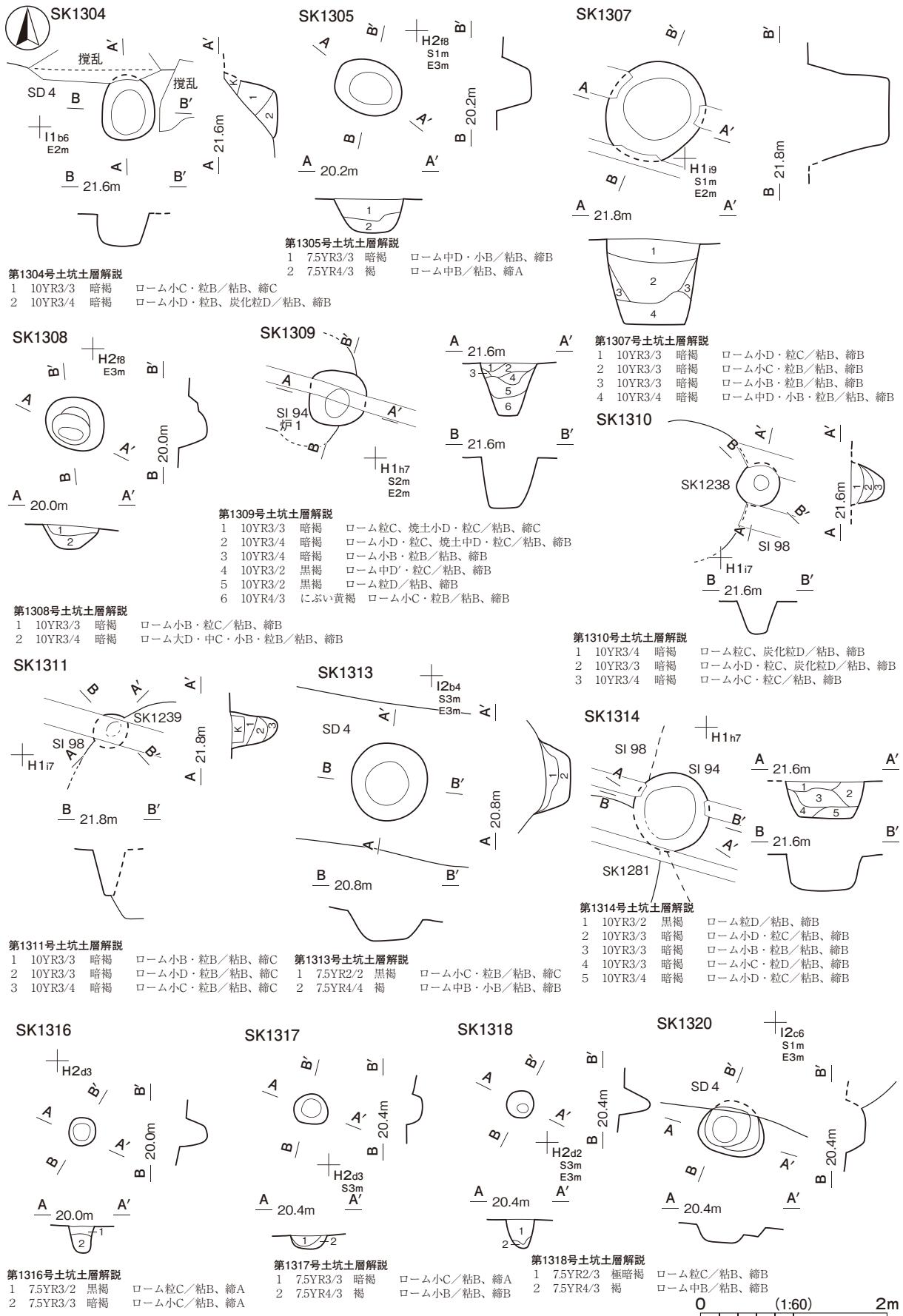
第372図 その他の土坑実測図(3)



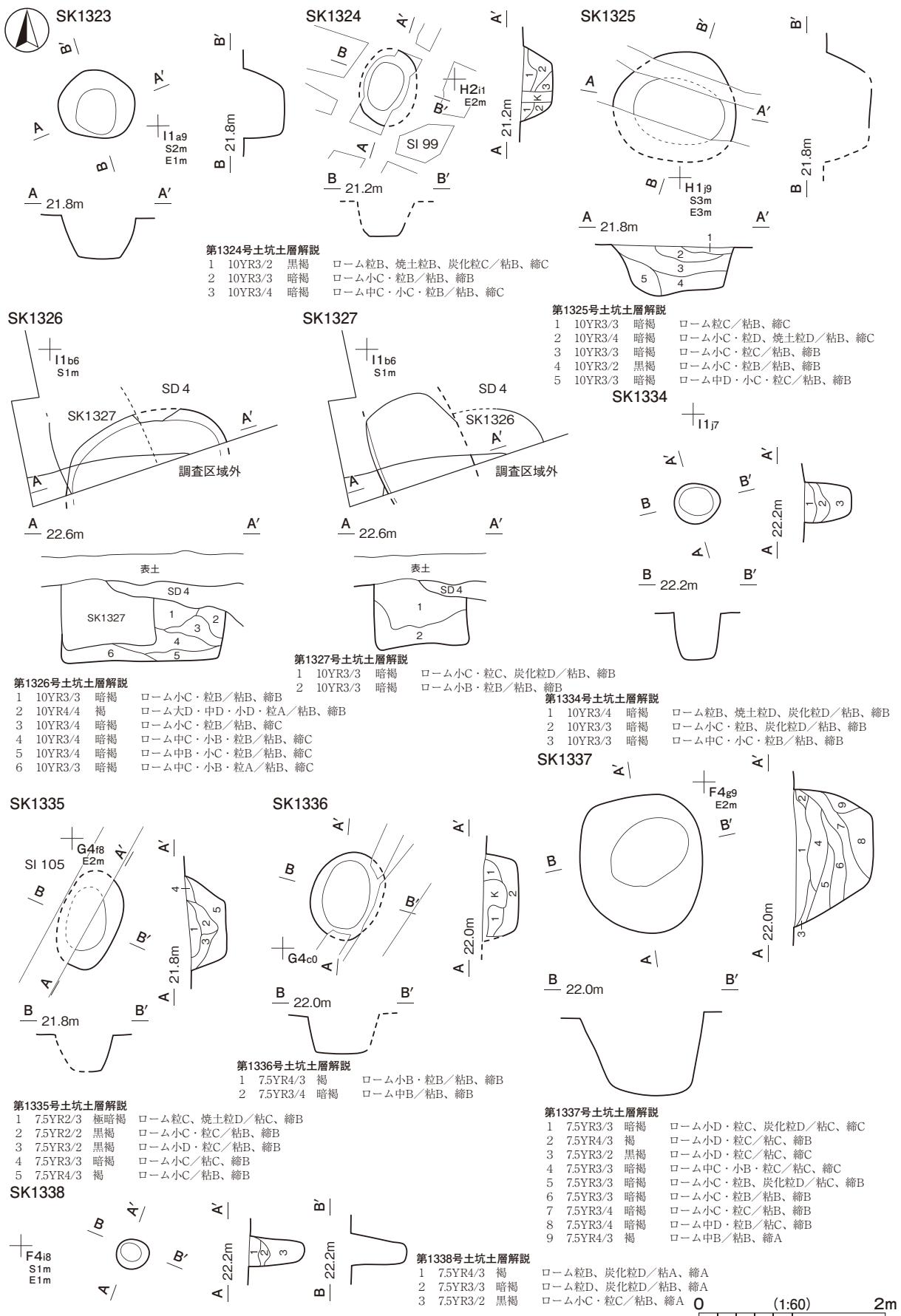
第373図 その他の土坑実測図(32)



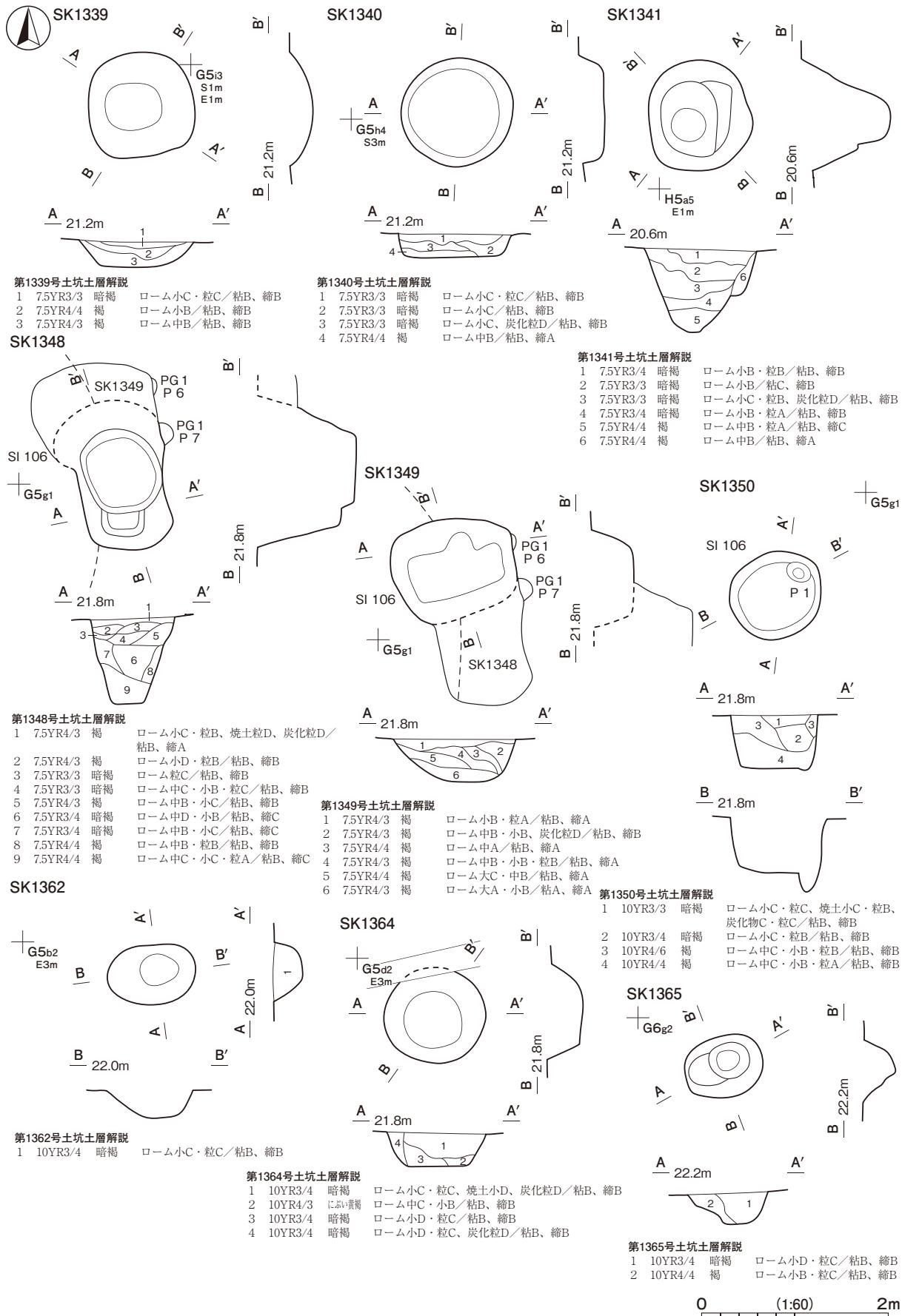
第374図 その他の土坑実測図(33)



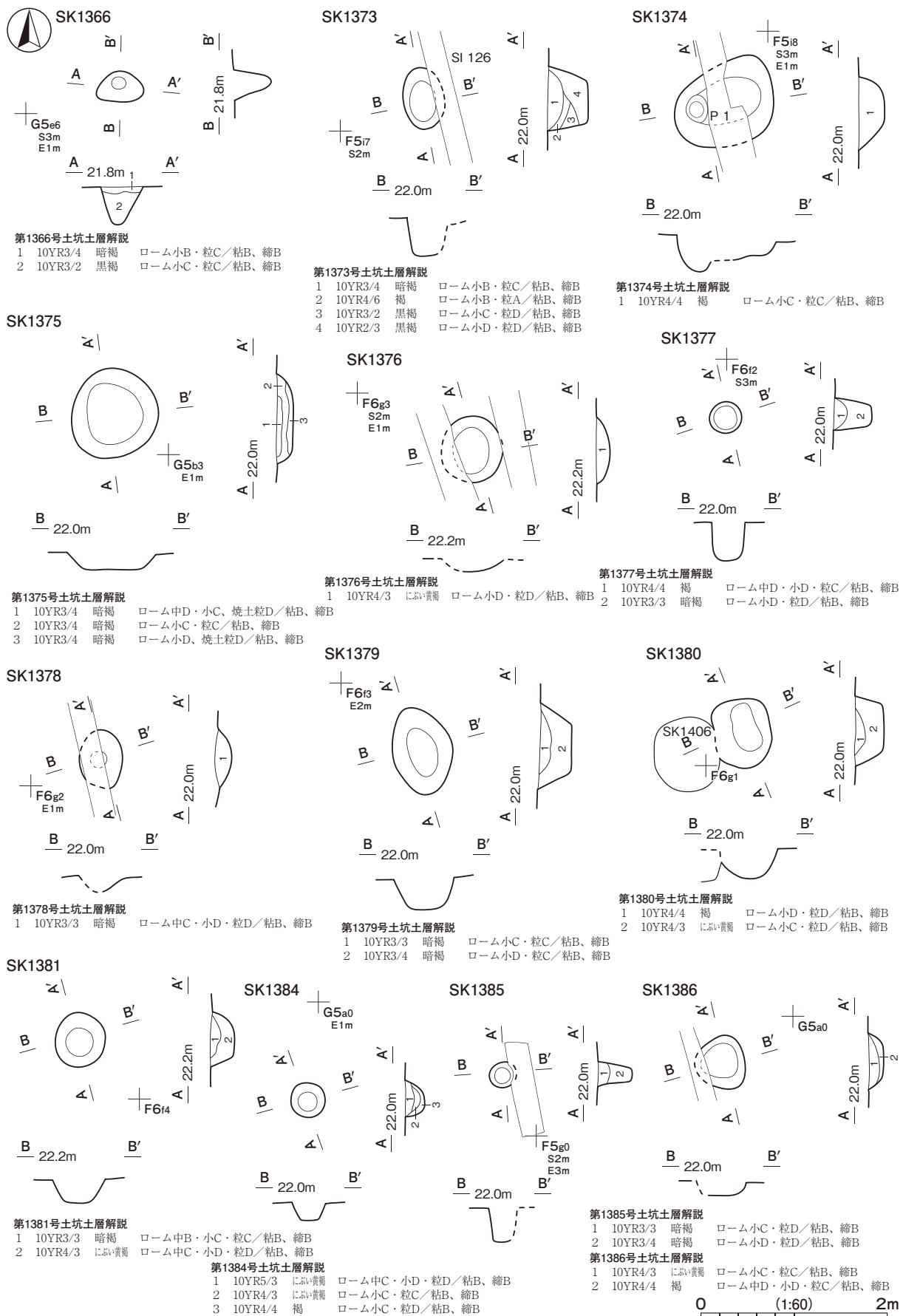
第375図 その他の土坑実測図(34)



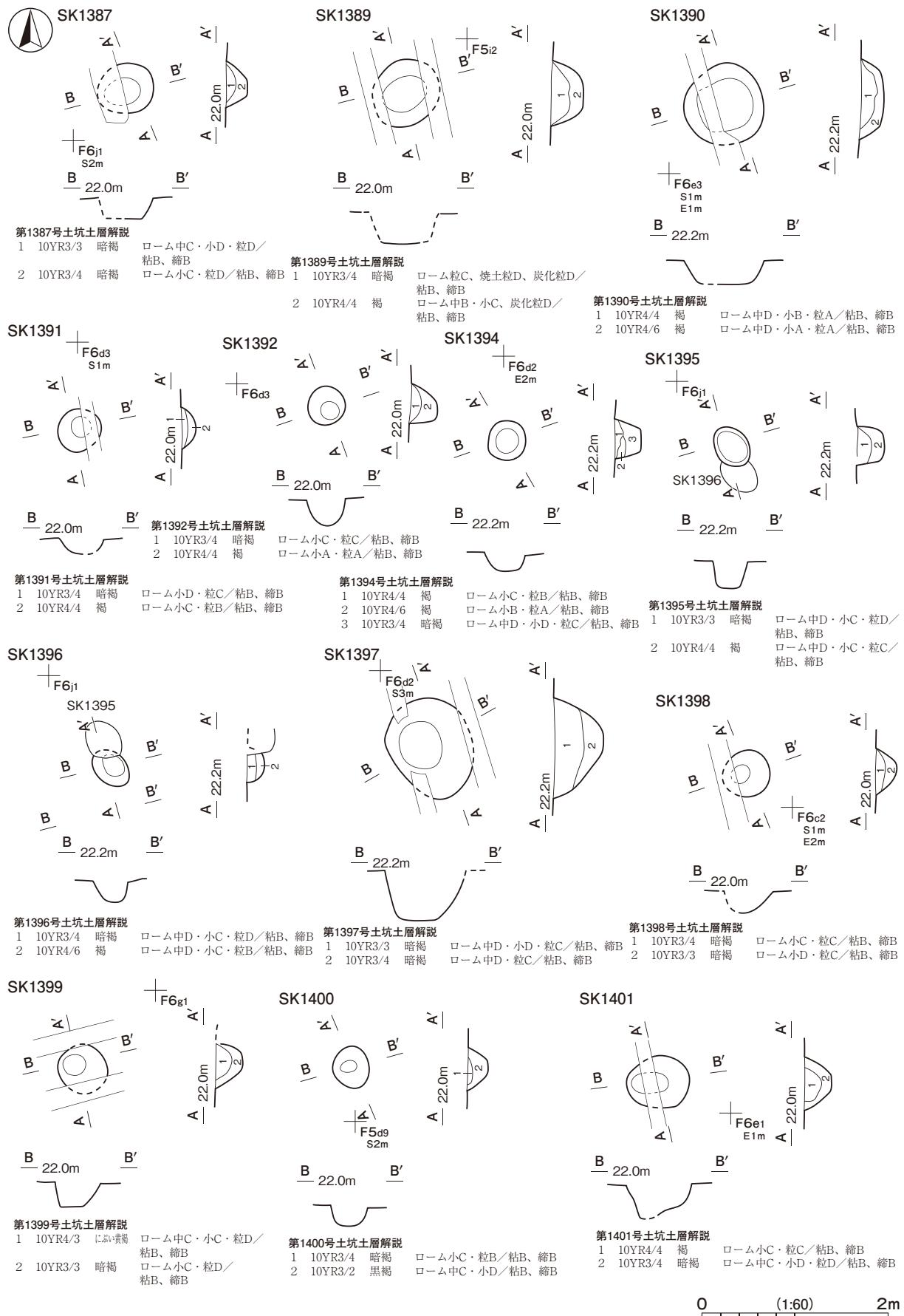
第376図 その他の土坑実測図(35)



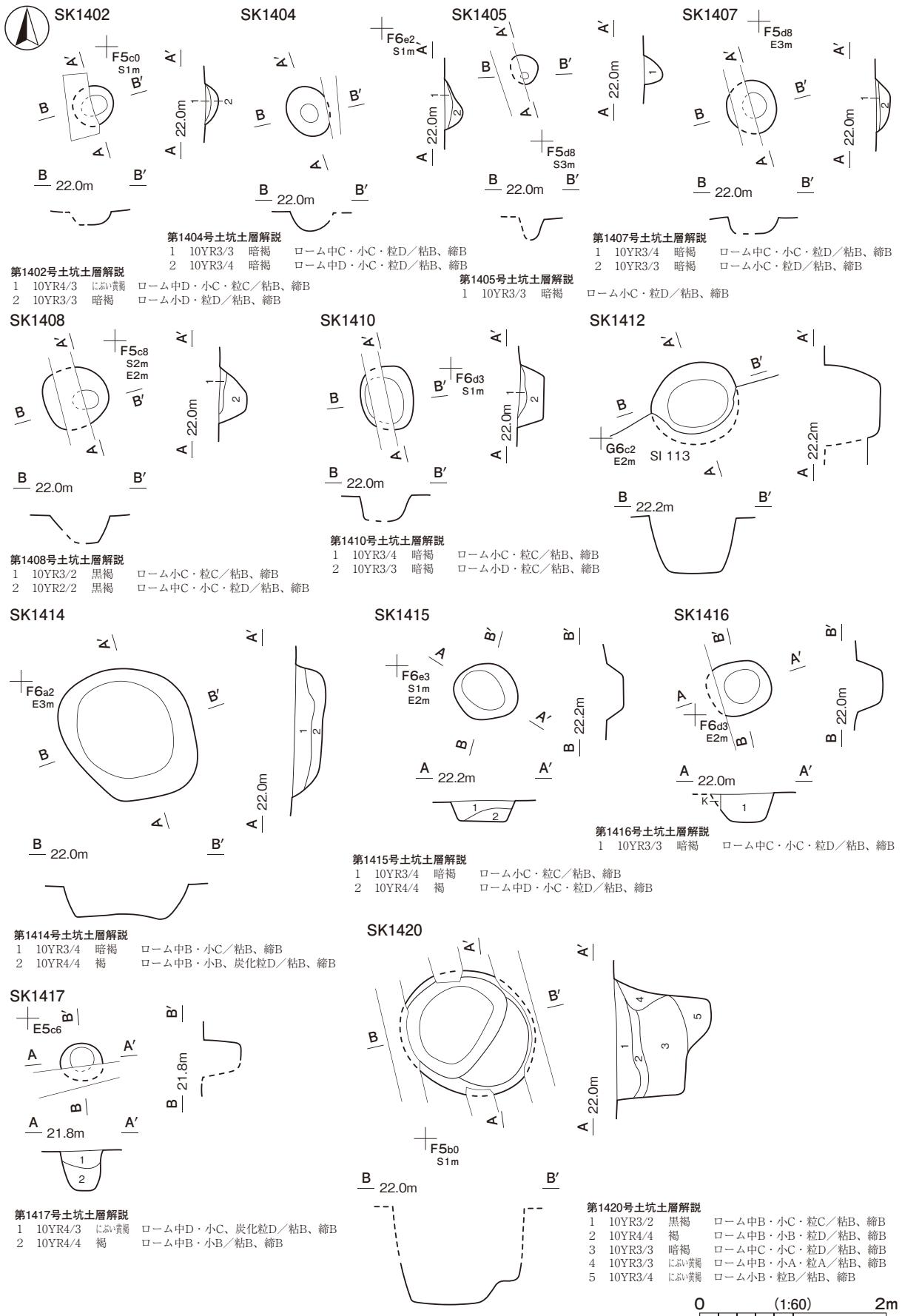
第377図 その他の土坑実測図(36)



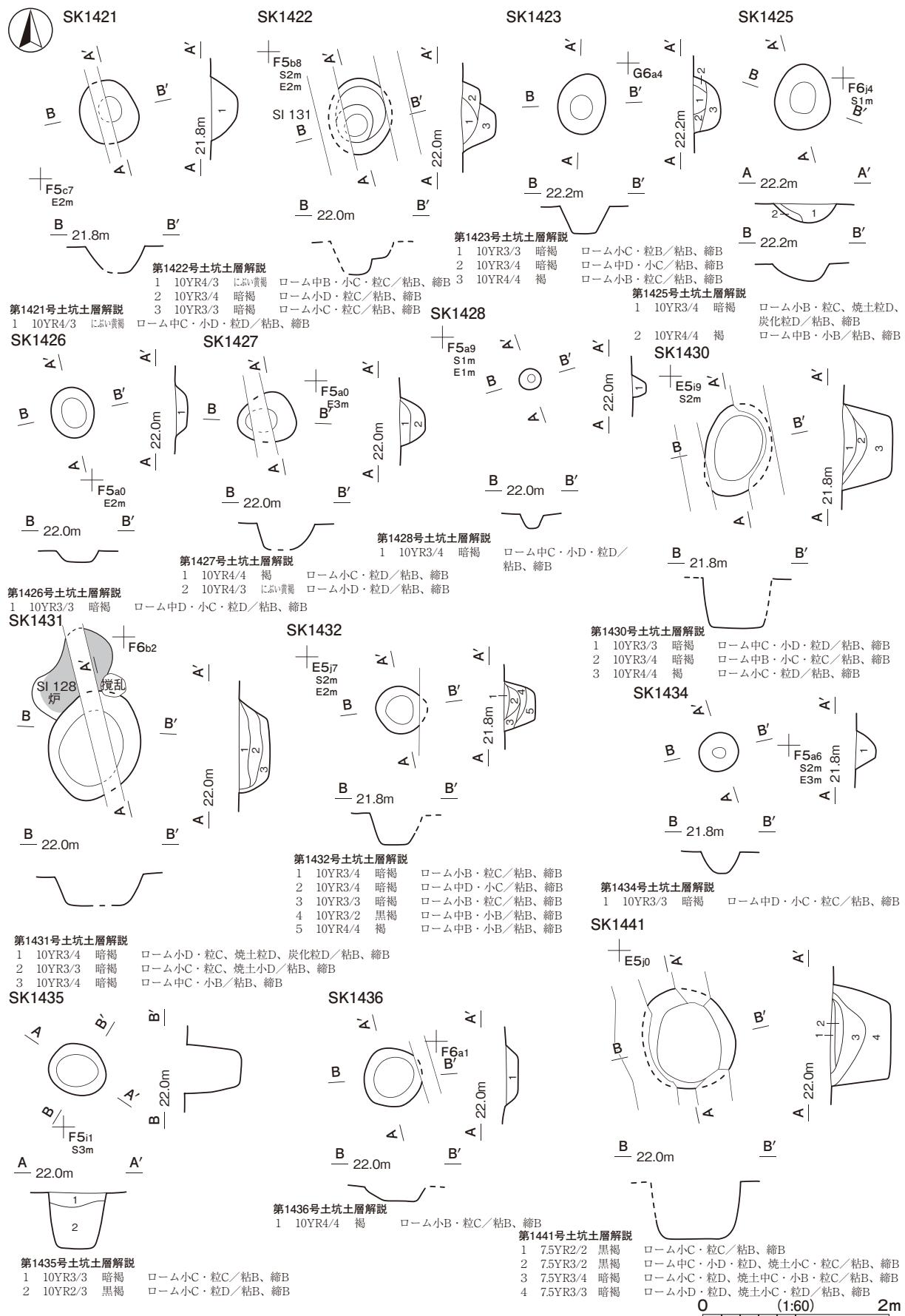
第378図 その他の土坑実測図(3)



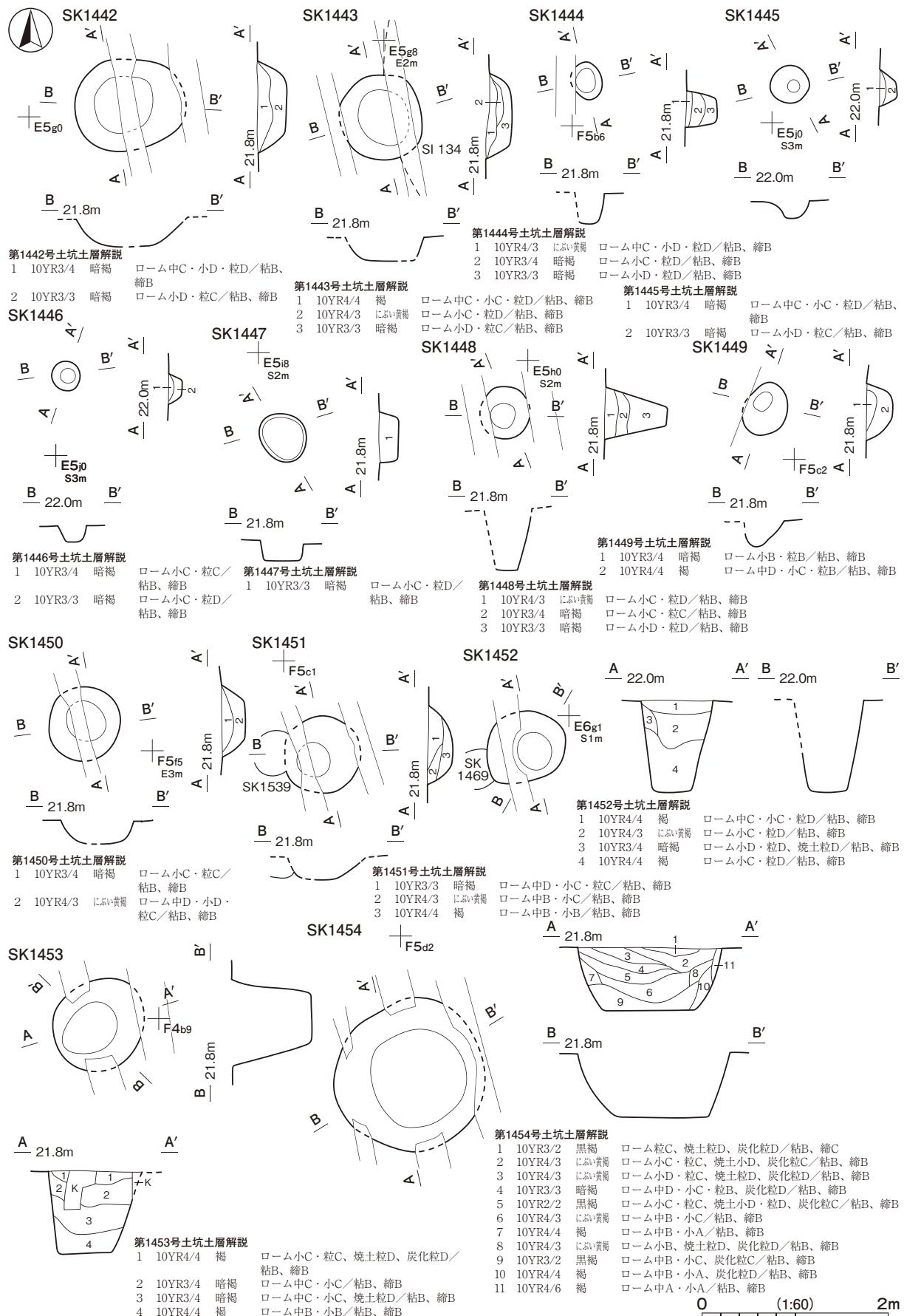
第379図 その他の土坑実測図(38)



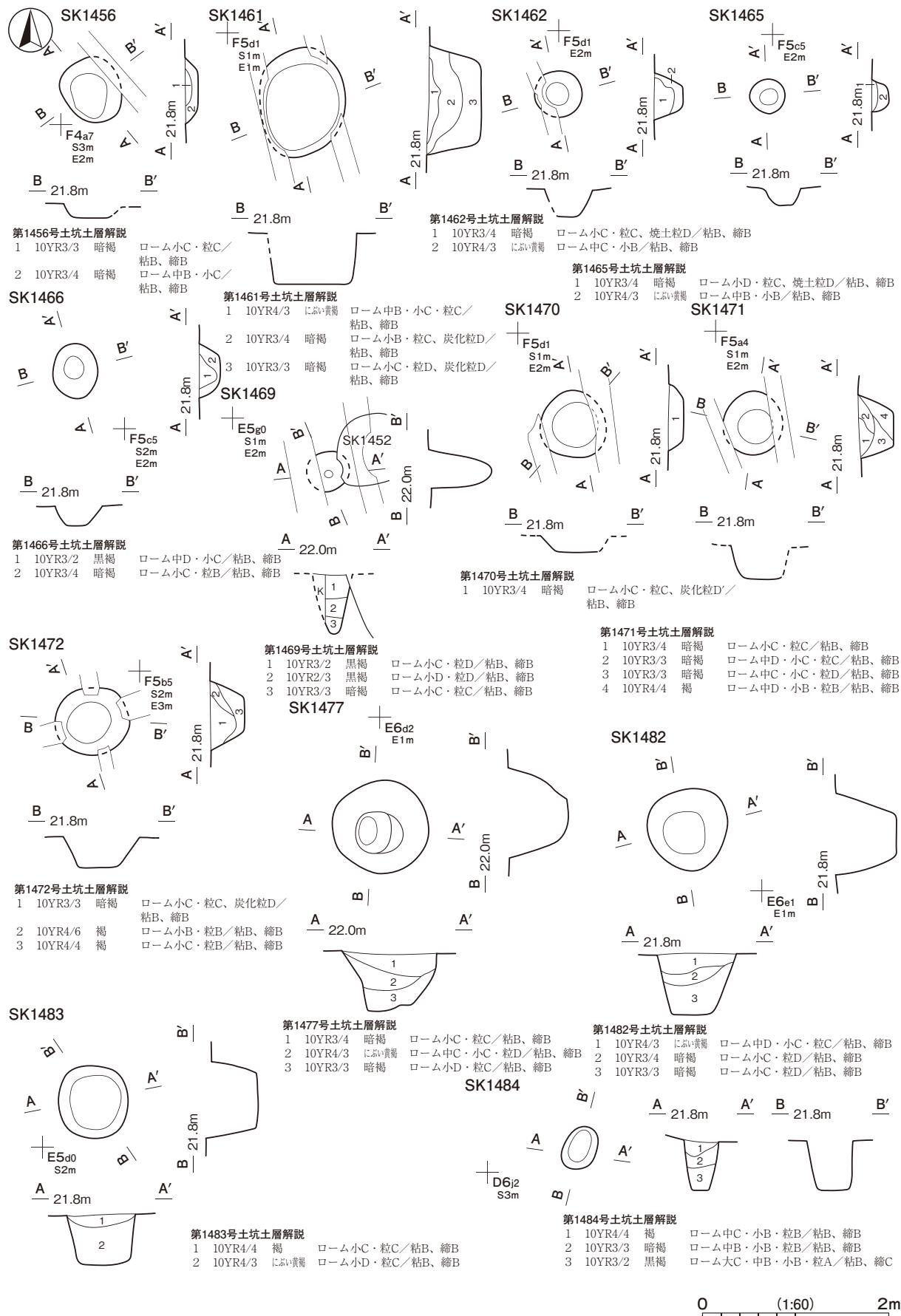
第380図 その他の土坑実測図(3)



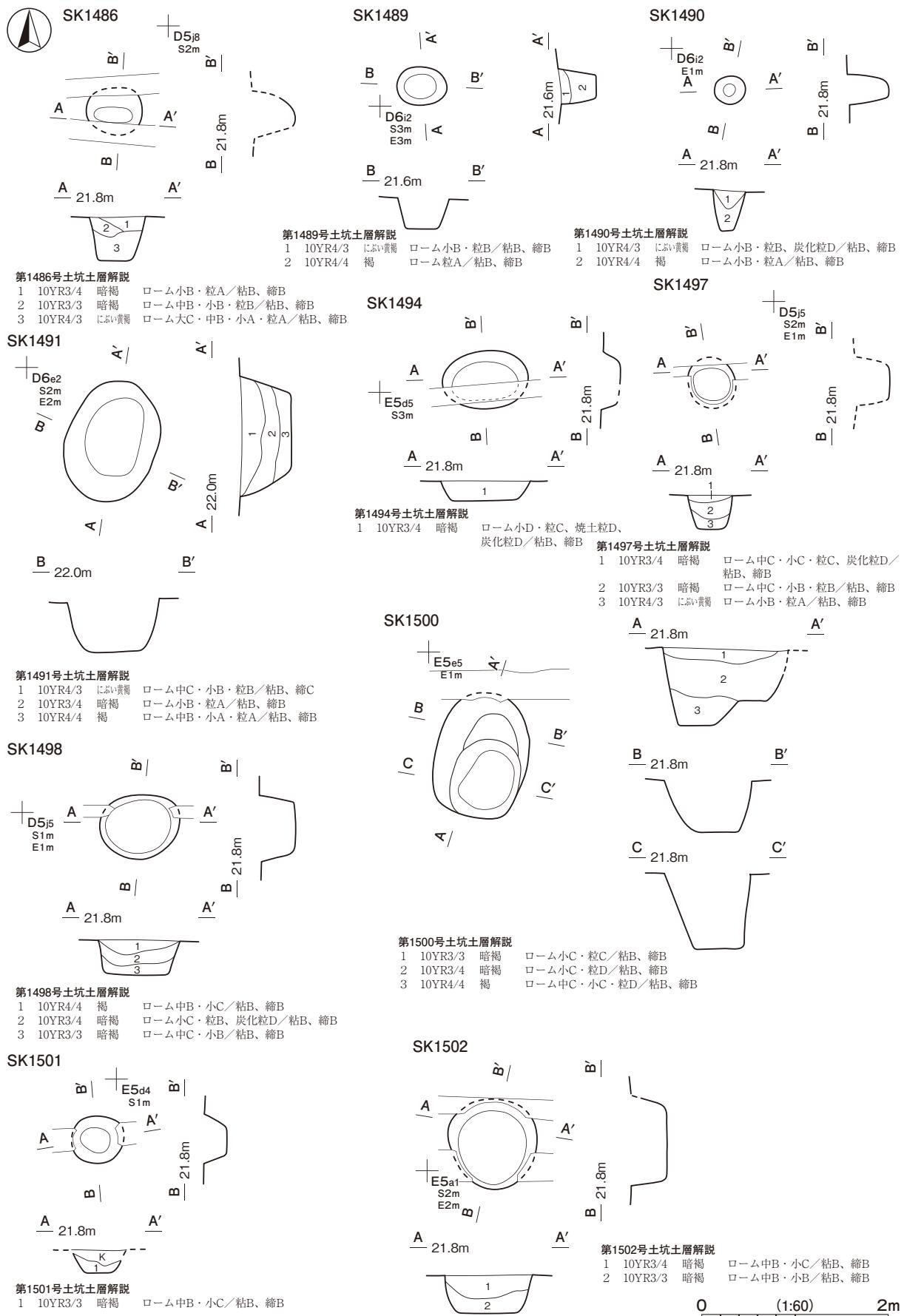
第381図 その他の土坑実測図(40)



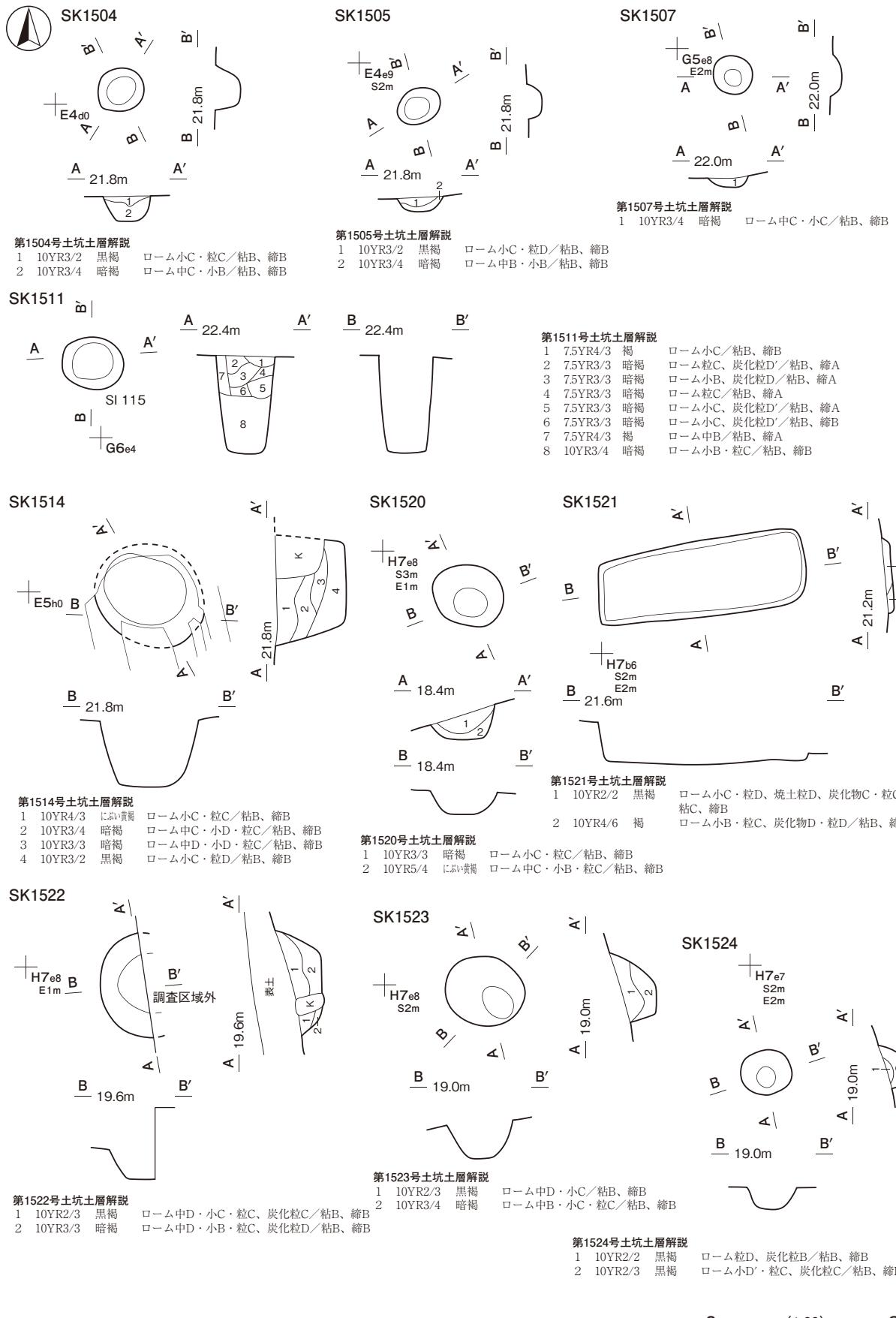
第382図 その他の土坑実測図(4)



第383図 その他の土坑実測図(42)

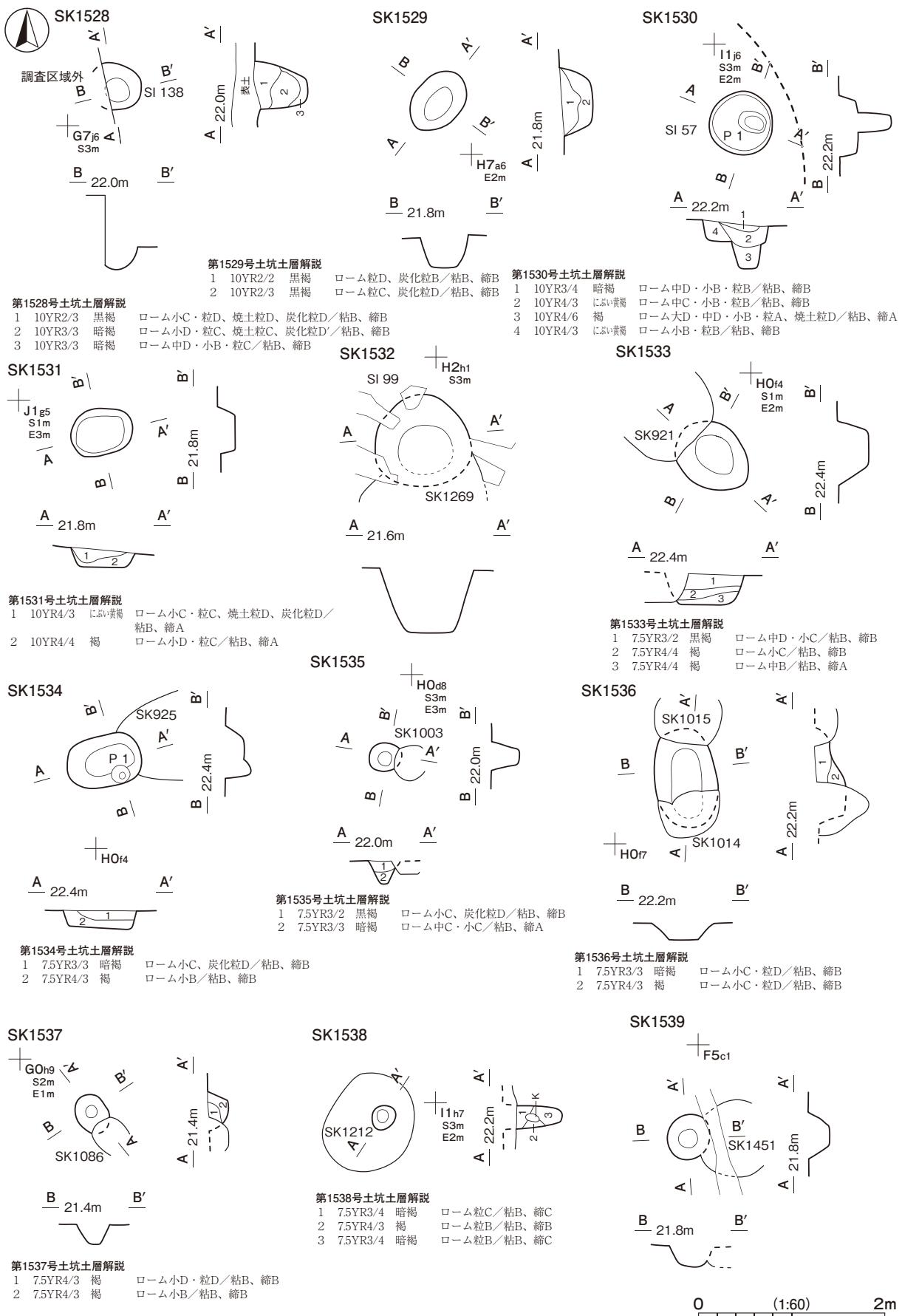


第384図 その他の土坑実測図(43)



0 (1:60) 2m

第385図 その他の土坑実測図(4)



第386図 その他の土坑実測図(45)

第169表 その他の土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
750	J 1 g6	N - 50° - E	楕円形	1.58 × 0.85	43	外傾	平坦	-	縄文土器	HG 1 と重複 ピット 1 か所
753	F 3 i7	N - 8° - E	楕円形	2.53 × 2.23	80	外傾	平坦	-	縄文土器、瓦質土器	
757	F 4 f1	N - 53° - W	楕円形	1.43 × 1.28	84	直立	平坦	-	縄文土器、陶器	
758	F 3 e0	N - 50° - E	楕円形	0.56 × 0.47	31	外傾	皿状	-	-	
759	F 4 j3	N - 53° - W	楕円形	1.20 × 0.94	58	外傾	平坦	-	縄文土器	
761	F 3 g5	N - 0°	楕円形	2.36 × 2.00	82	外傾	平坦	-	縄文土器	
762	F 4 h4	-	円形	1.75 × 1.66	94	外傾	平坦	-	縄文土器	SK749 → 本跡
770	J 1 i4	N - 8° - W	楕円形	0.88 × 0.69	15	外傾	平坦	-	-	SI 49 と重複
772	F 3 d9	N - 15° - E	楕円形	1.23 × 1.10	62	外傾	平坦	-	縄文土器	
774	F 3 b8	N - 61° - W	楕円形	1.36 × 1.06	45	外傾	平坦	-	縄文土器	
781	J 1 j6	N - 18° - E	楕円形	1.18 × 0.90	25	外傾	平坦	人為	-	HG 1 と重複
782	I 1 j6	N - 37° - E	楕円形	0.77 × 0.62	27	外傾	平坦	-	縄文土器、土師器、土師質土器	SK784 → 本跡
786	F 3 a5	N - 38° - E	楕円形	0.94 × 0.73	80	外傾	平坦	-	縄文土器	
788	E 4 e3	N - 69° - E	楕円形	1.54 × 0.87	26	外傾	平坦	-	縄文土器	
789	E 4 e4	N - 40° - E	楕円形	0.91 × 0.75	46	外傾	有段	-	縄文土器	
793	J 1 b9	N - 79° - E	楕円形	0.95 × 0.63	23	外傾	平坦	人為	縄文土器	
794	E 4 e4	-	円形	0.86 × 0.83	48	外傾	皿状	-	-	
795	E 4 d4	N - 35° - E	楕円形	1.14 × 1.01	51	外傾	平坦	-	縄文土器	ピット 2 か所
796	E 3 g6	N - 27° - E	楕円形	1.28 × 1.00	52	外傾	平坦	-	縄文土器	
797	E 4 d4	N - 60° - E	楕円形	0.95 × 0.86	47	外傾	平坦	-	縄文土器	
798	E 4 e4	N - 70° - E	楕円形	0.93 × 0.71	41	外傾	皿状	-	-	
799	E 3 e8	-	円形	1.03 × 1.09	61	外傾・直立	有段	-	縄文土器	
800	I 1 f7	N - 21° - E	[楕円形]	0.82 × (0.49)	68	外傾	皿状	-	-	
801	J 1 b9	N - 4° - E	楕円形	1.30 × 1.17	33	外傾	平坦	人為	縄文土器	SK802 → 本跡
802	J 1 b9	N - 49° - W	楕円形	1.00 × 0.82	46	外傾	平坦	人為	-	本跡 → SK801
804	E 3 c3	N - 50° - W	楕円形	2.08 × 1.36	48	外傾	平坦	-	縄文土器	
809	E 2 e0	N - 39° - W	楕円形	0.70 × 0.45	20	外傾	平坦	-	-	
810	F 2 f8	-	円形	0.71 × 0.66	30	外傾	平坦	-	-	
813	E 3 g1	N - 32° - E	楕円形	0.80 × 0.77	65	外傾	平坦	人為	-	SK814 → 本跡
814	E 3 h1	N - 73° - E	楕円形	0.63 × 0.57	60	外傾	平坦	人為	-	本跡 → SK813
822	J 1 c8	N - 40° - E	楕円形	0.90 × 0.64	29	外傾	平坦	人為	縄文土器、剝片	SI 67 → 本跡
824	J 1 c8	N - 60° - W	楕円形	0.98 × 0.85	39	外傾	皿状	人為	縄文土器	SI 55 と重複
825	J 1 b6	-	[円形]	0.90 × [0.90]	63	外傾	皿状	-	-	SI 54, SK826 → 本跡
827	J 1 b7	N - 16° - W	楕円形	1.62 × 1.23	42	外傾	平坦	-	縄文土器	SI 55・61, SK828 → 本跡
828	J 1 b7	N - 10° - W	[楕円形]	[1.44] × 1.04	112	外傾	皿状	-	縄文土器	SI 55・61 → 本跡 → SK827
829	G 3 g3	N - 52° - E	楕円形	1.50 × 1.09	21	外傾	平坦	人為	縄文土器	ピット 1 か所
830	G 3 g3	-	円形	0.51 × 0.47	20	外傾	平坦	人為	-	SK831 → 本跡
831	G 3 g3	N - 32° - W	[楕円形]	[0.80] × 0.64	22	外傾	平坦	人為	-	本跡 → SK830
832	G 3 g2	-	円形	1.10 × 1.06	45	外傾	皿状	人為	-	
833	G 3 g2	-	円形	0.82 × 0.78	80	外傾	有段	人為	縄文土器	
834	G 2 e0	N - 56° - W	楕円形	0.40 × 0.33	20	外傾	皿状	人為	-	SK835 → 本跡
835	G 2 e0	N - 54° - W	[楕円形]	0.36 × (0.27)	23	外傾	皿状	人為	-	本跡 → SK834
836	G 3 g3	-	円形	0.43 × 0.40	16	外傾	平坦	人為	-	
837	G 2 f0	N - 85° - W	楕円形	1.98 × 0.78	35	外傾	平坦	人為	-	
838	G 2 e9	N - 14° - W	楕円形	1.13 × 0.97	43	外傾	平坦	人為	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
839	G 2 e8	N - 6° - W	楕円形	0.88 × 0.79	40	外傾	平坦	人為	-	
840	G 2 e9	-	円形	0.75 × 0.70	44	外傾	平坦	人為	縄文土器	
841	F 2 j1	N - 78° - W	楕円形	0.90 × 0.75	20	外傾	皿状	人為	縄文土器	SI 69
842	F 1 d0	N - 32° - W	楕円形	1.74 × 1.51	83	外傾	平坦	人為	縄文土器	SK853 → 本跡
843	F 1 h0	N - 86° - E	楕円形	1.42 × 1.14	48	外傾	平坦	人為	縄文土器	
845	G 2 a1	N - 27° - E	方形	1.04 × 0.98	80	外傾	平坦	人為	縄文土器	
846	F 1 f1	-	[円形]	2.20 × [2.18]	20	外傾	平坦	人為	縄文土器	
847	F 2 f2	N - 57° - E	楕円形	1.28 × 0.98	50	外傾	平坦	人為	-	
849	F 2 e1	N - 84° - E	楕円形	0.98 × 0.89	13	外傾	平坦	-	-	
850	F 2 e1	N - 20° - E	楕円形	0.76 × 0.67	49	内彎	平坦	-	-	
851	F 2 e1	N - 27° - W	楕円形	1.35 × 1.06	31	外傾	凹凸	人為	縄文土器	
853	F 1 d0	N - 67° - W	楕円形	1.65 × [1.40]	35	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡 → SK842
855	F 3 c1	N - 42° - W	楕円形	0.60 × 0.45	33	外傾	平坦	-	縄文土器	
856	E 3 b1	-	円形	0.82 × 0.78	37	外傾	平坦	-	縄文土器	
857	E 2 h5	N - 39° - W	楕円形	0.84 × 0.73	20	外傾	平坦	人為	-	
858	E 2 f4	N - 81° - W	楕円形	1.50 × 1.29	84	外傾	平坦	人為	縄文土器	
859	F 1 d0	-	円形	0.79 × 0.76	38	外傾	平坦	人為	-	
860	F 1 b0	N - 46° - W	楕円形	0.47 × 0.35	12	外傾	皿状	人為	-	
861	E 2 g4	N - 82° - E	楕円形	0.39 × 0.28	15	外傾	平坦	人為	-	
862	E 2 h4	N - 34° - W	楕円形	0.90 × 0.57	22	外傾	平坦	人為	縄文土器	
864	F 2 e6	N - 51° - W	楕円形	0.78 × 0.63	21	外傾	平坦	-	-	
865	F 2 f5	N - 61° - E	楕円形	0.79 × 0.56	32	外傾	平坦	人為	-	
867	F 2 i7	N - 8° - E	楕円形	1.60 × 1.40	60	外傾	平坦	人為	縄文土器	
871	F 1 b8	N - 64° - E	楕円形	1.97 × 1.24	105	外傾	有段	-	縄文土器	
873	F 2 e6	-	円形	0.35 × 0.35	21	外傾	皿状	人為	-	
875	F 2 h6	-	円形	2.42 × 2.28	82	外傾	平坦	人為	縄文土器、土師器	
878	E 2 h7	-	円形	0.65 × 0.64	34	外傾	皿状	-	-	
879	E 3 h1	N - 63° - E	楕円形	0.40 × 0.30	26	外傾	平坦	人為	-	SK880 → 本跡
880	E 3 h1	-	円形	0.31 × 0.30	25	外傾	平坦	人為	-	本跡 → SK879
881	H 0 d5	N - 53° - E	楕円形	1.67 × 0.74	25	外傾	平坦	-	縄文土器	本跡 → SK958 · 962
882	F 2 j9	-	円形	0.83 × 0.81	42	外傾	平坦	-	縄文土器	
884	F 2 i4	N - 72° - W	楕円形	0.93 × 0.83	22	外傾	平坦	-	縄文土器	
885	G 2 b8	N - 30° - E	楕円形	1.00 × 0.85	34	外傾	平坦	-	縄文土器	
889	J 1 a0	N - 64° - W	楕円形	0.70 × 0.62	22	外傾	皿状	人為	縄文土器	
890	J 1 a0	N - 23° - W	楕円形	0.73 × 0.66	21	外傾	平坦	人為	縄文土器	
892	I 1 j0	N - 66° - E	楕円形	0.45 × 0.35	25	外傾	平坦	人為	-	
893	I 1 d9	N - 17° - E	楕円形	1.93 × 1.41	51	外傾	平坦	人為	縄文土器、剥片	
897	H 0 e5	N - 77° - W	楕円形	0.62 × 0.55	25	外傾	皿状	-	縄文土器	
898	H 0 f4	-	円形	0.40 × 0.39	19	外傾	平坦	-	-	SK899 → 本跡
899	H 0 e4	-	円形	0.40 × 0.40	18	外傾	平坦	-	-	本跡 → SK898
900	H 0 e5	N - 58° - W	楕円形	1.30 × 0.80	27	外傾	平坦	-	縄文土器	
901	H 0 h2	-	円形	1.28 × 1.25	45	外傾	有段	-	-	
902	H 0 g3	N - 12° - E	不整楕円形	0.96 × 0.77	37	外傾	平坦	-	縄文土器	
904	H 0 g2	N - 30° - W	楕円形	1.05 × 0.85	23	外傾	平坦	-	-	
905	H 0 g3	N - 29° - W	楕円形	0.59 × 0.48	30	外傾	皿状	-	-	
906	H 0 g3	N - 27° - E	楕円形	0.78 × 0.62	35	外傾	平坦	-	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
907	H 0g3	N - 38° - E	楕円形	0.52 × [0.46]	37	外傾	平坦	-	-	本跡→ SK908
908	H 0g3	N - 44° - W	楕円形	1.19 × 0.76	49	外傾	平坦	-	縄文土器	SK907 → 本跡
909	H 0f2	N - 33° - E	楕円形	0.42 × 0.37	21	外傾	平坦	-	縄文土器	
910	H 0f2	-	円形	0.66 × 0.62	28	外傾	平坦	-	縄文土器	
911	H 0f2	N - 88° - E	楕円形	0.93 × 0.73	28	外傾	平坦	-	-	
912	H 0f2	N - 73° - E	楕円形	0.45 × 0.33	31	外傾	平坦	-	-	
913	H 0f4	N - 8° - W	楕円形	0.77 × 0.69	44	外傾	平坦	-	-	
914	H 0f4	N - 17° - E	楕円形	0.87 × 0.74	29	外傾	平坦	-	-	
915	H 0f2	N - 37° - E	楕円形	1.14 × 0.83	39	外傾	平坦	-	縄文土器	ピット 2 か所
916	H 0f2	N - 40° - E	楕円形	0.56 × 0.37	29	外傾	平坦	-	-	
917	H 0f2	-	円形	0.40 × 0.40	18	外傾	平坦	-	縄文土器	
918	H 0f1	N - 46° - E	楕円形	0.60 × 0.53	21	外傾	平坦	-	-	
919	H 0e3	N - 39° - E	楕円形	0.85 × 0.70	27	外傾	平坦	-	-	
920	H 0f3	N - 45° - E	楕円形	1.06 × 0.81	21	外傾	平坦	-	縄文土器	
921	H 0f4	N - 46° - W	楕円形	1.53 × 1.03	32	外傾	平坦	-	縄文土器	SK1533 → 本跡
922	H 0e3	N - 35° - E	楕円形	1.33 × 0.85	31	外傾	平坦	-	-	
923	H 0f3	N - 31° - E	楕円形	1.10 × 0.98	45	外傾	平坦	-	-	
924	H 0f3	N - 25° - E	楕円形	0.94 × 0.71	29	外傾	平坦	-	-	
925	H 0e4	N - 89° - W	楕円形	1.85 × 1.08	19	外傾	平坦	-	-	本跡→ SK1534 ピット 1 か所
926	H 0e4	N - 69° - E	楕円形	0.86 × 0.69	45	外傾	皿状	-	-	
927	H 0h2	N - 15° - W	楕円形	0.73 × 0.66	35	外傾	皿状	-	-	
928	H 0e4	N - 86° - E	楕円形	1.02 × 0.49	27	外傾	平坦	-	-	
929	H 0e4	N - 60° - W	楕円形	0.95 × 0.73	36	外傾	皿状	-	縄文土器	
930	H 0e4	-	円形	0.85 × 0.85	31	外傾	平坦	-	縄文土器	ピット 1 か所
931	H 0e4	-	円形	0.57 × 0.56	20	外傾	平坦	-	-	
932	H 0e5	N - 6° - E	楕円形	1.21 × 0.77	26	外傾	平坦	-	-	
933	H 0e3	-	円形	0.36 × 0.36	17	外傾	皿状	-	-	
934	H 0d2	N - 25° - E	楕円形	1.00 × 0.64	16	外傾	平坦	-	-	
935	H 0d3	N - 59° - E	楕円形	0.63 × 0.50	34	外傾	平坦	-	-	
936	H 0d3	N - 54° - E	楕円形	0.85 × 0.51	35	外傾	有段	-	-	
937	H 0c2	N - 24° - E	楕円形	0.44 × 0.36	23	外傾	皿状	-	-	
938	H 0c2	-	円形	0.28 × 0.26	34	外傾	平坦	-	-	
939	H 0c2	N - 84° - W	楕円形	0.75 × 0.52	25	外傾	平坦	-	-	
940	H 0e2	N - 79° - E	楕円形	0.44 × 0.37	19	外傾	平坦	-	-	
941	H 0d4	N - 36° - E	楕円形	1.20 × 0.82	50	外傾	皿状	-	縄文土器	
942	H 0e4	N - 67° - E	楕円形	0.65 × 0.55	29	外傾	平坦	-	-	
943	H 0d3	-	円形	0.55 × 0.54	25	外傾	平坦	-	-	
944	H 0d3	-	円形	0.48 × 0.46	40	外傾	皿状	-	-	
945	H 0d3	N - 35° - E	楕円形	1.04 × 0.67	45	外傾	平坦	-	-	
946	H 0d3	N - 42° - E	楕円形	1.50 × 0.51	25	外傾	平坦	-	-	
947	H 0e5	N - 20° - E	楕円形	0.85 × 0.58	33	外傾	平坦	-	-	
948	H 0d5	-	円形	0.40 × 0.40	20	外傾	皿状	-	-	
949	H 0e5	N - 25° - W	楕円形	1.09 × 0.95	18	外傾	平坦	-	縄文土器	本跡→ SK950
950	H 0e5	N - 52° - E	楕円形	1.30 × 1.16	27	外傾	平坦	-	縄文土器	SK949 → 本跡
953	H 0d5	N - 83° - W	楕円形	0.83 × 0.57	32	外傾	平坦	-	-	
954	H 0e5	N - 75° - E	楕円形	0.78 × 0.58	32	外傾	平坦	-	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
955	H 0 d6	—	円形	0.53 × 0.49	58	外傾	皿状	—	—	
956	H 0 d6	—	円形	0.72 × 0.71	34	外傾	平坦	—	縄文土器	
957	H 0 d6	N - 5° - E	楕円形	1.12 × 0.75	20	外傾	平坦	—	縄文土器	
958	H 0 d5	—	円形	0.59 × 0.56	30	外傾	平坦	—	縄文土器	SK881 → 本跡
959	G 0 j4	—	円形	0.57 × 0.55	22	外傾	平坦	—	縄文土器	
960	H 0 c5	—	円形	0.53 × 0.52	20	外傾	皿状	—	—	
961	H 0 d5	N - 37° - W	楕円形	0.58 × 0.46	29	外傾	平坦	—	—	
962	H 0 d5	N - 88° - W	楕円形	1.30 × 0.71	14	外傾	平坦	—	縄文土器	SK881 → 本跡
970	I 2 i1	N - 77° - W	楕円形	1.05 × 0.77	25	外傾	平坦	人為	縄文土器	SK971 → 本跡
971	I 2 i1	N - 65° - W	[楕円形]	0.90 × (0.55)	23	外傾	平坦	人為	—	本跡 → SK970
977	H 0 d5	N - 45° - W	楕円形	0.93 × 0.75	52	外傾	有段	—	縄文土器	
981	I 1 a9	N - 84° - E	楕円形	0.53 × 0.41	21	外傾	平坦	—	縄文土器	
982	I 1 a9	N - 33° - E	楕円形	0.87 × 0.61	21	外傾	平坦	—	縄文土器	
986	I 1 j5	N - 10° - E	楕円形	1.60 × 1.15	84	外傾	平坦	—	—	SK1332 → 本跡 SI 57 と重複
989	I 2 i1	—	円形	0.72 × 0.73	33	外傾	平坦	—	縄文土器	
990	I 2 i1	N - 29° - W	楕円形	1.08 × 0.78	28	外傾	平坦	人為	縄文土器	
993	G 0 i1	N - 20° - E	楕円形	1.69 × 0.64	17	外傾	平坦	—	—	
994	H 0 a2	N - 74° - W	楕円形	0.63 × 0.57	32	外傾	平坦	—	—	本跡 → SK995
995	H 0 a2	—	円形	0.50 × 0.48	29	外傾	皿状	—	—	SK944 → 本跡
996	G 0 g1	—	円形	0.70 × 0.68	30	外傾	平坦	—	—	
1001	G 0 i1	N - 6° - W	楕円形	0.70 × 0.54	35	外傾	平坦	—	—	
1002	G 0 i1	N - 7° - E	楕円形	0.70 × 0.53	20	外傾	平坦	—	—	
1003	H 0 d8	—	円形	0.39 × 0.39	27	外傾	平坦	—	—	SK1535 → 本跡
1004	H 0 d8	N - 60° - W	楕円形	0.77 × 0.64	35	外傾	平坦	—	縄文土器	
1005	H 0 d7	N - 51° - W	楕円形	0.46 × 0.36	17	外傾	皿状	—	—	
1006	H 0 d7	N - 54° - W	楕円形	0.95 × 0.75	16	外傾	皿状	—	—	
1008	G 0 i1	N - 69° - W	楕円形	0.50 × 0.40	39	外傾	皿状	—	—	
1009	H 0 b6	N - 37° - W	楕円形	0.72 × 0.55	25	外傾	平坦	—	—	
1010	H 0 b5	N - - -	円形	0.55 × 0.51	27	外傾	皿状	—	—	
1011	H 0 c5	N - 29° - W	楕円形	1.57 × 0.81	31	外傾	平坦	—	縄文土器	ピット 1 か所
1012	H 0 b5	N - 85° - W	楕円形	1.11 × 0.79	23	外傾	平坦	—	縄文土器	
1013	H 0 c5	N - 85° - E	楕円形	0.97 × 0.48	29	外傾	平坦	—	—	
1014	H 0 e7	N - 58° - E	楕円形	0.70 × 0.57	54	外傾	皿状	—	縄文土器	SK1536 → 本跡
1015	H 0 e7	—	円形	0.75 × 0.69	23	外傾	平坦	—	縄文土器	SK1536 → 本跡
1017	I 1 c8	N - 64° - W	楕円形	1.31 × 0.92	57	外傾	平坦	人為	縄文土器	SK1016 → 本跡
1018	H 0 b4	—	円形	0.49 × 0.47	18	外傾	平坦	—	—	
1019	H 0 b5	—	円形	0.57 × 0.55	28	外傾	平坦	—	縄文土器	
1020	H 0 b4	N - 69° - W	楕円形	0.35 × 0.30	32	外傾	平坦	—	—	
1021	H 0 b4	—	円形	0.30 × 0.28	11	外傾	平坦	—	—	
1022	H 0 b4	N - 88° - W	楕円形	0.42 × 0.37	18	外傾	平坦	—	—	
1023	H 0 b5	N - 41° - W	楕円形	0.50 × 0.41	21	外傾	平坦	—	縄文土器	
1024	H 0 a5	—	円形	0.35 × 0.35	15	外傾	平坦	—	—	
1025	H 0 a5	N - 7° - E	楕円形	0.58 × 0.52	18	外傾	皿状	—	—	
1026	H 0 a6	—	円形	0.46 × 0.42	17	外傾	平坦	—	—	
1027	H 0 c6	N - 89° - W	楕円形	1.03 × 0.59	55	外傾	平坦	—	縄文土器	
1028	H 0 b6	N - 57° - W	[楕円形]	1.15 × (0.82)	55	外傾	平坦	—	—	TP 6 → 本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1029	H O b0	N - 32° - W	楕円形	0.88 × 0.65	32	外傾	有段	-	-	
1030	H O c0	N - 30° - W	不整楕円形	1.20 × 0.55	25	外傾	平坦	-	-	
1032	H O b9	-	円形	0.44 × 0.42	30	外傾	平坦	-	-	
1033	H O a0	N - 88° - E	楕円形	1.37 × 0.59	22	外傾	皿状	-	-	
1034	H O a9	-	円形	0.50 × 0.49	40	外傾	皿状	-	縄文土器	SK1049 と重複
1037	G O j7	N - 36° - E	楕円形	0.51 × 0.43	61	外傾・内 彎	皿状	-	-	
1038	G O g4	-	円形	0.47 × 0.44	24	外傾	皿状	-	-	
1040	G O j7	N - 67° - W	楕円形	0.32 × 0.28	18	外傾	皿状	-	-	
1041	G O j7	-	円形	0.21 × 0.20	47	直立	皿状	-	-	
1042	H O b0	N - 66° - E	楕円形	0.61 × 0.41	20	外傾	平坦	-	-	
1043	H O b0	N - 54° - W	楕円形	0.60 × 0.37	28	外傾	平坦	-	-	
1044	G O j8	N - 23° - W	楕円形	0.72 × 0.50	29	外傾	平坦	-	-	
1045	H O b9	-	円形	0.34 × 0.33	25	外傾	平坦	-	-	
1046	H O b9	N - 79° - E	楕円形	0.36 × 0.27	40	外傾	平坦	-	-	
1047	G O j8	N - 70° - W	楕円形	0.65 × 0.48	25	外傾	平坦	-	-	
1048	H O b0	-	円形	0.24 × 0.23	31	外傾	平坦	-	-	
1049	H O a9	-	円形	0.56 × 0.52	35	外傾	皿状	-	-	SK1034 と重複
1050	H O a9	N - 2° - E	楕円形	0.53 × 0.46	21	外傾	平坦	-	縄文土器	
1051	G O h5	-	円形	0.47 × 0.44	30	外傾	平坦	-	-	
1052	G O h5	N - 33° - E	楕円形	0.56 × 0.46	28	外傾	平坦	-	-	
1053	G O j5	N - 57° - E	楕円形	1.40 × 0.86	30	外傾	平坦	-	-	
1054	G O j4	N - 27° - E	楕円形	0.50 × 0.41	23	外傾	平坦	-	縄文土器	
1057	J 1 a6	N - 39° - W	楕円形	1.08 × 0.90	36	外傾	平坦	人為	-	SI 54 と重複
1061	H O a5	N - 89° - W	楕円形	1.01 × 0.56	30	外傾	凹凸	-	-	
1062	H 1 c1	N - 56° - W	楕円形	0.92 × 0.83	19	外傾	平坦	-	-	
1063	H 1 b1	N - 88° - E	楕円形	0.71 × 0.60	69	外傾	有段	-	-	
1064	H O a0	N - 78° - E	楕円形	0.72 × 0.52	29	外傾	平坦	-	-	
1065	G 1 j1	N - 73° - E	楕円形	0.58 × 0.50	23	外傾	平坦	-	-	
1066	G 1 j1	N - 29° - E	楕円形	0.66 × 0.57	22	外傾	皿状	-	-	
1067	G O h4	N - 72° - E	楕円形	0.80 × 0.70	38	外傾	皿状	-	-	
1068	H 1 a1	-	円形	0.64 × 0.61	33	外傾	有段	-	縄文土器	
1069	H O b9	N - 12° - E	楕円形	0.76 × 0.67	20	外傾	平坦	-	縄文土器	
1070	G O j5	N - 37° - W	楕円形	0.49 × 0.28	26	外傾	平坦	-	-	
1071	F 3 i2	N - 28° - W	楕円形	0.95 × 0.84	60	外傾	平坦	-	縄文土器	
1072	H 1 b1	N - 80° - E	楕円形	1.15 × 0.74	18	外傾	平坦	-	-	
1074	H O b0	N - 2° - W	楕円形	0.90 × 0.65	20	外傾	平坦	-	-	ピット 1 か所
1075	G O i6	-	円形	0.50 × 0.48	39	外傾	皿状	-	-	
1076	G O h6	N - 18° - E	楕円形	0.43 × 0.38	31	外傾	皿状	-	-	
1077	G O i6	N - 3° - W	楕円形	0.52 × 0.46	29	外傾	平坦	-	-	本跡→ SK1078
1078	G O i6	N - 29° - E	楕円形	0.52 × 0.45	52	外傾	皿状	-	-	SK1077 → 本跡
1079	G 1 j1	N - 59° - E	楕円形	1.32 × 0.82	31	外傾	平坦	-	-	
1080	G O h9	N - 50° - E	楕円形	0.56 × 0.50	20	外傾	平坦	-	-	
1081	G O g9	N - 20° - W	楕円形	0.83 × 0.59	24	外傾	皿状	-	-	
1082	G O g9	N - 9° - W	楕円形	0.89 × 0.59	18	外傾	平坦	-	縄文土器	
1083	J 1 a5	N - 32° - W	楕円形	0.80 × 0.65	28	直立	平坦	人為	-	
1085	G O h8	N - 44° - E	楕円形	0.80 × 0.55	33	外傾	皿状	-	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1086	G 0 h9	N - 40° - W	楕円形	0.51 × 0.37	21	外傾	平坦	-	-	SK1537 → 本跡
1087	G 0 g8	N - 54° - E	楕円形	0.90 × 0.65	19	外傾	平坦	-	-	
1088	G 0 f9	N - 60° - E	楕円形	1.02 × 0.54	27	外傾	平坦	-	-	
1089	G 0 e7	-	円形	0.48 × 0.46	52	外傾	平坦	-	縄文土器	
1090	G 0 c9	N - 3° - E	楕円形	0.60 × 0.41	40	外傾	有段	-	-	
1091	G 0 c9	N - 25° - E	楕円形	1.22 × 0.90	15	外傾	平坦	-	-	
1092	G 0 e8	N - 66° - E	楕円形	0.64 × 0.52	28	外傾	平坦	-	-	
1093	G 0 g0	N - 63° - E	楕円形	0.55 × 0.48	20	外傾	平坦	-	-	
1094	G 1 h1	N - 31° - E	楕円形	0.56 × 0.42	23	外傾	平坦	-	-	
1097	G 1 g1	N - 34° - W	楕円形	0.51 × 0.36	20	外傾	平坦	-	-	
1098	G 1 e1	-	円形	0.25 × 0.24	34	外傾	皿状	-	-	
1099	G 0 e9	N - 29° - E	楕円形	0.63 × 0.53	30	外傾	有段	-	-	
1100	G 1 i1	N - 8° - W	楕円形	0.42 × 0.33	35	外傾	有段	-	-	
1101	G 1 i2	N - 62° - E	楕円形	0.70 × 0.59	36	外傾	有段	-	縄文土器	
1102	G 1 h2	N - 50° - W	楕円形	0.72 × 0.44	16	外傾	平坦	-	-	
1103	G 1 i3	N - 58° - E	楕円形	0.66 × 0.42	14	外傾	平坦	-	-	
1104	G 1 j3	N - 72° - E	楕円形	0.39 × 0.33	14	外傾	平坦	-	-	
1105	G 1 j3	N - 2° - W	楕円形	0.47 × 0.37	24	外傾	平坦	-	-	
1106	G 1 j3	-	円形	0.29 × 0.27	18	外傾	皿状	-	-	
1107	G 1 j3	-	円形	0.37 × 0.35	19	外傾	皿状	-	-	
1108	G 1 h3	-	円形	0.43 × 0.42	30	外傾	平坦	-	-	
1109	G 1 i4	-	円形	0.81 × 0.76	39	外傾	有段	-	-	
1111	G 1 j3	N - 24° - E	楕円形	0.62 × 0.49	55	外傾	有段	-	-	
1112	G 1 j6	N - 56° - E	楕円形	0.87 × 0.51	20	外傾	平坦	-	-	
1113	H 1 a4	-	円形	0.46 × 0.43	26	外傾	平坦	-	縄文土器	
1114	H 1 a4	N - 69° - W	楕円形	0.57 × 0.50	40	外傾	平坦	-	-	
1115	H 1 a4	N - 78° - W	楕円形	0.76 × 0.59	33	外傾	平坦	-	縄文土器	
1116	H 1 a4	-	円形	0.40 × 0.37	27	外傾	平坦	-	-	
1117	H 1 a4	-	円形	0.29 × 0.27	15	外傾	皿状	-	-	
1118	H 1 a4	N - 51° - E	楕円形	0.35 × 0.28	17	外傾	皿状	-	-	
1119	G 1 j4	-	円形	0.34 × 0.33	21	外傾	平坦	-	縄文土器	
1120	G 1 j5	N - 32° - W	楕円形	1.25 × 1.09	45	外傾	平坦	-	-	
1121	H 1 a5	N - 18° - E	楕円形	1.45 × 0.91	28	外傾	平坦	-	縄文土器	
1122	G 1 j5	N - 0°	楕円形	0.93 × 0.52	24	外傾	平坦	-	-	
1123	H 1 a5	N - 48° - W	楕円形	0.80 × 0.66	25	外傾	皿状	-	-	
1124	H 1 b5	N - 19° - E	楕円形	0.60 × 0.49	29	外傾	皿状	-	-	
1125	H 1 b5	-	円形	0.56 × 0.51	37	外傾	有段	-	縄文土器	
1126	H 1 b5	N - 27° - E	楕円形	0.56 × 0.47	20	外傾	平坦	-	-	
1127	H 1 b5	-	円形	0.37 × 0.35	25	外傾	皿状	-	-	
1128	H 1 c5	N - 12° - E	楕円形	1.00 × 0.62	24	外傾	平坦	-	縄文土器	ピット 1 か所
1129	H 1 b5	N - 64° - W	楕円形	0.40 × 0.35	27	外傾	平坦	-	縄文土器	
1130	H 1 c5	N - 26° - W	楕円形	0.62 × 0.56	37	外傾	平坦	-	縄文土器	
1132	H 1 a5	N - 61° - W	楕円形	0.84 × 0.56	25	外傾	平坦	-	縄文土器	
1133	H 1 b5	-	円形	0.51 × 0.48	25	外傾	平坦	-	-	
1134	H 1 a5	-	円形	0.55 × 0.51	24	外傾	平坦	-	縄文土器	
1135	H 1 b6	-	円形	0.40 × 0.39	36	外傾	平坦	-	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1137	H 1 b6	N - 29° - W	楕円形	0.42 × 0.38	27	外傾	平坦	-	-	
1138	H 1 b6	-	円形	0.40 × 0.37	19	外傾	平坦	-	-	
1139	H 1 b7	N - 62° - W	楕円形	0.55 × 0.45	22	外傾	平坦	-	縄文土器	SK1140 → 本跡
1140	H 1 b7	N - 88° - W	楕円形	0.56 × 0.44	34	外傾	平坦	-	-	本跡 → SK1139
1149	H 1 b8	N - 38° - E	楕円形	1.37 × 0.91	48	外傾	平坦	-	縄文土器	
1151	H 1 a6	-	円形	0.54 × 0.50	35	外傾	平坦	-	-	
1152	G 1 j6	N - 14° - E	楕円形	1.04 × 0.65	38	外傾	平坦	-	-	
1153	H 1 a7	N - 65° - W	楕円形	0.78 × 0.63	28	外傾	平坦	-	縄文土器	
1154	H 1 d5	-	円形	0.50 × 0.47	64	外傾	平坦	-	縄文土器	
1155	H 1 d4	-	円形	0.51 × 0.50	25	外傾	平坦	-	縄文土器	
1164	J 1 b5	N - 74° - E	楕円形	0.84 × 0.72	30	外傾	平坦	-	縄文土器、剥片	
1165	J 1 b5	-	円形	0.35 × 0.33	64	外傾	平坦	人為	-	
1167	H 1 b7	N - 34° - W	楕円形	0.58 × 0.40	49	外傾	平坦	-	-	SK1159 → 本跡
1168	H 1 b7	N - 32° - E	楕円形	0.73 × 0.51	26	外傾	平坦	-	-	
1170	G 1 j8	N - 47° - W	楕円形	0.56 × 0.44	33	外傾	皿状	-	-	
1171	H 1 b8	-	円形	0.43 × 0.41	21	外傾	皿状	自然	-	
1175	H 1 b8	-	円形	0.62 × 0.60	36	外傾	皿状	-	-	
1176	H 1 b8	N - 40° - E	楕円形	0.45 × 0.40	31	外傾	皿状	-	-	
1180	H 1 d4	N - 74° - W	楕円形	0.43 × 0.38	24	外傾	皿状	-	-	
1183	H 1 d6	-	円形	0.25 × 0.25	13	外傾	皿状	-	-	
1185	H 1 d5	-	円形	0.30 × 0.28	52	直立	皿状	-	-	
1186	H 1 c4	N - 3° - W	楕円形	0.58 × 0.40	31	外傾	皿状	自然	縄文土器	
1187	H 1 c4	N - 76° - W	楕円形	0.51 × 0.41	28	外傾	平坦	自然	-	
1188	H 1 b4	-	円形	0.51 × 0.50	26	外傾	平坦	自然	縄文土器、土師器	
1189	H 1 b8	N - 15° - W	楕円形	0.87 × 0.75	24	外傾	平坦	-	-	
1190	H 1 c7	N - 47° - W	楕円形	0.61 × 0.54	31	外傾	平坦	-	-	
1193	J 1 a4	N - 84° - W	[楕円形]	(0.69) × 0.74	14	外傾	平坦	-	縄文土器、剥片	SK1095・1096・ 1144 → 本跡
1194	H 1 d7	N - 59° - W	楕円形	1.27 × 1.08	20	外傾	平坦	-	-	
1195	H 1 c8	N - 35° - E	楕円形	1.01 × 0.80	20	外傾	平坦	-	縄文土器	
1197	H 1 b9	N - 34° - W	楕円形	1.50 × 1.25	52	外傾	有段	-	縄文土器	
1200	H 1 b8	N - 50° - W	楕円形	0.87 × 0.62	27	外傾	平坦	-	-	
1201	H 1 c9	N - 2° - W	楕円形	0.88 × 0.60	32	外傾	平坦	-	-	
1202	H 1 c9	N - 66° - E	楕円形	0.79 × 0.61	30	外傾	有段	-	-	
1203	H 1 c0	N - 12° - E	楕円形	0.60 × 0.50	25	外傾	平坦	-	-	
1204	H 1 c0	N - 65° - W	楕円形	0.40 × 0.32	25	外傾	平坦	-	縄文土器	
1205	H 1 e8	N - 58° - W	楕円形	0.82 × [0.63]	34	外傾	平坦	-	縄文土器	SI 97 と重複
1206	H 1 e9	N - 35° - E	楕円形	0.51 × 0.39	17	外傾	平坦	-	-	
1207	H 1 c0	N - 83° - E	楕円形	1.27 × 0.96	35	外傾	平坦	-	縄文土器	
1208	H 1 a0	N - 50° - W	楕円形	0.40 × 0.35	36	外傾	皿状	-	-	
1212	I 1 h7	N - 31° - E	楕円形	1.10 × 0.90	15	外傾	平坦	-	縄文土器	SK1230 → 本跡 → SK1538
1213	I 1 i7	N - 20° - W	[楕円形]	1.10 × (0.58)	21	外傾	平坦	人為	-	SK754 → 本跡
1214	H 1 a0	N - 42° - E	楕円形	0.47 × 0.35	32	外傾	皿状	-	-	
1215	H 1 g5	N - 47° - E	楕円形	0.68 × 0.59	44	外傾	有段	-	縄文土器	SI 95 → 本跡
1219	H 1 g7	N - 73° - W	[楕円形]	1.36 × [1.18]	28	外傾	平坦	-	縄文土器、剥片	
1225	J 1 b5	N - 17° - E	楕円形	0.97 × 0.79	23	外傾	平坦	人為	縄文土器	
1228	I 1 h9	N - 51° - W	楕円形	0.76 × 0.58	36	外傾	皿状	-	縄文土器、土師器、剥片	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1229	I 1 i8	—	円形	1.00 × 0.93	38	外傾	平坦	—	縄文土器	ピット1か所
1232	I 1 f7	N - 11° - E	楕円形	1.36 × 1.19	47	外傾	平坦	人為	縄文土器	SK1254と重複
1234	H 1 h8	N - 70° - W	楕円形	0.70 × [0.65]	20	外傾	平坦	—	縄文土器	
1236	H 1 h5	N - 71° - W	楕円形	1.42 × [0.87]	6	外傾	平坦	—	—	SI 95 → 本跡 ピット1か所
1241	I 1 f8	—	円形	0.63 × 0.60	160	外傾	平坦	—	縄文土器	
1244	I 1 f9	N - 30° - E	【楕円形】	1.07 × (0.70)	42	外傾	有段	人為	縄文土器	
1245	I 1 e9	N - 31° - E	楕円形	0.96 × 0.76	52	外傾	有段	—	縄文土器	
1246	I 1 e9	—	円形	0.70 × 0.69	27	外傾	平坦	人為	縄文土器、土師器	
1251	I 1 f9	—	円形	0.81 × 0.79	80	外傾	平坦	人為	縄文土器	SI 80、SK1252 → 本跡 → SD3
1252	I 1 e9	N - 51° - W	【楕円形】	0.85 × (0.55)	40	外傾	平坦	—	縄文土器	SI 80 → 本跡 → SK1251
1253	I 1 c9	—	円形	0.43 × 0.42	37	外傾	平坦	—	縄文土器	
1254	I 1 g7	N - 20° - E	楕円形	1.34 × [0.68]	60	直立	平坦	人為	—	SK1232と重複
1258	H 1 i6	—	円形	0.50 × 0.46	78	直立	平坦	—	縄文土器、剥片	
1259	H 1 j6	N - 75° - W	楕円形	0.90 × [0.64]	73	外傾・直立	皿状	—	縄文土器	
1260	I 1 a6	—	円形	0.45 × 0.43	60	外傾	平坦	—	—	
1262	H 1 j6	N - 2° - E	楕円形	0.41 × 0.37	52	直立	平坦	—	縄文土器	
1266	H 1 j7	—	円形	0.41 × 0.38	61	外傾	平坦	—	縄文土器	
1267	H 1 j7	—	円形	0.79 × 0.77	53	外傾	平坦	—	縄文土器、剥片	
1268	H 1 j7	N - 53° - E	楕円形	0.60 × 0.50	69	外傾	平坦	—	縄文土器	
1269	H 1 i0	N - 11° - W	【不整楕円形】	1.35 × [1.08]	84	外傾	平坦	—	縄文土器	SI 99 → 本跡 SK1532と重複
1270	H 1 h9	N - 75° - W	【楕円形】	1.01 × 0.61	31	外傾	平坦	—	縄文土器	
1271	J 2 a2	—	円形	0.92 × 0.85	34	外傾	平坦	—	縄文土器	HG 1と重複
1272	H 2 f1	N - 70° - E	楕円形	0.52 × 0.47	19	外傾	平坦	—	—	
1273	H 2 e1	N - 83° - W	楕円形	0.99 × 0.84	31	外傾	平坦	—	—	
1274	H 2 e1	N - 37° - E	楕円形	1.08 × 0.92	45	外傾	平坦	—	縄文土器	
1275	H 1 e0	—	円形	0.42 × 0.42	37	外傾	皿状	—	—	
1276	H 2 e1	N - 28° - E	楕円形	0.87 × 0.72	75	外傾	皿状	—	—	SK1277 → 本跡
1277	H 2 e1	N - 2° - W	楕円形	0.83 × 0.60	34	外傾	皿状	—	縄文土器	本跡 → SK1276
1278	H 2 d2	N - 62° - W	楕円形	0.43 × 0.39	16	外傾	皿状	—	—	
1279	H 2 c4	—	円形	0.95 × 0.90	27	外傾	平坦	人為	—	
1280	H 2 d2	—	円形	0.36 × 0.33	40	外傾	皿状	人為	—	
1282	H 2 d6	N - 85° - W	楕円形	0.83 × 0.75	28	外傾	平坦	—	—	
1284	H 2 d3	N - 43° - W	楕円形	0.70 × 0.44	19	外傾	平坦	人為	—	
1285	H 2 c1	—	円形	0.70 × 0.69	48	外傾	皿状	—	—	
1286	H 2 d1	N - 79° - W	楕円形	1.16 × 0.73	19	外傾	平坦	—	—	
1287	H 2 d1	N - 39° - E	楕円形	0.52 × 0.42	25	外傾	皿状	—	縄文土器	
1289	H 2 e1	N - 29° - E	楕円形	0.48 × 0.41	51	外傾	皿状	—	—	
1290	H 2 i1	N - 10° - E	楕円形	0.80 × 0.67	57	外傾	皿状	—	縄文土器、土師器	SI 99と重複
1291	H 2 d1	N - 30° - E	楕円形	1.58 × 0.75	37	外傾	凹凸	人為	—	ピット1か所
1292	I 1 a7	—	円形	0.50 × 0.48	81	外傾	平坦	—	縄文土器	
1293	H 2 d4	N - 18° - E	楕円形	1.00 × 0.90	30	外傾	平坦	—	—	SD 3 → 本跡
1294	H 2 e6	—	円形	0.33 × 0.32	40	外傾	平坦	—	—	
1295	H 2 e5	—	円形	0.32 × 0.32	36	外傾	平坦	—	—	
1296	H 1 j6	N - 68° - E	楕円形	0.35 × (0.27)	61	外傾	平坦	—	—	
1297	H 1 j6	N - 18° - W	楕円形	0.59 × 0.47	50	外傾	平坦	—	縄文土器	
1298	H 1 j6	—	円形	0.52 × 0.49	27	外傾	平坦	—	縄文土器	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1299	H 2 e6	N - 43° - E	楕円形	0.31 × 0.26	29	外傾	皿状	-	-	
1304	I 1 a6	N - 4° - E	楕円形	0.70 × 0.58	57	外傾	平坦	-	-	本跡→SD 4
1305	H 2 f8	N - 55° - W	楕円形	0.74 × 0.59	36	外傾	平坦	-	-	
1307	H 1 i9	-	円形	1.10 × 1.02	85	外傾	平坦	-	縄文土器	
1308	H 2 f8	N - 48° - W	楕円形	0.65 × 0.57	26	外傾	有段	人為	-	
1309	H 1 h7	-	円形	0.60 × 0.60	53	外傾	平坦	-	縄文土器	SI 94・98→本跡
1310	H 1 h7	N - 9° - E	〔楕円形〕	[0.50] × (0.30)	35	外傾	皿状	-	-	SI 98、SK1238→本跡
1311	H 1 h7	-	〔円形〕	0.40 × (0.20)	50	外傾	皿状	-	-	SI 98、SK1239と重複
1313	I 2 c4	-	円形	0.84 × 0.84	26	外傾	平坦	-	-	本跡→SD 4
1314	H 1 h6	-	〔円形〕	0.81 × [0.80]	40	外傾	平坦	-	縄文土器	SI 94→本跡 SI 98、SK1281と重複
1316	H 2 d3	-	円形	0.30 × 0.29	26	外傾	平坦	-	-	
1317	H 2 d2	N - 72° - W	楕円形	0.37 × 0.32	12	外傾	平坦	-	-	
1318	H 2 d2	-	円形	0.30 × 0.29	30	外傾	平坦	-	-	
1320	I 2 c6	N - 70° - W	楕円形	0.81 × [0.56]	19	外傾	有段	-	-	本跡→SD 4
1323	I 1 a9	-	円形	0.80 × 0.79	42	外傾	平坦	-	縄文土器	
1324	H 2 i1	N - 14° - E	〔楕円形〕	0.83 × [0.60]	35	外傾	平坦	-	縄文土器	SI 99と重複
1325	H 1 j9	-	〔円形〕	1.34 × [1.22]	51	外傾	平坦	-	縄文土器	
1326	I 1 b6	N - 72° - E	〔楕円形〕	1.75 × (0.55)	86	外傾	平坦	-	-	本跡→SK1327→SD 4
1327	I 1 b6	-	不明	1.00 × (0.89)	70	直立	平坦	-	縄文土器	SK1326→本跡→SD 4
1334	I 1 j7	N - 78° - E	楕円形	0.50 × 0.43	50	直立	平坦	-	-	
1335	G 4 f8	N - 24° - E	楕円形	[1.04] × [0.64]	40	外傾	平坦	-	縄文土器	SI 105と重複
1336	G 4 b0	N - 30° - E	〔楕円形〕	0.95 × [0.75]	40	外傾	平坦	-	-	
1337	F 4 g9	N - 33° - W	楕円形	1.55 × 1.40	85	外傾	平坦	-	縄文土器	
1338	F 4 i8	N - 81° - E	楕円形	0.36 × 0.32	59	外傾・直立	平坦	-	-	
1339	G 5 i3	-	円形	1.22 × 1.22	26	外傾	平坦	-	-	
1340	G 5 h4	-	円形	1.23 × 1.15	25	外傾	平坦	-	-	
1341	G 5 j5	-	円形	1.22 × 1.18	88	外傾	有段	-	-	
1348	G 5 f1	N - 18° - W	不整楕円形	1.55 × 0.90	106	外傾	有段	-	縄文土器	SI 106、PG 1→本跡 SK1349と重複
1349	G 5 f1	N - 56° - E	〔楕円形〕	1.36 × [1.17]	45	外傾	平坦	-	縄文土器	SI 106、PG 1→本跡 SK1348と重複
1350	G 4 g0	N - 60° - E	楕円形	1.02 × 0.90	58	外傾	有段	-	縄文土器	本跡→PG 1 SI 106と重複 ピット 1 か所
1362	G 5 b3	N - 76° - E	楕円形	0.93 × 0.63	32	外傾	平坦	-	-	
1364	G 5 d2	-	円形	1.06 × 1.03	36	外傾	平坦	-	縄文土器	
1365	G 6 g2	N - 52° - E	楕円形	0.87 × 0.69	35	外傾	平坦	-	-	
1366	G 5 e6	N - 81° - E	不整楕円形	0.49 × 0.33	40	外傾	皿状	-	-	
1373	F 5 i7	N - 9° - W	楕円形	0.66 × (0.44)	43	外傾	平坦	-	縄文土器、磁器、剝片	SI 126と重複
1374	F 5 i8	N - 78° - E	楕円形	1.08 × 0.85	27	外傾	平坦	-	縄文土器	ピット 1 か所
1375	G 5 a3	-	円形	0.97 × 0.95	18	外傾	平坦	-	縄文土器	
1376	F 6 g3	N - 1° - W	〔楕円形〕	0.72 × [0.65]	14	外傾	皿状	-	縄文土器	
1377	F 6 f1	-	円形	0.35 × 0.33	42	直立	平坦	-	縄文土器	
1378	F 6 f2	N - 12° - E	楕円形	0.64 × 0.46	17	外傾	皿状	-	縄文土器	
1379	F 6 f3	N - 6° - W	楕円形	0.95 × 0.65	35	外傾	平坦	-	縄文土器	
1380	F 6 f1	N - 21° - W	楕円形	0.76 × 0.60	30	外傾	平坦	-	縄文土器	SK1406と重複
1381	F 6 e3	-	円形	0.59 × 0.55	27	外傾	平坦	-	縄文土器	
1384	G 5 a0	-	円形	0.39 × 0.37	36	外傾	平坦	-	-	
1385	F 5 g0	-	〔円形〕	[0.30] × 0.29	46	外傾	平坦	-	縄文土器	
1386	G 5 a9	-	〔不整円形〕	0.60 × [0.55]	15	外傾	平坦	-	縄文土器	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1387	F 6 j1	—	[円形]	[0.59] × 0.54	23	外傾	平坦	—	縄文土器	
1389	F 5 i1	N - 66° - E	[楕円形]	[0.76] × 0.69	34	外傾	平坦	—	縄文土器	
1390	F 6 e3	—	円形	0.85 × 0.85	24	外傾	平坦	—	縄文土器	
1391	F 6 d3	N - 71° - E	[楕円形]	[0.48] × 0.43	15	外傾	平坦	—	—	
1392	F 6 d3	N - 35° - E	楕円形	0.43 × 0.39	28	外傾	皿状	—	—	
1394	F 6 d2	N - 12° - E	楕円形	0.44 × 0.40	29	外傾	平坦	—	—	
1395	F 6 j1	N - 46° - W	[楕円形]	0.48 × 0.39	29	外傾	平坦	—	縄文土器	SK1396 → 本跡
1396	F 6 j1	N - 50° - W	[楕円形]	0.48 × 0.53	20	外傾	平坦	—	—	本跡 → SK1395
1397	F 6 d2	N - 25° - W	楕円形	1.10 × 0.85	52	外傾	平坦	—	縄文土器	
1398	F 6 c2	—	[円形]	[0.53] × 0.50	22	外傾	平坦	—	縄文土器	
1399	F 5 g0	—	[円形]	0.55 × [0.52]	24	外傾	平坦	—	縄文土器	
1400	F 5 d8	N - 12° - W	楕円形	0.46 × 0.40	21	外傾	平坦	—	—	
1401	F 6 d1	N - 71° - W	楕円形	0.70 × 0.57	36	外傾	皿状	—	縄文土器	
1402	F 5 c9	—	[円形]	[0.45] × 0.43	14	外傾	平坦	—	縄文土器	
1404	F 6 e1	N - 28° - W	[楕円形]	0.58 × [0.45]	20	外傾	皿状	—	縄文土器	
1405	F 5 d7	—	[円形]	0.32 × [0.30]	29	外傾	皿状	—	—	
1407	F 5 d8	—	円形	0.57 × 0.53	15	外傾	平坦	—	縄文土器	
1408	F 5 c8	—	[円形]	0.70 × [0.65]	30	外傾	平坦	—	縄文土器	
1410	F 6 d2	N - 12° - W	[楕円形]	0.65 × [0.56]	26	外傾	平坦	—	縄文土器	
1412	G 6 b2	N - 72° - E	[楕円形]	0.95 × [0.85]	60	外傾	平坦	—	縄文土器	本跡 → SI 113
1414	F 6 a3	N - 56° - W	楕円形	1.62 × 1.30	35	外傾	凹凸	—	縄文土器	
1415	F 6 e3	N - 78° - W	楕円形	0.72 × 0.61	20	外傾	平坦	—	縄文土器	
1416	F 6 c3	N - 72° - E	[楕円形]	[0.66] × 0.57	30	外傾	平坦	—	縄文土器	
1417	E 5 c6	—	[円形]	0.43 × [0.40]	42	外傾	平坦	—	縄文土器	
1420	F 5 a0	N - 60° - W	[楕円形]	[1.50] × 1.23	100	外傾	有段	—	縄文土器	
1421	F 5 b7	—	円形	0.67 × 0.61	27	外傾	平坦	—	縄文土器	
1422	F 5 b8	N - 3° - W	[楕円形]	0.82 × [0.67]	37	外傾	有段	—	縄文土器	SI 131 → 本跡
1423	G 6 a3	N - 16° - E	楕円形	0.64 × 0.50	29	外傾	平坦	—	—	
1425	F 6 j3	N - 18° - E	楕円形	0.69 × 0.50	19	外傾	皿状	—	縄文土器	
1426	E 5 j0	N - 14° - W	楕円形	0.56 × 0.46	13	外傾	平坦	—	縄文土器	
1427	F 5 a0	N - 80° - E	楕円形	0.61 × 0.52	28	外傾	平坦	—	縄文土器	
1428	F 5 a9	—	円形	0.24 × 0.23	15	外傾	平坦	—	—	
1430	E 5 i9	N - 21° - E	[楕円形]	[1.03] × [1.71]	53	外傾	平坦	—	—	
1431	F 6 b1	N - 8° - E	楕円形	1.23 × 0.97	33	外傾	平坦	—	縄文土器	SI 128 → 本跡
1432	E 5 j7	—	円形	0.50 × 0.50	33	外傾	平坦	—	縄文土器	
1434	F 5 a6	N - 42° - E	楕円形	0.44 × 0.39	22	外傾	平坦	—	縄文土器	
1435	F 5 i1	N - 55° - W	楕円形	0.62 × 0.53	60	外傾	平坦	—	縄文土器	
1436	F 5 a0	—	円形	0.65 × 0.64	15	外傾	平坦	—	—	
1441	E 5 j0	N - 26° - W	[楕円形]	[1.06] × [0.96]	64	外傾	平坦	—	縄文土器、剥片	
1442	E 5 f0	N - 78° - E	[楕円形]	[1.20] × 0.98	30	外傾	平坦	—	縄文土器、土師器	
1443	E 5 g8	—	円形	0.92 × 0.90	25	外傾	平坦	—	縄文土器	SI 134 と重複
1444	F 5 a6	N - 14° - W	[楕円形]	[0.43] × [0.30]	34	外傾	平坦	—	—	
1445	E 5 j0	—	円形	0.43 × 0.40	19	外傾	平坦	—	—	
1446	E 5 j0	—	円形	0.31 × 0.30	15	外傾	平坦	—	—	
1447	E 5 i8	N - 34° - W	楕円形	0.56 × 0.50	21	直立	平坦	—	—	
1448	E 5 h9	—	[円形]	0.57 × [0.55]	66	外傾	平坦	—	—	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1449	F 5 b1	N - 18° - E	楕円形	0.60 × 0.43	27	外傾	皿状	-	-	
1450	F 5 e5	-	円形	0.81 × 0.75	26	外傾	平坦	-	-	
1451	F 5 c1	-	[円形]	0.84 × [0.84]	26	外傾	平坦	-	縄文土器、土師器	SK1539と重複
1452	E 5 g0	N - 40° - E	楕円形	0.90 × 0.80	98	外傾	平坦	-	縄文土器、土師器	SK1469→本跡
1453	F 4 b8	N - 36° - E	楕円形	1.07 × 0.93	87	外傾	平坦	-	縄文土器	
1454	F 5 d2	-	円形	1.64 × 1.55	67	外傾	平坦	人為	縄文土器	
1456	F 4 a7	N - 40° - W	[楕円形]	0.70 × [0.62]	14	外傾	平坦	-	-	
1461	F 5 d1	N - 7° - E	楕円形	1.20 × 0.94	55	外傾	平坦	-	縄文土器	
1462	F 5 d1	-	円形	[0.51] × 0.50	29	外傾	平坦	-	-	
1465	F 5 c5	-	円形	0.38 × 0.36	18	外傾	平坦	-	-	
1466	F 5 c5	N - 16° - W	楕円形	0.59 × 0.50	23	外傾	平坦	-	-	
1469	E 5 g0	-	[円形]	0.43 × [0.43]	66	外傾	皿状	-	縄文土器	本跡→SK1452
1470	F 5 d1	-	[円形]	[0.77] × 0.72	17	外傾	平坦	-	-	
1471	F 5 a4	-	[円形]	0.67 × [0.63]	36	外傾	平坦	-	-	
1472	F 5 b5	N - 80° - W	楕円形	0.82 × 0.73	36	外傾	平坦	-	縄文土器	
1477	E 6 d2	-	円形	1.05 × 1.00	60	外傾	有段	-	縄文土器	
1482	E 6 d1	-	円形	0.90 × 0.86	65	外傾	平坦	-	縄文土器	
1483	E 5 d0	-	円形	0.78 × 0.74	51	外傾・直立	平坦	-	-	
1484	D 6 j2	N - 22° - E	楕円形	0.48 × 0.35	54	直立	平坦	-	縄文土器	
1486	D 5 j7	N - 86° - E	楕円形	0.60 × [0.51]	46	外傾	平坦	人為	縄文土器	
1489	D 6 i2	N - 82° - W	楕円形	0.55 × 0.40	37	外傾	平坦	自然	-	
1490	D 6 i2	-	円形	0.34 × 0.31	43	外傾	平坦	自然	-	
1491	D 6 e2	N - 19° - E	楕円形	1.32 × 0.97	55	外傾	平坦	自然	縄文土器	
1494	E 5 d5	N - 87° - E	楕円形	0.95 × 0.62	20	外傾	平坦	-	縄文土器	
1497	D 5 j5	N - 5° - E	[楕円形]	[0.55] × 0.50	37	外傾	平坦	自然	-	
1498	D 5 j5	N - 55° - E	[楕円形]	0.78 × [0.69]	38	外傾	平坦	-	縄文土器	
1500	E 5 e5	N - 14° - E	[楕円形]	[1.34] × 1.00	82	外傾・直立	有段	-	縄文土器	
1501	E 5 d3	-	[円形]	0.57 × 0.54	24	外傾	平坦	-	-	
1502	E 5 a1	-	[円形]	0.97 × [0.97]	40	外傾	平坦	-	-	
1504	E 4 c0	-	円形	0.50 × 0.48	35	外傾	平坦	-	-	
1505	E 4 e9	N - 57° - E	楕円形	0.49 × 0.36	15	外傾	平坦	-	-	
1507	G 5 e8	-	円形	0.43 × 0.41	10	外傾	平坦	-	-	
1511	G 6 d3	N - 88° - W	楕円形	0.64 × 0.55	102	直立	平坦	-	-	SI 115→本跡
1514	E 5 h0	N - 34° - W	楕円形	1.17 × 1.05	72	外傾	平坦	-	縄文土器、土師器	
1520	H 7 e8	N - 56° - W	楕円形	0.76 × 0.64	36	外傾	平坦	人為	-	
1521	H 7 b6	N - 82° - E	長方形	2.22 × 0.80	43	外傾	平坦	人為	縄文土器	
1522	H 7 e8	[N - 8° - W]	[楕円形]	1.10 × (0.47)	39	外傾	平坦	人為	-	
1523	H 7 e8	N - 78° - W	楕円形	0.85 × 0.71	37	外傾	平坦	人為	-	
1524	H 7 e7	N - 90° -	楕円形	0.55 × 0.46	23	外傾	平坦	自然	-	
1528	G 7 j6	N - 24° - W	[楕円形]	0.53 × (0.38)	24	外傾	平坦	-	-	SI 138→本跡
1529	G 7 j6	N - 38° - E	楕円形	0.73 × 0.50	34	外傾	平坦	自然	縄文土器	
1530	I 1 j6	-	円形	0.69 × 0.67	47	外傾・直立	有段	-	-	SI 57と重複 ピット1か所
1531	J 1 g5	N - 77° - E	楕円形	0.67 × 0.49	20	外傾	平坦	-	-	
1532	H 1 h0	-	[円形]	1.04 × [0.98]	69	外傾	平坦	-	-	SI 99→本跡 SK1269と重複
1533	H 0 f4	N - 47° - W	楕円形	[0.87] × 0.68	32	外傾	平坦	-	-	本跡→SK921
1534	H 0 e4	N - 74° - E	楕円形	0.81 × 0.55	20	外傾	平坦	-	-	SK925→本跡 ピット1か所

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1535	H 0 d8	N - 83° - W	楕円形	0.40 × 0.30	30	外傾	皿状	-	-	本跡→SK1003
1536	H 0 e7	N - 4° - W	[楕円形]	[1.05] × 0.66	30	外傾	緩斜	-	-	本跡→SK1014・1015
1537	G 0 h9	N - 34° - W	[楕円形]	[0.43] × 0.34	20	外傾	平坦	-	-	本跡→SK1086
1538	I 1 h7	-	円形	0.28 × 0.26	65	直立	皿状	-	-	SK1212 → 本跡
1539	F 4 c0	-	[円形]	0.50 × [0.46]	24	外傾	平坦	-	-	SK1451 と重複

(2) 溝跡

第3・4号溝跡の平面図は本文中に記載し、そのほかの溝跡の平面図は全体図（付図）に記載する。

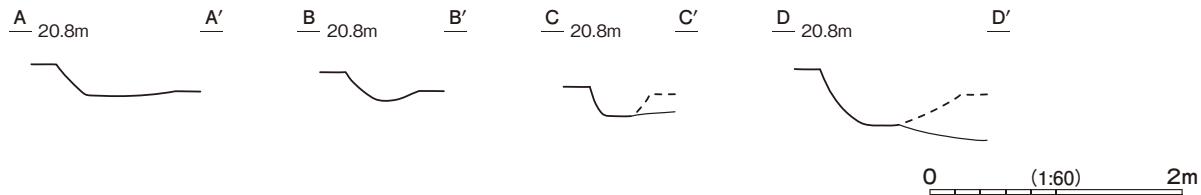
第2号溝跡（第387図）

位置 調査区南東部のJ 1 g7～J 1 j6区、標高約22mの台地上に位置している。

規模と形状 J 1 g7区から南西方向（N - 25° - E）に、直線状に延びている。規模は、長さ13.12m、上幅32～102cm、下幅12～44cm、深さ6～32cmで、断面はU字状である。壁は、緩やかに外傾して立ち上がるが、南東側の壁は谷に向かって流出している。底面は北東から南西に向かって緩やかに下っている。

遺物出土状況 混入した縄文土器片87点（深鉢）が出土している。

所見 時期は、不明である。



第387図 第2号溝跡実測図

第3号溝跡（第388図 第170表 PL19）

位置 調査区南西部のH 2 d4区～南東部のJ 2 b1区、標高約22mの台地上に位置している。

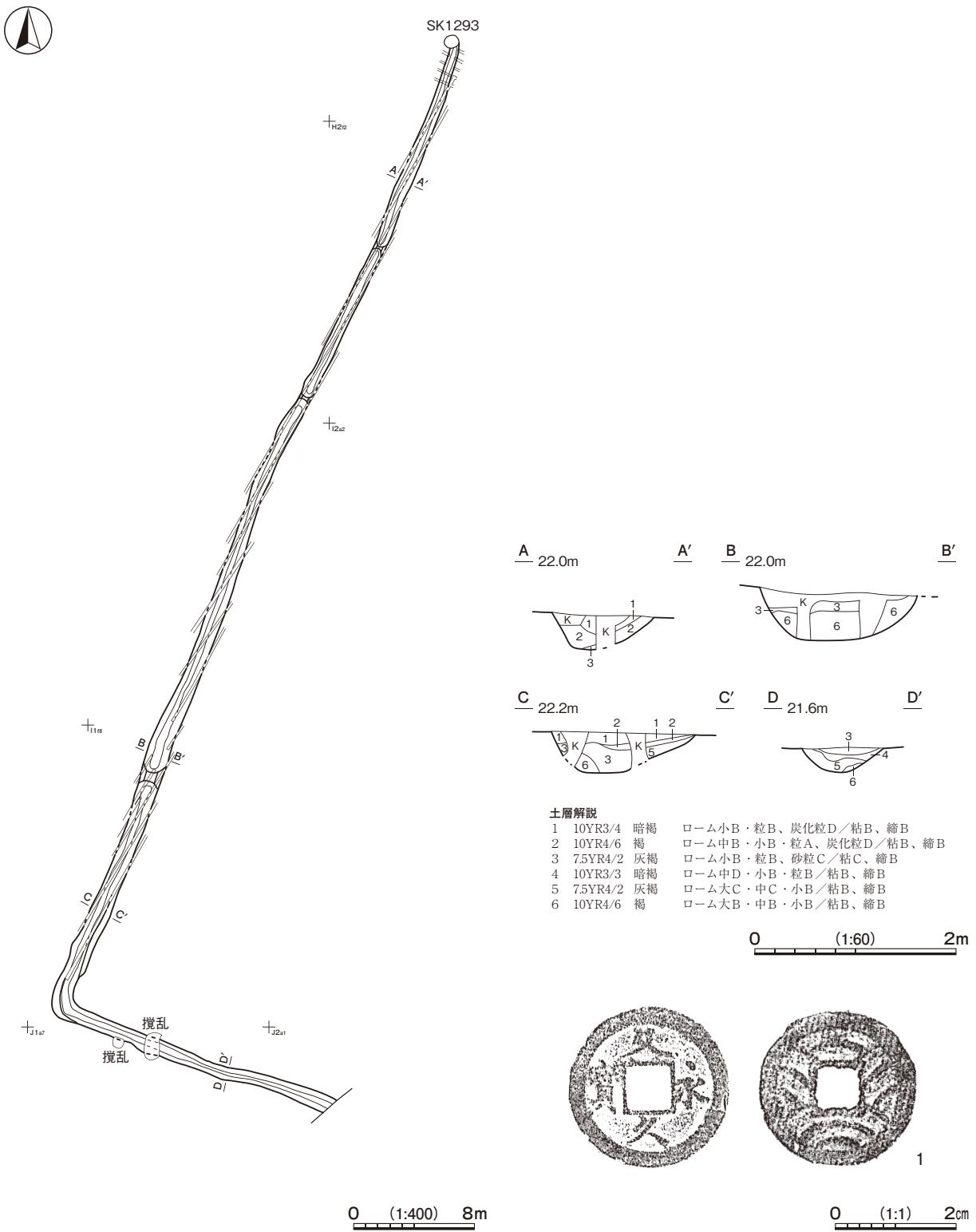
重複関係 第1293号土坑に掘り込まれ、第780・812・999号土坑、第4号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 H 2 d4区から南西方向（N - 23° - E）に直線状に68.7m延び、L字状に屈曲し南東方向（N - 70° - W）に調査区外まで19.7m延びている。規模は、上幅74～152cm、下幅16～78cm、深さ18～50cmで、断面はU字状である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は北側から南に向かって緩やかに傾斜している。

覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれる状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 磁器片7点（碗）、銭貨1点（文久永寶）が出土している。ほかに、混入した縄文土器片1725点（深鉢）、土師器片4点（壺2、甕2）、須恵器片1点（壺）、石器5点（磨石）が出土している。

所見 時期は、出土した銭貨から江戸時代以降と考えられる。



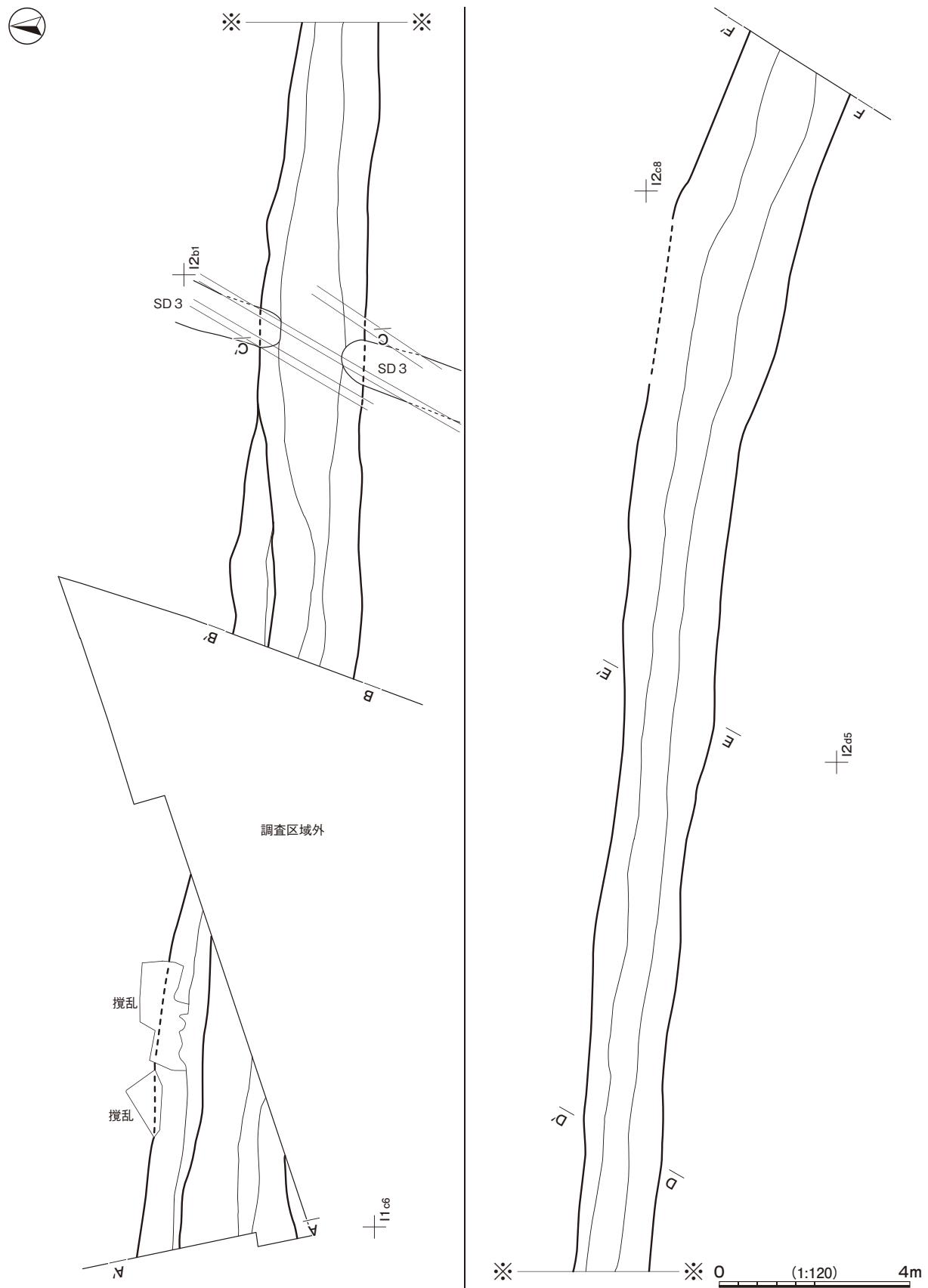
第388図 第3号溝跡・出土遺物実測図

第170表 第3号溝跡出土遺物一覧（第388図）

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
1	文久永寶	2.6	0.7	0.11	3.06	銅	文久三 (1863)	表面草書体 裏面青海波文	覆土	

第4号溝跡 (第389・390図 PL19)

位置 調査区南西部のI 1 b6区～南東部のI 2 c8区、標高約22mの台地上に位置している。



第389図 第4号溝跡実測図(1)

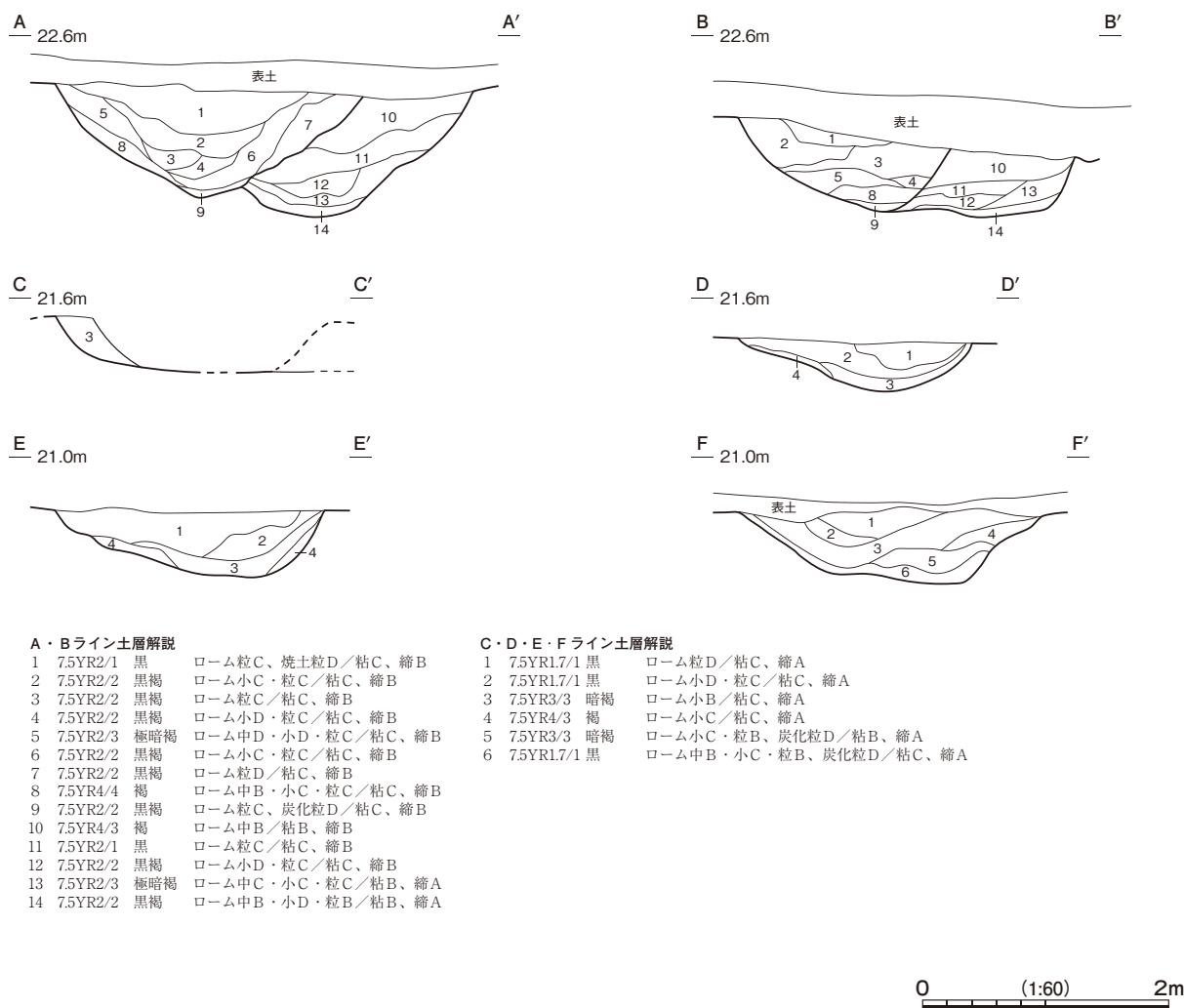
重複関係 第1255・1304・1312・1313・1327号土坑を掘り込み、第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 I 1a6 から I 2c8 区まで東西方向 (N - 82° - W) に、直線状に延びている。東西が調査区外に延びており、確認できた長さは 38.8 m である。規模は、上幅 160 ~ 336cm、下幅 40 ~ 138cm、深さ 38 ~ 98 cm で、断面形は U 字状である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は西側から東部に向かって緩やかに傾斜している。

覆土 14 層に分層できる。黒色土が周囲から流れ込んでいる状況から自然堆積である。覆土の状況から、本跡は、一度完全に埋没後、改めてほぼ同位置で掘り直されていると考えられる。

遺物出土状況 混入した縄文土器片 455 点 (深鉢)、陶器片 1 点 (碗)、石器 3 点 (磨石 2、敲石 1) が出土している。

所見 時期は、本跡に伴う遺物がないため、不明である。同一位置で掘り直されていることから、長期間にわたって機能していたと考えられる。また、規模や地形の等高線にほぼ沿って構築していることから、区画溝の可能性もある。



第390図 第4号溝跡実測図(2)

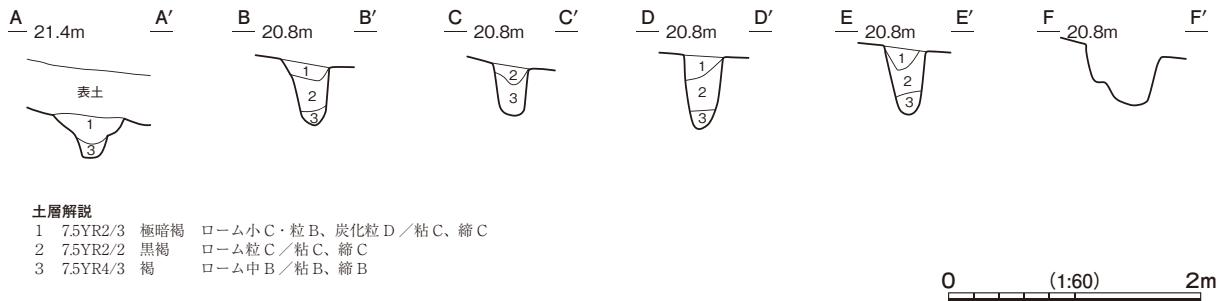
第5号溝跡 (第391図)

位置 調査区南西部のG 0c8～G 1g1区、標高約21mの台地上に位置している。

規模と形状 G 1g1区から北西方向 (N-43°-W) に、やや蛇行しながら伸びている。北側は調査区外まで伸びており、確認できた長さは22.4mである。上幅28～60cm、下幅12～24cm、深さ16～56cmで、断面形はU字状である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は北から南端部に向かって緩やかに下っている。

覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが含むことから、人為堆積である。

所見 時期は、不明である。



第391図 第5号溝跡実測図

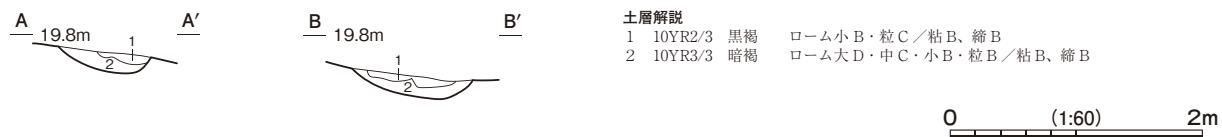
第6号溝跡 (第392図 PL19)

位置 調査区西部のH 2e7～H 3f1区、標高約20mほどの台地上に位置している。

規模と形状 H 2e7区から南西方向 (N-65°-W) に、直線状に伸びている。長さ13.1m、上幅56～96cm、下幅16～52cm、深さ16cmで、断面形は皿状である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は西から東に向かって緩やかに傾斜している。

覆土 2層に分層できる。黒色土が周囲から流入を示す堆積状況から自然堆積である。

所見 時期は、不明である。



第392図 第6号溝跡実測図

第171表 その他の溝跡一覧

番号	位置	方 向	平面形	規 模				断 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
2	J1g7～J1j6	N-25°-E	直線状	13.1	0.32～1.02	0.12～0.44	6～32	U字状	外傾	不明	-	
3	H2d4～J2b1	N-23°-E N-70°-W	L字状	68.7 (19.7)	0.74～1.52	0.16～0.78	18～50	U字状	外傾	人為	錢貨	SK780・812・999、SD 4→本跡→SK1293
4	I1b6～I2c8	N-82°-W	直線状	(38.8)	1.60～3.10	0.40～1.38	38～98	U字状	外傾	自然	-	SK1255・1304・1312・1313・1327→本跡→SD 3
5	G0c8～G1g1	N-43°-W	蛇行	(22.4)	0.28～0.60	0.12～0.24	16～56	U字状	ほぼ垂直	人為	-	
6	H2e7～H3f1	N-65°-W	直線状	13.1	0.56～0.96	0.16～0.52	16	皿状	外傾	自然	-	

(3) 柱穴列

第1号柱穴列 (第393図 第172表)

位置 調査区南西部のH 1 a8 から H 1 d6 区、標高約 22 m の台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長さ 16.58 m の間に配列された柱穴 13 か所を確認した。主軸方向は N - 34° - E である。柱間寸法は 0.78 ~ 2.24 m と不規則である。柱筋は揃っているが、P 12 と P 13 の間で 21° 東に振れる。

柱穴 13 か所。平面形は径 24 ~ 90 cm の円形または橢円形で、深さは 17 ~ 44 cm である。

遺物出土状況 混入した縄文土器片 4 点 (深鉢) が出土している。

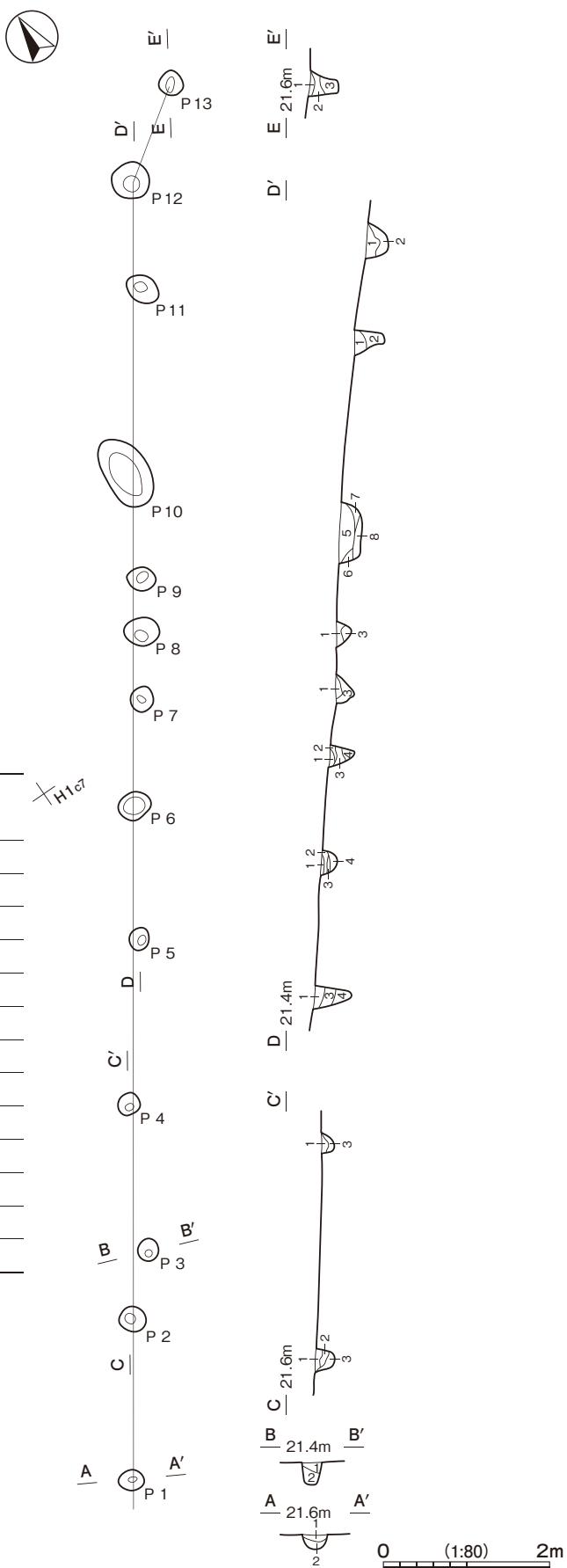
所見 時期は、不明である。

第172表 第1号柱穴列一覧

番号	位置	形状	規模		深さ (cm)	備考
			長径	短径		
1	H 1 d6	橢円形	30	25	18	-
2	H 1 d6	円形	32	32	24	-
3	H 1 d6	円形	28	27	25	-
4	H 1 c6	円形	28	26	16	-
5	H 1 c6	橢円形	29	24	44	-
6	H 1 c7	橢円形	40	34	21	-
7	H 1 b7	橢円形	32	29	27	-
8	H 1 b7	橢円形	44	34	24	-
9	H 1 b7	橢円形	34	29	12	-
10	H 1 b7	橢円形	90	42	32	-
11	H 1 a8	橢円形	42	30	35	-
12	H 1 a8	円形	46	44	27	-
13	H 1 a8	円形	30	30	34	-

ピット土層解説 (各ピット共通)

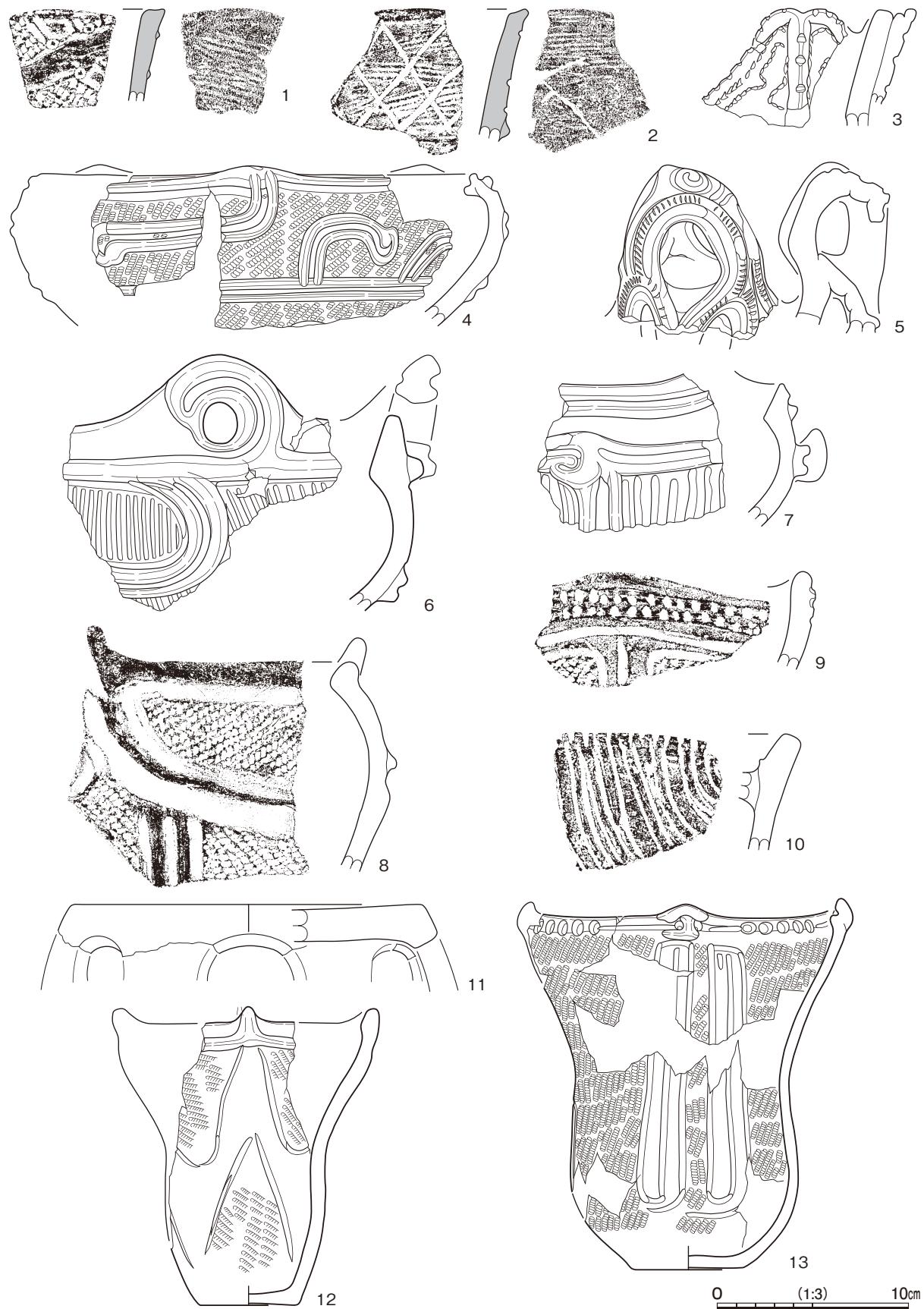
- 1 7.5YR4/3 褐 ローム小B・粒C／粘B、締B
- 2 7.5YR3/3 暗褐 ローム小C／粘B、締B
- 3 7.5YR4/4 褐 ローム小D・粒C／粘B、締B
- 4 7.5YR4/3 褐 ローム粒D／粘B、締B
- 5 7.5YR3/3 暗褐 ローム小C／粘C、締A
- 6 7.5YR3/3 暗褐 ローム粒C／粘B、締A
- 7 7.5YR4/4 褐 ローム小C／粘B、締A
- 8 7.5YR4/3 褐 ローム小C／粘B、締B



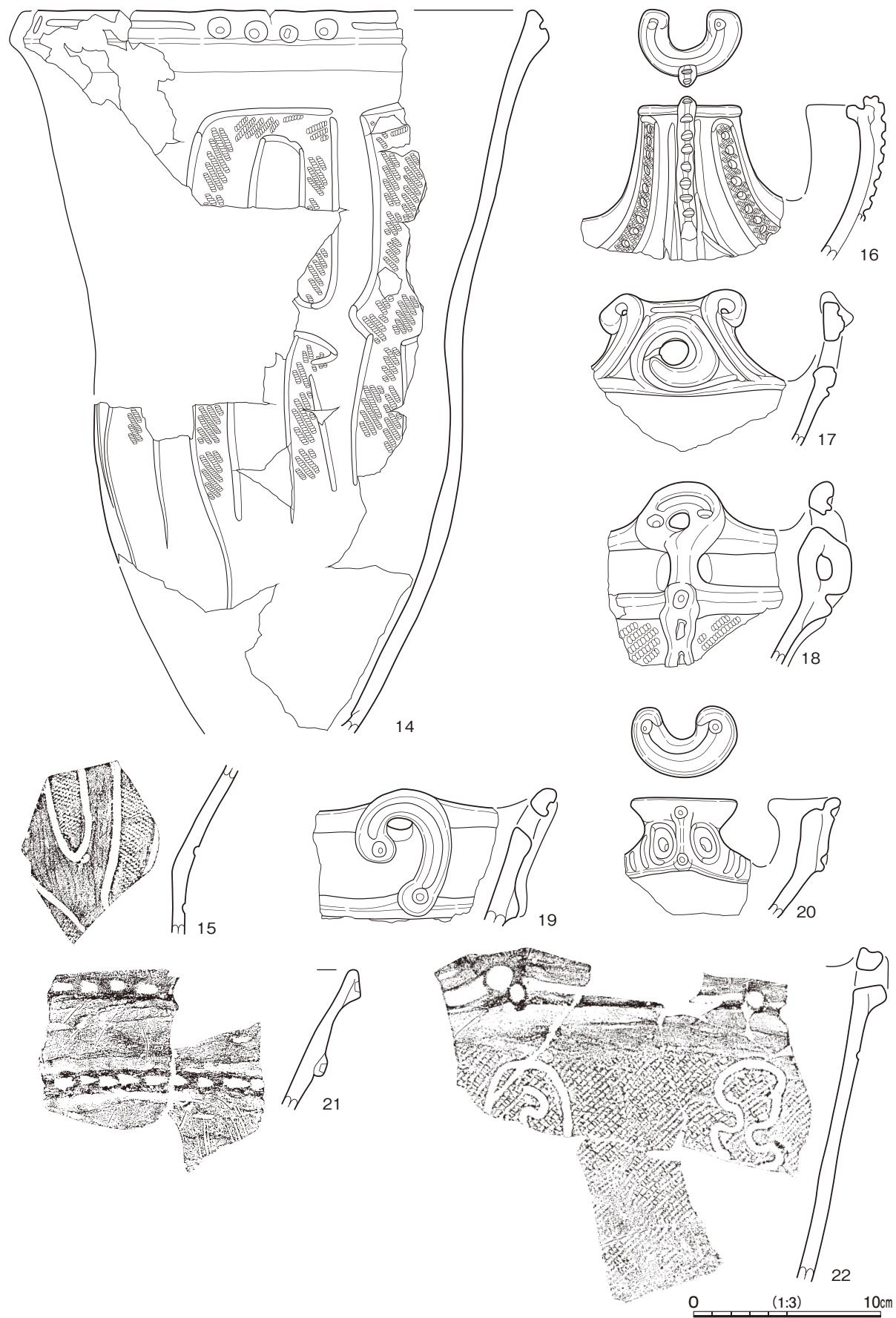
第393図 第1号柱穴列実測図

(4) 遺構外出土遺物

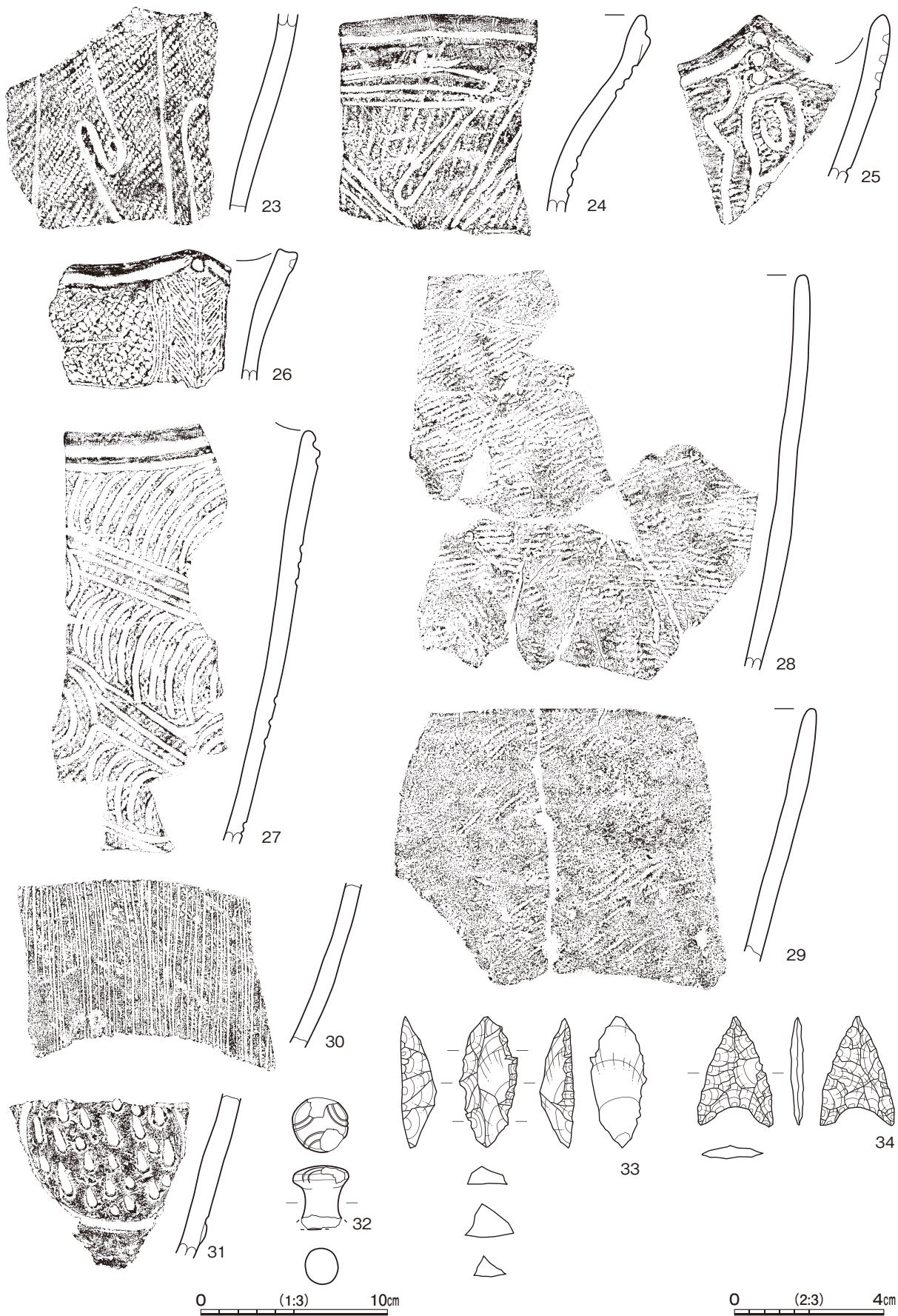
遺構に伴わない遺物や表土出土遺物のうち、特徴的なものについて、実測図と出土遺物一覧で記載する。



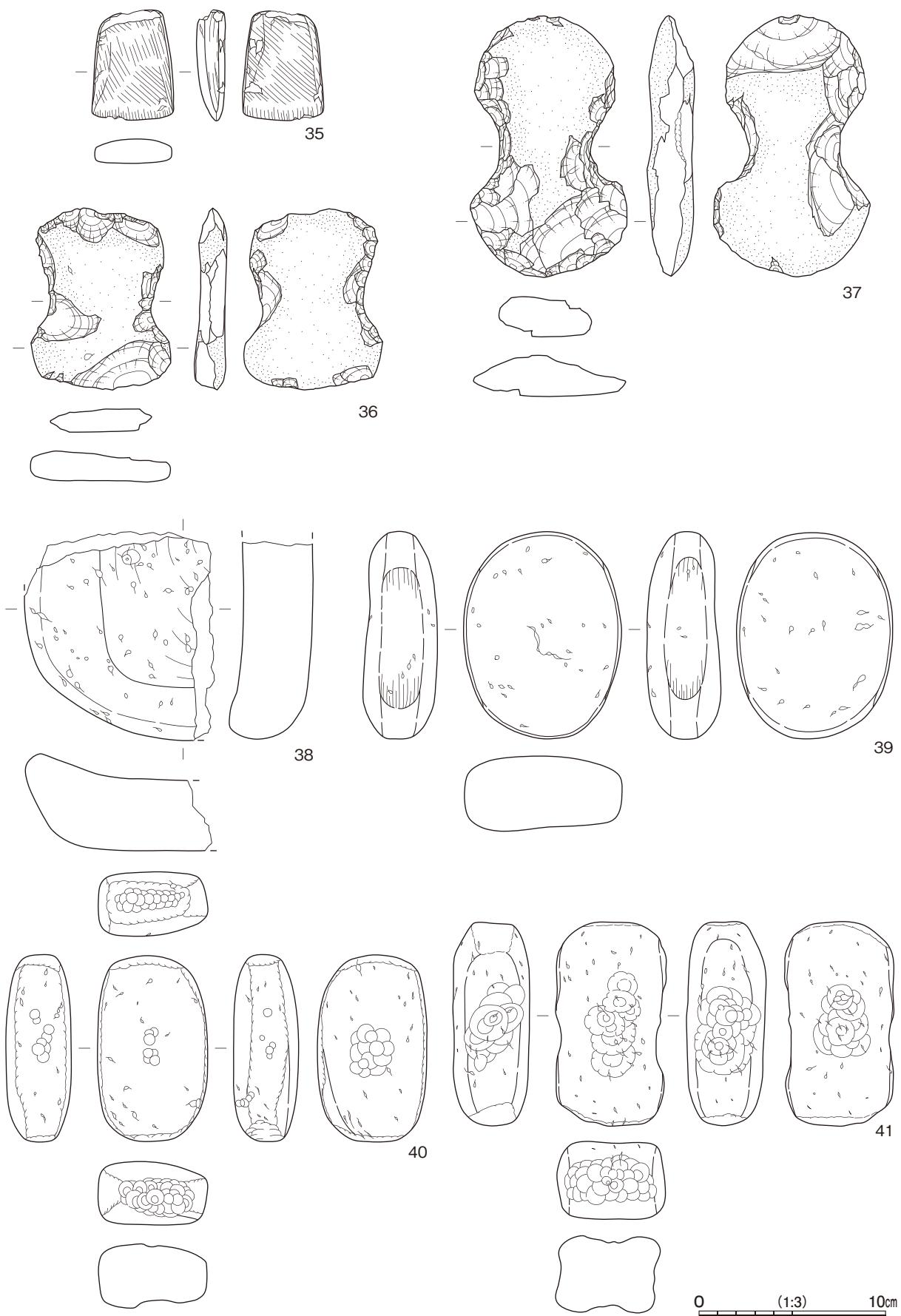
第394図 遺構外出土遺物実測図(1)



第395図 遺構外出土遺物実測図(2)



第396図 遺構外出土遺物実測図(3)



第397図 遺構外出土遺物実測図(4)

第173表 遺構外出土遺物一覧（第394～397図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	—	(4.8)	—	長石・石英・繊維	橙	普通	内外面地文条痕文 微隆帯による格子状文 微隆帯交点内形刺突文 連続刺突文充填	SK978	5% PL50
2	縄文土器	深鉢	—	(6.8)	—	長石・石英・繊維	にぶい黄橙	普通	内外面地文条痕文 微隆帯による格子状文 口縁部隆帯文	SD 3	5% PL50
3	縄文土器	深鉢	—	(6.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	双頭波状口縁 波頂部からキザミのある隆帯文 懸垂 隆帯に沿う有筋沈線文	SK1352	5%
4	縄文土器	深鉢	[22.4]	(8.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	小波状口縁 地文縦位 RL 単節縄文 口縁部下部2本一組の隆帯文 口縁部2本一組の隆帯によるし字状文	SI 54	15% PL50
5	縄文土器	深鉢	—	(9.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	把手上部環状・下部眼鏡状 頂部沈線による渦巻文 孔周縁背に沈線・キザミのある隆帯文	SK988	5% PL50
6	縄文土器	深鉢	—	(13.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	円孔のある環状把手 孔周縁・口縁部背に沈線のある隆帯文 縦位沈線文充填	SA 1	5% PL50
7	縄文土器	深鉢	—	(7.4)	—	長石・石英	にぶい黄褐	普通	波状口縁 口縁部背に沈線のある隆帯文・渦巻文 縦位沈線文充填	SK1218	5%
8	縄文土器	深鉢	—	(11.0)	—	長石・石英	にぶい黄橙	普通	小波状口縁 地文口縁部横位・胴部縦位 LR 単節縄文 沈線の沿う隆帯文 磨消懸垂文	表採	5% PL50
9	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	小波状口縁 口縁部沈線文・交互刺突文 地文縦位 RL 単節縄文 磨消懸垂文	表土	5%
10	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	長石・石英	明黄褐	普通	口縁部内面肥厚帯 半截竹管による平行沈線文	表土	5%
11	縄文土器	台形土器	[18.5]	(3.0)	—	長石・石英	にぶい褐	普通	台面平坦 脊部円孔	表土	20%
12	縄文土器	深鉢	[13.2]	15.5	5.3	長石・石英	にぶい黄橙	普通	小波状口縁 口縁部直下隆帯文 口縁部・胴部沈線による区画文 縦位 L無筋縄文充填	表土	30% PL50
13	縄文土器	深鉢	[16.3]	19.4	5.7	長石・石英	にぶい橙	普通	小波状口縁 地文縦位 LR 単節縄文 口唇部直下沈線文・円形刺突文 脊部沈線による区画文	SI 57	60% PL50
14	縄文土器	深鉢	[27.0]	(38.6)	—	長石・石英	橙	普通	口唇部直下沈線文・円形刺突文 脊部沈線による区画文 縦位 LR 単節縄文充填	表土	25% PL50
15	縄文土器	深鉢	—	(8.7)	—	長石・石英	にぶい黄橙	良好	沈線による区画文 縦位 L無筋縄文充填	表土	5%
16	縄文土器	深鉢	—	(8.8)	—	長石・石英	にぶい褐	良好	波状口縁 波頂部上面背に沈線のあるC字状貼付文 地文縦位 LR 単節縄文 沈線のある区画文 円形刺突文充填	SI 56	5% PL50
17	縄文土器	深鉢	—	(8.6)	—	長石・石英	にぶい橙	良好	双頭の波状口縁 波頂部直下円孔・沈線の沿う隆帯による緩い渦巻文 赤彩痕	SI 54	5% PL50
18	縄文土器	深鉢	—	(10.0)	—	長石・石英	にぶい橙	良好	波状口縁 波頂部直下円孔・端部に円形刺突のある沈線文・刺突のある隆帯文懸垂 脊部縦位 LR 単節縄文	SI 54	5% PL51
19	縄文土器	深鉢	—	(7.3)	—	長石・石英	にぶい赤褐	良好	波状口縁 波頂部直下円孔・端部に円形刺突のあるC字状貼付文	SK818	5% PL51
20	縄文土器	深鉢	—	(6.4)	—	長石・石英	にぶい橙	良好	波状口縁 波頂部上面背に沈線のあるC字状貼付文 沈線・円形刺突による眼鏡状文	SI 54	5% PL51
21	縄文土器	深鉢	—	(7.5)	—	長石・石英	にぶい橙	良好	口唇部直下・口縁下部刺突のある隆帯文 脊部櫛齒状工具による条線文	SI 54	10%
22	縄文土器	深鉢	—	(17.8)	—	長石・石英	橙	普通	小波状口縁 波頂部直下円孔 地文横位 LR 単節縄文 沈線による厥手文	SI 57	5%
23	縄文土器	深鉢	—	(10.4)	—	長石	橙	良好	地文縦位 LR 単節縄文 沈線によるS字状文	SI 51	5%
24	縄文土器	深鉢	—	(10.5)	—	長石・石英	にぶい黄橙	良好	口唇部直下沈線文 地文横位 L無筋縄文 沈線による斜行文	表土	5%
25	縄文土器	深鉢	—	(9.0)	—	長石・石英	橙	良好	波状口縁 地文横位 L無筋縄文 波頂部直下円形刺突文 沈線文懸垂	SI 51	5%
26	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	長石	にぶい褐	良好	小波状口縁 波頂部直下円孔 地文横位 LR 単節縄文 半截竹管による集合平行沈線文	SI 51	5%
27	縄文土器	深鉢	—	(22.1)	—	長石・石英	にぶい橙	良好	小波状口縁 地文横位 L無筋縄文 3本一組の沈線による区画文 沈線による弧状文充填	SI 51	5% PL51
28	縄文土器	深鉢	—	(21.1)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横位・胴部斜位 L無筋縄文	SI 57	10% PL51
29	縄文土器	深鉢	—	(13.5)	—	長石・石英	橙	普通	横位 LR 単節縄文	SI 50	10%
30	縄文土器	深鉢	—	(8.7)	—	長石・石英	にぶい黄橙	良好	櫛齒状工具による条線文	表採	5%
31	縄文土器	深鉢	—	(8.5)	—	長石・石英	灰黄褐	良好	沈線の沿う隆帯による区画文 刺突文充填	表採	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
32	耳飾り	3.4	3.0	2.9	(21.4)	長石・石英	にぶい黄橙	鼓形 半截竹管による弧状の平行沈線文	表採	80% PL51

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
33	角錐状石器	3.4	1.5	0.9	3.5	黒曜石	素材錐長剥片 左側縁背面腹側から急角度の連続した調整右側縁微細剝離痕	SK1055	100% PL50
34	石鎌	2.9	2.1	0.3	1.68	チャート	凹基無茎鎌	表土	100% PL51
35	磨製石斧	5.9	4.4	1.5	(69.5)	蛇紋岩	撥形 全面研磨	表土	95% PL51
36	打製石斧	9.6	7.5	1.7	161.8	凝灰岩	分銅形 素材扁平礫 周縁より剥離調整	撲乱	100%
37	打製石斧	14.0	8.5	2.6	326.8	安山岩	分銅形 素材扁平礫 周縁より剥離調整 中央部敲打による抉り込み・潰れ	撲乱	100%
38	石皿	(10.9)	(10.0)	5.3	(720.0)	安山岩	全面研磨・敲打整形 凸状縁部 研磨面皿状・平滑	表土	15% PL51
39	磨石	11.1	8.4	4.0	616.6	安山岩	全面研磨 両側縁磨痕	表土	100% PL51
40	凹石	10.0	5.9	3.4	359.8	安山岩	全面研磨 表面凹痕2か所 裏面凹痕2か所 上下端部・両側縁敲打痕	表土	100% PL51
41	凹石	10.9	5.0	4.1	367.3	安山岩	全面研磨 表・裏・両側縁凹痕 上下端部敲打痕	表採	100% PL51

第4節 総括

1 はじめに

島名境松遺跡は、平成12年度から当財団による調査が5回にわたり実施され、これまでに2冊（茨城県教育財団文化財調査報告第191・281集）の報告書を刊行している。今回の報告を含めて、総調査面積は42,342m²になる。当遺跡の範囲は、西から東へ開析された谷津に挟まれた舌状台地上の全域に展開している。調査範囲は、舌状台地の先端部に当たる平成15・16年度の調査区を除いて、その大部分が舌状台地の基部に当たる。表土除去後、中央部で北西から南東へ開析された埋没谷が確認された。その埋没谷によって台地は南北に大別できる。

これまでの調査の結果、当遺跡は旧石器時代から古墳時代にかけての集落跡で、主体は縄文時代と古墳時代であることが確認されている。主な遺構は、旧石器時代の石器集中地点1か所、縄文時代の竪穴建物跡108棟、土坑461基、炉跡24基、土器埋設遺構2基、土器焼成遺構1基、陥し穴14基、遺物包含層1か所、古墳時代の竪穴建物跡16棟、土坑1基、古墳1基である。

本節では、当遺跡における旧石器時代、縄文時代、古墳時代の様相を概観することで、総括としたい。

2 旧石器時代

近年、当遺跡が立地している谷田川上流域や隣接する西谷田川上流域、小貝川下流左岸域における調査で、旧石器時代の石器集中地点の確認が増加している。

谷田川上流域では、当遺跡の今回の調査で下総編年¹⁾Ⅱc～Ⅲa期併行に位置付けられる石器集中地点1か所を確認した。谷田川とその支流である蓮沼川が合流する左岸台地上の平北田遺跡²⁾でも、石器集中地点1か所が確認され、剥片37点が出土している。石器群の時期は、当遺跡と同じ下総編年Ⅱc期～Ⅲa期併行に位置付けられる。西谷田川上流域では、元宮本前山遺跡³⁾で1か所、下河原崎谷中台遺跡⁴⁾で2か所、元中北東藤四郎遺跡⁵⁾で1か所、上河原崎前山遺跡⁶⁾で1か所の石器集中地点が確認されている。元宮本前山遺跡では、石核や剥片など22点が出土している。下河原崎谷中台遺跡の石器集中地点2か所からは、石核、搔器、角錐状石器、石刃、二次加工のある剥片、剥片、碎片、礫など計264点が出土し、石器群の時期は、下総編年Ⅱb～Ⅱc期併行と考えられる。下河原崎谷中台遺跡では、さらに平成30年度と令和2年度の調査でも石器集中地点が8か所確認されている。元中北東藤四郎遺跡では、ナイフ形石器、楔形石器、搔器、剥片、碎片など計17点が出土している。上河原崎前山遺跡では、石核、ナイフ形石器、尖頭器、二次加工のある剥片、微細剥離痕のある剥片、剥片、碎片など計36点が出土している。元中北東藤四郎遺跡と上河原崎前山遺跡の石器群の時期は、いずれも下総編年Ⅱc期併行と考えられる。小貝川下流左岸域では、高須賀中台東遺跡⁷⁾で3か所の石器集中地点が確認され、ナイフ形石器、石刃、剥片など計37点が出土している。石器群の時期は、下総編年Ⅱb～Ⅱc期併行と考えられる。

これらの調査によって、谷田川上流域、西谷田川上流域、小貝川下流左岸域における後期旧石器時代（下総編年Ⅱb～Ⅲa期併行）の人々の活動がより鮮明になった。具体的には、下河原崎中谷台遺跡を除く、前述の各遺跡で確認された石器集中地点は1～3か所で、出土石器の点数も40点未満と少ない。いずれも小規模な石器製作跡と判断できる。時期は、下河原崎中谷台遺跡と高須賀中台東遺跡を除いて、下総編年Ⅱc～Ⅲa期併行で、主要石器はナイフ形石器や尖頭器などである。各流域の台地上で居住や狩猟活動、小規模

な石器製作を単発的に行っていいたと考えられる。下河原崎中谷台遺跡と高須賀中台東遺跡では、ナイフ形石器と角錐状石器を主体とした石器製作が行われている。時期は、下総編年Ⅱb～Ⅱc期併行で、両遺跡は直線で約2.5kmしか離れていない。高須賀中台東遺跡の石器集中地点は規模が小さく、一方の下河原崎中谷台遺跡の石器集中地点は規模が大きく、出土石器の点数も極めて多い。こうしたことから、各流域の台地上で居住や狩猟活動、小規模な石器製作を単発的に行っていいた場合と、地域の中心となる台地上で居住や狩猟活動、小規模な石器製作を繰り返し行っていた場合があると考えられる。旧石器時代の人々の居住や狩猟活動、石器製作などは、当然ながら時期や地域、集団の規模・性格などによって大きく変化していると考えられる。今後の研究の深化に期待したい。

3 縄文時代

(1) 土器の様相（第398～400図）

当遺跡の縄文時代の遺構からは、中期中葉の阿玉台Ⅰb式期から後期前葉の堀之内2式にかけての土器が出土している。ここでは、当遺跡の集落変遷を検討する基礎作業として、土器の時期区分と様相を整理する。

加曽利E式土器の編年については、埼玉県埋蔵文化財調査事業団による編年⁸⁾を援用するとともに、関東地方北東部の特徴を異系統土器の共存と捉え、型式組列を抽出して、その変遷と消長を追及している塚本師也氏の研究⁹⁾を基準とした。称名寺式土器の編年については、関東地方北東部の資料を集成し、称名寺Ⅰ式古段階（称名寺Ⅰa式）と併行関係にある加曽利E式系土器群の特徴を整理した江原英氏の研究¹⁰⁾を基準にした。

変遷については、Ⅰ期からⅣb期までの11期に分類した。

I期（阿玉台Ⅰb式期）

第401号土坑出土土器（第398図1）が良好な資料で、第40号竪穴建物跡出土遺物が該当する。阿玉台Ⅰb式土器の特徴は、単列の角押文を施すことである。

Ⅱa期（加曽利EⅠ式中段階期）

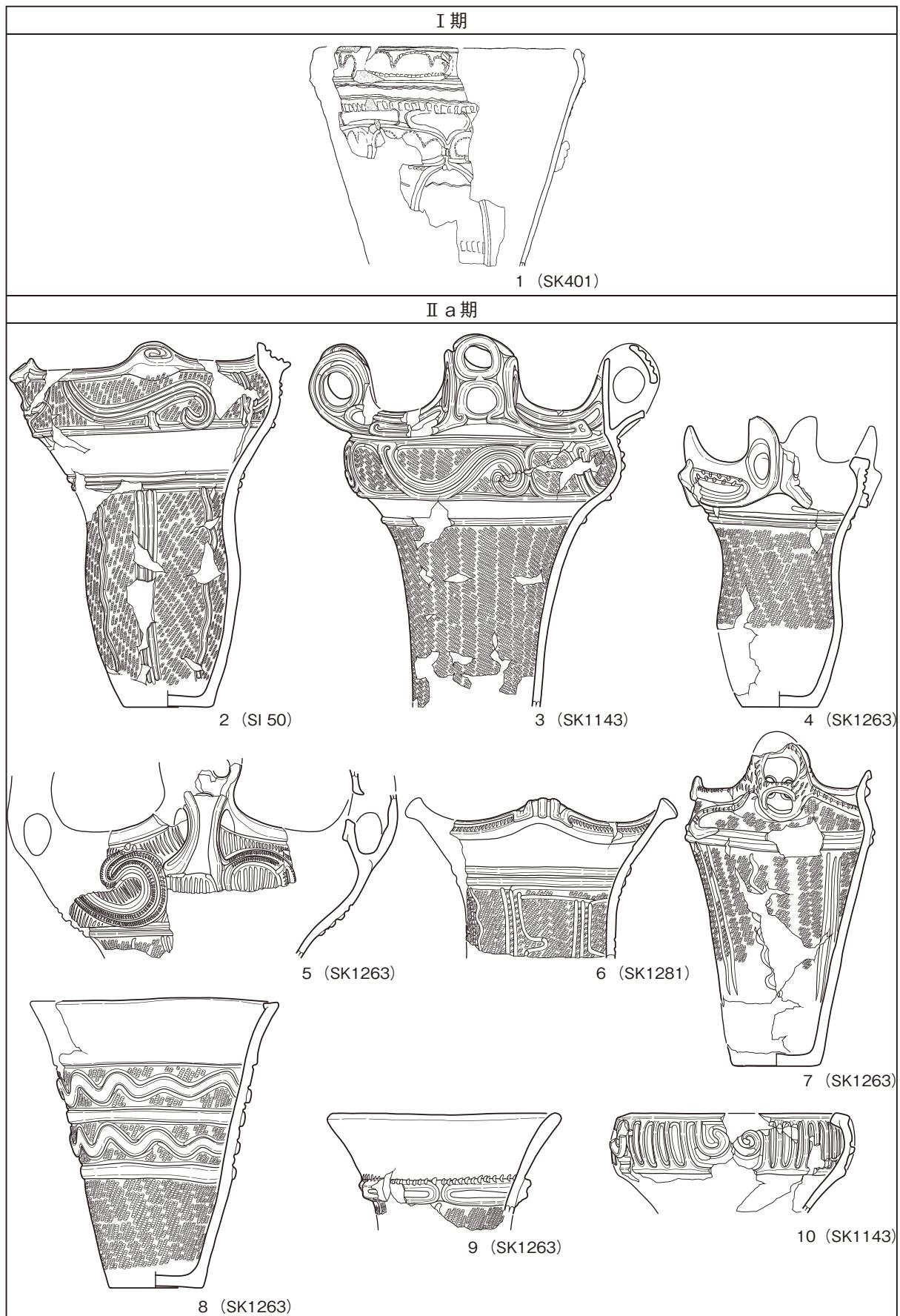
第50号竪穴建物跡出土土器、第1143・1263号土坑出土土器が良好な資料で、第50号竪穴建物跡、第784・1281号土坑出土遺物が該当する。当期の加曽利EⅠ式土器の特徴は、沈線の沿う隆帯により文様を施すことである。把手は、眼鏡状把手と箱状把手とともに、波頂部に渦巻文を施す小把手が主体となる。組成は、頸部無文帯を有し、口縁部に末端が閉じる2本一組の隆帯による横S字文を施すもの（第398図2・3）、交互刺突文を施すもの（第398図4）、口縁部に地文として縦位の集合沈線文を施す下総台地型（第398図5）、肥厚する口縁部に文様帯を持ち、頸部を無文とするもの¹¹⁾（第398図6）が主体となる。それらに、正面の上下に孔を配する中空把手を有し、口縁部にキザミのある隆帯により文様を施すもの（第398図7）、器形が筒形で、胴部に沈線の沿う隆帯による波状文を施すもの（第398図8）、良文B地点型（第398図9）、褶曲文土器（第398図10）が客体として加わる。

Ⅱb期（加曽利EⅠ式新段階期）

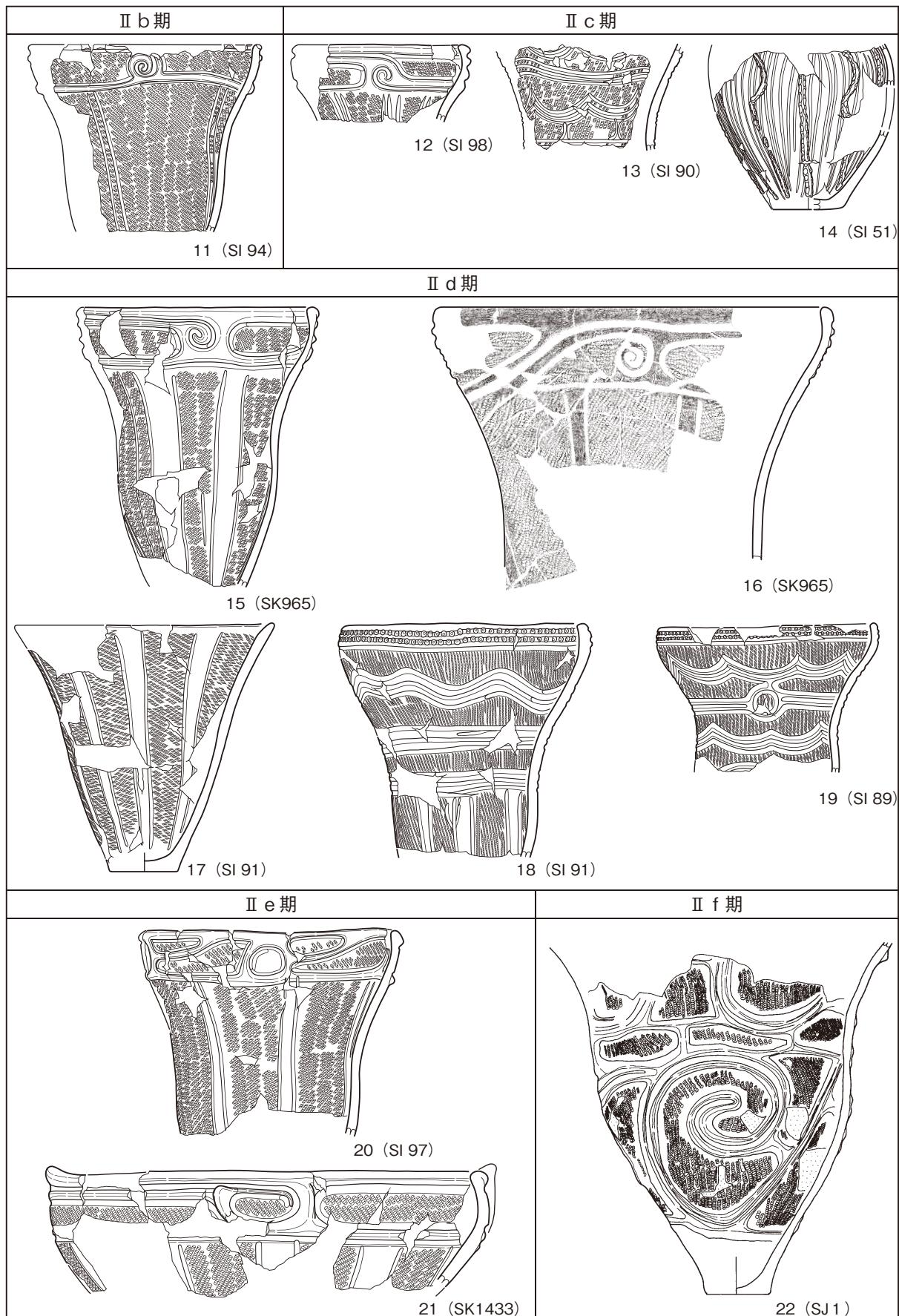
第94号竪穴建物跡出土土器が良好な資料である。当期の加曽利EⅠ式土器の特徴は、沈線の沿う隆帯による文様の端部が渦巻文になること、渦巻文が口縁部文様帯の高さまで大型化することである。

Ⅱc期（加曽利EⅡ式古段階期）

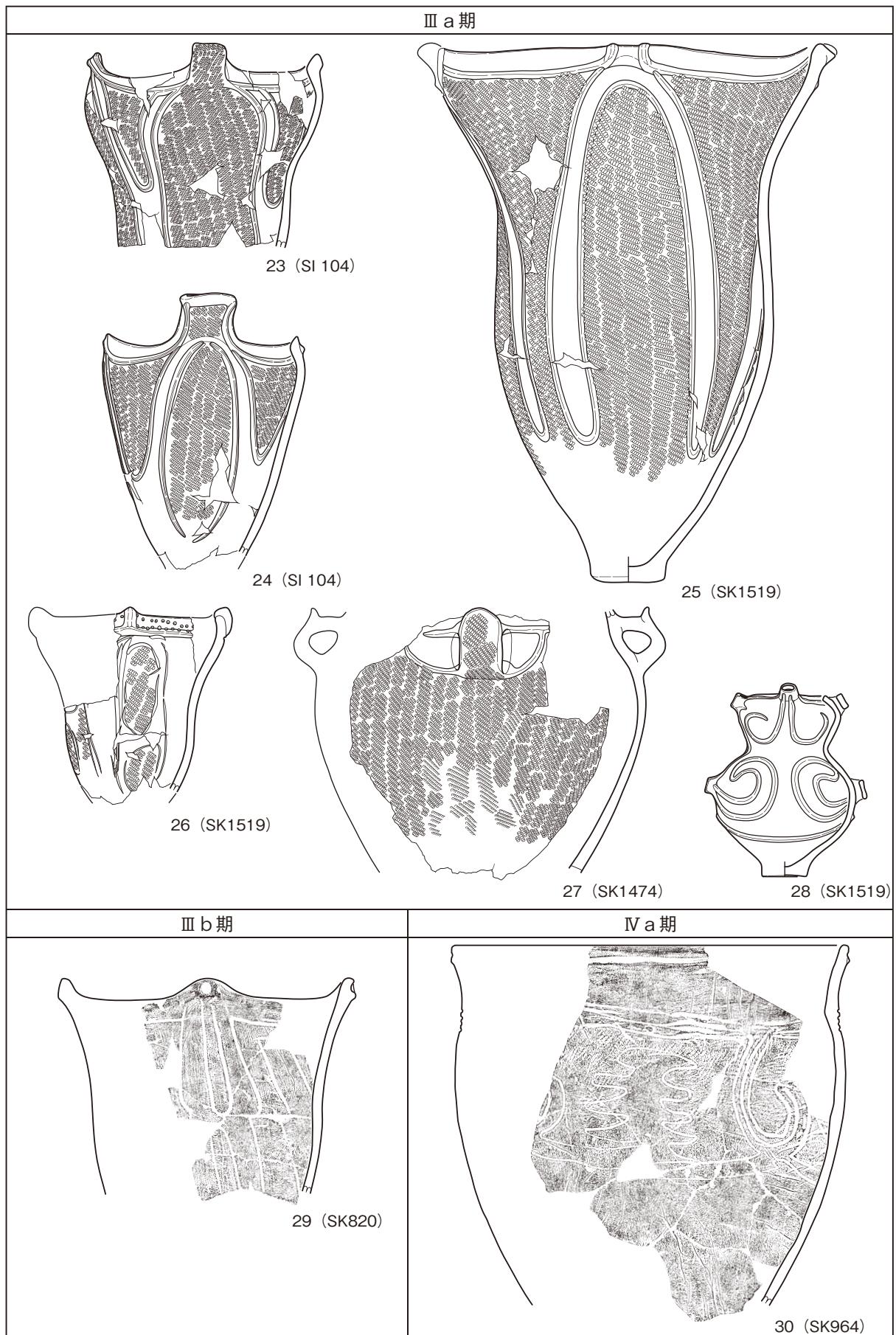
第90・98号竪穴建物跡出土土器が良好な資料で、第51号竪穴建物跡出土遺物が該当する。当期の加曾



第398図 繩文時代中・後期時期別出土土器(1)



第399図 繩文時代中・後期時期別出土土器(2)



第 400 図 繩文時代中・後期時期別出土土器(3)

利E II式土器の特徴は、口縁部の渦巻文に隣接する文様が区画文になること、胴部に幅の狭い磨消懸垂文を施すことである。組成は、連弧文土器（第399図13）と曾利式系土器（第399図14）が客体として加わる。当期の連弧文土器（第399図13）の沈線間は、磨り消していない。

II d期（加曾利E II式新段階期）

第965号土坑出土土器、第89・91号竪穴建物跡出土土器が良好な資料である。当期の加曾利E II式土器の特徴は、胴部に幅の広い磨消懸垂文を施すことである。組成は、口縁部文様帯のないもの（第399図17）と曾利式系土器が客体として共判するが、連弧文土器（第399図18・19）は前段階より増加して最盛期を迎える。当期の連弧文土器は、沈線間を磨り消すことが特徴になる。地文は、一段の縄が主流であるが、二段の縄を用いるもの（第399図19）がわずかにみられる。

II e期（加曾利E III式古段階期）

第97号竪穴建物跡出土土器、第1433号土坑出土土器が良好な資料である。当期の加曾利E III式土器の特徴は、口縁部の渦巻文が緩い渦巻となり区画文化すること、胴部に幅の広い磨消懸垂文を施すことである。口縁部の主文様は、緩い渦巻文（第399図21）と円文（第399図20）がある。連弧文土器と曾利式系土器は、さらに在地化して、いずれも減少する。

II f期（加曾利E III式新段階期）

第1号土器埋設遺構出土土器（第399図22）、第124号竪穴建物跡出土土器、第746号土坑出土土器が良好な資料である。当期の加曾利E III式土器の特徴は、隆帯により文様を施すものと、沈線文により文様を施すものに大別されること、隆帯により文様を施すものは、隆帯が幅広で低くなり、胴部に端部が閉じる2本一組の隆帯により大振りの渦巻文を施すもの（第399図22）が主体になることである。

III a期（称名寺I式期）

第104号竪穴建物跡出土土器（第400図23・24）、第1474・1519号土坑出土土器が良好な資料である。当期は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団¹²⁾によるXIV期直後の称名寺式第1段階、江原英氏¹³⁾による称名寺式古段階（称名寺I a式）が主体を占める。第42・67号竪穴建物跡と第1131・1288号土坑出土土器については、江原氏による称名寺式中段階（称名寺I b式）に相当する可能性があるが、破片資料であるため、一段階として独立させるには蓋然性が低い。当期は、以上のことから、称名寺式古段階（称名寺I a式）と称名寺式中段階（称名寺I b式）を併せて称名寺I式期とした。器種組成は、深鉢、両耳壺、注口土器で、深鉢は波状口縁を呈するものが多い。深鉢の波頂部下の文様は、口唇部直下の微隆帯と連結した逆U字状文（第400図23）、口唇部直下の微隆帯から遊離した長楕円形文（第400図24・26）、口唇部直下の微隆帯から遊離し、胴部下部で隣接する区画文と連結した逆U字状文（第400図25）に大別できる。

III b期（称名寺II式期）

第820号土坑出土土器（第400図29）が良好な資料で、第764号土坑出土遺物が該当する。器種組成は、深鉢、鉢、釣手土器で、深鉢の特徴は区画文内に列点文や条線文を充填することである。

IV a期（堀之内1式期）

第964号土坑出土土器（第400図30）が良好な資料で、第49号竪穴建物跡出土遺物が該当する。第964号土坑からは、胴部に逆J字文と蛇行懸垂文を施す深鉢とともに、縄文を地文とする粗製深鉢片が大量に出土している。

IV b期（堀之内2式期）

第52号竪穴建物跡出土遺物が該当する。深鉢の特徴は口縁部に8の字状貼付文を施すことである。

(2) 集落の様相 (第 401 ~ 404 図)

土器の様相から分類した時期区分に従い、各期の様相を概観する。各期の遺構は、時期区分に該当するもののみを抽出し、時間幅があるものは除外した。平成 15・16 年度調査区で確認された遺構は、集落変遷図の範囲外である舌状台地先端部に位置し、I 期・IV b 期に該当する遺構は数が少ないので、いずれも集落変遷図に掲載していない。

I 期 (阿玉台 I b 式期)

縄文時代集落の黎明期で、第 40 号竪穴建物跡と第 401 号土坑が該当する。両遺構は、調査区の北東部に当たる平成 12 年度調査区に分布している。

II a 期 (加曾利 E I 式中段階期)

第 50・55 号竪穴建物跡、第 784・999・1060・1143・1144・1263・1281 号土坑が該当し、I 期から一転



第 401 図 縄文時代中・後期の集落変遷図(1)

して埋没谷南側の台地縁辺部に集落が形成される。第 55 号竪穴建物跡と第 784・999・1060・1143・1144 号土坑は南部に群を形成し、1263・1281 号土坑は北部に位置している。

II b 期 (加曽利 E I 式新段階期)

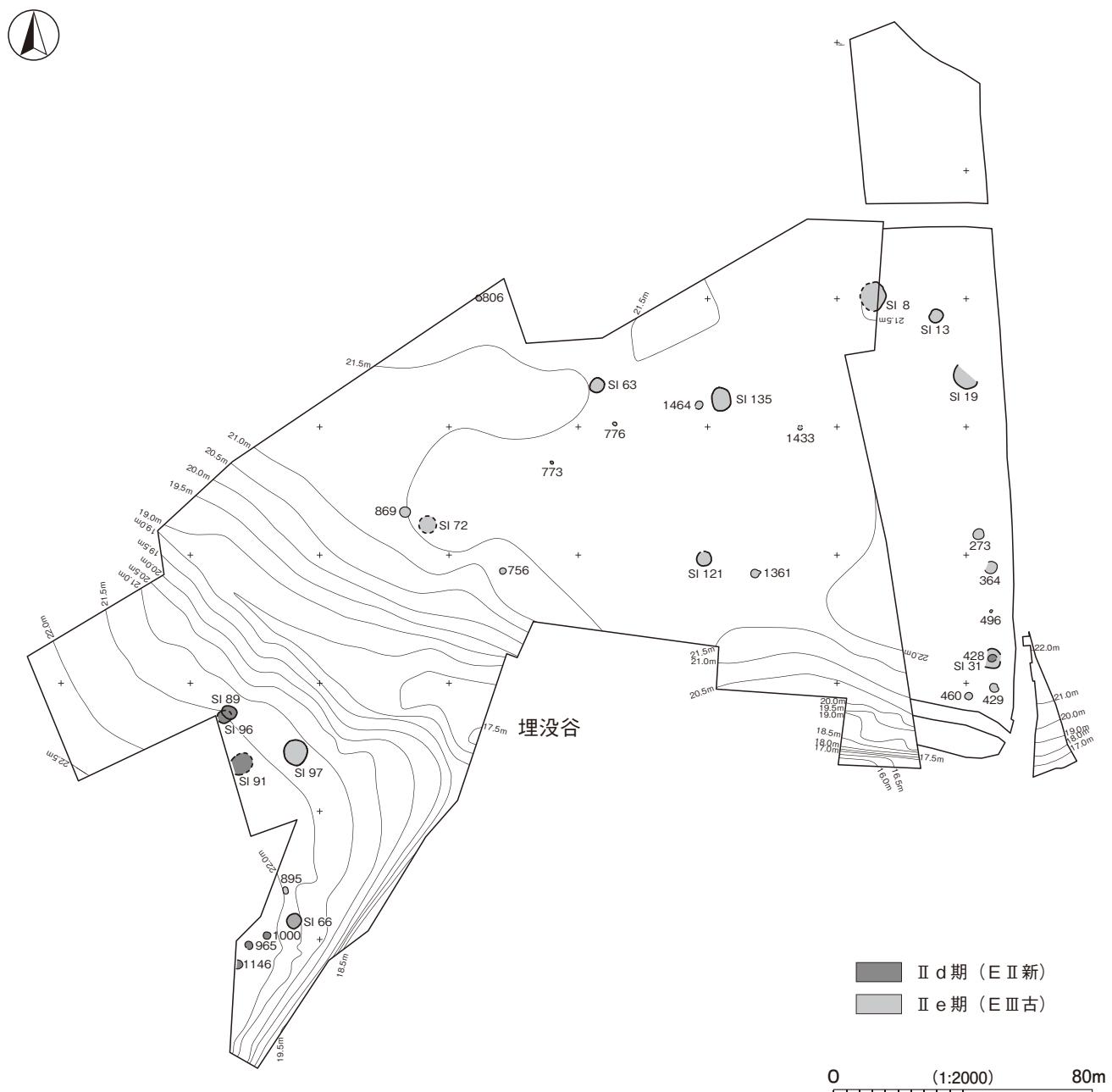
第 94 号竪穴建物跡が該当し、埋没谷南側の台地縁辺部に単独で位置している。

II c 期 (加曽利 E II 式古段階期)

第 51・90・98 号竪穴建物跡が該当し、埋没谷南側の台地縁辺部に継続して展開する。第 51 号竪穴建物跡が南部に位置し、第 90・98 号竪穴建物跡が北部に近接して位置している。

II d 期 (加曽利 E II 式新段階期)

第 89・91・96 号竪穴建物跡、第 428・773・965・1000・1146 号土坑が該当する。第 428・773 号土坑だけが埋没谷北側に分布し、それ以外の竪穴建物跡と土坑は埋没谷南側に継続して展開する。



Ⅱ e 期 (加曾利 E Ⅲ式古段階期)

第8・13・19・31・63・66・72・97・121・135号竪穴建物跡、第273・364・429・460・496・756・776・806・869・895・1361・1433・1464号土坑が該当し、遺構数が増加する。第97号竪穴建物跡と第895号土坑だけが埋没谷南側に所在し、それ以外の竪穴建物跡と土坑は埋没谷北側に展開する。

II f 期 (加曾利 E Ⅲ式新段階期)

当遺跡の縄文時代集落の最盛期で、第1・3・4・7・11・18・20・21・30・34・47・56・115・116・118・122～124・127・128号竪穴建物跡、第746・883・1429・1476号土坑が該当する。第56号竪穴建物跡が埋没谷南側に、第746号土坑が集落変遷図の範囲外である舌状台地先端部の平成15・16年度調査区に所在する以外、竪穴建物跡と土坑は埋没谷北側に展開している。竪穴建物跡にまとまりはなく、竪穴建物跡数に対して同時期の土坑数は少ない。第115号竪穴建物跡は、炉の覆土から、石核1点、2次加工



第403図 繩文時代中・後期の集落変遷図(3)

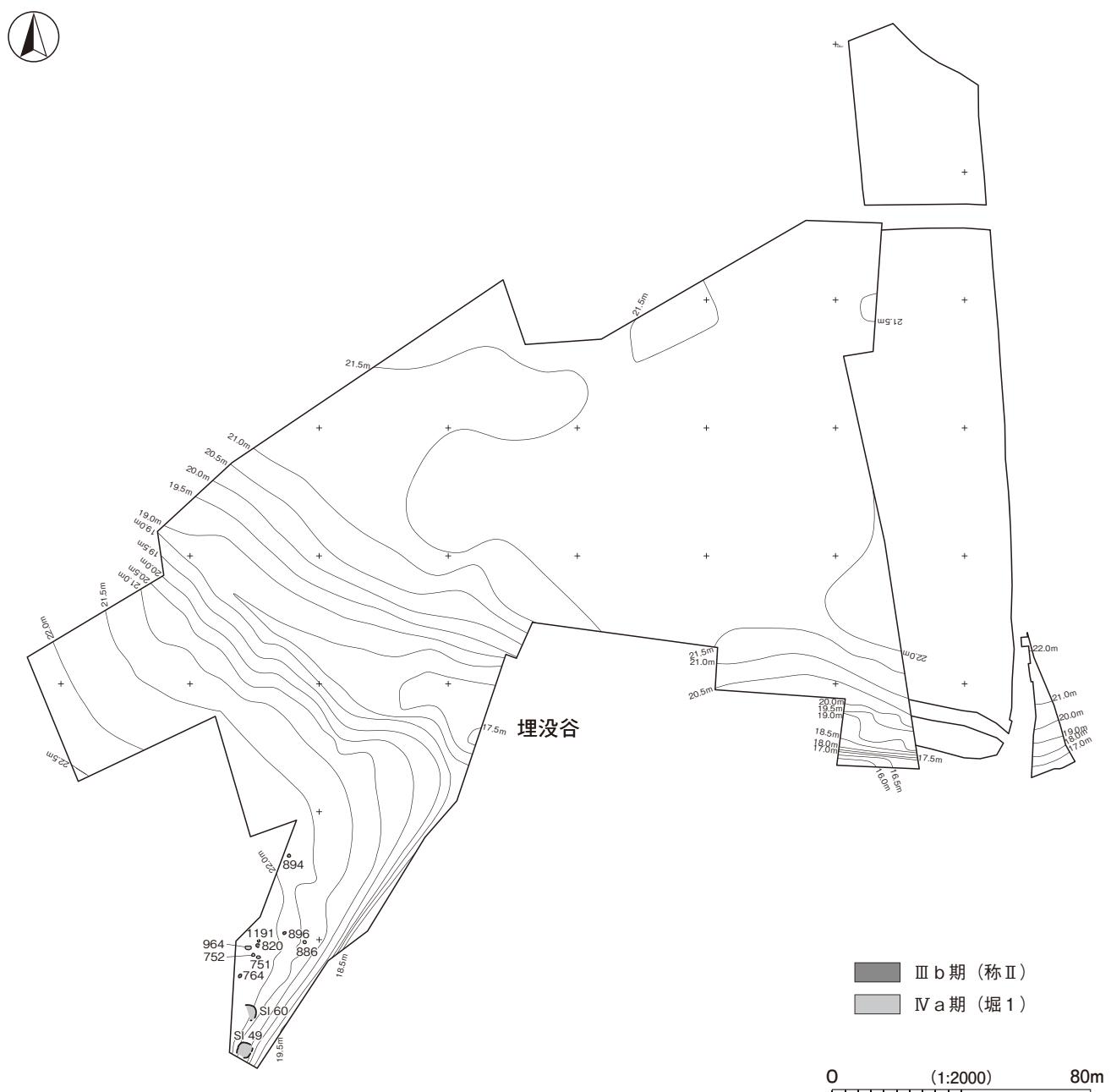
のある剥片 1 点、剥片 26 点、碎片 252 点が出土しており、石器製作が行われた可能性がある。

III a 期 (称名寺 I 式期)

前時期とともに縄文時代集落の最盛期で、第 23・25～27・29・35・36・42・67・104 号竪穴建物跡、第 333・445・535・537・601・606・654・664・676・700・877・1131・1288・1351・1368・1393・1474・1519 号土坑が該当する。67 号竪穴建物跡が埋没谷南側に分布し、第 41・42 号竪穴建物跡が集落変遷図の範囲外である舌状台地先端部の平成 15・16 年度調査区に所在する以外、竪穴建物跡と土坑は埋没谷北側に分布している。

III b 期 (称名寺 II 式期)

第 764・820・896・1191 号土坑が該当し、III a 期から一転して再び埋没谷南側の台地縁辺部に遺構が形成される。



第 404 図 縄文時代中・後期の集落変遷図(4)

IV a 期（堀之内 1 式期）

第 45・49・60 号竪穴建物跡、第 751・752・886・894・964 号土坑が該当し、第 45 号竪穴建物跡が集落変遷図の範囲外である舌状台地先端部の平成 15・16 年度調査区に所在する以外、集落は埋没谷南側の台地縁辺部に形成される。

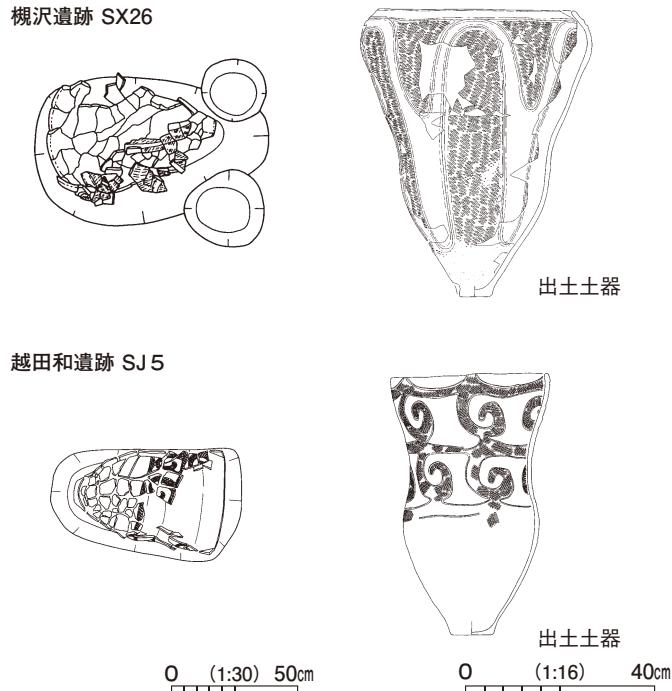
IV b 期（堀之内 2 式期）

第 52 号竪穴建物跡が該当し、埋没谷南側の台地縁辺部に遺構が形成され、集落はその後に終焉を迎える。

(3) 第 1519 号土坑について（第 405 図）

第 1519 号土坑の覆土下層から、大型深鉢と注口土器が口縁部を南に向けた斜位の状態で出土している。時期は、後期初頭（称名寺 I 式期）である。大型深鉢内の堆積土からは、植物遺体が検出され、炭化種実がクリとオニグルミ、炭化材がクリと同定されている。その特異な出土状況について、若干の検討を加える。

太田圭氏は、中期末葉から後期前葉に深鉢を横位で埋設する遺構を屋外横位土器埋設遺構と命名して、東関東から東北中部太平洋側の地域に分布していると述べられている¹⁴⁾。その好例は、楢沢遺跡の SX26¹⁵⁾ と越田和遺跡の第 5 号土器埋設遺構¹⁶⁾ である。どちらも土坑部分の掘方は、土器の法量に応じた大きさであり、第 1519 号土坑とは相違がある。なお、常陸大宮市の滝ノ上遺跡¹⁷⁾ の報告によると、袋状土坑が貯蔵穴としての機能を停止した後に墓などへ転用しており、こうした報告例が増加している。第 1519 号土坑の調査では、大型深鉢と注口土器を埋設したものなのか、あるいは埋納したものなのか判断できなかった。太田氏による屋外横位土器埋設遺構との類似点と相違点もあり、今後の調査事例などの増加を待ちたい。



第 405 図 屋外横位土器埋設遺構・出土遺物

4 古墳時代

(1) 土器の様相（第 406 図）

当遺跡の古墳時代の遺構からは、前期後葉（4 世紀後葉）から後期中葉（6 世紀中葉）にかけての土器が出土している。ここでは、当遺跡の集落変遷を検討する基礎作業として、土器の時期区分と様相を整理する。

前期土器については、谷仲俊雄氏ほかによる茨城県考古学協会シンポジウム編年¹⁸⁾ を、中期土器については、樋村宣行氏ほかによる編年¹⁹⁾ を、後期土器については、樋村宣行氏による編年²⁰⁾ と吹野富美夫による編年²¹⁾ を基準にした。

変遷については、V 期から VII b 期までの 5 期に分類した。

V期		
VIa期		
VIb期		
VIIa期		
VIIb期		

第406図 古墳時代時期別出土土器

V期（4世紀後葉）

土師器は、甕が出土している。甕（第406図1）は、体部と口縁部内面がハケ目調整で、口縁部外面がハケ目調整後、上位がナデられている。類例は、島名熊の山遺跡第2926号竪穴建物跡出土遺物²²⁾で、柱状脚高坏が出土していることから、茨城県考古学協会シンポジウム編年のⅢ期に相当する。

VIa期（5世紀前葉）

土師器は、高坏と壺が出土している。高坏は、坏部下端の稜が明瞭で、脚部がエンタシス状に膨らみ、裾部がハの字形に開く。壺は、口縁部内外面にハケ目調整が残る。

VIb期（5世紀中葉）

土師器は、壺・高坏が主体で、甕が伴う。壺は平底で、口径と体部径が等しいものが主体となる。高坏は、坏部下端の稜が弱くなり、脚部のエンタシス状の膨らみが不明瞭になる。甕は、口縁部内外面にハケ目調整を施すものが依然として残り、口縁部の断面形がコの字状のもの（第406図6）が加わる。

VIIa期（6世紀前葉）

土師器は、坏が主体で、甕・壺が伴う。坏は、口縁部と体部の境に稜があり、口縁部が外反するもの（第406図7 以下A類と呼ぶ）と口縁部と体部の境に段があり、口縁部が内傾するもの（第406図8 以下B類と呼ぶ）に分けられる。坏は、A類が主体で、赤彩され、B類が客体で、本期がB類の出現期となる。甕は、口縁部の断面形がコの字状を呈し、体部がヘラ削り後に、ヘラ磨きを施している。壺（第406図10）は、口縁部が緩く外反し、体部に膨らみがある。須恵器は、陶邑編年²³⁾のMT15型式期の高坏（第406図9）が共伴する。

VIIb期（6世紀中葉）

土師器は、坏が主体で、甕・壺が伴う。坏は、B類がA類を凌駕し、口縁部と体部の境に稜があり、口縁部が内湾するものが加わる。坏に黒色処理が出現し、黒色処理が赤彩を凌駕する。甕は、口縁部のコの字状の断面が緩やかになり、体部が長胴化する。壺（第406図14）は、口縁部の外反が強くなり、体部が長胴化する。

(2) 集落と古墳の様相（第407・408図）

土器の様相から分類した時期区分に第1号墳の時期としてⅢ期を加え、各期の様相を概観する。

V期（4世紀後葉）

古墳時代集落の黎明期で、第48号竪穴建物跡と第888号土坑が該当する。両遺構は、埋没谷北側の台地縁辺部に位置している。

VIa期（5世紀前葉）

第53号竪穴建物跡が該当する。埋没谷北側の台地縁辺部に単独で位置し、上屋が焼失している。

VIb期（5世紀中葉）

第46・68・71・112号竪穴建物跡が該当する。いずれも埋没谷北側の台地縁辺部に位置し、中央部で第46・112号竪穴建物跡が、西部で第68・71号竪穴建物跡が、それぞれ近接している。竪穴建物跡の面積は、平均が27.54m²で、大型のもの（SI46）、中型のもの（SI71・112）、炉がなく小型のもの（SI68）に分けられる。第46・71号竪穴建物跡は、どちらも上屋が焼失している。

VIIa期（6世紀前葉）

第12・114号竪穴建物跡が該当し、どちらも埋没谷北側の台地上に位置し、第12号竪穴建物跡が北東部、

第114号竪穴建物跡が中央部東寄りである。竪穴建物跡の面積は、平均が36.41m²で、前時期より大型になる。竪穴は、北壁中央部に位置し、煙道の壁外への掘り込みが浅い初期竪穴である。第12・114号竪穴建物跡は、どちらも上屋が焼失している。

VIIb期（6世紀中葉）

古墳時代集落の最盛期で、第14・17・22・28・113号竪穴建物跡が該当する。いずれも埋没谷北側の台地上で東部に位置している。竪穴建物跡の面積は、平均が33.45m²で、大型のものが大半を占める。竪穴は、第113号竪穴建物跡が東壁中央に位置している以外は、北壁中央に位置している。いずれの竪穴建物跡も、上屋が焼失している。古墳時代集落は、本期を最後に終焉を迎える。

VIII期（7世紀後葉）

第1号墳が該当する。墳丘規模は、東西13.21m、南北15.80mで、墳形は方墳である。周溝は南辺西部が途切れており、南辺中央部に墓道がある。埋葬施設は、前室を設けた複室構造の石棺系石室である。類例は、下河原崎高山古墳群第18号墳²⁴⁾で、同時期に位置付けられる。



第407図 古墳時代の集落・古墳変遷図(1)



第408図 古墳時代の集落・古墳変遷図(2)

5 おわりに

当遺跡における旧石器時代、縄文時代、古墳時代の様相を概観した。

縄文時代の集落跡については、当遺跡の一部を調査したにすぎないため、全容を把握することは困難である。遺構は調査区域外にも広がり、舌状台地の全域に及ぶことが考えられる。特に、西側は、隣接して島名タカドロ遺跡が位置しており、当遺跡と同一遺跡となる可能性がある。また、当遺跡の南側の谷津を隔てた台地上には、拠点的集落跡である谷田部陣場西遺跡が立地している。今後は、当遺跡の周辺遺跡、特に谷田部陣場西遺跡との関係を究明していくことが必要である。

古墳時代の集落跡については、VIIb期（5世紀中葉）が断面コの字状甕の出現期、VIIb期（6世紀中葉）が壙の黒色処理の出現期で、どちらも竪穴建物跡数が増加する時期となることから、画期となる。茨城県南

部の中期集落跡については、根本佑氏ほかによれば、河川流域ごとに小地域に分けられ、その小地域ごとに消長が確認されている²⁵⁾。谷田川上流域の大規模な後期集落跡である島名熊の山遺跡は、清水哲氏によつて集落構造と変遷が解明されている²⁶⁾。当地域における中・後期の集落研究については、島名熊の山遺跡を含めた分析が今後の課題である。

今回の報告が、縄文時代と古墳時代の集落研究の一助になれば幸いである。

註

- 1) 橋本勝雄 2002年 「茨城県における旧石器時代の編年」『茨城県における旧石器時代研究の到達点－その現状と課題－』 発表要旨・資料集 茨城県考古学協会
- 2) 舟橋理 2011年 『平北田遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書』 茨城県教育財団文化財調査報告第336集
- 3) 高野裕璽 2006年 『元宮本前山遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2』 茨城県教育財団文化財調査報告第265集
- 4) 高野裕璽 2007年 『下河原崎谷中台遺跡 島名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3』 茨城県教育財団文化財調査報告第282集
- 5) 坂本勝彦 清水哲 2023年 『元中北東篠四郎遺跡 上河原崎前山遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書7』 茨城県教育財団文化財調査報告第469集
- 6) 註5) と同じ
- 7) 坂本勝彦 2014年 『高須賀中台東遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書』 茨城県教育財団文化財調査報告第382集
- 8) 谷井彪 宮崎朝雄 大塚孝司 鈴木秀雄 青木美代子 金子直行 細田勝 1982年「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』 1982 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 9) a 塚本師也 1997年 『浄法寺遺跡』 栃木県教育委員会
b 塚本師也 2010年 「鬼怒川・小貝川流域の加曾利E式期の土器－旧関町西原遺跡第61号住居跡出土土器の位置付け－」『茨城県考古学協会誌』第22号 茨城県考古学協会
c 塚本師也 2019年 「阿玉台IV式から加曾利E I式古段階の土器様相－那珂川流域と鬼怒川・小貝川流域との対比－」『考古学の地平II－縄文時代中期の土器論と生業研究の新視点－』 六一書房
d 塚本師也 2021年 「鹿嶋市域の縄文時代中期前葉から後半の土器」『林城跡埋蔵文化財発掘調査報告書』 鹿嶋市の文化財第171集 公益財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団
- 10) 江原英 2007年 「東関東の様相」『第20回セミナー 中期末から後期初頭の再検討』 縄文セミナーの会
- 11) a 註8) のⅨ期2群土器F類に該当する。
b 西川博孝氏は「大松SK134型深鉢」と仮称している。
西川博孝ほか 2019年 『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15－柏市小山台遺跡B区－縄文時代以降編』 千葉県教育振興財団調査報告第775集
- 12) 註8) と同じ
- 13) 註10) と同じ
- 14) 太田圭 2023年 「縄文時代中期末葉から後期前葉における土器群と遺構の関係について－福島県域における屋外土器埋設遺構の分析とその位置づけ－」『東京大学考古学研究室研究紀要』第36号 東京大学文学部考古学研究室
- 15) 後藤信祐 1996年 『楓沢遺跡Ⅲ 県営圃場整備事業「井口・楓沢地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査』 栃木県埋蔵文化財調査報告第171集 財団法人栃木県文化振興事業団
- 16) 福島雅儀 1996年 『三春ダム関連遺跡発掘調査報告8 越田遺跡』 福島県文化財調査報告第322集 財団法人福島県文化センター
- 17) a 青池紀子 中林香澄 2016年 『滝ノ上遺跡Ⅲ 畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査5』 茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第29集 常陸大宮市教育委員会
b 田中浩江 中林香澄 2016年 『滝ノ上遺跡Ⅳ 畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査6』 茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第30集 常陸大宮市教育委員会
- 18) 谷仲俊雄ほか 2016年 「弥生土器から土師器へ－土器からみた地域間交流－」『シンポジウム考古学からみる茨城の交易・交流』 茨城県考古学協会

- 19) a 横村宣行 1996年 「和泉式土器編年考－茨城県を中心にして－」『研究ノート』第5号 財団法人茨城県教育財団
b 横村宣行 土生朗治 白石真理 1999年 「茨城県における5世紀の動向」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 20) 横村宣行 1993年 「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』第2号 財団法人茨城県教育財団
- 21) 吹野富美夫 1998年 「常陸南部における古墳時代後期の土器様相」『列島の考古学－渡辺誠先生還暦記念論集－』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
- 22) 小澤重雄 2010年 『島名熊の山遺跡 島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XVII』茨城県教育財団文化財調査報告第328集
- 23) 田辺昭三 1981年 『須恵器大成』角川書店
- 24) 内堀団 2020年 『下河原崎高山古墳群2 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書6』茨城県教育財団文化財調査報告第446集
- 25) 根本佑ほか 2020年 「茨城県南部における古墳時代中期の集落変遷」『研究ノート』第17号 公益財団法人茨城県教育財団
- 26) 清水哲 2021年 「島名熊の山遺跡の構造と変遷」『第24回古代官衙・集落研究会報告書 古代集落の構造と変遷I』奈良文化財研究所研究報告第30冊

付章 自然科学分析

島名境松遺跡ローム層の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

つくば市に所在する島名境松遺跡は、常陸台地南西部を構成する筑波・稻敷台地の北西部の台地平坦面上に位置する。この台地は、貝塚ほか編（2000）により常陸台地の上位台地Cという地形面に区分されている。常陸台地の主体を占める上位台地Aは、下末吉海進により形成された海成面（酸素同位体ステージ5e:約12.5万年前）であり、上位台地Bは南関東の小原台面相当の海成面（酸素同位体ステージ5c:約10万年前）とされ、上位台地Cは下末吉海進後の海退によって形成された厚い河成堆積物からなる地形面とされている。上位台地Cの具体的な離水年代は示されていないが、地形発達史的には、9万年前に離水した武藏野台地のM1面（遠藤ほか2019）に対比されるものであろう。以下、分析結果および考察について記述する。

2 試料

試料は、SS1とされた土層断面より採取された。土層断面は、発掘調査所見により、上位よりI、II、III、IV、V、VI、VIIの各層に分層されている。I層は現地表面を構成する黒ボク土であり、II層は黒ボク土からロームへの漸移層、III層以下は褐色の火山灰土いわゆるロームである。ローム層のうち、V層とVII層はやや色調の暗い暗色帯をなす。なお、石器はII層からIV層上部までの層位から出土している。

試料は、I層とII層の層界付近から厚さ5cmで連続に試料番号1～16までが採取されている。各試料の採取層位は、分析結果を呈示した図1に柱状図として併記する。本報告では、16点の試料のうち、試料番号1～5、8、10、12、14、16の計10点を対象とする。

3 分析方法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」とは、軽鉱物分における火山ガラス以外の粒子（石英や長石類などの鉱物粒子および風化変質粒など）である。

4 結果

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成は、試料番号1～5と試料番号8以下とで大きく異なる。試料番号1～5では、斜方輝石が非常に多く、60～70%を占め、次いで不透明鉱物が15～25%程度を占める。他には10%未満のカンラン石と单斜輝石が含まれる。この層位では、各鉱物ともに層位的な量比の変化は比較的小さいが、その中で单斜輝石の量比は下位ほど増える傾向が読み取れる。試料番号8以下の重鉱物組成は、カンラン石と斜方輝石の2者を主体とする組成であり、少量の单斜輝石と不透明鉱物を伴う。カンラン石と斜方輝石の量比の層位的な変化をみると、試料番号8から14に向かってはカンラン石の増加傾向と斜方輝石の減少傾向が認められ、試料番号14ではカンラン石が斜方輝石よりも多い。その下位の試料番号16ではカンラン石よりも斜方輝石の方が多い。また、試料番号14と16には微量ではあるが、角閃石が含まれている。

火山ガラス比では、試料番号5から8にかけて無色透明のバブル型火山ガラスの濃集層準が認められる。また、試料番号1と2には微量ながらも無色透明の中間型火山ガラスが特徴的に含まれ、試料番号1には極めて微量の軽石型火山ガラスも含まれる。

5 考察

(1) 指標テフラによる対比

分析結果から、最も明瞭かつ有効な対比指標は、試料番号5から8にかけて認められたバブル型火山ガラスの濃集層準である。試料番号5以上および試料番号8以下の火山ガラス比の層位的変化から、試料番号5と試料番号8がそれぞれ濃集層準の上限と下限に相当すると判断される。この火山ガラスは、産出層位と形態およびこれまでの関東地方におけるローム層の分析事例により、鹿児島湾奥部の姶良カルデラを給源とする姶良Tnテフラ(AT:町田・新井,1976)に由来すると考えられる。ATの噴出年代については、福井県の水月湖のボーリングコアの年縞堆積物の研究事例にか所づき、暦年で3万年前であるとされている(Smith et al.,2013)。本地点におけるATの産状は、ATが降灰後に搅乱と再堆積を繰り返したことを見唆しているが、このように土壤中に特定テフラが混交して産出する場合はテフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にほぼ一致すると言われている(早津,1988)。したがって本地点では、試料番号8がATの降灰層準に相当すると考えられる。すなわち、試料番号8の採取されたV層上部が約3万年前の層準になる。

これまでの武藏野台地における立川ローム層の分析事例では、ATの降灰層準は、標準層序のVI層とVII層の層界付近(VI層最下部またはVII層最上部)に推定されることが多い。したがって、本地点のV層は、上部が標準層序のVI層下部に対比され、中部から下部は標準層序のVII層に概ね対比されるといえる。

火山ガラス比分析では、試料番号1と2に微量ながらも中間型や軽石型火山ガラスが特徴的に含まれることを指摘したが、この火山ガラスは、ATよりも上位で黒ボク土層最下部から漸移層さらにはローム層最上部という産出層位とその形態から、立川ローム層上部ガラス質テフラ(UG:山崎,1978)に由来すると考えられる。UGの噴出年代については、町田・新井(2003)では明記されていないが、UGの由来と考えられている浅間火山の軽石流期のテフラの年代が暦年で1.5～1.6万年前とされているから、これがUGの噴出年代となる。本地点では、UGの火山ガラスの産状から降灰層準を推定することは難しいが、出現層準の下限ということであれば、本地点のIII層上部にその降灰層準を求めることができる。また、武藏野台地の立川ローム層では、UGの降灰層準は標準層序のIII層上部に推定されることが多いことから、

本地点のⅢ層は、標準層序のⅢ層に概ね対比されると考えられる。

(2) 重鉱物組成による対比

関東地方に分布する立川ローム層は、火山噴出物（テフラ）が積み重なってできたというような単純な累積性の土壌ではなく、テフラとその再堆積物およびテフラには由来しない表層の砂やシルトなどが、主に風によって運ばれ、それらが積み重なって形成された複雑な累積性の土壌であると考えられている（例えば鈴木（1995）など）。ただし、ローム層の母材の主体である火山噴出物の給源である富士山や関東平野周縁に分布する火山の長期にわたる活動の変化は、ローム層の重鉱物組成の層位的な変化として表されると考えられる。関東ローム層の重鉱物組成の中で、カンラン石は富士山のテフラに由来し、斜方輝石と单斜輝石の両輝石は、富士山、箱根火山そして北関東の浅間火山の3者のテフラに主に由来する。これらの火山の活動の変化およびその地域への影響度の変化によって、ローム層の重鉱物組成が層位的に変化することができる。

これまでの当社における関東地方の台地上のローム層の分析事例からは、武蔵野台地、大宮台地、相模野台地というスケールの区分では各台地内での重鉱物組成はほぼ共通するが、台地の異なる地域間では重鉱物組成も異なることがわかっている。例えば富士山に最も近い相模野台地では、カンラン石の量比が全体的に高く、浅間火山の影響が強い大宮台地では、浅間火山の活動が活発となる立川ローム層上半部以上では斜方輝石の量比が高くなる。本報告でも、試料番号1～5のローム層に斜方輝石の多い重鉱物組成が認められるが、これは調査地の位置するつくば稲敷台地の火山との地理的位置関係が大宮台地と共通することによると考えることができる。すなわち、ATよりも上位の立川ローム層上半部の形成時期には、浅間火山の噴出物の影響が相対的に高くなったことを示していると考えられるのである。

重鉱物組成の層位的変化による立川ローム層の層序対比は、多数の分析事例のある武蔵野台地において詳細な対比が可能となった（矢作・橋本,2012）。筑波稲敷台地では分析事例は少ないものの、カンラン石の多い立川ローム層下半部では、武蔵野台地の重鉱物組成とほぼ共通する傾向が認められ、斜方輝石の多い上半部でもカンラン石の量比の変化は、少ないながらも共通した傾向が見出せる。これは、ATやUGといった武蔵野台地の対比指標と共通する指標が得られていることにより確認ができる。

ここで、矢作・橋本（2012）が示した、武蔵野台地の立川ローム層における重鉱物組成による対比指標を上位より順にあげると、Ⅲ層下部～Ⅳ層上部のカンラン石の極大層準、Ⅴ層直上および直下の輝石の極大層準、Ⅶ層下部のカンラン石の極大層準、Ⅸ層中部～下部の輝石の極大層準、X層における斜方輝石と单斜輝石の量比の近似およびX層のカンラン石の極大層準、Ⅺ層のカンラン石の極小層準となる。これらのうち、Ⅴ層上限の輝石の極大層準は、小林ほか（1971）における羽鳥の分析例以来多くの分析例で指摘されている。

本地点では、前述したATおよびUGの降灰層準による標準層位との対比を考慮すると、以下の対比が考えられる。单斜輝石の割合の最も高い試料番号5は武蔵野台地のⅤ層直上の輝石の極大層準に、試料番号12の斜方輝石の極大層準は武蔵野台地のⅨ層中部～下部の輝石の極大層準に、試料番号14のカンラン石の極大層準は武蔵野台地のX層のカンラン石の極大層準にそれぞれ対比される可能性があると考えられる。これらの各指標の対比から、本地点の各層と武蔵野台地の標準層序との対比関係をまとめると以下の通りになる。本地点のⅢ層は、武蔵野台地のⅢ層にほぼ対比され（以下「本地点の」と「武蔵野台地の」は省略）、Ⅳ層からⅤ層の上部までがⅣ層からⅥ層までに、Ⅴ層中部からⅥ層までがⅦ層からX層までにそれぞれ対比されると考えられる。

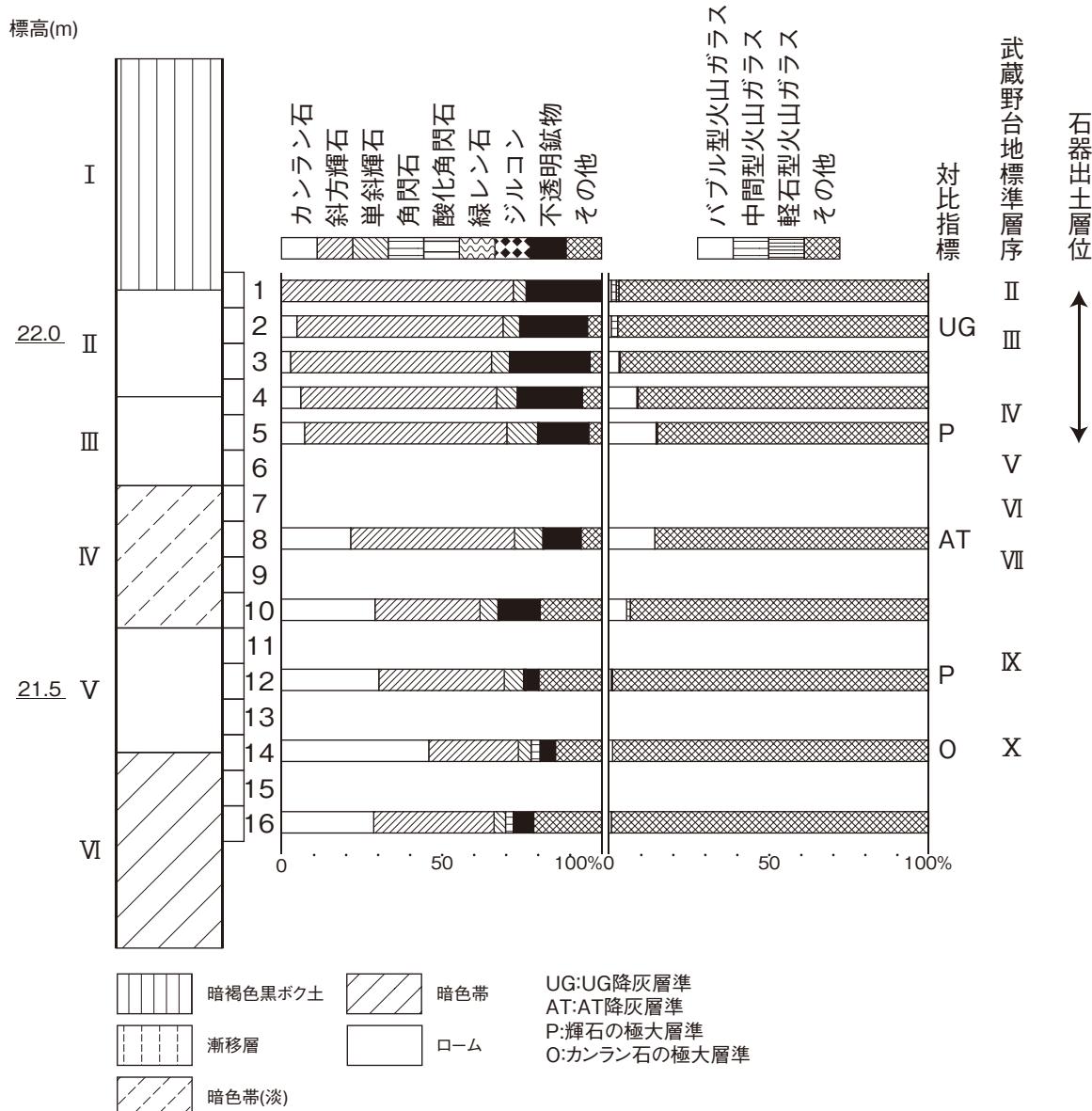


図1 島名境松遺跡SS 1 ローム層の重鉱物組成および火山ガラス比

表1 島名境松遺跡 SS1 ローム層の重鉱物・火山ガラス比分析結果

層名	試料番号	カナラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
I・II	1	0	181	10	0	0	0	0	59	0	250	2	4	2	242	250
II・III	2	12	161	13	1	0	0	0	52	11	250	2	5	0	243	250
III	3	7	157	14	0	0	0	0	63	9	250	8	0	1	241	250
III・IV	4	15	153	16	0	0	0	0	51	15	250	22	1	0	227	250
IV	5	18	158	24	1	0	0	0	39	10	250	37	1	0	212	250
V	8	54	128	22	1	0	0	0	29	16	250	36	0	0	214	250
	10	73	82	14	1	0	0	0	32	48	250	14	3	0	233	250
VI	12	76	98	15	1	1	0	0	10	49	250	2	0	1	247	250
VI・VII	14	115	70	10	7	0	0	0	12	36	250	3	0	0	247	250
VII	16	72	94	9	6	0	0	0	16	53	250	2	0	0	248	250

引用文献

- 遠藤邦彦・千葉達朗・杉中佑輔・須貝俊彦・鈴木毅彦・上杉 陽・石綿しげ子・中山俊雄・舟津太郎・大里重人・鈴木正章・野口真利江・佐藤明夫・近藤玲介・堀 伸三郎,2019,武藏野台地の新たな地形区分,第四紀研究,58,353-375.
- 早津賢治,1988,テフラおよびテフラ性土壤の堆積機構とテフロクロノロジー-AT にまつわる議論に關係して-,考古学研究,34,18-32.
- 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編,2000,日本の地形4 関東・伊豆小笠原, 東京大学出版会,349p.
- 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男,1971,野川先土器時代遺跡の研究,第四紀研究,10,231-252.
- 町田 洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義-,科学,46,339-347.
- 町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.
- Smith,V.C.,Staff,R.A.,Blockley,S.P.E.,Ramsey,C.B.,Nakagawa,T.,Mark,D.F.,Takemura,K.,Danhara,T.,Suigetsu 2006Project Members,2013,Identification and correlation of visible tephras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive,Japan:chronostratigraphic markers for synchronizing of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150ka,Quaternary Science Reviews,67,121-137.
- 鈴木毅彦,1995,いわゆる火山灰土(ローム)の成因に関する一考察-中部-関東に分布する火山灰土の層厚分布-,火山,40,167-176.
- 矢作健二・橋本真紀夫,2012,重鉱物組成と火山ガラス比による武藏野台地の立川ローム層層序対比,新西郊文化,2,7-18.
- 山崎晴雄,1978,立川断層とその第四紀後期の運動,第四紀研究,16,231-246.

図版1 重鉱物・火山ガラス

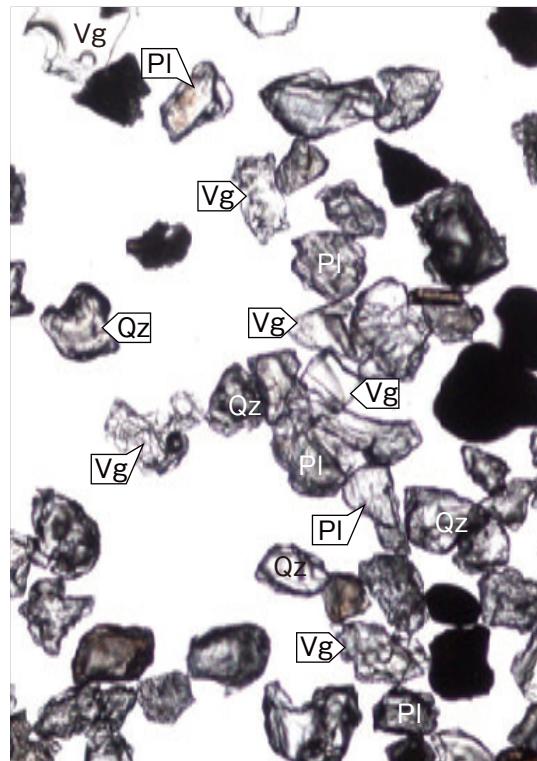


1. 重鉱物(島名境松遺跡SS1 I・II層; 1)

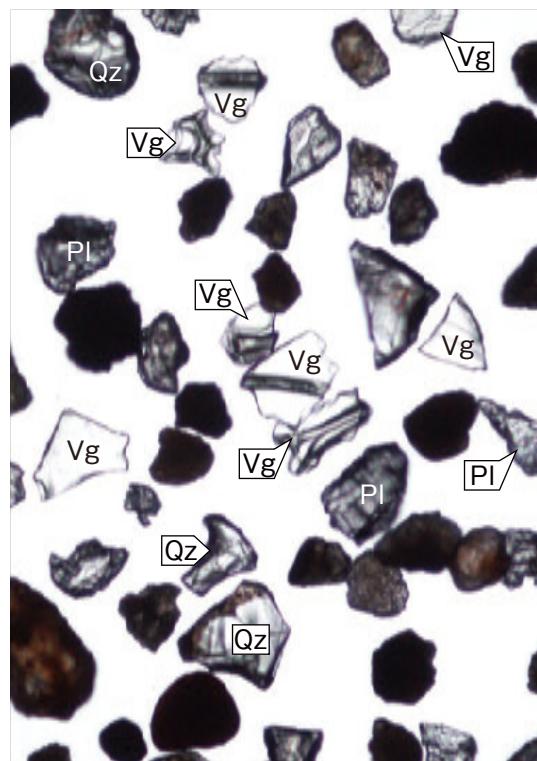


3. 重鉱物(島名境松遺跡SS1 VI・VII層; 14)

Ol: カンラン石.Opx: 斜方輝石.Cpx: 单斜輝石.Ho: 角閃石.Op: 不透明鉱物.Vg: 火山ガラス.Qz: 石英.PI: 斜長石.



2.UGの火山ガラス(島名境松遺跡SS1I・II層;1)



4. ATの火山ガラス(島名境松遺跡SS1V層;8)

0.5mm

炭化種実・炭化材樹種同定

佐々木由香（金沢大学古代文明・文化資源学研究所）

能城修一（明治大学黒耀石研究センター）

1 はじめに

つくば市に所在する島名境松遺跡は、縄文時代中期から後期の集落跡である。ここでは、縄文時代後期初頭の土坑出土土器の内部土壤から検出された炭化種実と炭化材の同定結果を報告し、当時の利用植物について検討した。

2 試料と方法

試料の炭化物は、第 1519 号土坑の覆土下層から出土した完形の深鉢土器内部の土壤全量を乾燥篩がけして得られた。乾燥篩選別は 5 mm、3 mm、1 mm 目の篩を用いて行われ、残滓から炭化物が目視で抽出された。土器の時期は、縄文時代後期初頭（称名寺 I 式期）である。

土壤の採取から炭化物の抽出までは、茨城県教育財団によって行われた。同定・計数は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。破片の大きさがまちまちな分類群は、一辺が 5 mm 以上の大きさを破片として計数し、一辺が 5 mm 未満はおおよその数を記号（+）で示した。また、重量を計量した。

炭化材は、一辺が 5 mm 以上の個体のうち、より横断面が大きい 6 点を樹種同定の試料として抽出し、任意に試料番号を付した。その後、剃刀を用いて横断面と接線断面を割り、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 超深度マルチアングルレンズ VHX-D500/D510）で写真撮影を行った。試料は、茨城県埋蔵文化財センターに保管されている。

3 炭化種実の同定結果

同定した結果、木本植物ではオニグルミ炭化核とクリ炭化子葉、クリーコナラ属炭化子葉の 3 分類群が産出した（表 1）。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかった種実を不明 A～E 炭化種実にタイプ分けした。科以上の細分に必要な識別点が残存していない一群で、本来大きい堅果類と推定される一群を不明堅果炭化果皮、果皮か内部の子葉かの判断がつかない微細な一群を炭化果皮・子葉とした。炭化種実以外には、炭化材が得られた。

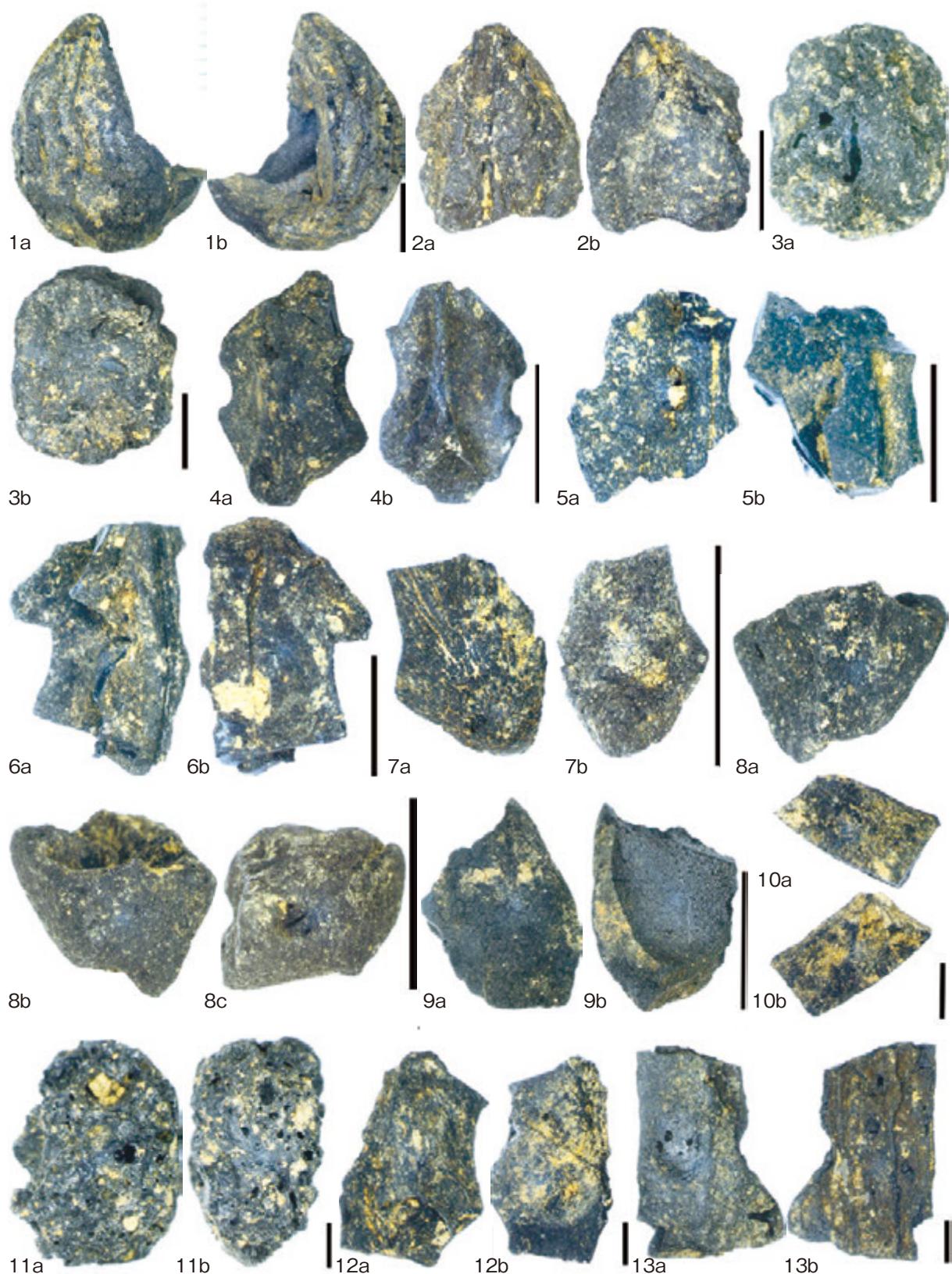
オニグルミ核が最も多く、全て破片で、一辺 5 mm 以上の破片が 82 点、5 mm 未満の破片が 100 点以上あった。大きな破片でも一辺 10 mm 程度であった。次にクリ子葉が多かったが、ほぼ完形の 1 個体以外は一辺 5 mm 以上の破片が 17 点、5 mm 未満の破片が 10 点未満であった。不明種実は 1 点ないし 2 点であった。不明堅果果

表 1 島名境松遺跡から出土した炭化種実

（括弧は一辺 5 mm 以上の破片数）

遺構名	SK1519			
サンプル名	土器内土より			
選別方法	乾燥篩選別			
時期	縄文時代後期初頭			
分類群	部位	産出数	重量	
オニグルミ	炭化核	(82)	+++	3.31g
クリ	炭化子葉	1 (17)	+	1.60g
クリーコナラ属	炭化子葉	(1)		0.23g
不明 A	炭化種実	(1)		0.01g
不明 B	炭化種実	(1)		0.04g
不明 C	炭化種実	(1)		0.03g
不明 D	炭化種実	(1)		0.01g
不明 E	炭化種実	(2)		0.02g
不明堅果	炭化果皮	(2)		0.01g
	炭化果皮・子葉	(5)	+++	0.35g
不明	炭化材	(10)	+++	0.37g

+1-9, ++10-99, +++100-149



図版1 島名境松遺跡出土の炭化種実

1・2. クリ炭化子葉、3. クリーコナラ属炭化子葉、4-6. オニグルミ炭化核、7. 不明 A 炭化種実、8. 不明 B 炭化種実、9. 不明 C 炭化種実、10. 不明 D 炭化種実、11. 不明 E 炭化種実、12・13. 不明堅果炭化果皮 スケール 1-9: 5mm, 10-13: 1mm

皮と、不明堅果果皮・子葉は全て微細な破片で、ほとんどがクリもしくはオニグルミの可能性が高いが、状態が悪く絞り込めなかった。

次に、各分類群の記載を行い、図版1に写真を示して同定の根拠とする。大きさは表2に示した。

(1) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

炭化子葉 ブナ科

完形ならば側面観が広卵形で、側面一面に縦方向の不規則でしわ状の深い溝がある。元々半分が抉れていたか。片面は平坦。しわ以外の面はやや平坦で光沢がある。硬質。最大の破片で、全体の約2/3が残存する。

(2) クリーコナラ属 *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. - *Quercus* sp. 炭化子葉 ブナ科

完形ならば横方向に幅広い楕円体か。約半分が残存し、表面は劣化により粗く、縦方向に空隙が生じている。内面側は中央部が皿状に窪んでおり、大きさや割れ方からクリもしくはコナラ属とした。コナラ属ならばクヌギ節の可能性が高い。

(3) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 炭化核 クルミ科

すべて破片であるが、完形ならば側面観は広卵形。木質で、壁は厚くて硬く、ときどき空隙がある。表面に浅い縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。断面は角が尖るものが多い。内部は二室に分かれる。破片には縫合線が付いたまま、割れている破片が見られた(図版1-5・6)。

(4) 不明 A Unknown A 炭化種実

全体形は不明で、臍がやや突出する。臍から放射状に不規則な縦線がある。やや肉厚である。

(5) 不明 B Unknown B 炭化種実

全体形は不明で、上面観は長方形。下方の臍に向かってやや窄まる。下端中央には窪んだ臍がある。

(6) 不明 C Unknown C 炭化種実

全体形は不明で、木質。外面はわずかに縦方向の筋が観察される。大型の堅果と推定される。内面は平滑で種子もしくは子葉が当たっていたと思われる浅い皿状の窪みがある。

(7) 不明 D Unknown D 炭化種実

全体形は不明。薄く硬く、頂部に向かって外反し、微細な縦方向の筋が見られる。内面は中央部に縦方向の溝が頂部から見られる。

(8) 不明 E Unknown E 炭化種実

楕円体か。全体的に発泡しており、強い光沢がある。一側面がやや平坦で線状の痕跡があるが、形態的な特徴かは判断できなかった。大きさからはマメ科の可能性があるが、識別可能な根拠が見出せなかった。

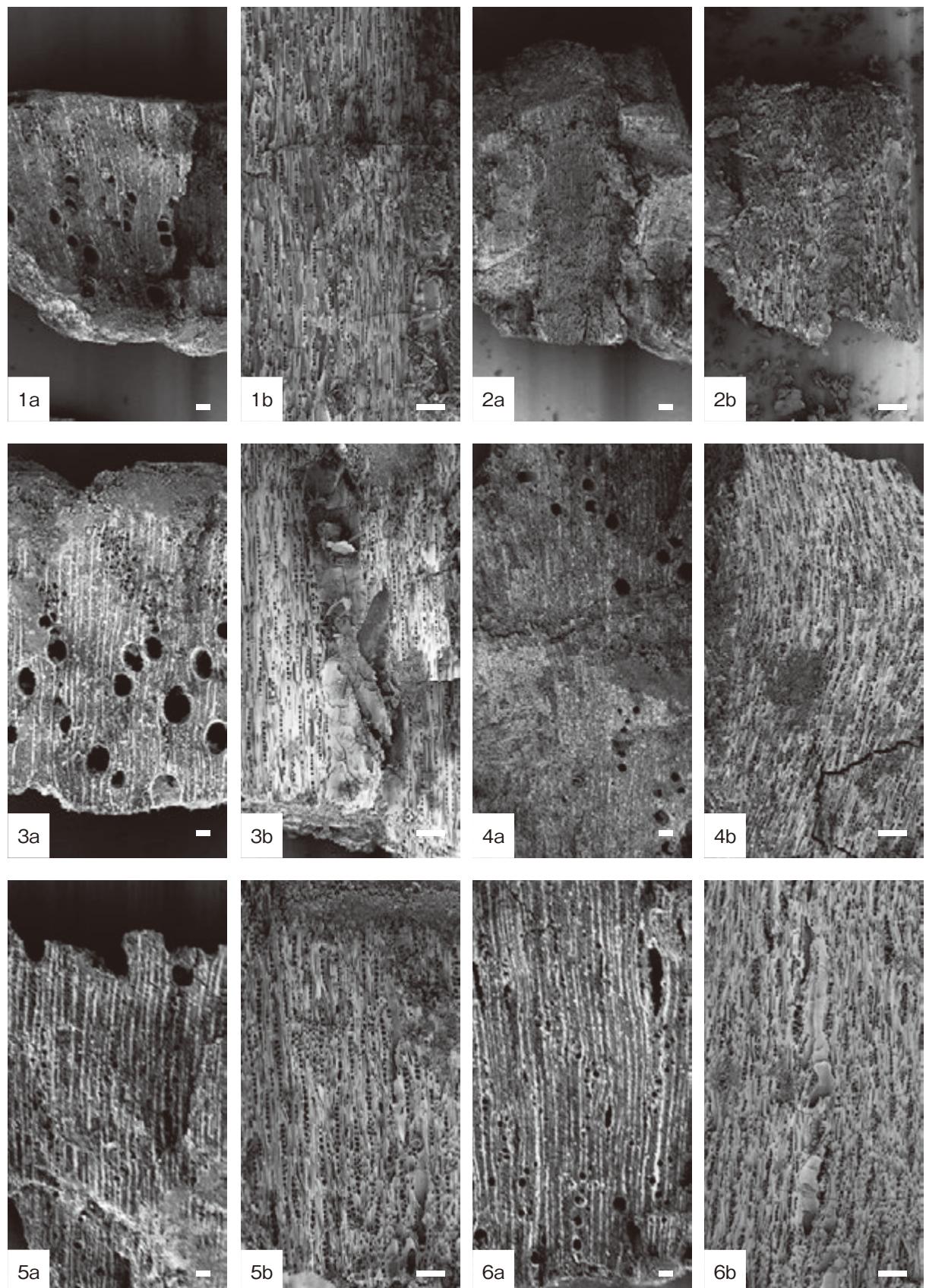
(9) 不明堅果 Unknown acorn 炭化果皮

全体形は不明。図版1-12は中央が「くの字状」に突出し、薄くて硬い。表面は平坦。裏側に細い隆線が1本ある。13は表面に細い筋があり、裏面にも規則的な縦方向の隆起がある。13はクリもしくはコナ

表2 炭化種実の大きさ

(単位mm、括弧は残存値)

分類群	部位	長さ	幅	厚さ	図版番号
クリ	炭化子葉	16.65	14.12	7.05	1-1
クリ	炭化子葉	(10.13)	(8.43)	(3.26)	1-2
クリーコナラ属	炭化子葉	12.63	(10.30)	(3.94)	1-3
オニグルミ	炭化核	(8.66)	(5.59)		1-4
オニグルミ	炭化核	(7.35)	(5.90)		1-5
オニグルミ	炭化核	(10.69)	(6.74)		1-6
不明 A	炭化種実	(4.47)	(3.57)		1-7
不明 B	炭化種実	(5.20)	(4.49)	(3.98)	1-8
不明 C	炭化種実	(6.31)	(5.26)		1-9
不明 D	炭化種実	(2.44)	2.92		1-10
不明 E	炭化種実	(4.61)	(3.02)		1-11
不明堅果	炭化果皮	(4.61)	(3.02)		1-12
不明堅果	炭化果皮	(4.89)	(3.48)		1-13



図版2 島名境松遺跡出土の炭化材
1. クリ (試料1)、2. クリ (試料2)、3. クリ (試料3)、4. クリ (試料4)、5. クリ (試料5)、6. クリ (試料6)。a:横断面、b:接線断面 スケール: 100μm

ラ属の果実の可能性があるが、小さく特定できなかった。

4 炭化材樹種同定の結果

試料6点は、すべて広葉樹のクリであった。いずれも1辺10mm程度の破片のため、本来同一個体である可能性がある。以下に記載を行い、図版2に横断面と接線断面の走査型電子顕微鏡写真を示して同定の根拠とする。

(1) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

早材には径が300μmに達する丸い孤立道管が散在し、晩材では径50μm以下の孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、普通は単列、ときに2細胞幅。

5 考察

土坑覆土下層から出土した縄文時代後期初頭の土器内から検出された炭化種実や炭化材を同定した結果、炭化種実ではオニグルミとクリ、クリーコナラ属、炭化材ではクリが得られた。これらは野生植物で食用として利用可能な種類であるが、オニグルミは食用にならない核の破片が産出した。オニグルミは通常、縫合線に沿って自然に割れるが、縫合線が付いた状態で割れている破片がいくつか見られた。人が道具を用いて割った打撲痕を持つ個体では、しばしば縫合線が付いた状態のまま割られた個体が見られるため、打撲によって割られた残滓が燃やされた、もしくは燃えた可能性がある。クリは食用部位である子葉がわずかに得られ、表面には深い溝が観察された。深い皺は炭化によって形成された可能性もあるが、「カチグリ」などの保存食のように、乾燥した状態で保管されていたクリが何らかの要因で炭化した可能性が考えられる。大きさが計測できた炭化子葉は高さ16.7mm、幅14.1mmであった。これは、縄文時代の他の遺跡と比較すると、吉川(2011)で提示された縄文時代前期中葉から晩期前葉の5遺跡の中では福島県和台遺跡(中期後半、平均高19.2±2.1mm、幅19.2±2.9mm)に次いで大きかった。

今回の分析結果から考えると、堅果類としてはオニグルミとクリが利用されていたと推定される。不明種実や不明堅果の中には微小な種実の可能性がある個体は全くみられなかった。これは抽出方法が乾燥篩選別のみで篩が最小1mm目であった影響も多少あると考えられる。

土坑の覆土は人為的な埋め戻しとされているが、土器の内部には炭化して食用部位以外のオニグルミや炭化材が残存している点から、内部に残存していた炭化種実は土器に保管されていた内容物ではなく、堆積時に周囲から流れ込んで入った可能性が考えられる。

縄文時代のクリの炭化種実の出土例は、石田ほか(2016)の「日本の遺跡出土大型植物遺体データベース」によると、県内では高萩市小場遺跡(縄文時代後期、パリノ・サーヴェイ株式会社1985)と古河市釈迦才仏遺跡(縄文時代後期中葉、パリノ・サーヴェイ株式会社1998)の2例のみである。同様にオニグルミ核についても、上述の小場遺跡のほか、日立市諏訪遺跡(縄文時代中期、粉川1980)、稲敷市福田貝塚(縄文時代後期中葉、渡辺1991)の3例しか登録されておらず、周辺地域に比べて非常に少ない。

炭化材はクリのみであり、縄文時代の遺構の構築に多用される点から考えて、住居などの建築材や土木用材の可能性が高く、燃料材の可能性もある。子葉と木材でクリが確認されたことは、遺跡周辺にクリの資源があったことを示唆する。

今後、焼失住居など、炭化物が含まれている可能性があるより多くの土壌を水洗すれば、当時の利用植物の詳細が検討可能になると考えられる。

謝辞

分析にはJSPS科研費(JP20H05811)の一部を用いた。同定・撮影にあたり蒲生侑佳氏(明治大学大学院)、杉本亘氏(千葉大学大学院)の協力を得た。

引用文献

- 石田糸絵・工藤雄一郎・百原新 2016 「日本の遺跡出土大型植物遺体データベース」『植生史研究』24-1、pp. 18-24.
- 粉川昭平 1980 「炭化材と炭化種子類の鑑定－諫訪遺跡出土の種子類」『諫訪遺跡発掘調査報告書』p. 189、日立市教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1985 「リン・カルシウム、材・種子同定報告について」『小場遺跡－常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書9－茨城県教育財団調査報告第35集』pp. 413-417、財団法人茨城県教育財団
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1998 「釈迦才仏遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類」『大橋B遺跡、釈迦才仏遺跡－主要地方道つくば古河線緊急地方道路事業地内埋蔵文化財調査報告書－茨城県教育財団文化財調査報告第131集』pp. 173-174、財団法人茨城県教育財団
- 吉川純子 2011 「縄文時代におけるクリ果実の大きさの変化」『植生史研究』18-2、pp. 57-63.
- 渡辺誠 1991 「自然遺物－植物遺体」『茨城県福田（神明前）貝塚－古代學研究所報告第2輯』p.192、財團法人古代學協會

写 真 図 版



第1519号土坑出土遺物



平成30年度調査区遠景（南から）



平成30年度調査区南部全景（南西から）

PL2



令和元年度調査区遠景（南西から）



令和元年度調査区遠景（北から）



令和5年度調査区北部全景（北から）



令和5年度調査区南部全景（南から）

PL4



第2号テストピット



第1号石器集中地点



第8号竪穴建物跡



第47号竪穴建物跡 遺物出土状況



第47号竪穴建物跡



第49号竪穴建物跡 炉土層断面



第49・50号竪穴建物跡



第50号竪穴建物跡 遺物出土状況



第50号竪穴建物跡 遺物出土狀況



第50号竪穴建物跡 爐



第50号竪穴建物跡 爐体土器埋設狀況



第51号竪穴建物跡 土層断面



第51号竪穴建物跡 遺物出土狀況



第51号竪穴建物跡



第52・60号竪穴建物跡



第55号竪穴建物跡 遺物出土狀況(1)

PL6



第55号竪穴建物跡 遺物出土状況(2)



第55号竪穴建物跡 炉土層断面



第55号竪穴建物跡 炉体土器埋設状況(1)



第55号竪穴建物跡 炉体土器埋設状況(2)



第55号竪穴建物跡



第56号竪穴建物跡 遺物出土状況



第56号竪穴建物跡



第61号竪穴建物跡



第62号竪穴建物跡 遺物出土状況



第62号竪穴建物跡



第63号竪穴建物跡



第64号竪穴建物跡



第66号竪穴建物跡 遺物出土状況(1)



第66号竪穴建物跡 遺物出土状況(2)



第66号竪穴建物跡



第67号竪穴建物跡

PL8



第69号竪穴建物跡



第70号竪穴建物跡



第72号竪穴建物跡



第74号竪穴建物跡



第77号竪穴建物跡 遺物出土状況



第77号竪穴建物跡



第89号竪穴建物跡 炉



第89号竪穴建物跡 炉体土器埋設状況



第89号竪穴建物跡



第90号竪穴建物跡 土層断面



第90号竪穴建物跡



第91号竪穴建物跡 遺物出土状況(1)



第91号竪穴建物跡 遺物出土状況(2)



第91号竪穴建物跡



第91号竪穴建物跡 炉 1・2



第94号竪穴建物跡 炉体土器埋設状況

PL10



第94·98号竪穴建物跡



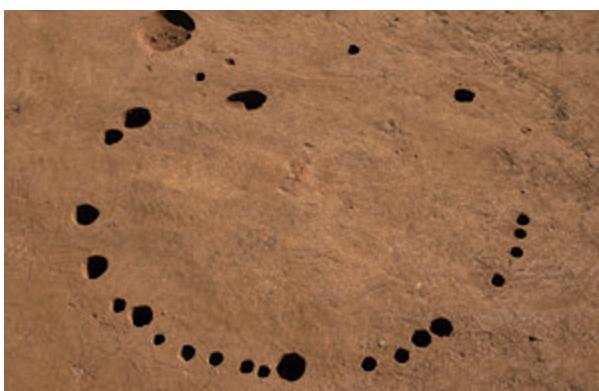
第95号竪穴建物跡



第96号竪穴建物跡 遺物出土状況



第97号竪穴建物跡



第102号竪穴建物跡



第103号竪穴建物跡



第104号竪穴建物跡 遺物出土状況(1)



第104号竪穴建物跡 遺物出土状況(2)



第104号竖穴建物跡



第107号竖穴建物跡



第115号竖穴建物跡 遺物出土状况



第115号竖穴建物跡



第116号竖穴建物跡 遺物出土状况



第116号竖穴建物跡 炉遺物出土状况



第116号竖穴建物跡



第121号竖穴建物跡



第122号豎穴建物跡 土層断面



第122号豎穴建物跡 遺物出土状況



第122号豎穴建物跡



第123号豎穴建物跡 遺物出土状況



第123号豎穴建物跡



第124号豎穴建物跡



第127号豎穴建物跡



第135号豎穴建物跡



第138号竪穴建物跡 遺物出土状況



第138号竪穴建物跡



第139号竪穴建物跡



第784号土坑



第807号土坑



第820号土坑 遺物出土状況



第820号土坑



第820·821号土坑

PL14



第869号土坑 遺物出土狀況



第869号土坑



第895号土坑



第1143号土坑 遺物出土狀況(1)



第1143号土坑 遺物出土狀況(2)



第1143号土坑 遺物出土狀況(3)



第1143号土坑 遺物出土狀況(4)



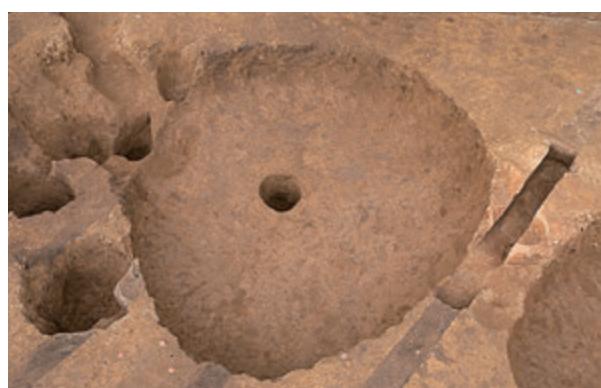
第1146号土坑



第1158号土坑



第1218号土坑



第1220号土坑



第1263号土坑 遺物出土狀況(1)



第1263号土坑 遺物出土狀況(2)



第1263号土坑 遺物出土狀況(3)



第1263号土坑 遺物出土狀況(4)



第1263号土坑

PL16



第1519号土坑 遺物出土状況



第13号炉跡 遺物出土状況



第5号陥し穴



第6号陥し穴



第7号陥し穴



第11号陥し穴



第1号ピット群



第1号遺物包含層



第15号竪穴建物跡 遺物出土状況(1)



第15号竪穴建物跡 遺物出土状況(2)



第15号竪穴建物跡 遺物出土状況(3)



第15号竪穴建物跡 遺物出土状況(4)



第15号竪穴建物跡 遺物出土状況(5)



第16号竪穴建物跡



第46号竪穴建物跡



第53号竪穴建物跡 炭化材出土状況

PL18



第53号豎穴建物跡



第68号豎穴建物跡



第71号豎穴建物跡 遺物出土状況



第71号豎穴建物跡



第112号豎穴建物跡 遺物出土状況



第112号豎穴建物跡



第113号豎穴建物跡 遺物出土状況



第113号豎穴建物跡



第114号竪穴建物跡 遺物出土状況



第114号竪穴建物跡



第133号竪穴建物跡



第888号土坑 遺物出土状況(1)



第888号土坑 遺物出土状況(2)



第3号溝跡



第4号溝跡 土層断面



第6号溝跡

PL20



第1号墳



第1号墳石室 土層断面(1)



第1号墳石室 土層断面(2)



第1号墳石室(1)



第1号墳石室(2)



第8·47·50号竪穴建物跡出土遺物

PL22



第50・51・52号竪穴建物跡出土遺物



第54・55号竪穴建物跡出土遺物



第55·56·57·62号竪穴建物跡出土遺物



第61·66·72·77号竪穴建物跡出土遺物



第89·90·91号竪穴建物跡出土遺物



第91·92·94·96号竪穴建物跡出土遺物



第97・98号竪穴建物跡出土遺物



第115·116号竪穴建物跡出土遺物

PL30



第117・118・121・122・124・127・128・135号竖穴建物跡出土遺物



第138号竪穴建物跡、第751・752・755・764・765・776号土坑出土遺物



SK771-1



SK784-1



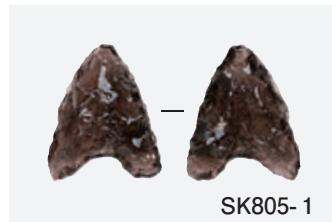
SK784-8



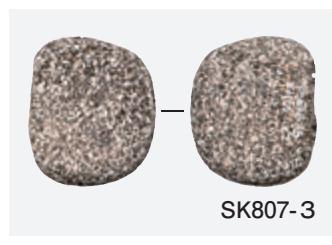
SK806-1



SK806-3



SK805-1



SK807-3



SK806-2



SK820-1



SK818-6



第821·844·854·869号土坑出土遺物

PL34



第869·874·877·883·886·891·894号土坑出土遺物



第895·896·964号土坑出土遺物



第965·984·965·988·997号土坑出土遺物



第997·999·1060·1131·1143号土坑出土遺物

PL38



SK1144-1



SK1146-3



SK1146-1



SK1146-9



SK1146-2



SK1156-1



SK1157-1

第1144·1146·1156·1157号土坑出土遺物



第1158·1191·1220·1221·1238·1239·1263号土坑出土遺物

PL40



SK1263-2



SK1263-3



SK1263-4

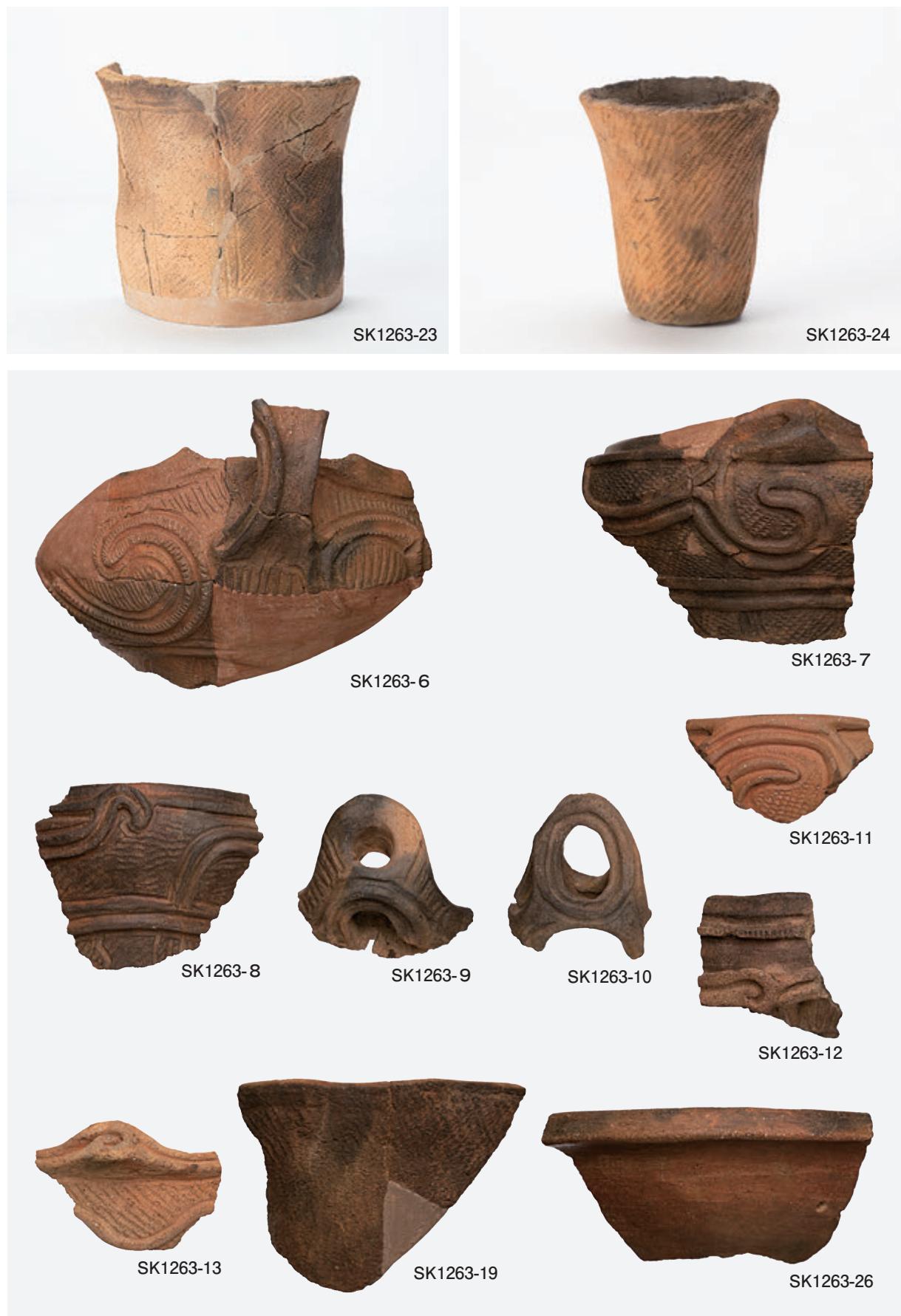


SK1263-5



SK1263-22

第1263号土坑出土遺物



第1263号土坑出土遺物



第1263・1265・1281・1351・1361・1363・1368・1369・1371・1393号土坑出土遺物



第1418·1433·1474·1476·1508·1518号土坑出土遺物

PL44



SK1519-1



SK1519-2

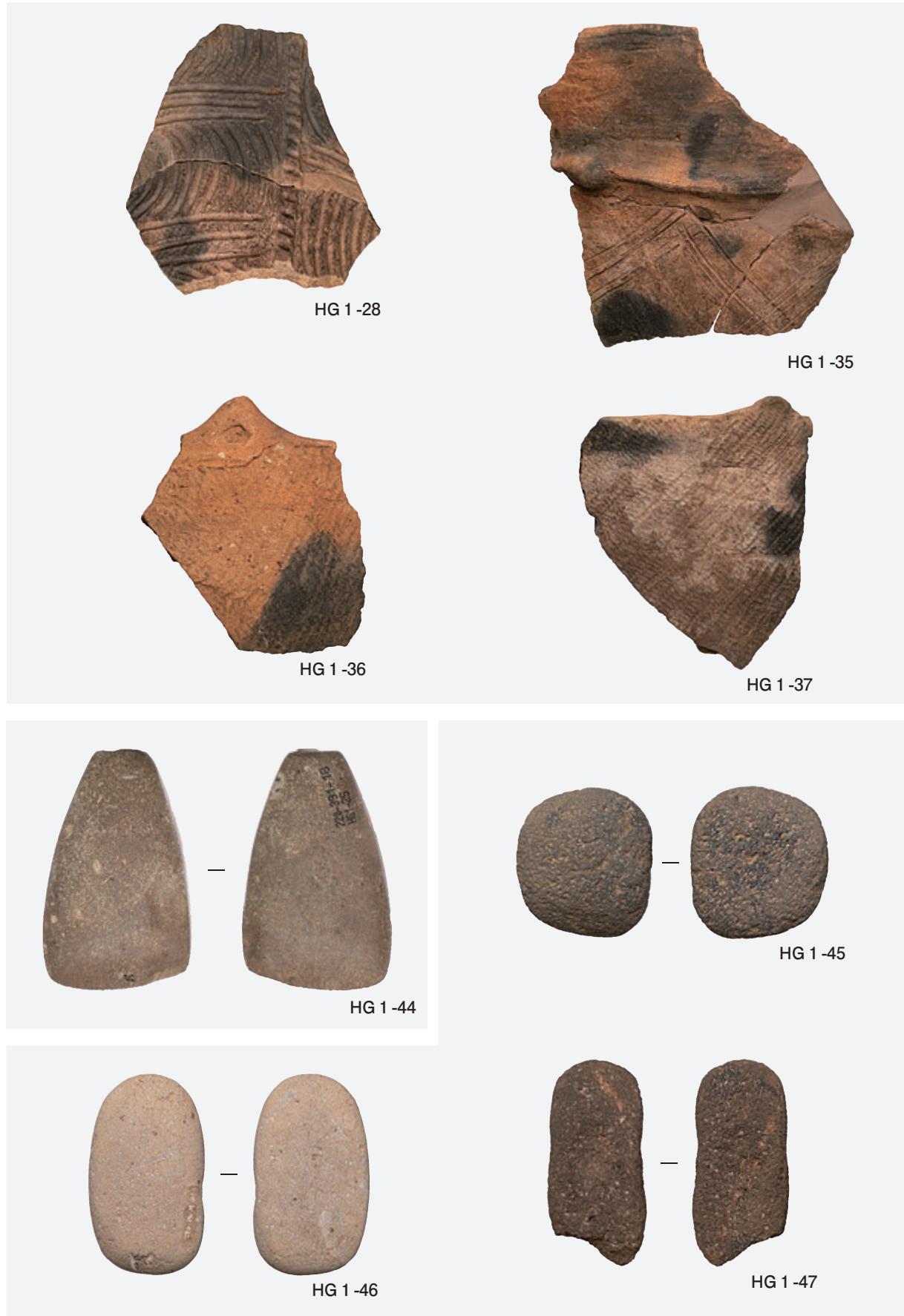
第1519号土坑出土遺物



第1519号土坑、第2号土器埋設遺構、第13・20号炉跡出土遺物



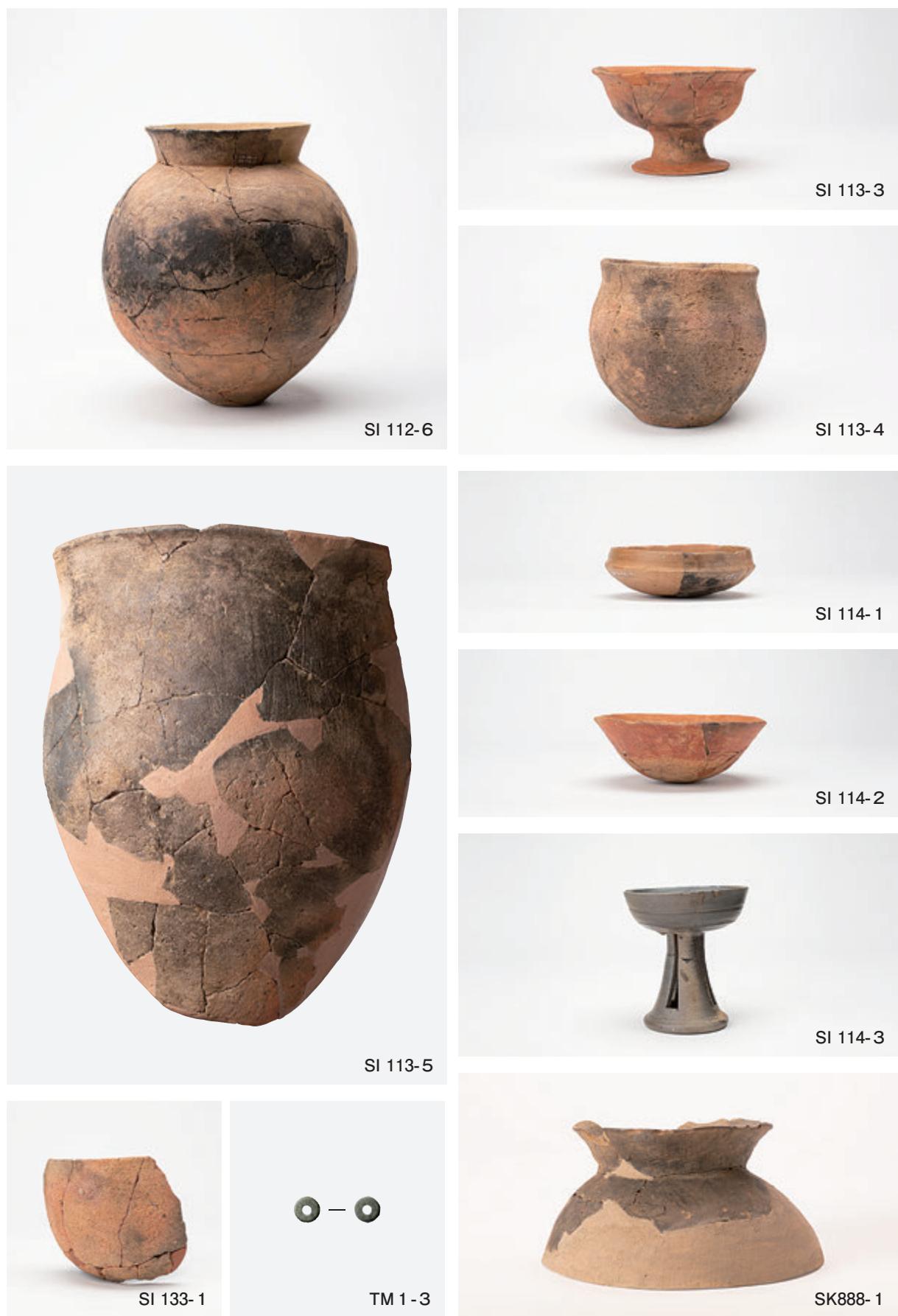
第1号遺物包含層出土土遺物



第1号遺物包含層出土遺物



第15・46・53・112号竪穴建物跡出土遺物



第112・113・114・133号竪穴建物跡、第1号古墳、第888号土坑出土遺物

PL50



遺構外出土遺物



抄 錄

印 刷 仕 様

編 集 OS Microsoft Windows 11 Pro
編集 Adobe InDesign 2024
図版作成 Adobe Illustrator 2024
写真調整 Adobe Photoshop 2024
Scanning EPSON DS-G20000
使用Font OpenType リュウミンPro L-KL、太ゴB101 Pro Bold
中ゴシック BBB Pro Medium
写 真 線数 カラー210線以上
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign 2024 でデータ入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第477集

つくば市

島名境松遺跡3

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XXX

下 卷

令和7（2025）年 3月21日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
HP <https://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 大富印刷株式会社
〒311-1251 ひたちなか市山崎160
TEL 029-265-9000